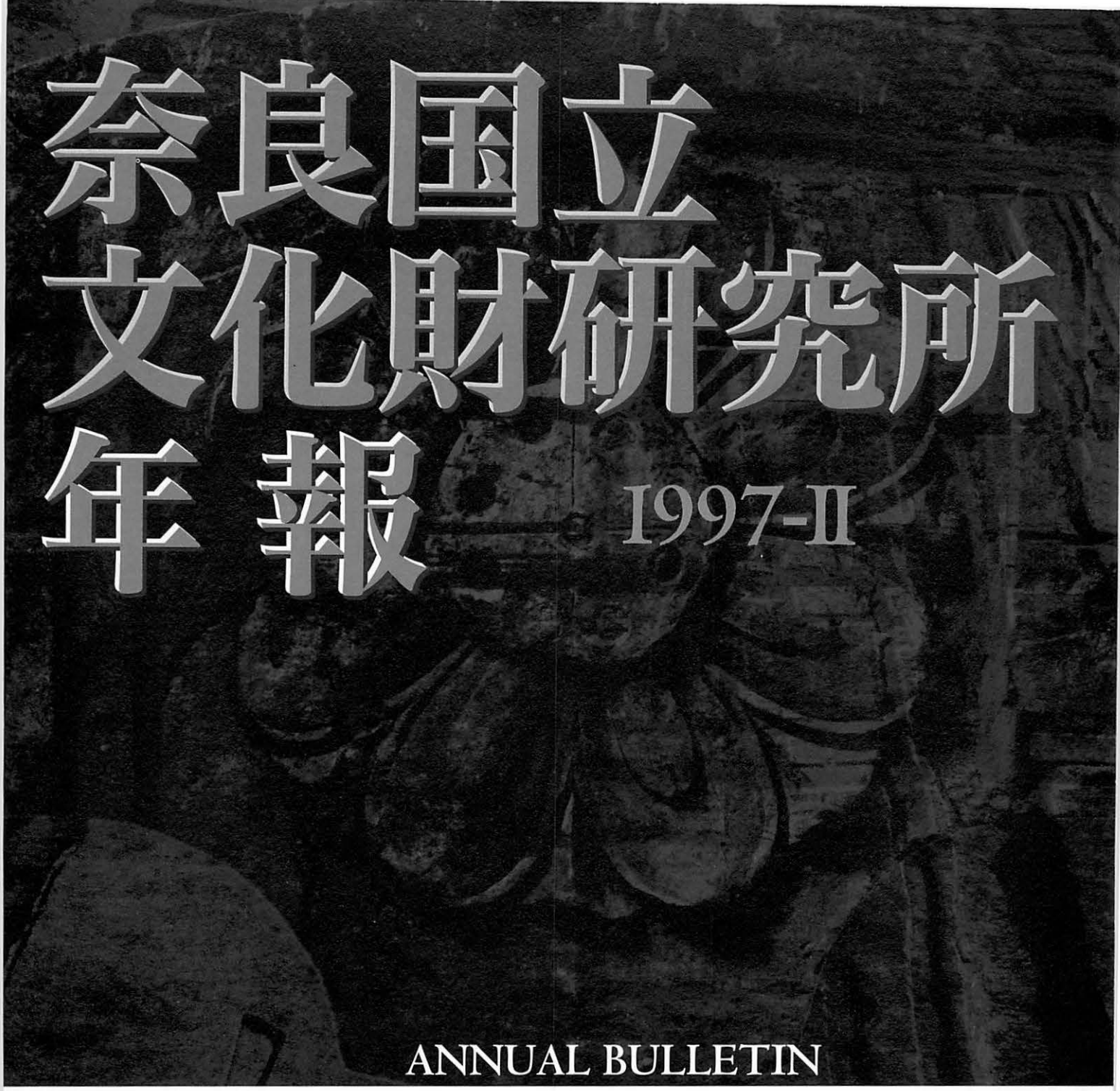


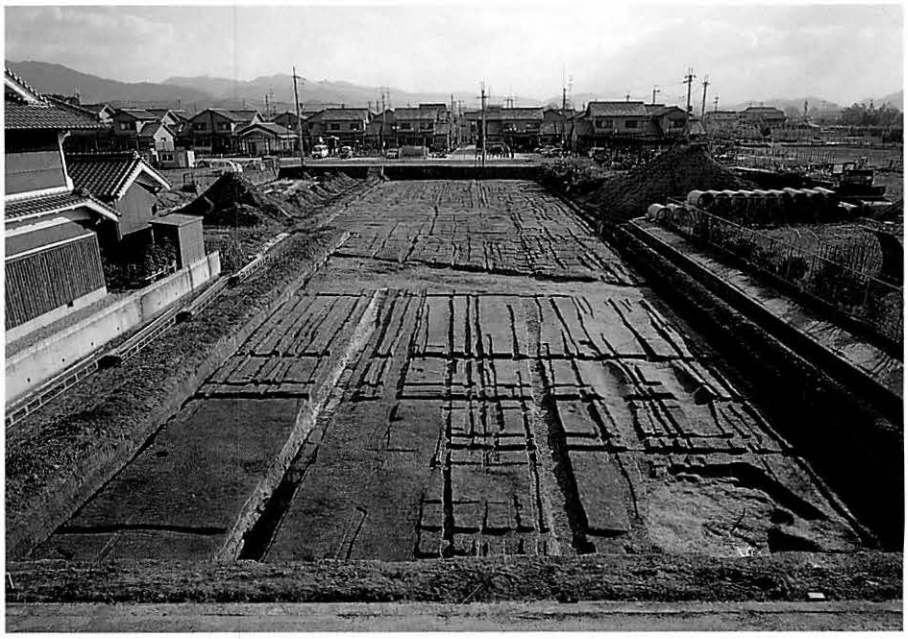
奈良国立文化財研究所年報 1997-II

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 1997-II

奈良国立文化財研究所

1996年度のおもな調査

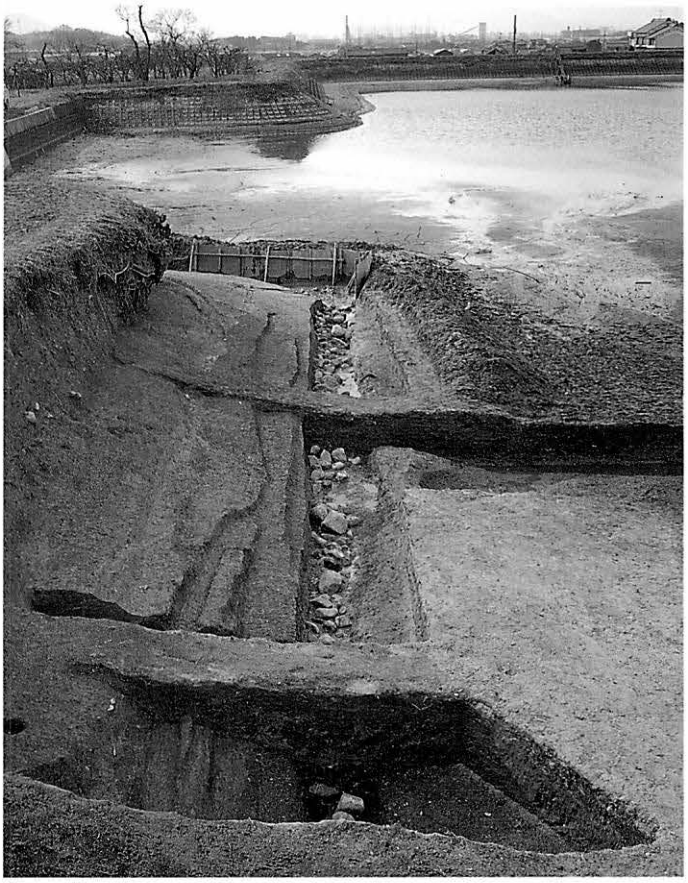
水落遺跡の大規模建物
漏刻台（水時計）の南東約50mでみつかった飛鳥時代の四面庇付きの大規模な建物。建物の大きさは、南北が約14m、東西が18mで、柱掘形も大ぶりである。背後には、飛鳥川をはさんですぐに甘橿丘がせまる。東から。
本文40頁参照（撮影　井上直夫）



藤原宮跡の調査
宮内の西南隅に近い地区の発掘。宮以前に通っていた南北方向の道路を北から見たもの。道路の幅は約6.5mで両側溝をそなえる。側溝からは「評」の木簡が出土した。宮の造営にともない埋められ、調査地周辺は、広い空閑地とされた。
本文４頁参照（撮影　井上直夫）

吉備池廃寺の調査（航空写真）

吉備池は、香久山の北東、桜井市吉備にある農業用のため池。今回の発掘で巨大な金堂の基壇を確認し、飛鳥時代寺院の存在が明らかとなった。写真は北上空からの撮影で、左が調査中の金堂である。現存の土壇よりひとまわり大きく、金堂の黄色の基壇土が見える。金堂の右（西）に残るもう一つの土壇は、塔基壇の可能性が高い。本文85頁参照。



↑〈上〉吉備池廃寺金堂基壇
金堂は、掘込地業をともなう高い基壇をもつ。これは、基壇の北辺を東からみた写真である。基壇土が掘込地業の外側まで広がっている。平行して、礫を投棄した近世の溝がめぐるが、礫自体は、ほんらい、基壇にともなうものであろう。遠方に見えるのは塔と推定される西方土壇である。本文85頁参照（撮影　井上直夫）

↑吉備池廃寺金堂基壇の断面
金堂基壇の断面を西から見たところである。暗褐色砂質土のベースを１ｍ近く掘り下げた掘込地業の状況がよくわかる。底面に多数の礫をおき、その上に厚さ５cm内外の版築を重ねて、高い基壇を構築している。掘込地業の底からの高さは、現状で2.5～2.7ｍある。本文85頁参照（撮影　井上直夫）

本薬師寺西塔

水田中に残る西塔土壇を南東からみた写真。心礎の南東、土壇の4分の1を発掘した。基壇上部は大きく削られ、基壇外装も抜き取られていたが、石組みによる雨落溝や犬走の一部をとどめる。土壇周囲には瓦を廃棄した土坑がある。本文24頁参照（撮影　井上直夫）

山田寺南面回廊

東からみた南面回廊。白っぽい礎石は花崗岩製で、蓮弁で飾った柱座をつくりだしたもの。礎石上に長く残るのは壁下の地覆材。ほかに回廊の建築部材として柱や頭貫、肘木や斗などの組物が点々とある。累々と残る瓦は、屋根に葺かれた状態をよくとどめているものや、反転して落下した状況を示すものがある。本文78頁参照（撮影　井上直夫）

目　次

I　藤原宮の調査

西方官衙南地区の調査　第82次……4

北面外濠の調査　第81-6次……12

II　藤原京の調査

左京七条三坊の調査　第81-1次……14

左京十一条三坊の調査　第81-7・8次……17

右京六・七条二坊の調査　第78-9次……22

本薬師寺の調査　1995-1・2・3次、1996-1次　本薬師寺出土の瓦……24

III　飛鳥地域等の調査

水落遺跡の調査　第9次・1995-1次……40

飛鳥寺の調査　1996-1・3次、第84次……44

川原寺の調査　1995-1・1996-1次、1996-2次……57

橘寺の調査　1995-1次……72

坂田寺の調査　1996-1次……75

山田寺の調査　第10次・第11次……78

吉備池廃寺の調査　第81-14・16次……85

その他の発掘調査概要……92

凡　例

1．本書は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が1996年1月から1997年3月までに実施した藤原宮跡、藤原京跡および飛鳥地域等の発掘調査の概要報告であり、これまで刊行してきた『飛鳥・藤原宮発掘調査概報　1～26』(1971年～1996年）を引き継ぐものである。各調査報告の執筆は、各調査の発掘担当者が主におこなった。執筆者名には、1996年度現在の所属調査室名を付した。

2．遺構図に付した座標は国土方眼第VI座標系による。また、高さは海抜高で示す。

3．遺構には、一連の番号を付けている。番号の前に遺構の種類を示すSA（築地、塀)、SB（建物)、SC（回廊)、SD（溝)、SE（井戸)、SF（道路)、SK（土坑)、SX（その他）などの記号を付した。

4．藤原宮の地区区分については、『藤原概報 26』（3頁）を参照されたい。

5．7世紀代の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴと表す。詳細は、『藤原報告II』(92～100頁）を参照されたい。

6．藤原宮第81次調査については、別途『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所、1997年3月）を刊行しているので、参照されたい。

7．藤原京の範囲については、新発見が相次ぎ、再検討が進んでいる。図12（13頁）は、岸俊男説藤原京を示した。コラム「藤原京の範囲」(38頁）を参照されたい。

8．本文未収録の調査については、92頁の「その他の発掘調査概要」を参照されたい。

奈良国立文化財研究所年報　1997-II

発行日 —— 1997年9月30日

編集発行 —— 奈良国立文化財研究所

〒630　奈良市二条町2-9-1　TEL.0742-34-3931

印刷 —— 関西プロセス

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties Research Institute
1997-II

CONTENTS

I Excavation of the *Fujiwara* Palace Sites

- Excavation on the southern area of the government offices in the west of the *Fujiwara* Palace; No.82
- Excavation on the northern part of the outer moat; No.81-6

II Excavation of the *Fujiwara* Capital Sites

- Excavation on the third ward on seventh street,the eastern sector; No.81-1
- Excavations on the third ward on eleventh street,the eastern sector; No.81-7, 81-8
- Excavation on the second ward on sixth and seventh street, the western sector; No.78-9
- Excavations on *Motoyakushi-ji* Temple Site; No.1995-1, 2, 3, No.1996-1
  Roof tiles from *Motoyakushi-ji* Temple

III Excavation in the *Asuka* area and Others

- Excavations of *Mizuochi* Site; No.9, No.1995-1
- Excavations of *Asuka-dera* Temple Site; No.1996-1, 1996-3,84
- Excavations of *Kawara-dera* Temple Site; No.1995-1, No.1996-1, 1996-2
- Excavation of *Tachibana-dera* Temple Site; No.1995-1
- Excavation of *Sakata-dera* Temple Site; No.1996-1
- Excavation of *Yamada-dera* Temple Site; No.10,11
- Excavations of *Kibiike* Temple Site; No.81-14, 81-16
- Other excavations

表1　1996年度　飛鳥藤原宮跡発掘調査部発掘調査一覧（＊は95年度調査分）

調査次数	調査地区	調査期間	面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
＊藤原宮78-9	5AJH-R・S 右京六・七条二坊	95.12.18～96.02.09	460㎡	橿原市飛騨町	近藤大典	宅地造成	22
＊藤原宮78-10	5AJK-C・D 宮西面大垣周辺	96.03.27～03.28	102㎡	橿原市縄手町	黒崎　直	水路改修	92
藤原宮81	5AJS-U・T 右京一条一坊	96.06.12～09.20	1270㎡	橿原市縄手町	寺崎保広	店舗増築	92
藤原宮81-1	5AJD-M 左京七条三坊	96.04.02～05.09	428㎡	橿原市木之本町	羽鳥幸一	宅地造成	14
藤原宮81-2	5AJC-P 東方官衙南地区	96.04.30～05.02	9㎡	橿原市高殿町	藤田盟児	住宅建設	92
藤原宮81-3	5AJK-C 西方官衙北地区	96.05.27～05.28	6㎡	橿原市縄手町	巽淳一郎	住宅建設	92
藤原宮81-4	5AJL-A 西方官衙南地区	96.06.12～06.13	15㎡	橿原市縄手町	巽淳一郎	小学校増築	92
藤原宮81-5	5AJL-C 右京五条三坊	96.07.02～07.19	108㎡	橿原市縄手町	毛利光俊彦	住宅建設	92
藤原宮81-6	5AJE-R 北面外濠	96.09.04～09.05	11㎡	橿原市醍醐町	毛利光俊彦	住宅建設	12
藤原宮81-7	5AMG-N 左京十一条三坊	96.09.18～10.01	68㎡	明日香村雷	毛利光俊彦	住宅建設	17
藤原宮81-8	5AMH-B・C・J・K・N 左京十一条三坊	96.09.12～10.30	667㎡	明日香村雷	荒木浩司	県道新設	19
藤原宮81-9	5AMC-E 奥山久米寺東方	96.09.24～09.27	20㎡	明日香村奥山	寺崎保広	住宅建設	92
藤原宮81-10	5AJB-T 東方官衙北地区	96.10.07～10.11	18㎡	橿原市高殿町	黒崎　直	住宅建設	92
藤原宮81-11	5AJC-E 左京六条三坊	96.10.14～10.17	27㎡	橿原市木之本町	黒崎　直	農小屋建設	92
藤原宮81-12	5AJC-P 東方官衙南地区	96.11.18～11.19	10㎡	橿原市高殿町	千田剛道	住宅建設	92
藤原宮81-13	5AJD-L 左京七条三坊	97.01.09～01.14	15㎡	橿原市木之本町	伊藤敬太郎	住宅建設	92
藤原宮81-14	5ADD-T 吉備池廃寺	97.01.09～03.26	420㎡	桜井市吉備	小澤　毅	確認調査	85
藤原宮81-15	5AJC-N 左京六条三坊	97.01.31～02.03	15㎡	橿原市木之本町	松村恵司	住宅建設	92
藤原宮81-16	5ADD-T 吉備池廃寺	97.03.31～04.04	100㎡	桜井市吉備	小澤　毅	水路改修	85
藤原宮82	5AJL-C・D 西方官衙南地区	96.10.07～97.02.07	1,800㎡	橿原市縄手町	千田剛道	道路造成	4
藤原宮84	5BAS-M・N 飛鳥寺寺域東南隅	97.01.09～継続中	2400㎡	明日香村飛鳥	島田敏男	万葉ミュージアム建設	56
＊本薬師寺1995-1	5BMY-H・N 西塔・南面回廊	96.02.01～06.06	609㎡	橿原市城殿町	千田剛道	計画調査	24
＊本薬師寺1995-2	5BMY-M 寺域西限	96.02.13～02.15	24㎡	橿原市城殿町	黒崎　直	農業倉庫建設	31
＊本薬師寺1995-3	5BMY-H 寺域南辺	96.03.18～04.09	211㎡	橿原市城殿町	千田剛道	水路改修	31
本薬師寺1996-1	5BMY-H、5AMQ-J 寺域南辺	97.03.24～03.27	100㎡	橿原市城殿町	長尾　充	水路改修	32
水落遺跡9	5AME-Q 漏刻台東南	96.04.08～08.19	533㎡	明日香村飛鳥	深澤芳樹	計画調査	40
＊水落遺跡1995-1	5AMD-N・U、5AME-P 掘込地業北端他	96.03.18～03.27	34㎡	明日香村飛鳥	西口壽生	下水道竪坑	42
石神遺跡1996-1	5AME-U 東辺	96.12.02～12.03	65㎡	明日香村飛鳥	西口壽生	農道補修工事	92
＊橘寺1995-1	5BTB-B 北門	96.01.09～02.14	91㎡	明日香村橘	西口壽生	村道拡幅	72
＊川原寺1995-1	5BKH-E・F 寺域各所	96.03.04～03.14	37㎡	明日香村川原	黒崎　直	下水道竪坑	57
川原寺1996-1	5AKI、5BKH-D・E・F 寺域各所	96.07.15～08.30	155㎡	明日香村川原	花谷　浩	公共下水道	57
川原寺1996-2	5BKH-A 寺域西南部	96.10.29～11.25	60㎡	明日香村川原	黒崎　直	店舗改築	67
山田寺10	5BYD-F・N 南面東回廊	96.05.10～08.07	170㎡	桜井市山田	佐川正敏	計画調査	78
山田寺11	5BYD-A・H 寺域南辺	96.10.21～12.16	175㎡	桜井市山田	黒崎　直	水路整備他	84
飛鳥寺1996-1	5BAS-S・T、5AME-S・T 西門	96.08.19～11.18	262㎡	明日香村飛鳥	花谷　浩	公園整備	44
飛鳥寺1996-2	5BAS-M 寺域東方	96.08.28～09.04	15㎡	明日香村飛鳥	荒木浩司	住宅建築	92
飛鳥寺1996-3	5BAS-R・S・Q・K 5AME-R 講堂周辺・西面大垣他	96.10.07～12.13	270㎡	明日香村飛鳥	西口壽生	公共下水道	52
坂田寺1996-1	5BST-A 西面回廊	96.12.16～97.02.28	120㎡	明日香村祝戸	西口壽生	住宅建設	75

I 藤原宮の調査

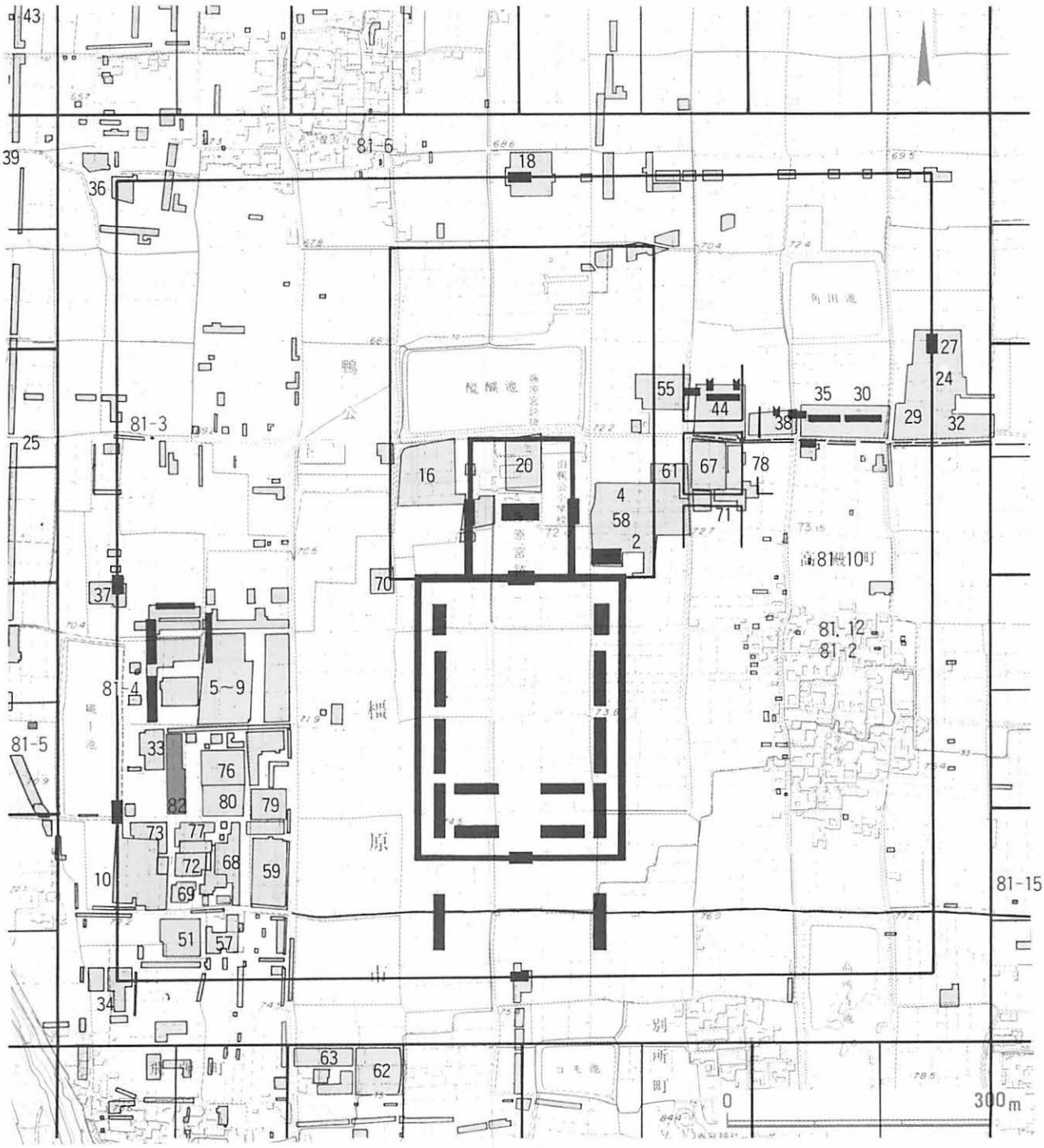


図1　藤原宮の調査位置図　1：7000

◆西方官衙南地区の調査―第82次

1　はじめに

調査地は藤原宮西南隅に位置し、藤原宮西方官衙南地区にあたる。道路造成にともなう事前調査として実施したもので、調査面積は1,800㎡である。

本調査区周辺では、1972年以降、多くの調査がおこなわれている。その結果、調査区の北には、先行条坊側溝を埋め立ててつくられた平城宮馬寮と類似する官衙（第5～9次調査『藤原報告II』）を発見したのをはじめ、東には掘立柱塀で区画された2つの区画（第76・79・80次調査）がみつかるなどの成果を得ている。

このほかに藤原宮の下層一帯に広がる弥生・古墳時代の四分遺跡の様相も断片的ながら判明してきている。

これらの調査によって、今回の調査区には、藤原宮の官衙のほか、藤原宮直前期では、宮内先行条坊として西二坊坊間路と五条大路などの遺構の存在が予想されると

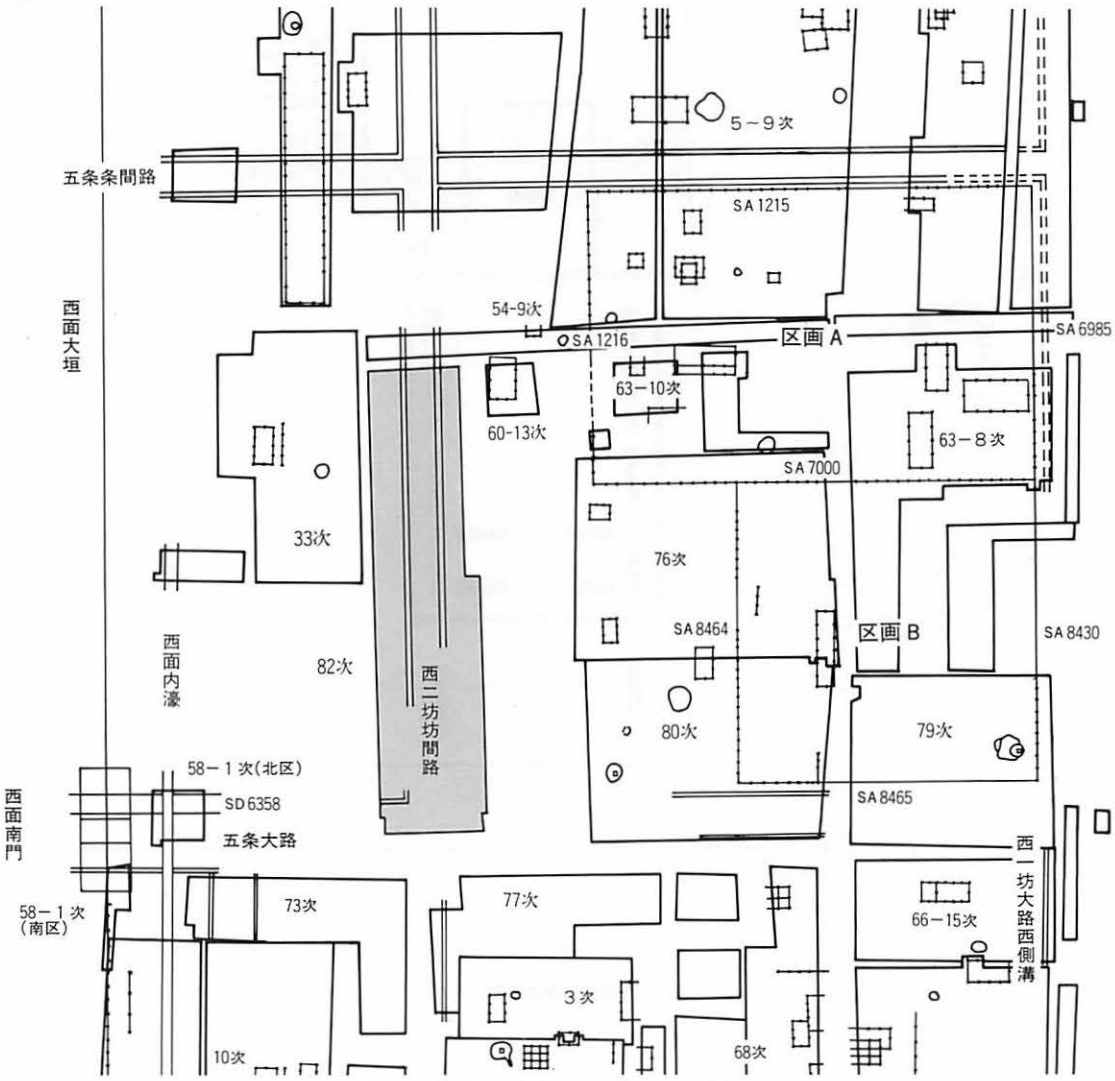


図2　西方官衙南地区遺構図および調査位置図　1：1500

ともに四分遺跡の様相など、弥生時代から藤原宮期にかけての長期にわたる土地利用、空間利用にかんする成果が期待された。

2　基本層序

調査地の基本的な土層は、上から水田耕土、床土、灰褐色土で、その下は、場所によって異なる。調査区南半では、灰褐色土は比較的薄く、その下は、南端で、弥生時代の包含層である黒灰色粘土が露出している場所があるほかは、大部分が黄褐色細砂または、こげ茶色の粗砂層が広がる。調査区中ほどから北よりにかけては、床土と古墳時代の包含層（炭混じり暗褐色砂質土、灰色粘質土）とのあいだに、灰褐色土が分厚く堆積する。

遺構の検出は、中世以降の細溝群を、灰褐色土において、藤原宮期および藤原宮直前期、古墳時代斜行溝などは、灰褐色土下の茶褐色砂質土または、包含層上面において行った。古墳時代水田は、黄褐色砂層下で検出した。

3　検出遺構

検出した遺構は、時期別にみると、(1)　古墳時代　(2)藤原宮直前期から藤原宮期　(3)藤原宮期以降中世以前　(4)中世以降、に大別される。

中世以降の遺構は、東西、南北方向からなる多数の細溝群であり、記述を省略する。

藤原宮直前期から藤原宮期の遺構

宮内の先行条坊にぞくする西二坊坊間路、五条大路とその側溝、土坑がある。

西二坊坊間路SF3205　すでに北方の調査区（第54-９次）で検出されており、今回検出分は、その南延長部にあたる。東西両側に側溝をそなえ、道路の規模は路面幅で約5.4～6.5ｍ、側溝心心間で約6.2～6.8ｍである。調査区の北から約56ｍ分までは、両側溝を検出し、以南は、西側溝がさらに約12ｍ分かろうじて残っていた。五条大路との交点付近までの間約18ｍは、両側溝とも削平のため遺存していない。

西二坊坊間路東側溝SD3206　幅が約１ｍ、深さは調査区北端で約1.2ｍと最も深く、南へいくにしたがって浅くなる。調査区中ほどでは、底部を浅く残すのみとなる。溝内の土層は、上半部が青灰色ないし灰褐色砂質土で、堅くしまっており、溝の埋め立て土と推定する。下半部

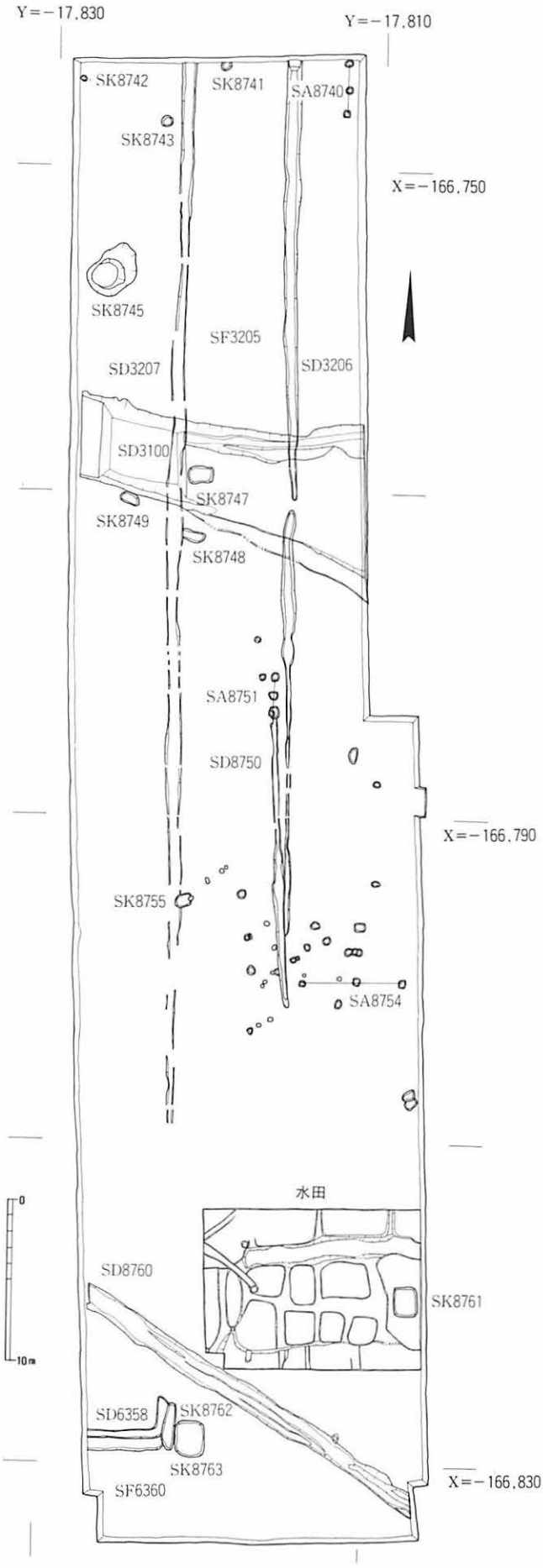


図３　第82次調査遺構図　1：400

は、細砂混じりの青灰色ないし暗灰色粘質土で、流水時の堆積である。青灰色ないし灰褐色砂質土は、調査区北端から約20mほどまでは認められるが、以南は、細砂混じり青灰色粘質土のみとなる。調査区北端に近い位置の溝底に近い暗灰色粘質土から藤原宮直前期に属する土師器、須恵器とともに「評」の文字を含む木簡が出土した。

交差点における西側溝SD3207は、交差点から北に3m分だけ存在し、幅約1m、深さ約0.2mである。溝の東が土坑SK8762で破壊されているので、本来の幅はもう少し広かったであろう。

西二坊坊間路西側溝SD3207　幅0.8～1.0m、深さは、北端で現存0.3mほどで、南へ行くにしたがって浅くなる。東側溝にくらべて浅い。溝内は青灰色砂質土が堆積する。その上の溝埋土である灰褐色砂質土は北端から10mほどまでは薄く認められるが、以南では青灰色砂質土のみである。少量の土器が出土した。

西二坊坊間路は、調査区南端で五条大路SF6360と交差する。交差点北西で、西二坊坊間路西側溝と五条大路北側溝が逆L字形に連接する。これに対応する北東位置では、側溝はまったく残っていない。

五条大路SF6360は、今回の調査区内では、北側溝を調査区西端から約5m分を検出したが、南側溝は、調査区外になるため、この位置での道路幅を確認することはできなかった。なお、五条大路の幅については、東の調査区（第80次）では、溝心心間で約8.5m、路面幅で約7.5mという値が知られている（『藤原概報26』）。

五条大路北側溝SD6358は、幅1.2m、深さ約0.2m。南半部が深い。

なお、宮内の五条大路に関しては、東の既調査区（第80次調査）では、藤原宮期に側溝の掘りなおしがあり、宮内道路として踏襲されたことが指摘されている（『藤原概報26』）。

土坑SK8745は、南北約3.4m・東西2.3mの不整形で、深さ約1mある。埋土は、2層にわかれ下層は、暗灰色粘土、上層は青灰色砂質土である。一気に埋め戻された様相を呈する。

藤原宮期以降中世以前の遺構

藤原宮期以降中世以前の遺構としては、塀2と、南北溝1、土坑4がある。

南北溝SD8750は、東側溝SD3206に重複して、それより

図4　西二坊坊間路・五条大路交差点（西北隅　東から）

新しい溝である。全長18.5m、幅40cm前後で、深さ5～10cmある。溝の方位は、北で西に振れる。

南北塀SA8740は、調査区東北隅で検出した。南北2間で、柱間は北から約1.6m、約1.4mである。北接する第54-9次調査区にはのびない。SA8740は、坊間路との前後関係は決めがたい。ただ、方位がほぼ方眼方位にのっていることや、東約6mに検出されている掘立柱建物（4間×3間の南北棟）（第60-13次調査）と中心を揃えることから、それとの関係が考えられるが、決め手を欠く。

南北塀SA8751は柱間2間で、南北溝SD8750を切って柱穴が掘られており、柱間は北が約1m、南が約1.2m。

東西塀SA8754は、東西2間、柱間は、東から約2.7m、約3.3mである。

土坑SK8741は、一辺約0.6mの不整方形、深さ0.15mの小土坑である。土坑内には平瓦1枚分を3枚に割って重ねてあった。北に接する既調査区（第54-9次調査区）には関連する遺構は存在せず、この1箇所だけの単独の存在であり性格は明らかにしがたい。

次に記す3箇所の土坑は、調査区南よりにある。

土坑SK8761は、東西1.4m、南北1.8mの長方形、深さ0.5mである。土坑SK8762は、東西1m、南北3.6mの長方形、深さ0.2mである。土坑SK8763は、東西1.7m、南北2.3mの長方形、深さ0.4mである。

これらの遺構は、先行条坊路面上に位置すること（SK8763）、側溝が埋められた後に、もうけられていること（SK8762）、また縄叩きの平瓦をふくむ（SK8741、SK8761、SK8763）ことなどから、年代は藤原宮以降に属する。土坑SK8762も土坑SK8763と同質の埋土であり、同

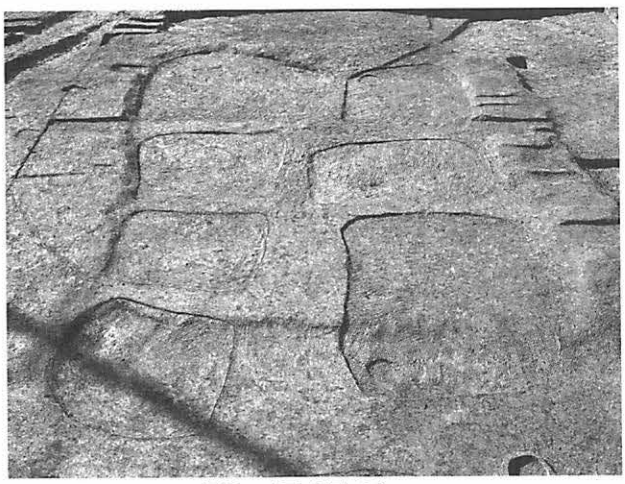


図5　水田（東から）

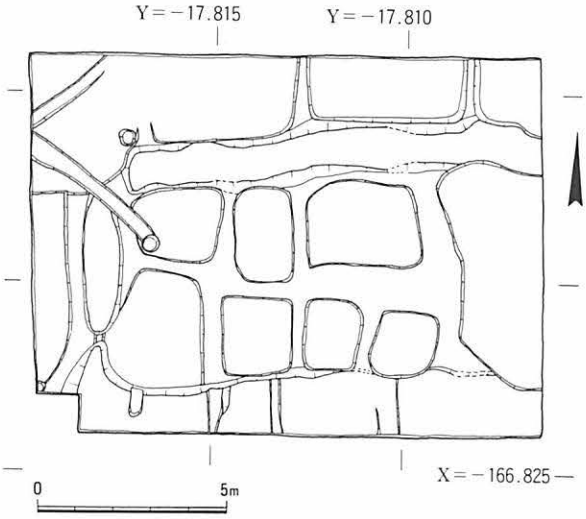


図6　水田遺構図　1：200

時期と推定される。

古墳時代の遺構

水田と斜行溝２がある。

水田　東西13ｍ、南北10ｍの範囲を掘りさげて検出した。水田は、黒灰色粘質土（弥生時代包含層）をベースにつくられており、計12枚を検出した。

まとまって検出されたのは本調査区の南辺に露出した包含層を南辺として、その西と北の大畦（幅約１ｍ）で区画された東西に長い長方形の大区画（南北約５ｍ、東西11ｍ以上）のなかに形成された水田である。低い小畦（幅0.3～1.0ｍ、高さ15㎝前後）で区画された水田８枚を検出した。東端の１枚をのぞく７枚は全形がわかり、いずれも方形または、不整方形である。大きさは、大中小３種類あり、小型は一辺1.5～2.5ｍで５枚、中型は３×２ｍで２枚ある。東の１枚は一辺６ｍで、これらより大型である。西の大畦の北端と南よりに２箇所の開口部がある。

調査区内には、このほか大畦の北にも一辺７～８ｍの水田が３枚ある。西北の斜行する２条の溝は、重複関係から見て水田よりは新しいものである。

水田面は黄色の微細な砂層でおおわれていた。水田の深さは、小畦からの深さが、現状で約３～７㎝ある。水田中からは土器細片が少量出土している。大半がベースの包含層から遊離した弥生土器の細片であるが、１片の古墳時代の布留式の土師器小片があり、水田の時期がその頃である可能性を示している。

斜行溝SD3100　調査区中ほどで検出した南東から西北へ流れる大規模な自然流路である。既に、西隣の第33次調査区や、東方の第76次や、第80次の調査で、存在が知られていたもので、本調査区では、長さ18ｍ分を検出した。本調査区内での溝幅は４ｍ前後で、オーバーフローを含めると、最大幅は、西端で約５ｍ、東端で約９ｍとなる。両岸は比較的急な傾斜をもつ。溝の深さは、調査区西端において溝肩から約２ｍまでは確認したが、崩壊の危険により、溝底は未確認である。調査区西端の南岸裾に近い位置に掘立柱穴１箇所を検出した。掘形は、一辺約0.8ｍで、柱根（直径20㎝、長さは現状で0.6ｍ）を残す。検出位置からみて橋脚かとおもわれるが、対する北岸には掘形や、柱根は認められない。

溝の堆積層は、基本的に砂層であって、上から第１～３層に大別される。第３層は、分厚い砂礫層で、磨滅したごく少量の土器片の他は、ほとんど遺物をふくまず、強い流れがあったことを示している。第２層は、粘質土まじりの青灰色の細砂層であり、流れがゆるいか、または

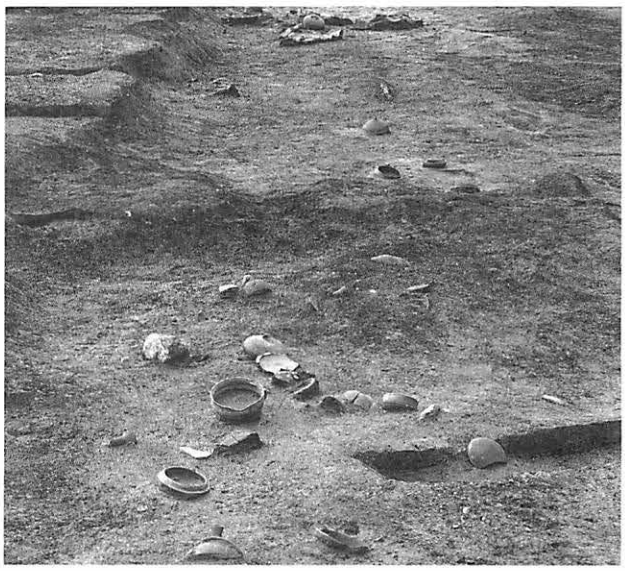


図7　斜行溝SD3100土器出土状態（東から）

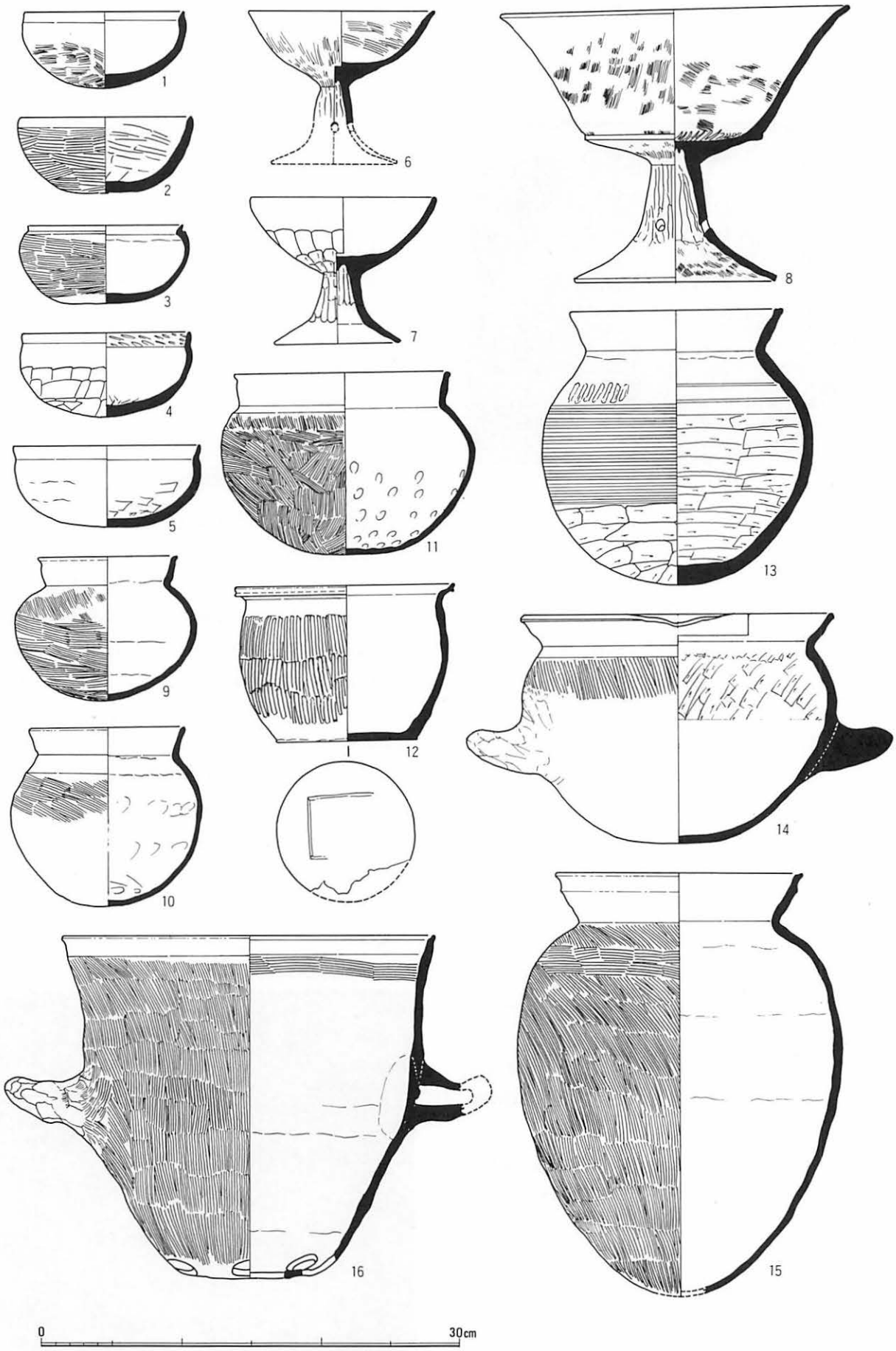


図8　古墳時代斜行溝SD3100出土土器 その1 1:4 土師器　韓式土器

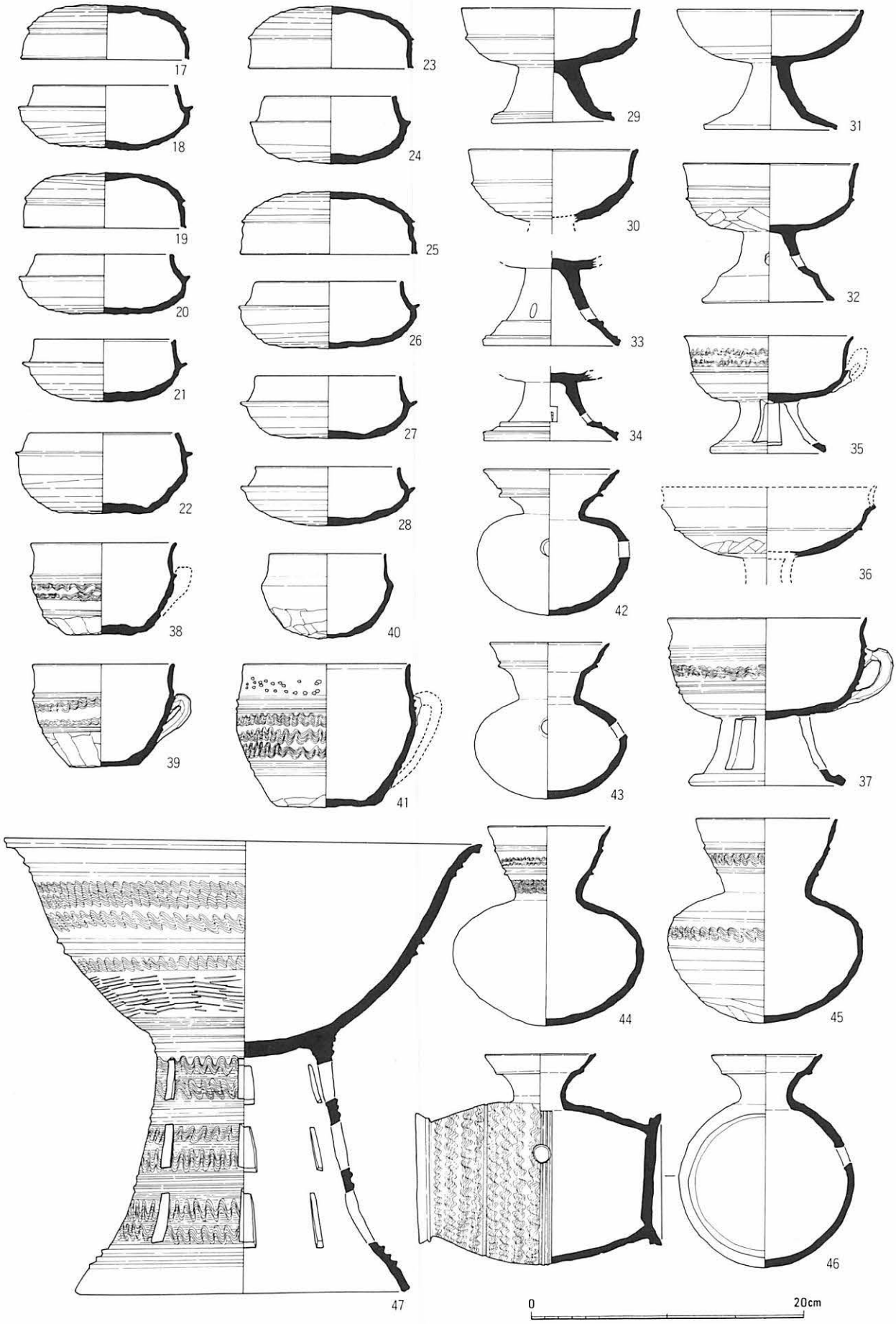


図9　古墳時代斜行溝SD3100出土土器 その2 1:4 須恵器

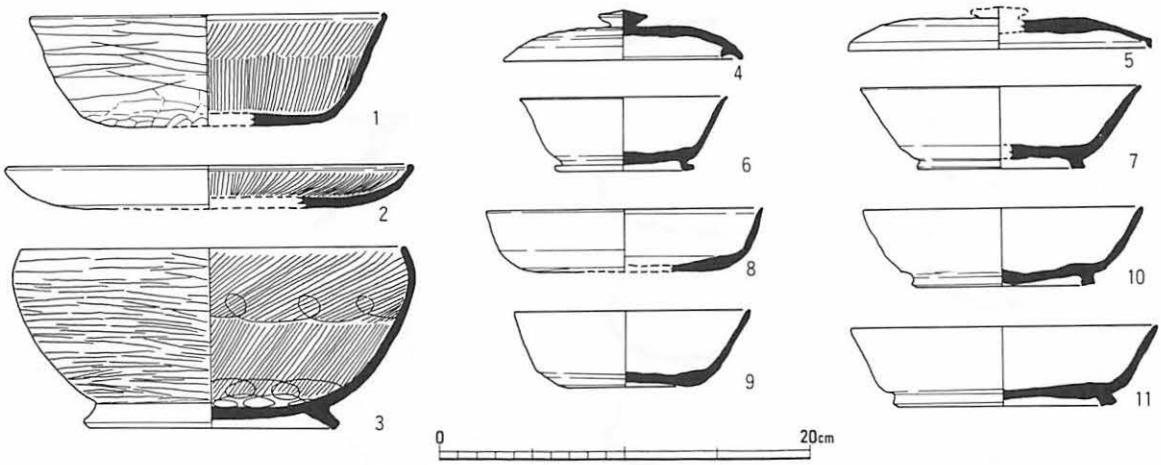


図10　西二坊坊間路東側溝SD3206出土土器　1：4

よどんだような状況である。多量の古墳時代土師器、須恵器、韓式土器が出土した。土器は南岸寄りに集中して出土する傾向がある。出土土器には、完形品または完形に近い大破片のものが多い。磨滅の痕跡もほとんどみられず、ごく近い場所から投棄されたものと推定できる。第1層は、厚さ5cm前後、溝の南岸に幅1～1.2mで、溝埋没の最終段階のオーバーフローとみられる。北半部は後の削平が深く及んでいるため、第2層が直接露出しており、第1層の本来の幅は不明である。堆積層は赤褐色の粗砂に礫をまじえ、多量の古墳時代土器を含むが、それらには、磨滅した細片が多い。

斜行溝SD8760　調査区南端で検出した南東から西北へ流れる溝である。幅は約1～1.4mで、深さは0.4m、長さ26m分を検出した。溝は、ほぼ直線をなし、調査区の西端および東寄りでわずかに南へ湾曲する。基本的には素掘りであり、北岸東寄りには、長さ2mにわたって、しがらみ護岸の痕跡と見られる杭と杭跡計4箇所がある。堆積層は、灰褐色砂質土を主体にし、古墳時代の土師器、須恵器、韓式土器が出土した。

4　出土遺物

主な出土遺物には木簡、土器、瓦、木製品、金属製品、石製品がある。

木簡　西二坊坊間路東側溝SD3206から1点出土した。釈文、法量は次のとおり。

［知夫利ヵ］
□□□評由羅五十戸

加□□加伊□□　□　192×33×4mm　031型式
［鮎ヵ］

上半右側を欠くが完形に近い。切り込みをもつ荷札木簡で、貢進地はのちの隠岐国智夫郡由良郷（和名抄の表記）にあたる。「評」「五十戸」の表記からみて7世紀末の木簡である。

土器　弥生時代、古墳時代と藤原宮期前後の土器がある。弥生土器は下層包含層に伴うもので弥生時代後期が主体を占める。古墳時代土器は主に2条の斜行溝から出土した古い段階の須恵器をともなうものが多量にあり、須恵器をともなわない古式土師器が少量ある。藤原宮期前後の土器は、西二坊坊間路の東側溝SD3206および土坑SK8745等から出土したものにまとまりがある。土器の大半は整理途上にあり、ここでは、斜行溝SD3100と、東側溝SD3206出土土器をとりあげる。

SD3100出土土器（図8・9）　下流の第33次調査、上流の第76・80次調査でも多量に出土し、南方の第62次調査地、香久山西麓の第46次調査地の住居跡出土の土師器・韓式土器等や明日香村山田道第2次調査地、橿原市四条大田中遺跡、南山古墳群出土の土器群などとともに、古墳時代中期における飛鳥地域の様相をさぐる上で重要な資料である。

ここでは、主に第2層出土の須恵器、韓式土器を抽出して示した。したがって、器種構成を反映していない。

土師器には、椀（1～5）、高杯（6・7）、甕（9～11）、鍋（14）、長胴甕（15）、甑（16）などがある。椀には調整法や口縁部の形状の異なる多様なものがある。高杯には、半球形の杯部外面をハケメ調整する小型品（6・7）と口縁が大きく外反する大型品（8）がある。小型品には対向する2個の円孔をうがつものと円孔のな

いものがある。甕には球形かやや縦長の体部のものと広口で浅いもの（11）がある。細かい白色砂粒が多量に混じる胎土が特徴的で、椀（1・3）や韓式土器の影響をうけた長胴甕（15）、甑（16）にも共通している。鍋（14）は、片口で棒状の把手を貼り付ける。内面上半を強くナデあげる。長胴甕（15）は、口縁部上半に強いヨコナデによる段がある。体部外面は細かなハケメ、内面はナデ調整。粘土紐の継ぎ目が残る。甑（16）は、下すぼまりの体部中央に棒状の把手を付ける。把手は中空になっているが、内部から挿入した芯が脱落した可能性がある。底部には中央の円孔を囲んで5つの小円孔をあける。

韓式土器には軟質の平底鉢（12）、瓦（13）、甑、硬質の平行叩き甕などがある。12は外面を平行叩きで調整し、底部に方形のゲタ痕がある。13は器形が土師器甕と類似するが、厚手で体部外面に平行叩きとカキメ状の条痕がある。二次加熱を受けている。甕にはほかに薄手で外面に平行叩き、内面に同心円当て板痕跡が残るものがある。甑には平底で外面を格子叩きで調整したものがある。

須恵器には杯（17～28）、高杯（29～37）、椀（38～41）、瓦（42・43）、壺（44・45）、樽形瓦（46）、器台（47）などがある。陶邑編年のTK73～TK216に属する古い段階のものが主体をしめる。多様な高杯、把手付椀など韓式系の硬質土器と区別しがたいものがある。

SD3206出土土器（図10）「評」の木簡と伴出した点で重要である。器種には土師器杯A（1）、杯C、皿A（2）、鉢B（3）、甕、須恵器杯B（6・7・10・11）、同蓋（4・5）、杯A（8・9）、壺、甕がある。1は口径18.6cm、高さ5.8cm。2は口径21.1cm、高さ2.3cm。ともに口縁端部が小さく内側に肥厚する。3は口径20.3cm、高さ9.7cm。2段の放射暗文の境にラセン文を施す。須恵器杯B蓋では身受けのかえりのある4に似たものが多く、かえりのない5のようなものはわずかである。杯BIII（6）は高台の端部が外方へ突き出る。杯B（7・10・11）の高台も外方へ踏ん張り気味で藤原宮造営直前期の特徴を示している。8は内外面に火襷があり、底部はロクロケズリ。9は底部へラキリで内面に自然釉がかぶる。

瓦　丸瓦が23点（2.33kg）、平瓦107点（10.78kg）が出土した。SK8741出土分以外は、ほとんどが小片で出土し、軒瓦は皆無であった。

木製品　SD3206出土の曲物底板などがある。

石製品　石包丁、石斧、紡錘車などがある。石包丁は、弥生時代の包含層（黒灰色土）から出土したものである。石斧は小型の柱状片刃石斧で、SK8761から出土したが、ベースをなす弥生時代包含層から遊離したものであろう。紡錘車は、古墳時代溝SD8760から出土した滑石製の截頭円錐形のものである。

5　まとめ

今回の調査では、予想位置に先行条坊道路（西二坊坊間路、五条大路）とその側溝を検出した。

西二坊坊間路については、その東側溝は、今回検出した約54m分のうち、北寄り約10m分が深くなっている。西側溝より東側溝が深く掘られていることは北接する第54-9次調査区での知見と同様で、側溝のどちらか一方が深いことはしばしばみられる現象である。

北の既調査区（第5～9次）では、先行条坊側溝を埋めて官衙が造営されているが、本調査区でも先行条坊側溝は埋められているとみてよい。

五条大路については、西面南門から東に向かう宮内道路として踏襲されたとかんがえられているが、今回の調査区内では、五条大路が藤原宮期に踏襲されたことは確認できなかった。

本調査区は、藤原宮西方官衙南地区の西南隅部に近く、東の既調査区で発見されているような区画の存在が予想された。しかし、今回の調査区で検出できたのは、小規模な塀や、土坑のみであり、建物はまったく検出されていない。ここが、西面南門を入って、すぐの場所であることから、広い空閑地となったのか、あるいは既に削平をうけて建物などの遺構が失われたのか、現状では決しがたい。

今回の調査区では、このほか古墳時代の水田と溝を検出した。水田は4世紀代、斜行溝SD3100と、SD8760は5世紀代と推定する。水田の遺構は、これまで、本調査区をふくむ四分遺跡では、弥生後期の水田（第59次調査、第66-15次、68次西）が多く知られているが、古墳時代の水田としては第71-2次調査に次ぐ2例目である。集落の北辺に近いとおもわれるこの地域の古墳時代における土地利用の状況を示す好資料を得たことも特筆されよう。

（千田剛道／考古第2　土器：西口）

◆北面外濠の調査 ―第81-6次

はじめに

この調査は、個人住宅の改築に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で実施した。調査地は藤原宮の北面大垣の外濠にかかり、その検出を主目的として、敷地の北よりに南北５ｍ、東西２ｍの調査区を設けた。

調査地の土層は、表土・床土下に厚さ0.1ｍほどの灰褐色砂質土があり、その下（表土下約0.4ｍ）は暗黄灰色粘質土の地山となる。

遺構

主な遺構は、北面外濠と柱穴１個で、ともに地山面で検出した。他に灰褐色砂質土上面から掘り込んだ土坑などがあるが、遺物は出土しなかった。

北面外濠SD145は、南岸を検出した。検出した幅は約１ｍで、調査区北端での深さは約0.7ｍである。溝心はさらに北になる（推定幅約５ｍ）。藤原宮期の土器が少量出土した。柱穴は一辺約0.7ｍ、深さ約0.7ｍ。柱は抜き取っている。痕跡から、柱の径は20cmほどになる。１個だけで建物か塀か不明だが、掘形からみると北で西に振れる。柱抜取穴や掘形から、古墳時代の布留式の土師器甕が出土した。

（毛利光俊彦／史料）

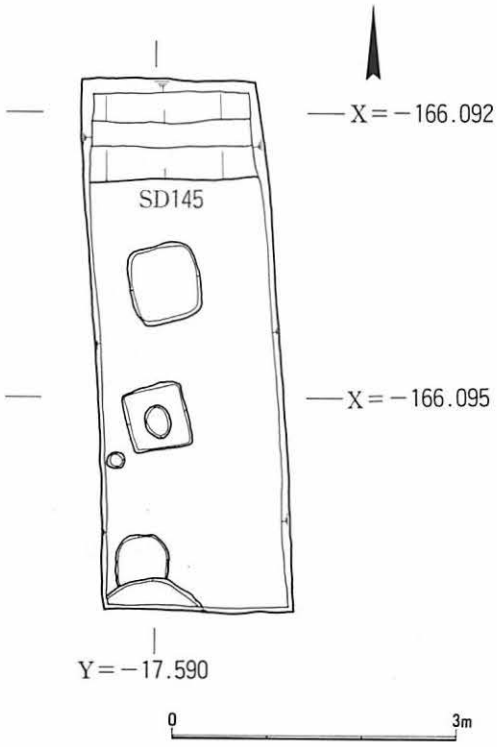


図11　第81-６次調査遺構図　1：80

コラム：あすかふじわら①

1995年度	1996年度			
冬	春	夏	秋	冬
黒崎　直	巽淳一郎	毛利光俊彦	黒崎　直	松村恵司
千田剛道	深澤芳樹	寺崎保広	千田剛道	小澤　毅
西口壽生	佐川正敏	花谷　浩	西口壽生	島田敏男
近藤大典	藤田盟児	荒木浩司	水戸部秀樹	長尾　充
	村上　隆			伊藤敬太郎
	羽鳥幸一			

◆現場班ラインアップ

1995年度冬の現場班は、黒崎総担当で12月18日にはじまり、最後の埋め戻しが終わったのが６月６日。４月からの新年度は、春は深澤総担当で、４月２日から８月19日まで。夏は寺崎総担当で７月２日から11月18日まで。秋は、千田総担当で、10月７日から翌1997年２月28日まで。冬は島田総担当で１月９日から５月６日まで、それぞれ稼働した。この他、現場には、随時、国内の研修生が混じって、ミャンマーなどからの多くの外国人が現場に参加し、国際色にあふれた。

(C)

Ⅱ 藤原京の調査

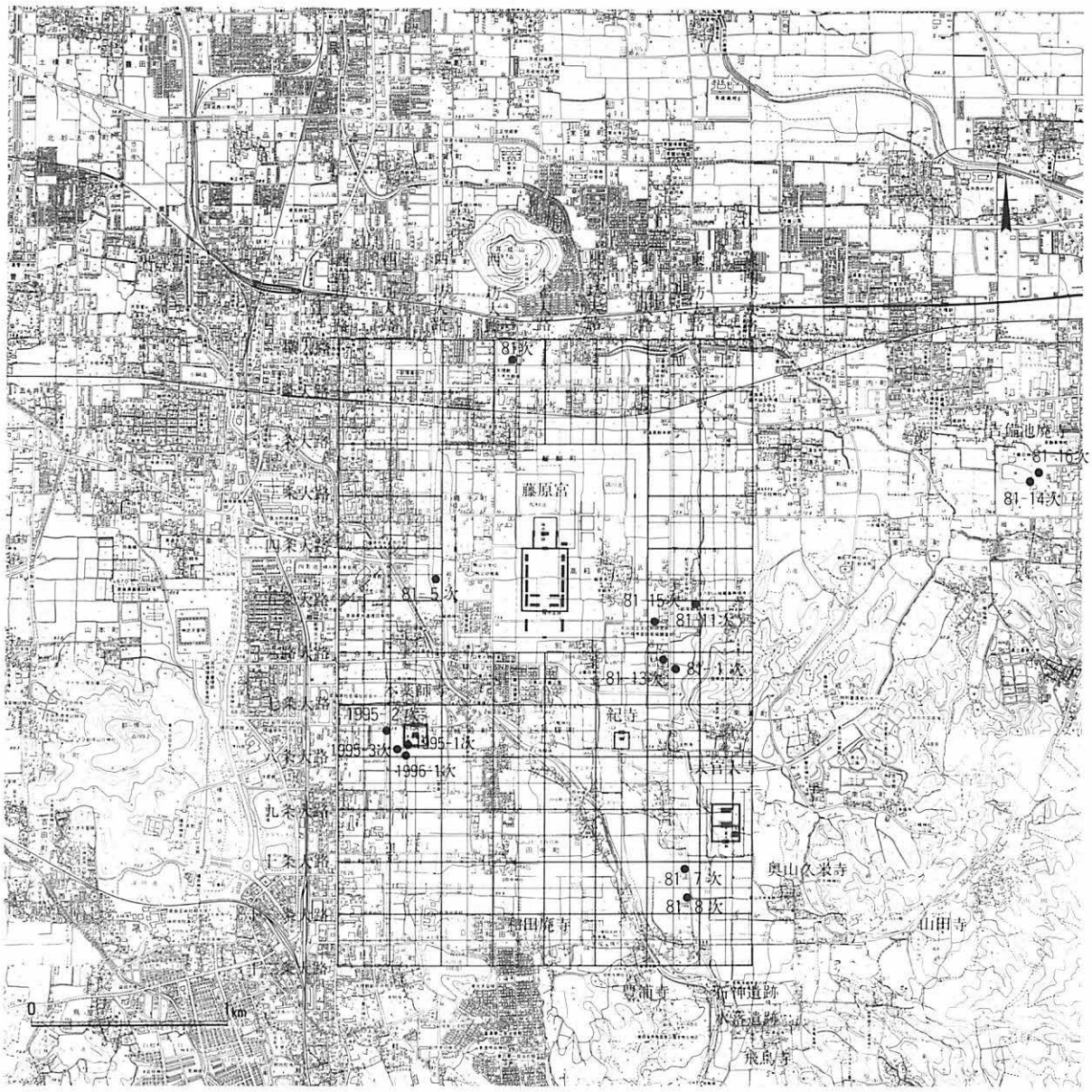


図12　藤原京の調査位置図　1：35000

◆左京七条三坊の調査—第81-1次

1 はじめに

この調査は、橿原市木之本町において宅地造成にともなう事前調査として実施したものである。調査地は香久山の西裾部で、木之本町の集落からは、道路を隔てて東に位置する。調査区は、1985～1987年の第46・47・50・53次調査（『藤原概報16～18』）で検出されたSF4300、SD4301・4302、SA4282等の東三坊坊間路に関連する遺構の南延長上にあたり、それらの検出を調査の主たる目的とした。調査面積は428m²である。

2 遺 構

基本層序は、上から耕土、床土、黄褐色土(地山)、暗褐色砂質土（地山）である。後述する井戸の断面観察によれば、さらにその下には砂礫層が厚く堆積している。すべての遺構の検出は黄褐色土上面で行った。検出した主な遺構には、古墳時代の流路、藤原宮期の掘立柱塀・素掘溝、中世の掘立柱建物・井戸・溝がある。

古墳時代の遺構

調査区南東隅から北端中央に向かって流れる流路SD8702である。幅は４ｍ。上層遺構保護のため完掘はしなかったが、下層堆積土には、布留式の土師器、上層に５世紀から６世紀代の須恵器片が含まれ、藤原京建設以前には埋没していたと考えられる。

藤原宮期の遺構

南北溝SD8700とそれを埋め立てた後に建てられた南北塀SA8701がある。SD8700は北方の第46次調査などで検出した溝SD4301の南延長上にほぼ位置し、東三坊坊間路東側溝とみられる。溝は幅1.2ｍ、調査区北部での深さ0.7～0.8ｍで、南ほど浅くなって、北端から約20ｍで途切れる。埋土に流水の形跡はみられず、暗褐色土で埋め立てている。埋土には藤原宮期の土器が含まれている。なお、西側溝については本調査区では検出されず、削平

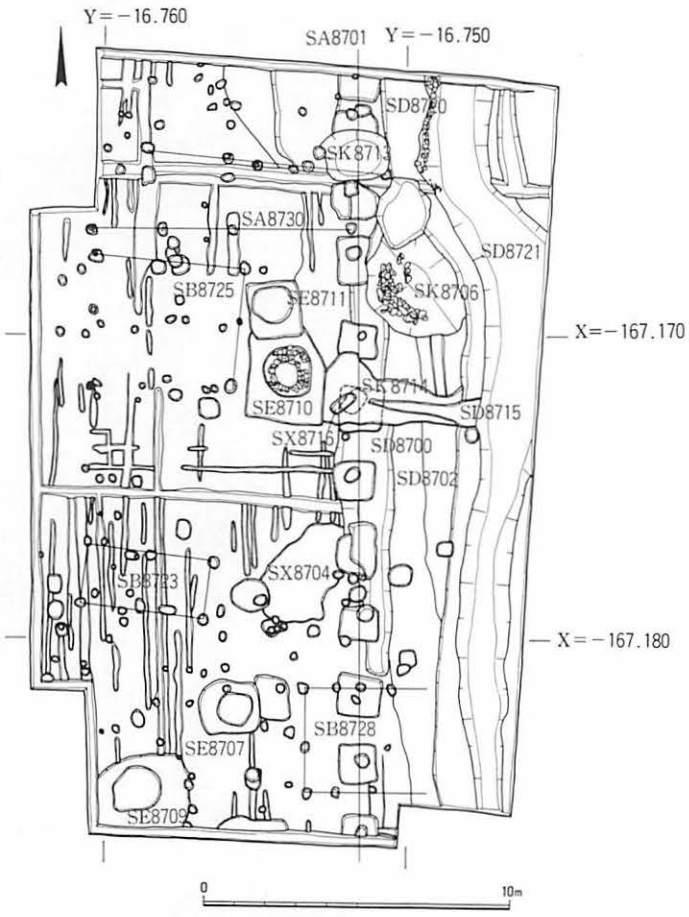


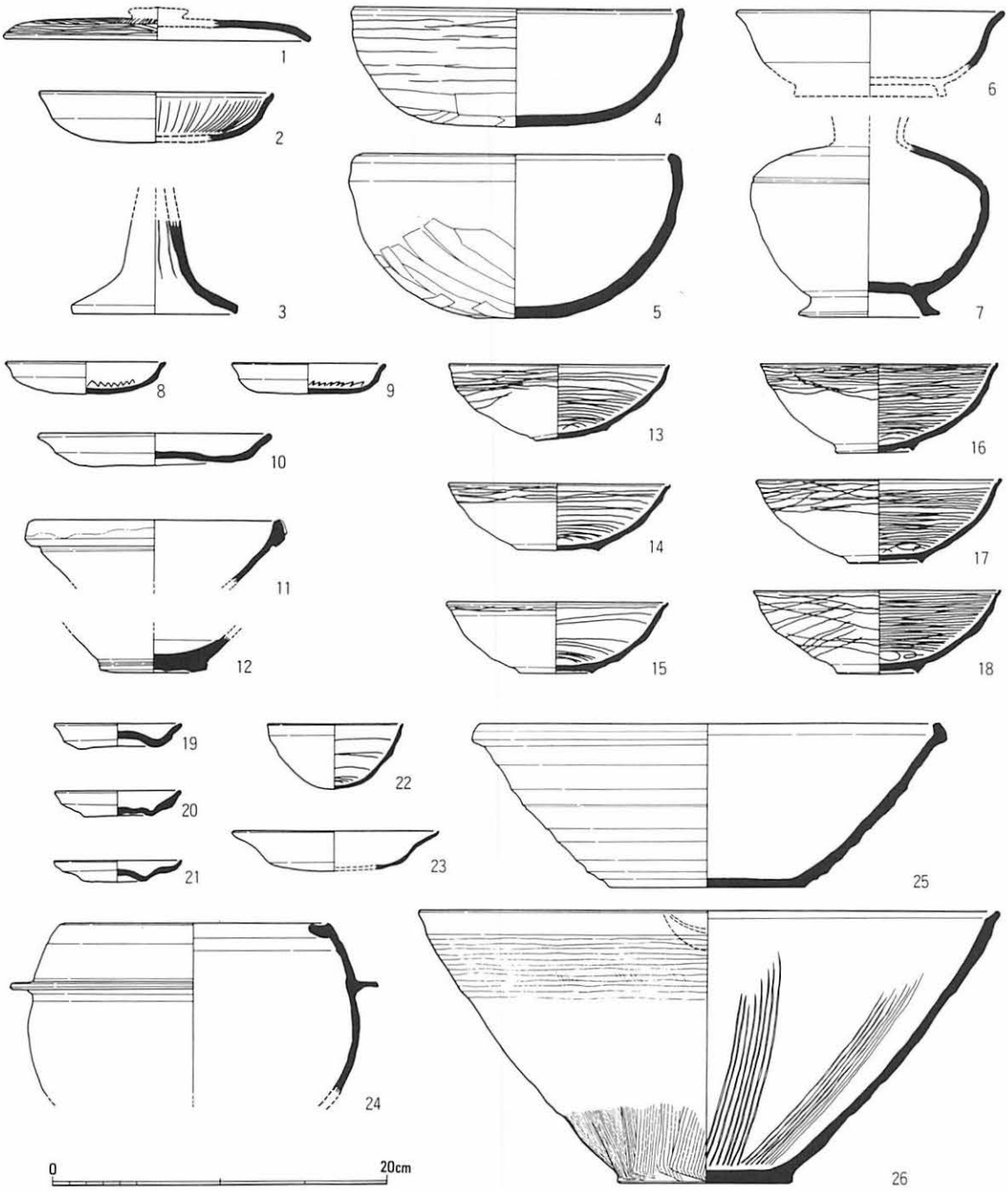
図13 第81-1次調査遺構図 1：250

されたとみられる。

南北塀SA8701は、11間分を検出した。柱掘形は一辺1.2～1.5ｍ。いずれにも柱抜取穴か柱痕跡がある。柱間は約2.4ｍ（８尺）で、深さは北端で0.3～0.4ｍ。SD8700同様、南で浅く、南端では約0.1ｍしかない。柱抜取穴には藤原宮期の土器が少量含まれていた。

SA8701はSD8700の位置を踏襲して建てられており、遺物の上からも、藤原宮期の中での造替えとみられる。

このことから当調査区周辺の原地形は、香久山西麓の



1・2・5・6・7 SA8701柱穴掘形、3・4 SD8700、8～10・13～15 SK8706上層、11・12・16～18同下層 19・22～25 SD8720、20・21・26 SD8721

図14 第81-1次調査出土土器 1：4

尾根に派生する南から北に下る緩やかな傾斜地であって、藤原京の造営に際しても平坦に造成されることなく、溝や塀が設けられたことをうかがわせる。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構

SK8706は最大幅4.5m、深さ0.9mの不整形な土坑である。西壁の中腹部から底部にかけて大石が投棄されていた。埋土は上層と下層に大別される。上層から13世紀前半代の瓦器椀の完形品が大量に出土した。下層では12世紀後半代の瓦器椀が最新である。

SE8707は一辺約2mの隅丸方形の掘形をもつ石組井戸で、深さは0.8mある。石組上部の大半の石は抜き取られ、底部の3段分が残るのみであった。埋土出土遺物から12世紀後半には廃絶していたとみられる。

SE8709は一辺3m以上の掘形をもつ石組井戸である。SE8707と同様、石組の石は大半が抜き取られ、砂礫層上面から積まれた底部の4段を残すのみであった。抜取穴埋土からは、瓦器椀、土師器皿・羽釜、青磁椀片等が出土した。井戸は13世紀末から14世紀前半代に廃絶したであろう。

室町時代の遺構

SD8720・SD8721は、調査区東辺で検出された幅3.0～3.5m、深さ0.8mの南北溝。両溝とも調査区の北で

緩やかに西へ屈曲し、蛇行する。SD8721は屈曲部から北の西壁部を人頭大の石や瓦で護岸し、SD8720の東岸を壊していることから、15世紀中頃に溝を掘り直したことが明らかである。西壁護岸部の南で土師器小皿が肩に沿って一括投棄されていることもこれを裏づける。SD8720は浅く不整形な土坑SK8714より新しく掘られた溝で、その西の石組井戸SE8710もSK8714より新しい。井戸SE8710の廃絶は遺物からみると15世紀中頃以降のことである。井戸SE8710の北の井戸SE8711はSE8710の掘形の一部を壊して造られている。SE8711は深さ2.0m。石はすべて抜き取られている。遺物からみた時期には大差がない。

3 遺物

土器、瓦塼類、石製品が出土した。

土器 整理箱にして10箱程度で、その7割は中世に属し、藤原宮期に属するものは少ない。

藤原宮期のSD8700・SA8701出土の土器はその大部分が細片である。土師器は、杯A、杯B蓋(1)、杯G、皿A、高杯(3)、鉢類(4・5)があり、鉢類の残りが良いのに対して、甕類などの煮沸形態の量が少ないことが特徴的である。須恵器は、杯B、平瓶、横瓶、台付長頸壺(7)、甕類がある。須恵器杯F(6)は、上部が外に開いてS字状に屈曲し、口縁を丸くおさめ、下半部にケズリをほどこすことや、胎土が緻密で、灰白色を呈するという特色をそなえることから佐波理鋺の模倣形態である可能性が高い。

SK8706からは、多量の瓦器皿(8・9)、椀(13～18)と少量の土師器皿(10)、土師器羽釜、白磁椀(11・12)が出土した。SD8720からは土師器皿(19・23)、土師器羽釜(24)、瓦器椀(22)、東播系須恵器擂鉢(25)、青磁椀や白磁椀が出土した。SD8721には土師器小皿が一括投棄されており、器壁の厚いもの(20)と薄いもの(21)に大別できる。ほかに土師器羽釜、瓦質土器の擂鉢(26)、火鉢、深鉢、青磁椀などが出土し、すべて小片ではあるが、豊富な器種構成をもっている。

瓦塼類 丸瓦36点、6.7kg、平瓦126点、21.2kg、塼1点が出土し、いずれも第47次、第50次調査(『藤原概報17』)で報告されたものと同型式である。

石製品 中世土坑SK8713から出土した石帯がある。奈良時代末から平安時代初頭の型式に属する。

図15 南北塀SA8701(南から)

4 まとめ

藤原宮期の南北溝SD8700は、北の左京六条三坊での成果に対比すると、東三坊坊間路の東側溝とみてよいだろう。西側溝は削平のため遺存していなかったが、推定路面上には、SD8700に重複して南北塀SA8701がある。藤原京条坊が藤原宮期に廃止される状況は六条三坊でも確認されているが、七条三坊でも当初は西北坪と東北坪が坊間路で分離されていたが、後にこの二つの坪を一体に利用し、南北区画塀を設けたことが判明した。

つぎに、中世の南北溝SD8720とそれを改修したSD8721にかんしては、調査地周辺の水田の段差や畦畔に、この溝と南北に連続しているものがみられ、平面的にそれらをたどると現在の木之本の集落を囲む。環濠の遺存地割であろう。とすれば、SD8720・SD8721は中世環濠集落の東を画する溝である可能性が高い。

以上のように本調査区では、藤原宮期と中世環濠との2つの時期の区画施設の存在を明らかにしたが、香久山、中ノ川を東にひかえる環境で、それらがどのように機能したかは興味深い課題である。今後の調査で、周辺施設との関連や当地区の土地利用の変遷が追究されていくことを期待したい。 (羽鳥幸一)

◆左京十一条三坊の調査—第81-7・8次

1　ギヲ山東麓の調査（第81-7次）

はじめに

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、明日香村雷のギヲ山東麓で実施した。調査区は東西12.5m、南北4mに設定し、のち一部拡張した。調査面積は68m²。

ギヲ山周辺では、これまでに北・東辺で小規模な調査を実施している。顕著な遺構は検出していないが、大官大寺式の軒瓦が出土したり、表採されており、近くに瓦窯もしくは寺院（雷廃寺）の存在が推測されてきた。

今回の調査地は畑地で西は約1m程高い畑地（幅8～15m）を隔ててギヲ山の麓になり、東は村道小山雷線をはさみ、一段低い水田になる。後述のように今回検出の建物柱穴は調査区の西に延びており、西の畑地の少なくとも東半部は後世に盛土されたと推定できる。また、調査地の畑地は現在は1枚だが、かつては3枚以上に分かれていたことが旧水路（SD3734～3736・3738）の存在や床土のレベルからわかる。西3分の2が高く、東南・東北部は、これより0.2～0.3m低い。

層　序

耕土・床土（厚さ0.2～0.4m）の直下は、西南隅が花崗岩風化土の地山、以東は西が灰白色粘土混り赤褐色粘質土、東が灰白・赤褐色粘土混り暗黄灰褐色土の整地土1となる。整地土1上面のレベルは、西端で92.3m、東端で92.1m。厚さは、東に次第に厚く、東端で約0.4mある。整地土1の下は、調査区北辺を幅0.6m掘り下げて確認した。西半が黄褐色粘質土、東半が赤褐色粘土混り茶褐色粘質土（整地土2）。上面のレベルは西端で92.3m、東端で91.7mであり、東にゆるやかに傾斜する。調査区の北西隅で深く掘り下げたところによると、整地土2は厚いところで約0.4mあり、この下には厚さ約0.4mの灰白・赤褐色粘土混り黄褐色粘質土の整地土3があり、赤褐色粘土の地山に至る。地山は約20度の傾斜で東北方向に落ちており、整地土2・3も東下りになっている。

整地土1は飛鳥Ⅰの土器を含む。後述のように整地土2の上面から掘り込まれた炭混り土坑SX3752からも飛鳥Ⅰの土器が出土しており、整地土1の造成は7世紀前半かやや遅れる時期と推定できる。整地土2・3からは遺物が出土していない。SX3752出土土器からは、7世紀前半以前となるが、調査地南方の雷丘東方遺跡や雷丘北方遺跡の調査成果からすると、7世紀前半のなかに納まる可能性が高い。整地土3は上面で遺構を検出しておらず、整地土2と同時期の整地と考えるべきかもしれない。

遺　構

遺構は、整地土1の上面と、整地土2の上面で検出した。それぞれを上層遺構と下層遺構と呼ぶ。下層遺構の年代は7世紀前半頃、上層遺構の年代は7世紀前半以降で、一部は調査区内の細溝などで、出土した土器から9世紀に入る可能性がある。

下層遺構　掘立柱穴3個と斜行溝SD3750・3751、炭混り土坑SX3752がある。いずれも上層の整地土を部分的に掘り下げて検出したため、不明瞭な点が多い。

掘立柱穴3個は調査区東辺で検出。北の2個は重なり、2時期にわたるが、建物か塀かは不明。北の2個の柱穴の北にも落ち込みがあるが、浅い土坑のようである。

斜行溝SD3750・3751は、調査区の西辺で検出した素掘溝。SD3750の幅は約1.0m、深さは約0.6m。柱穴の断ち割りによって、調査区南端にも延びていることを確認。底のレベルは南が15cm程高く、北に流れていたと推定できる。北に真直ぐに延長すると、ギヲ山の北東麓をかすめることになる。SD3751の幅は約0.6m。溝肩は西が東より約0.2m高い。西肩からの深さは約0.4m。両溝は北で西に20度～30度の振れをもってほぼ平行する。間隔が約0.4mと近接しており、時期を異にしようが、出土遺物もなく、新旧関係は明らかでない。

炭混り土坑SX3752は、SD3750の上に掘られた浅い土

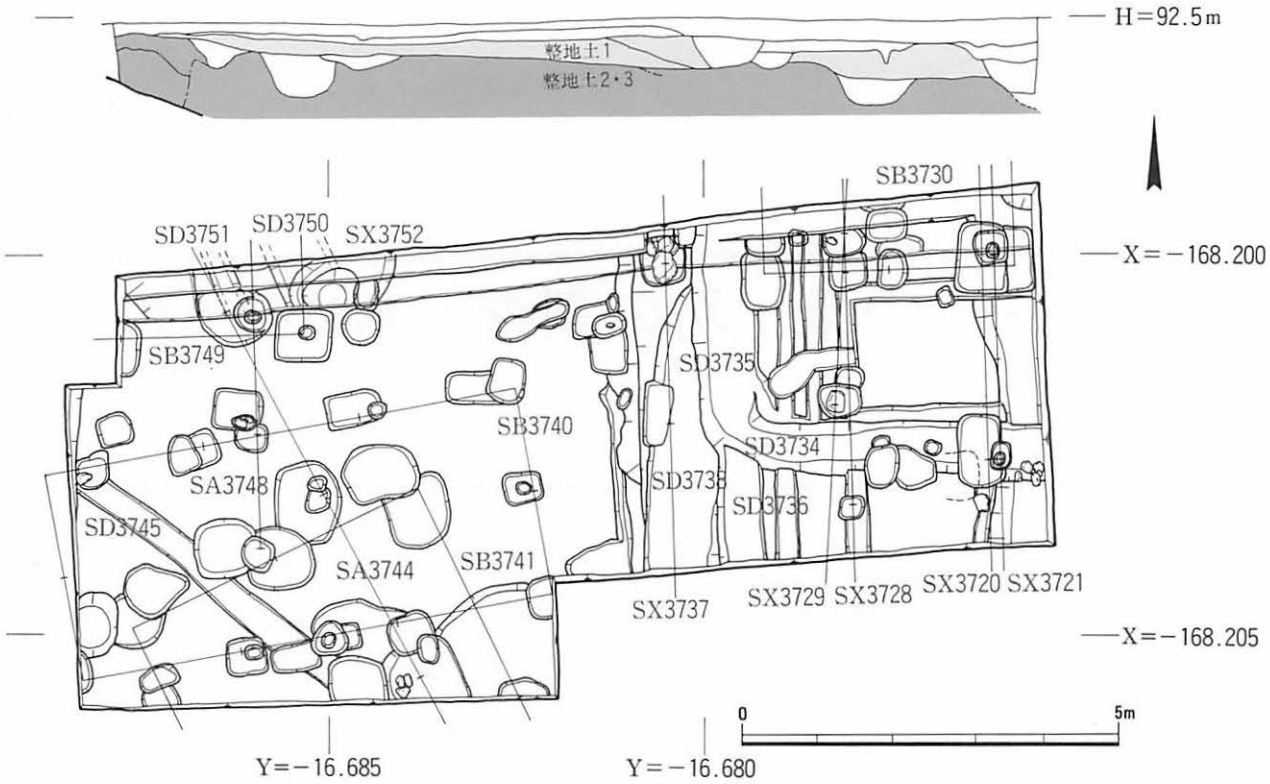


図16　第81-7次調査遺構図・土層断面図　1：100

坑。東西の長さは約1.5m、深さは約0.2m。焼壁を含み、炉の可能性もある。埋土からは飛鳥Ⅰの土器が出土。

上層遺構　掘立柱建物SB3730・3740・3741・3749、掘立柱塀SA3748・3744、斜行溝SD3745のほかに、建物か塀か確定できない柱穴列SX3720・3721・3728・3729・3739などがある。便宜上、調査区の西半と東半とに分けて記述する。

調査区西半の掘立柱建物SB3740は桁行4間以上、梁間2間の東西棟。柱間は桁行が約2.1m等間、梁間が約1.4m等間。方位は北で西に10度前後振れる。柱穴から飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土。7世紀末～8世紀初頭頃の建物だろう。SB3741はSB3740と重なる位置にある南北棟。桁行1間以上、梁間2間。柱間は桁行約2.0m、梁間2.1m前後。方位は北で西に20度～30度振れる。SB3749は東西に並ぶ2個の柱穴で、柱間は推定2.4m。西はギヲ山があり、3間以上にはならない。建物の可能性が高い。方位は次のSA3748に近い。掘立柱塀SA3748は2間以上の南北塀。柱間は約1.5m等間。方位はほぼ真南北である。SA3744は2間以上の掘立柱塀。柱間は2.0～2.1m等間。方位は北で西に30度前後振れる。この西のSD3745は素掘りの斜行溝。幅約0.4m、深さ約0.3m。埋土に8世紀の土器を含む。西はギヲ山があり真直ぐには延びない。

東半の掘立柱建物SB3730は東西に並ぶ3個の柱穴。中央の柱穴が小さく南北棟の南妻の可能性が高い。柱間は約1.7m等間。方位は次のSX3720などに近い。SX3720・3721は、ほぼ同じ位置で南北に並ぶ2個の柱穴。SX3720が古く柱穴も大きい。建て替えか。柱間はともに約2.7m。方位はほぼ真南北。SX3728・3729もほぼ同じ位置で南北に並ぶ柱穴。SX3728が古い。柱間は約2.3m等間。SX3729は石を据えている。柱間は約1.5m。方位が北で東に若干振れる。SX3737も南北に並ぶ柱穴。北の柱穴には石を据えている。南の柱穴は水路で壊されている。柱間は約2.1m。礎石建ちかもしれない。

西半の遺構は、新旧関係からSA3744→SB3740・3741→SD3745→SA3748と変遷する。出土土器からみるとSB3740が7世紀末頃から8世紀初頭頃、SD3745が8世紀。SA3744と同様に方位が大きく振れるSB3741は7世紀前半～後半、SA3748と同様に方位が真南北になるSB3749は奈良時代か、平安時代に入ろう。

東半の遺構は、新旧関係から、SB3730→SX3720→SX3721、SX3728→SX3729と変遷する。大半は方位が真南北であり、藤原宮期以降、一部は平安時代に入るだろう。

まとめ

今回の調査では、7世紀前半から平安時代に入る可能性がある8時期以上の遺構の存在が、ギヲ山東麓ではじめて明らかとなった。遺跡の様相は南方の小墾田宮と推定される雷丘東方遺跡や雷丘北方遺跡と類似する。これらとの関係、あるいは藤原京の様相を究明する上で、今後なお周辺の調査の進展がまたれる。なお、今回の調査地でも、表土からではあるが、大官大寺式軒丸瓦6661B1点と若干の丸・平瓦が出土している。大官大寺との関連の究明も今後の課題である。　（毛利光俊彦）

2　雷丘北方遺跡第7次調査（第81-8次）

はじめに

本調査は県道橿原神宮停車場東口飛鳥線の新設に伴い実施した。調査地は雷丘の北、ギヲ山との間の微高地に位置する。県道新設とそれに関連する既往の調査では、7世紀後半に造営された大規模な建物群などがみつかっている（『藤原概報22・23』）。今回の調査地の西側で行った第75-16次調査では、7世紀前半の南北溝や整地層および7～8世紀の建物などがみつかった（『藤原概報26』）。また、本調査区の東で実施した第71-10次調査では、7世紀から平安時代初めまでの遺構がみつかっている（『藤原概報24』）。調査は、第75-16次調査区と第71-10次調査Ⅶ区との間の遺構の状況を明らかにすることを主な目的とし、これらの調査区および第29-18次調査区と一部重複して調査区を設定した。調査面積は667㎡である。

基本層序　調査区の西部では耕土直下に花崗岩の岩盤風化土がある。東部では盛土、耕土、床土、黄褐色粘土（地山）の順に堆積する。包含層は削平されてほとんど残らない。調査区東部にある地山の黄褐色粘土層は西で岩盤風化土の上にのっているので、本来この層は西部にも広がっていたが、後世の削平で失われたのだろう。岩盤風化土の範囲は雷丘とギヲ山を結ぶ線上に位置する。遺構検出は地山面で行い、一部整地土層上面で行った。

遺　構

7世紀前半の遺構　北で西に振れる南北方向の遺構群である。振れの角度は10度から25度の間におさまる。掘立柱建物1と掘立柱塀8、溝3、土坑多数がある。

掘立柱建物SB3666は調査区南部で検出。南北3間（1.8m）、東西2間以上（2.1m）。南北塀SA3661より新しい。掘立柱塀SA3675は調査区東北部の南北塀。3間分を検出。柱間は北1間目が2.1m、それ以外は1.8m。掘立柱塀SA3660はSA3675の西にあり、これより新しい南北塀。7間分を検出し南北とも調査区外に延びる。柱掘形は他の塀に比べて深い。柱間は1.8mで北から5間目だけが2.1m。掘立柱塀SA3661はSA3660の西にある南北塀で、調査区南端で柱穴が失われているものの、11間分を検出。柱間は1.8m・2.1m・2.7mとばらつく。SA3661の北から2間目には東西塀SA3662がとりつく。掘立柱塀SA3668はSA3661と重複し、これより新しい3間の南北塀。柱間は2.1m。掘立柱塀SA3667はSA3661の西にある3間の南北塀。柱間は北1間が1.8m、他は1.5m。SB3666より新しい。掘立柱塀SA3669はSB3666の西の南北塀。柱間は1.2～1.8m。西側に東西塀SA3670がとりつく。掘立柱塀SA3673は2間の南北塀。柱間は約2m。SX3676はSA3667の西側にあり、一辺約1mの隅丸方形の柱穴2個とその中間に小型の柱穴1個が南北に並ぶ。柱間2.1m等間。性格不明。

南北溝SD3671は上記の建物や塀の西にある素掘溝。新旧2時期ある。下層のSD3671Aは後述の南北溝SD3674を埋め立て、周囲を整地した後に開削される。溝底は北で約0.4m下がる。上層のSD3671Bは溝幅1mから2.5m。北端で西側だけに河原石を積み上げた護岸施設がある。SD3671Bは南端で直角に折れて東西溝SD3672につながる。上層・下層とも飛鳥Ⅰの新しい段階の土師器と須恵器が出土した。南北溝SD3674はSD3671の西にあり、緩く湾曲する。幅0.8～1.5m、深さ0.5m。SD3674を覆う整地土層は、東側で検出した掘立柱塀すべてのベースとなっているのでSD3674は調査区内の遺構の中で最も時期が古いが、出土土器の様相は整地土層やSD3671と大きな違いはない。

その他の遺構　土坑SK3663は、調査区の東辺北部にあり、東は調査区外に広がる。南北8m以上、深さは約30cm。飛鳥Ⅰ以降奈良時代末までの土器や瓦を出土。土坑SK3664は、調査区北東隅にあるほぼ方形の土坑。東西約5.5m、北辺は調査区外。深さ20～30cm。飛鳥Ⅰ以降奈良時代初めまでの土器や瓦を出土。土坑SK3665は、SK3663の西、掘立柱塀SA3660・3661と重複する位置にある直径約3mの不整円形土坑。埋土に拳大から人頭大までの河原石が大量に捨て込まれていた。検出面から1.4mまで掘り下げたが、これらの石が井戸枠に組まれていた形跡はなかった。埋土から12世紀後半の瓦器椀、黒色土器椀、羽釜、渥美窯陶器のほか石製硯や瓦が出土した。

出土遺物

土　器　飛鳥時代（飛鳥Ⅰ）から鎌倉時代までの土器が出土。なかでも南北溝SD3671とSD3674およびSD3674を覆う整地土層出土の土器はまとまりのある資料である。

SD3671からは、土師器杯C・G、鉢、高杯G、甕A・B・C、竈や、須恵器杯G・H、鉢A、高杯H、瓶、横瓶などが出土。SD3674からは、土師器高杯G、ミニチュ

ア甕C、須恵器杯H、高杯、短頸壺が出土した。SD3674を覆う整地土層からも、土師器杯H、高杯G・H、甕B・C（近江産）と須恵器杯H、高杯、壺、横瓶、甕が出土。これら三者は、いずれも飛鳥Ⅰの新しい段階の良好な資料群で、1994年度の第75-16次調査(雷丘北方遺跡第5次調査）の南北溝SD3580および東半部整地土層出土土器(『藤原概報26』52～55頁、Fig.31・32)と同時期である。

この他、包含層や土坑SK3663などから須恵質の陶棺片が7点出土。外面を格子目叩きしナデ調整したのち突帯を貼り付ける。外面にヘラ描きと竹管紋による施紋を行った破片もある（図17)。

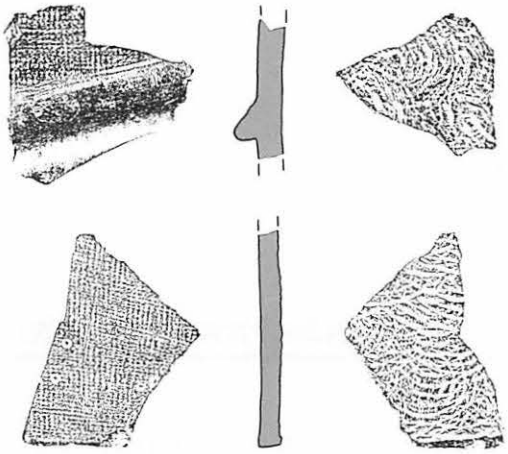
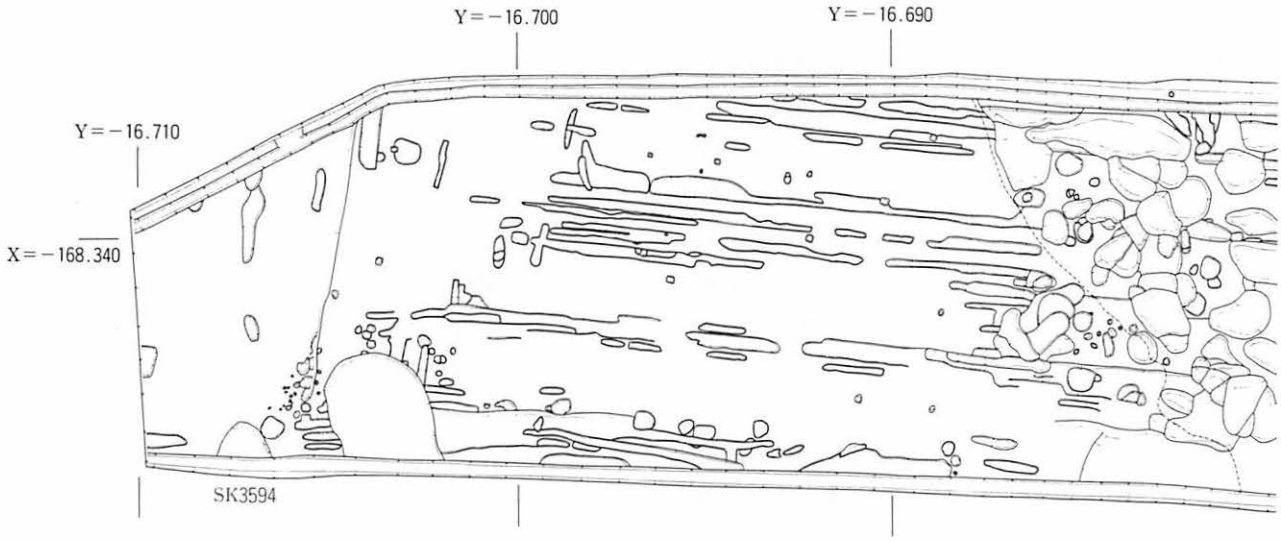


図17　陶棺片　1：4

瓦塼類　丸・平瓦の他、軒瓦、塼と隅木蓋瓦が出土。軒瓦は大官大寺所用軒平瓦6661Bが3点出土。隅木蓋瓦は、前面に重弧紋風の紋様をもち、藤原宮所用品である。類品が藤原宮内裏東官衙地区（第55次調査）で出土（『藤原概報18』10頁第4図)。丸瓦と平瓦は少量。大半が大官大寺のものだが、凸面布目平瓦が少量ある。丸瓦19点2.6kg、平瓦176点29.3kgが出土した。

まとめ

今回の調査区で検出した遺構は、奈良時代の土坑SK3663・3664および鎌倉時代の土坑SK3665以外は、7世紀代とみてよいだろう。これらの遺構は重複関係から、SD3674→SD3671、SA3675→SA3660、SA3661→SA



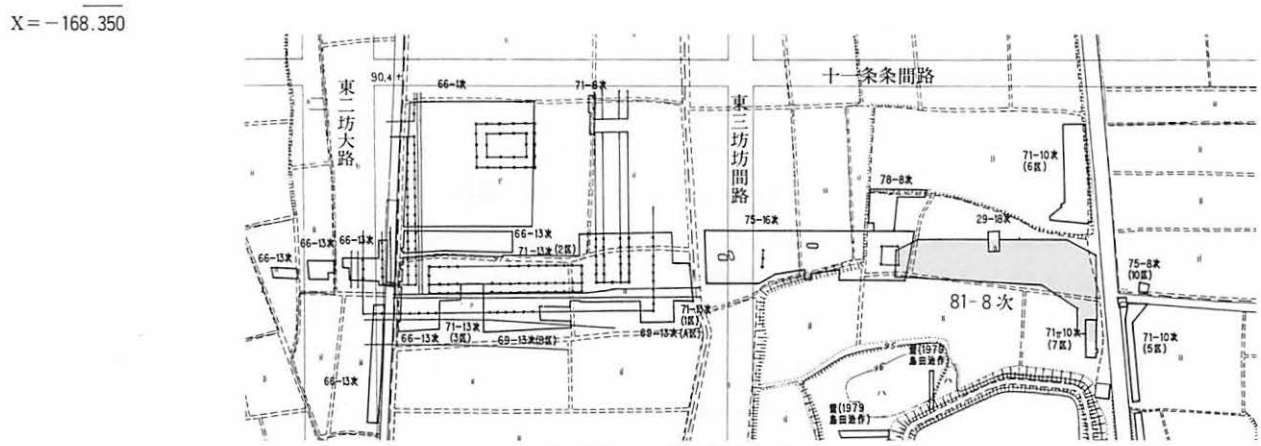


図18　第81-8次調査位置図　1：2000

3668、SA3661→SB3666→SA3667、の変遷がある。だが、出土土器ではSD3674・3671に大きな時期差はなく、共に飛鳥Ⅰの新しい段階でとらえられる。したがって、SD3671にほぼ平行する塀SA3660やSA3661などもこれと同時期だろう。

遺構分布からみると、SD3671以西は遺構が希薄だから、この溝をその東方に展開する遺構群の西限施設とみることもできる。しかし、SD3671は南端で西に折れSD3672に接続し、むしろ西側を囲い込む形で掘削されている。さらに、SD3671以西では検出した柱穴の深さが2～3cmたらずで、後世の大きな削平のため遺構が残らなかったと考えるべきだ。丘陵基盤の花崗岩風化土が遺構検出面に露呈していることもこれに対応する。よって、SA3660やSA3661はSD3671の東にある遺構群の西を限る施設と考えたい。

これまでの周辺での調査成果と比較すると、隣接する第71-10次調査Ⅴ・Ⅶ区だけでなく、南東の山田道第1・2次調査（『藤原概報19・20』）でも、7世紀前半の遺構は北で西に振れる方位をもつ。雷丘東方遺跡では7世紀後半にはほぼ真南北の方位になっており、周辺でも同様だ。一方、雷丘からギヲ山に連なる丘陵を隔てた西側では7世紀前半の遺構はほぼ方位にのっている（第75-16次調査『藤原概報26』）。このような地点による建物方位の違いは飛鳥地域におけるUrbunazation、つまりは宮の所在地と深い関わりがあるように思える。今回の調査では、検出した掘立柱遺構の多くを塀と報告したが、その当否を含め今後の周辺での調査に期待したい。　（荒木浩司）

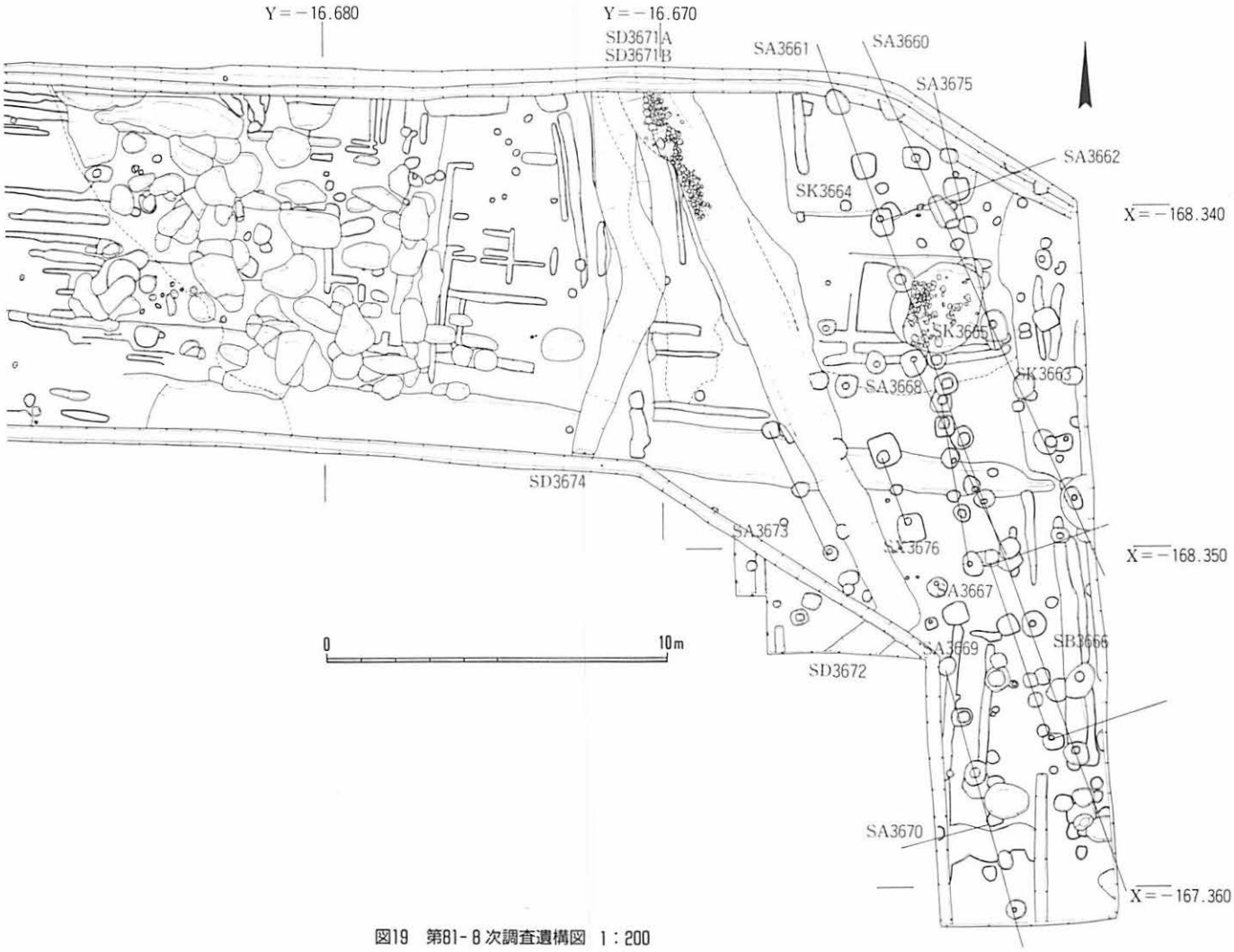


図19　第81-8次調査遺構図　1：200

◆右京六・七条二坊の調査 ―第78-9次

1 はじめに

本調査は、歩道建設及び宅地造成工事に伴って実施したものである。調査地は、藤原宮南面西門想定地のすぐ南にあたり、宮の南面を東西に走る六条大路と南面西門から南に伸びる西一坊大路の交差点付近に該当する。このため調査では、六条大路南北両側溝と西一坊大路西側溝、および右京七条二坊東北坪における宅地の一部を検出することが期待でき、また四分遺跡の範囲内にも含まれることから、弥生時代の遺構の存在も予想された。調査に当たっては、南北に細長い工事予定地に対して、南北2箇所の調査区を設定し、さらに弥生時代の遺構を追求するため、北区で21㎡の下層調査区を設けた。

調査の結果、予想通り、北区において六条大路と西一坊大路の交差点部分を確認した。また南区でも、西一坊大路の西側溝を検出したが、その西に存在したであろう東北坪内の居住に関連する遺構は確認できなかった。

2 遺 構

調査区の基本的な土層は、耕土、床土、灰褐色粘質土、暗茶褐色土の順で、地表下約50cmにある暗茶褐色土上面で藤原宮期の遺構を検出した。

六条大路北側溝SD2915は、幅約90cm、深さ約30cmで、長さ約5m分を検出した。溝SD2915の東端は北へ折れて、西一坊大路西側溝SD7758に連接する。六条大路南側溝SD2909は、幅約1m、深さ約20cmで、長さ約5m分を検出した。溝SD2909の東端は南に折れて、西一坊大路西側溝SD8511と連接する。この2本の溝に挟まれた部分が六条大路SF2910となり、その南北両側溝心心間の距離は、約16mである。

西一坊大路西側溝は、六条大路SF2910を挟んで北と南に分かれる。北の溝SD7758は、西肩を調査区の東端にほぼ重複するように約18mにわたって検出した。溝幅70cm以上、深さ約30cmである。溝SD7758の南端は、西に折れて六条大路北側溝SD2915に連接する。南の溝SD8511は、幅1.2m～1.5m、深さ10cm～20cmで、北区において約18m、南区において約11m分を検出した。溝SD8511の北端は、西に折れて六条大路南側溝SD2909に連接している。ただし、西一坊大路の幅員については、調査区の制約で東側溝を確認できず、今回の調査では判明しなかった。

北区に設けた下層の調査区では、弥生時代後期の土坑や小穴を検出した。これらの遺構は厚さ約30cmの暗茶褐色土(上面が藤原宮期の遺構面)を除去し、黄灰色粘質土上面で検出した。この粘質土は南から北にかけて斜めに落ち込む砂礫層の上に堆積したものである。調査区の北端で検出した土坑は、径約1m、深さ約30cmの不整円形で、大量の炭が詰まっていた。また中央部東寄りで検出した土坑は、径約80cm、深さ40cmである。

3 遺 物

遺物には瓦、土器がある。瓦には型式が不明な藤原宮式軒平瓦の小片と丸・平瓦が少量ある。土器には主に下層調査区から出土した弥生時代中、後期の土器が多量にあるほか、六条大路と西一坊大路の側溝出土の飛鳥II～Vの土師器、須恵器、中世の小溝出土の瓦器、土師器と平安時代初めの緑釉陶器皿片などがある。

4 まとめ

今回の調査で、六条大路の幅員が側溝心心間（以下同じ）16mであることが判明した。これまで宮の前面を通る六条大路は、京の中軸線でもある朱雀大路と同様、他の大路よりも幅広に設定されたものと推測されてきた。そして第21-1次(1977年度)や第29-7次(1980年度)の調査成果から、約21mの幅員が復原されてきた。しかし今回得られた数値は他の偶数条坊大路の幅員と同じ16mであった。いずれが正しいのか、再検討が必要であろう。

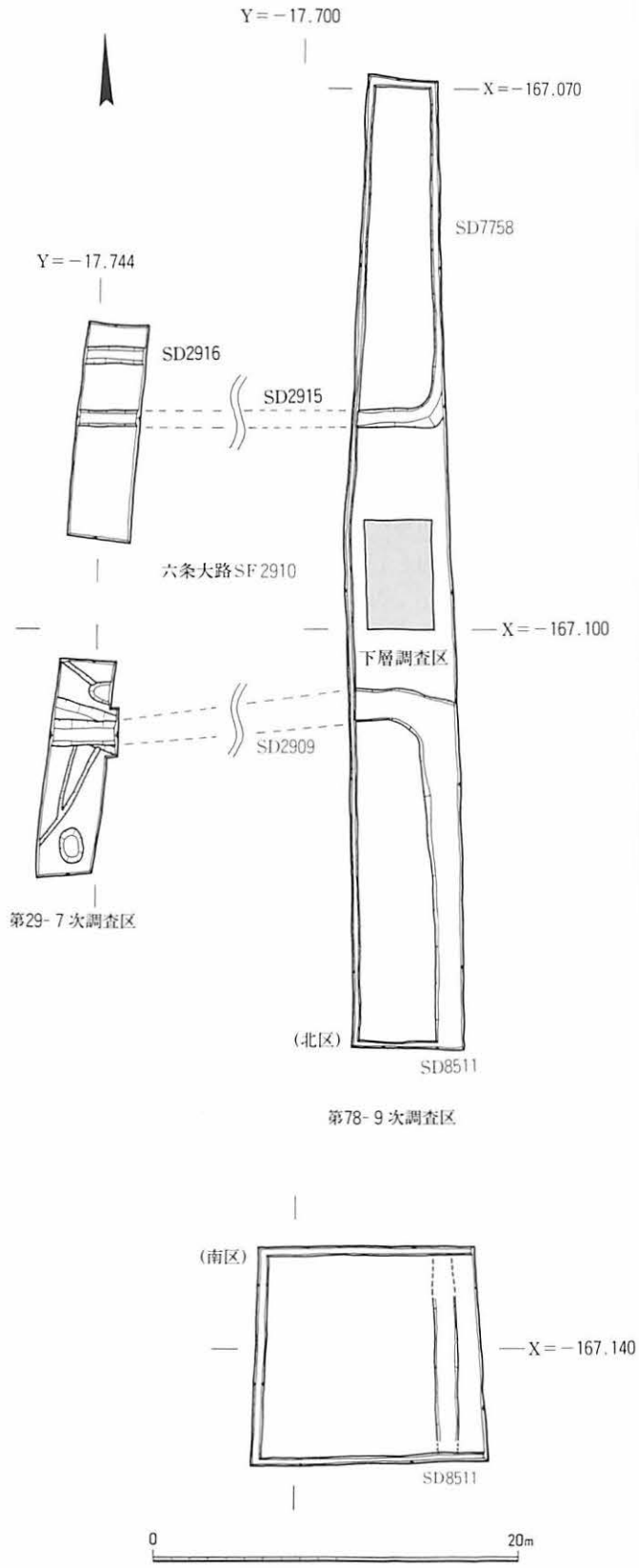


図20　第78-9次調査遺構図　1：400

藤原京の条坊遺構については、道路面そのものよりも、両側に掘られた側溝を確認し、それに挟まれた範囲を道路として認定することが多い。このため、条坊想定位置の発掘調査で、側溝にふさわしい年代と規模の溝が確認できれば問題はないが、近接してもう一本余分な溝があったり、対になるべき溝がない場合には、その認定に疑問が生じる。また、小面積の調査区の場合には、たとえ想定位置で検出できても、本当にそれが側溝であると断定できない弱点を持っている。

一方、藤原京の場合、側溝は、交差点部分で、ほぼ一定の方式で交わることが知られている。すなわち、東西道路の条坊側溝は、南北道路の東側溝に横T字形に合流するのに対し、西側溝は逆L字形に西へ折れて東西道路の側溝に連接する。それは東南から西北に下がる地形の影響を受けたもので、一部の例外を除いて、ほぼこの形で交差点の遺構は理解できる。逆にいえば、横T字形や逆L字形の溝が検出されれば、条坊交差点の遺構である可能性が高いことになる。

以上の観点から検討を加えると、第21-1次調査は土層断面による側溝の確認であり、第29-7次調査は面積36m²という狭小な範囲しか発掘していない。おまけに今回の調査区に隣接する29-7次調査では、南側溝は想定位置で検出されたが、北側溝想定位置には近接して2本の溝があり、いずれをとるかで大路幅は17.3mか、20.8mになるという（『藤原概報11』）。

これに対して今回の調査区では、逆L字形に連接する2本の溝を確認している。これは明らかに条坊の交差点を示す遺構であり、2本の溝はそれぞれ六条大路の南北側溝と理解してよいだろう。こうして従来の推定とは異なり、六条大路の幅員は16mである可能性が高くなった。

一方、橿原市教育委員会が担当した「大久保・東今度遺跡」（1991年度）や「藤原京右京六・七条四坊」（1995年度）の調査において六条大路が確認されたが、いずれも側溝心心間約21mの幅員が復原できるという。市教委の調査でも今回の調査結果とは異なる数値が復原されているが、側溝と解した大型の溝については、条坊に平行して設けられた物資運搬用の「運河」である可能性が大きい（『年報1996』参照）。ここでは今回の調査成果を尊重し、六条大路の幅員については他の偶数条坊大路と同じ16mであった可能性を強調し今後の調査の進展を待ちたい。

（黒崎　直／考古第1）

◆本薬師寺の調査
―1995-1・2・3次、1996-1次　本薬師寺出土の瓦

1　西塔・南面回廊の調査（1995-1次）

1　はじめに

本薬師寺に関する発掘調査は、1975年度の寺域西南隅の調査に始まって、金堂、東塔、中門、回廊におよんでおり、それぞれの位置、規模、基壇構造等が判明し、瓦などの出土遺物により、造営経過、存続、廃絶の状況、さらには伽藍と藤原京条坊との関係などにかんする多くの知見を得ている。また、移建、非移建をめぐる論争に代表される平城薬師寺との関係についても興味深い新事実を提供してきている。

今回の調査は、以上のようなこれまでの成果をうけて西塔および南面西回廊の遺存状況の確認、規模、構造形式の解明などを目的として実施した。調査面積は、609㎡である。

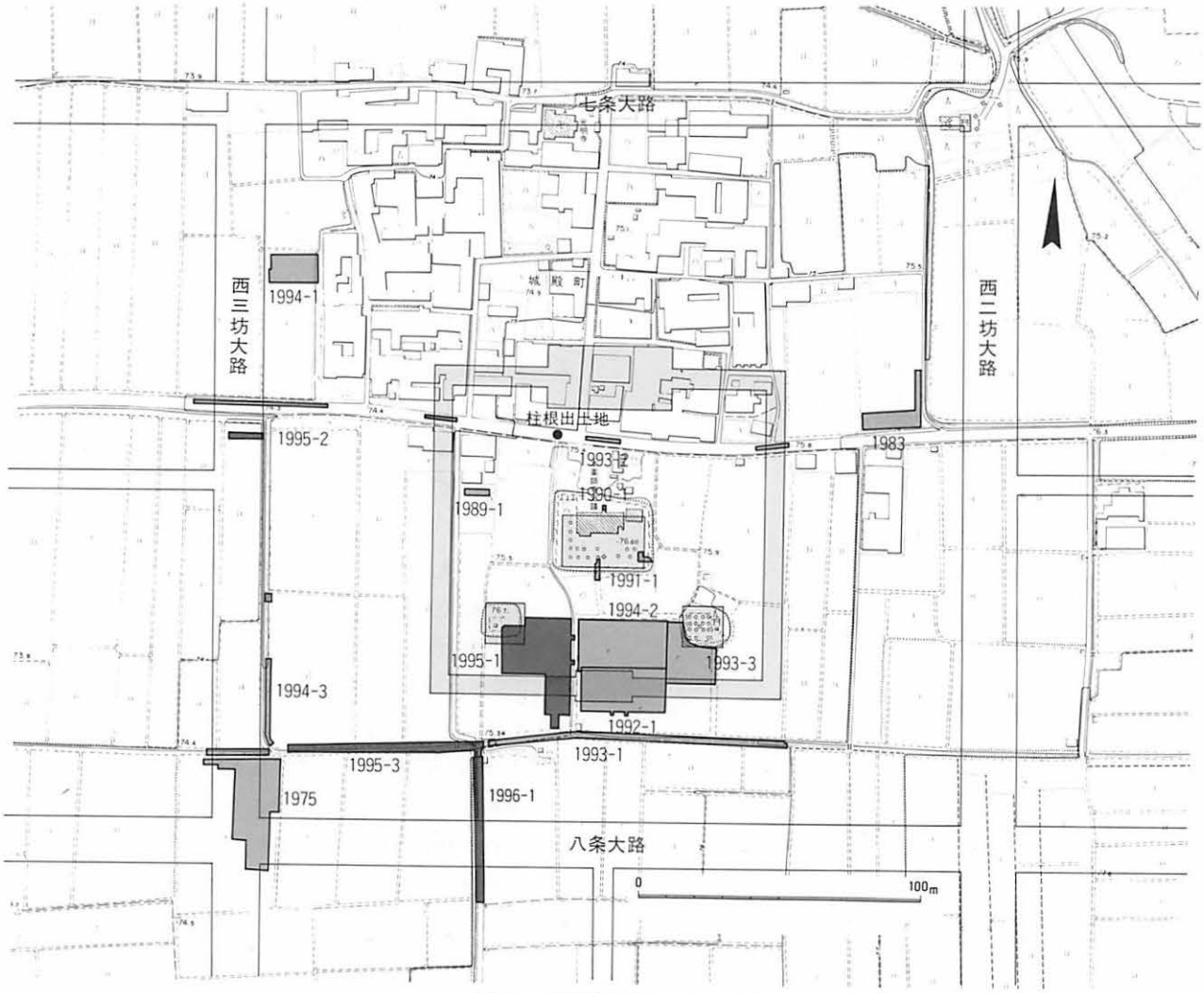


図21　本薬師寺調査位置図　1：2500

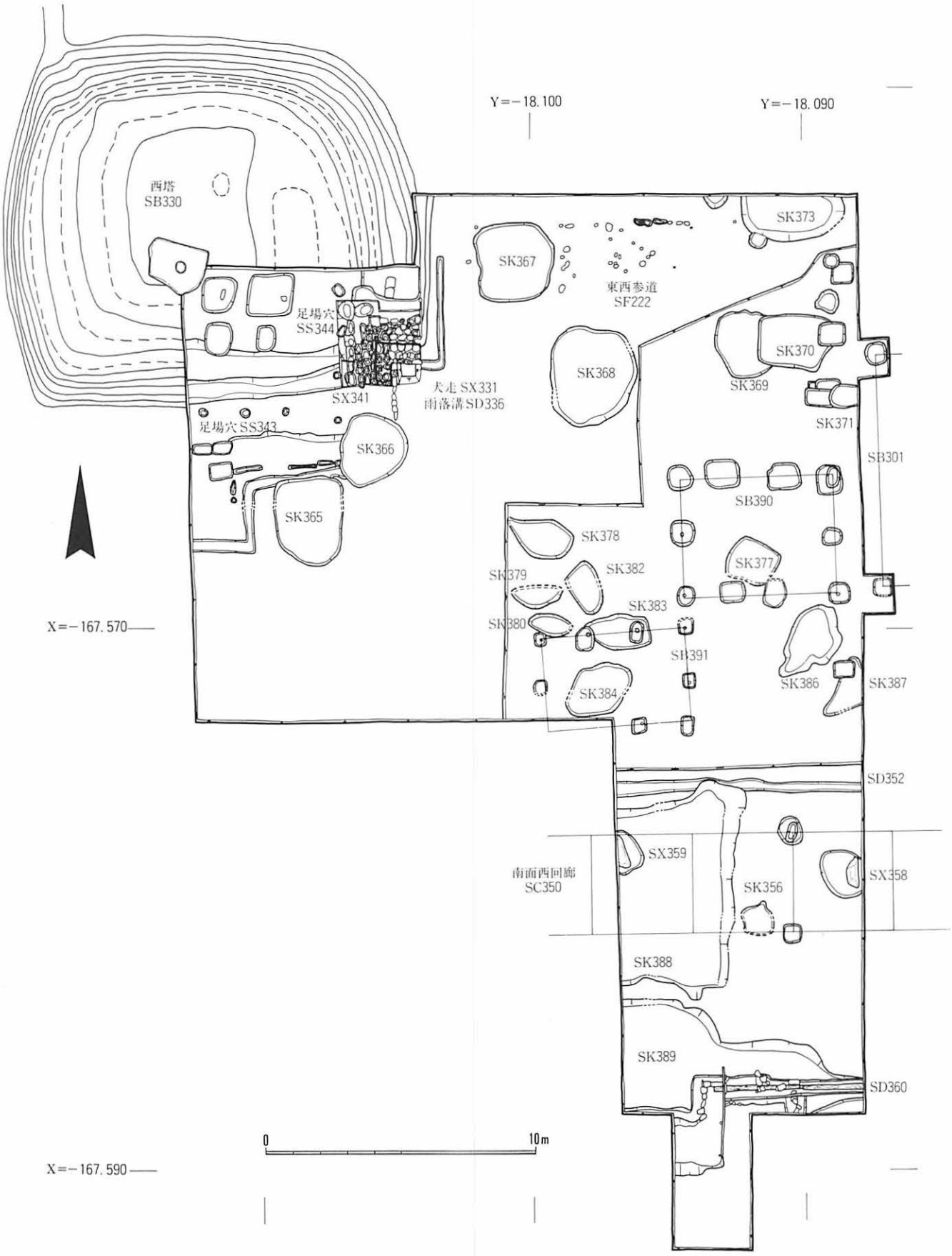


図22　本薬師寺1995-1次調査遺構図　1：200

2　基本層序

調査区の基本的な土層は、上から、水田耕土、床土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗褐色炭混り土などがあり、ベースの青灰色砂質土につづく。

西塔の南では、伽藍造営の整地土がよく残る。この整地層は、現状で厚さ約20cm前後あり、下半部は、茶褐色砂質土、上半部は、凝灰岩粉末や瓦小片をふくむ薄い数枚の層からなる。そのほかでは、後世の削平により整地層が失われ、暗褐色または、こげ茶色の炭混り粘質土が露出している部分が多い。このため、伽藍造営以前の遺構は、整地層のない部分では、これらの粘質土上面で検出した。

3　検出遺構

検出遺構は、本薬師寺の造営を境にして、大きく、その前と後の2時期に分かれる。

本薬師寺に関わる遺構

西塔SB330　西塔の現状は、水田中に大きな方形の土壇として残り、土壇中央やや南寄りに出枘を有する心礎が残っている。ほかには礎石を全く残していない。

調査では心礎を基準にして土壇の東南4分の1を発掘した。基壇の当初の面はのこっておらず、心礎上面から約50cmまでは大きく削平されている。

礎石据付掘形　東南の四天柱とその東の側柱位置に、礎石据付掘形を2箇所検出した。掘形は一辺1.2～1.5mの不整方形で、深さ約10cmを残す。柱間は、約2.4m。

礎石抜取穴　据付掘形の南に2箇所の穴がある。埋土には多量の瓦片が含まれていた。前述の掘形と南北の間隔は1.3mと狭すぎることなどから、南辺の側柱位置そのものではなく、側柱礎石の抜取穴の一部とみられる。

足場穴　基壇内東辺（心礎から5.8m）と南辺（同5.5m）に計7箇所の柱穴を検出した。直径約30～50cmの円形ないし楕円形を呈する。柱間は1.5～2m。柱穴の重複がないので建設時の足場穴（SS343・344）と推定する。

基壇外装　基壇東面には、地覆石抜取溝SX341があり、近辺に散乱する凝灰岩切石片の存在などから、基壇外装は花崗岩地覆石と凝灰岩切石の羽目石からなる切石積と推定した。

犬走・雨落溝　基壇の外側には玉石敷きの犬走と、玉石組の雨落溝がめぐる。ともに石の大部分は抜き取られている。犬走SX331は、基壇地覆石との間を2石の玉石をならべ、幅は約75cm。雨落溝SD336の底面からの高さは10cm、雨落溝は両側の側石とその間に2石を並べ、内側の縁石は犬走の縁石をかねる。幅約60cm、深さ約10cm。

階段　基壇の東面および南面に階段を検出した。東面階段位置には原位置をはなれた凝灰岩製の踏石が残る。周囲からは耳石の断片も出土している。南面階段は築成土

図23　西塔基壇犬走ＳＸ331（東から）

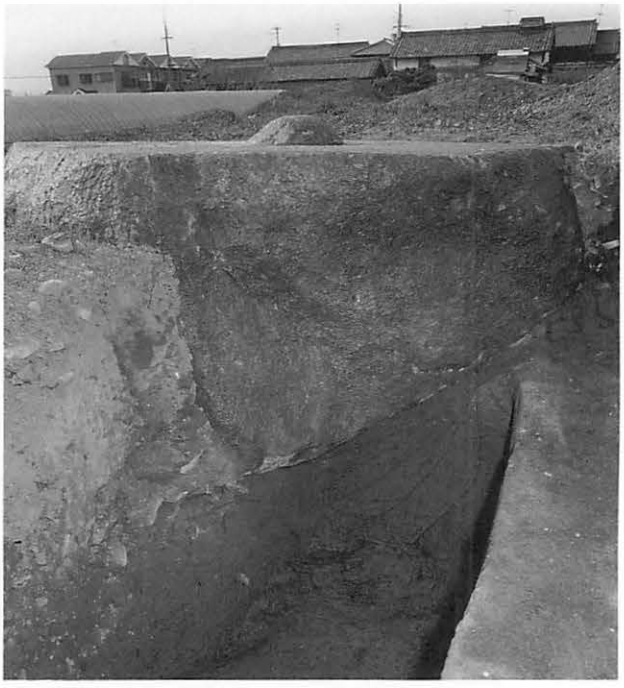


図24　心礎周辺、下面の攪乱状況（東南から）

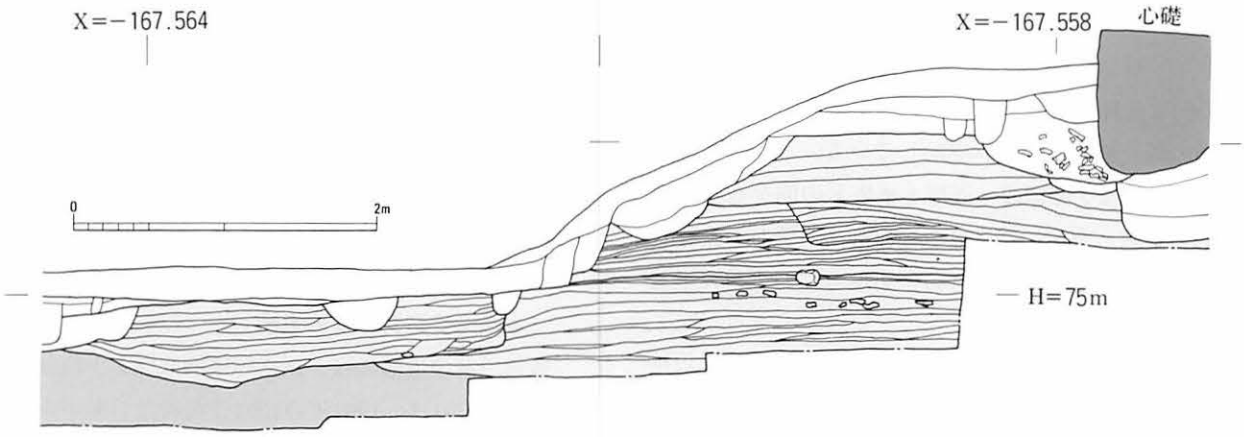


図25　西塔基壇南北断面図　1：50

までほとんど失われており、わずかに基壇外装の抜取溝を残すのみである。

階段規模の推定　東面の階段の出は、推定踏み石最下段縁からとると、約1.7mに復原できる。東階段の幅は推定復原で約3.8mである。

石敷　雨落溝の外側には石敷が広がるが、玉石の抜取痕跡をわずかに残すのみで、縁辺は不明確である。

基壇規模　推定基壇縁を犬走の敷石内法とみなして、心礎中心と結んでその距離を算出すると、基壇の一辺長は約13.5mとなる。

心礎　花崗岩製で、大きさは、東西2.1m、南北2.1mの不整形で、中心の出枘をのぞいて厚さが94cmある。中央の出枘は、直径約30cm、高さ10cm。

心礎周囲と下面は大きく撹乱され、撹乱坑には瓦片が投棄されている(図24)。この撹乱は西塔心礎の上面が現状で水平でなく、若干傾いていることとも関連するようである。

基壇築成　基壇築成は掘込地業と版築による。断面調査の所見によって、築成の工程を復原すると、まず、およその基壇範囲を版築した後、裾をカットして、階段部分を継ぎ足す。基壇築成土は、底面から約1.5mの高さまで残る。築成土は上半部と下半部とでは状況が異なり、下半部（約1.0m）では、一層の厚さが約3～8cmと比較的細かく版築するのに対して、上半部（約0.5m）は、一層の厚さが約10～15cmと分厚い。さらに、下半部について細かく見ると、その下半では、砂質土、粘質土の層をどちらもに似たような厚さ（6cm前後）で、版築するが、上半の版築では、粘質土は薄く、砂質土は厚いという特徴がみられる。

心礎の据付方法は、心礎周囲の撹乱坑のため、明確ではない。版築土のなかから金堂創建瓦である軒平瓦6647Cが出土しており、西塔の造営が金堂の建設に先立つことはないことを示す重要な知見である。なお、版築にもちいている土は、灰褐色系の土であって、版築土に通例みられる黄褐色粘質土は使用していない。

南面西回廊SC350　調査区は中門西脇からかぞえて、1間目から3間目にあたる。礎石は残っておらず、基壇築成土の一部（茶褐色粘質土）と、礎石据付掘形、雨落溝などを検出した。

礎石据付掘形　中門の西側2間目の東側一対の柱位置に当たる礎石据付掘形2箇所を検出した。掘形は一辺0.8mの隅丸方形で、北側の1箇所には抜取穴をともなう。掘形の間隔は、約3.8m。

礎石落し込み穴　調査区の東端壁と、西端壁にかかって、礎石落し込み穴2箇所(SX358、SX359)がある。落し込まれている礎石は、花崗岩製でいずれも一辺1mを越す大きさである。一面を平坦に整えている他は、柱座などの作りだしはない。出土位置から見て回廊の礎石とおもわれる。

雨落溝　雨落溝は、北側雨落溝(SD352)を検出した。側石は座っているものはなく、溝内に転落している。幅40cm、深さ20cm。両岸は護岸の玉石の抜取痕跡がある。南雨落溝は、削平と土坑によって破壊されている。

水路SD360　南面回廊の南側柱列位置から約5.7m南に検出した。東から西5.5mまでは木樋暗渠が設けられており、あとは開渠となる。暗渠の西端は木板と凝灰岩切石組みによる南北溝（長さ3m、幅0.6m）に開口する。この南北溝は南端で西に折れ約2mに幅を広げる。南北両岸は護岸の石の抜取痕跡が並ぶ。木樋は発掘区東外へ1m以上は東にのびている。

SD360は回廊南辺の整地過程でつくられ、厚い奈良時代中頃の灰色粗砂で覆われ廃絶している。

東西石敷参道SF222ほか　西塔と東塔との間をむすぶ東西方向の石敷。今回の調査区では、削平が著しく遺存状況は悪い。北側の縁石と内部の敷石部分にわずかに玉石の風化した痕跡をとどめる。

土坑　回廊以北に検出した多数の土坑は、検出状況や出土遺物の様相から、本薬師寺造営に関わる土坑と、本薬師寺造営以前の２種類に大別される。後者の土坑については、次項で述べる。

まず、参道位置とその周辺にあるSK369、SK370、SK373などについて述べる。SK370は、多量の木屑とともに、フイゴ羽口などの鋳造関係遺物が出土した。参道北端から北に広がるSK373からも木屑が出土している。参道石敷下にあたる土層で検出され、西塔造営時あるいはその後の寺の改修時にもうけられた土坑とみられる。なお、SK369・370については、東西参道と重複して見つかっている幢竿のようなものをたてる施設かと考えられている穴SX277・280（『藤原概報26』）と、伽藍中軸線をはさんでほぼ対称の位置にあるので、同様の性格を有する土坑かとも推測される。

西塔の周辺と参道位置にあるSK365、SK366、SK367、SK368にふれる。いずれも一辺2.6～3.5ｍの大型の土坑で、深さは、SK368が約0.3ｍと浅いほかは、1～1.3ｍと深い。いずれの土坑にも大量の瓦が投棄されているほか、SK365には、基壇外装や雨落溝や、犬走などにもちいたと思われる花崗岩などの玉石や、凝灰岩断片などが含まれていた。

本薬師寺造営以前の遺構

造営以前の遺構には、掘立柱建物３棟と土坑群がある。南北棟SB301は、1994年の1994-2次調査で東半分が検出されていた桁行４間の南北棟建物で、今回、西北と西南の柱位置を確認したことにより梁間が２間と確定した。桁行総長が8.4ｍ、梁間4.2ｍである。柱間は桁行、梁間とも2.1ｍである。SB390は、３間×２間の東西棟で、桁行総長5.5ｍ、梁間4.4ｍである。掘形は一辺0.6～1.2ｍ。SB391は、３間×２間の東西棟で、桁行総長5.4ｍ、梁間3.2ｍ。掘形は、一辺30～40㎝で、先の２棟と比べ、小型である。

これらの建物は、方眼方位に対して西で南に振れている。

これらの建物に重複あるいは近接して多数の土坑が分布する（SK377～380、382～384、386、387など）。土坑埋土は炭化物をふくむ暗褐色粘質土である。７世紀後半の土師器、須恵器が出土した。

図26　水路SD360（木樋暗渠の西端と石組　左：北から、右：西から）

4　出土遺物

大量の瓦類のほか、土器、土製品、金属製品、石製品などがある。

瓦類　別項に詳述したので参照されたい（33～37頁）。

土器　弥生時代から鎌倉時代までのものがある。寺造営以前のものと、寺の変遷にかかわるものに分けられる。前者では下層土坑SK377等の出土土器、後者では、西塔基壇築成土、西塔南の土坑SK365、SK366、東の土坑SK367～SK369、回廊を壊す土坑SK388、水路SD360出土土器が重要である。

下層土坑の土器は、1994-2次調査区のSK270や西三坊坊間路側溝出土土器と同じ７世紀後半代に属する土師器、須恵器があるが、その中に長方形透しが疎らに入る須恵器円面硯１点が含まれる。寺造営以前の右京八条三坊西南坪の性格を推定する上で重要である。

西塔基壇築成土には上半部、下半部ともに少量の飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が含まれているが、最も新しい資料が奈良時代に入るかどうかは判別できない。

西塔東南隅の土坑SK366と東西参道下の土坑SK367からは本薬師寺の古式の瓦とともに飛鳥Ⅳ～Ⅴに位置づけられる少量の土器が出土した。とくに土坑SK366は西塔基壇と重複する位置にあり、西塔の造営が他の堂宇よりも遅れることを示しているが、基壇土出土土器ともども、その年代観は微妙であって限定できない。

土坑SK368、SK369には奈良時代末、９世紀末から10世紀初頭の土師器杯・皿・黒色土器椀などが含まれる。1994-2次調査区の土坑SK272等に類似した改修時の土坑と考えられる。

回廊を壊す土坑SK388からは10世紀代の土師器杯Ａ、甕等とともに中国銅官窯の青磁壺片が出土した。

図27に示した土器は、水路SD360の石組開渠部分出土の土器で、奈良時代中頃（平城Ⅲ）に位置づけられる土師器杯Ａ（９）、皿Ｃ（１～５）、椀Ｃ（６・７）、皿Ａ（８・10）、甕、須恵器杯Ａ、皿などがある。多くに灯明の痕跡がみられ、その頃確実に寺院活動が行われていたことを示している。

SD360の木樋暗渠埋土からは内面に「□［朋ヵ］」の墨書がある須恵器杯Ｂ蓋が出土した。蓋は、飛鳥Ⅳに位置づけられ、木樋の埋設時を示す。

土製品　下層土坑出土を含めて円面硯２点、蹄脚硯１点がある。また、SK370からはルツボ、フイゴ羽口、回廊北雨落溝SD352から土馬１点、包含層から土製円盤４点などが出土している。

金属製品　金銅製垂木先金具、銅釘などがある。金銅製垂木先金具（図28）は、西塔東面地覆石抜取溝SX341内から出土した。直径10cmの円形金具で、ほぼ完形である。中央に小孔を穿ち、４葉の対葉花文を透し彫りし、毛彫りで輪郭線を刻む。寸法からみて裳階屋根の地垂木用と思われる。円形の金銅製垂木先金具は平城薬師寺からも出土している（『薬師寺発掘調査報告』1987年、PL.120-25）が、本例は、対葉花文の間の蕾状の文様を欠くなど、

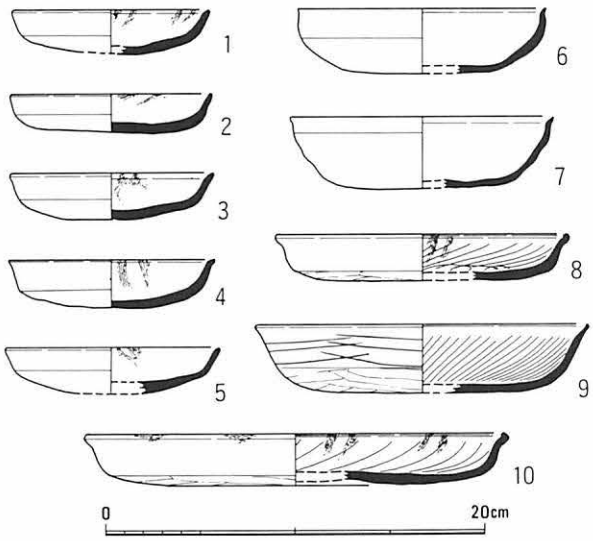


図27　SD360出土土器　1：4

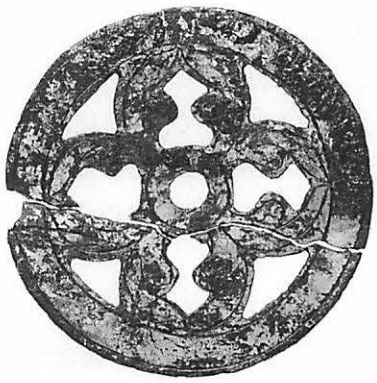


図28　垂木先金具　1：2

より退化がすすんだものとみられる。銅釘は、笠型の頭部（径1.0cm）がつく断面方形の釘で、完形品でみると全長4.2cmある。SX341やSK367などから約20点出土している。

石製品　西塔の足場穴SS344から砥石１個が出土した。

5　まとめ

今回の調査の成果と課題にふれまとめとする。

まず成果としては、西塔の規模、基壇の構造が明らかになったことがあげられよう。

基壇の規模は、本薬師寺東塔、平城薬師寺西塔とほぼ同規模である。ただし、基壇周囲の犬走、階段部などの大きさに若干の違いがある（表２参照）。

基壇外装は、花崗岩地覆石と凝灰岩の羽目石からなる切石積である。基壇上面の舗装は不明で、裳階の礎石あるいは据付穴などは見いだせなかった。ただし、西塔所用とみられる裳階用の軒瓦、丸・平瓦が出土していることや、裳階垂木用の金銅製飾り金具の出土からも、西塔に裳階があったことは確実である。

心礎がほぼ原位置にあることも判明した。ただし、心礎上面が水平でなく、若干傾いている。心礎の下や周囲に後世の撹乱がなされていることから、若干上下に移動している可能性もあるが、ここでは、大きく動かされてはいないという指摘にとどめておきたい。

この撹乱については、時期を明示する資料はないが、永長元年（1096）に本薬師寺塔跡から舎利をほりだしたとの記録（『中右記』）が想起される。実際には、舎利孔を有するのは、東塔心礎のほうであるが、その際、舎利の探索は、西塔にもおよんだ可能性もあろう。

西塔の造営時期については、まず出土瓦の様相がてがかりとなる。本薬師寺の主要堂塔の造営順序にかんしては、これまでの調査によって、第一段階として金堂、第二段階として東塔、中門、回廊となることが知られている。今回の調査によって判明した西塔の瓦はそれらより更に遅れる段階のもので、第三段階に位置づけられる。奈良・平安時代に属する軒瓦も出土しているから、西塔は、平城遷都後にも存在していたことは確実であるが、創建時期については、瓦の年代観が重要な問題となる（瓦の問題については33～37頁参照）。

回廊については、瓦は、南面東回廊と同様の様相を示す。回廊の廃絶については、回廊を破壊してもうけられた土坑の遺物などから、これまでの調査による推定と同様に、ほぼ11世紀代と見てよいと思われる。

出土遺物にかんしては、塑像の問題がある。本薬師寺からは、かつて塑像の出土が伝えられているが、東塔周囲の調査につづき、今回の西塔の調査でもまったく出土しなかった。本薬師寺で塑像がまつられていた可能性はほとんどなくなったといえよう。

下層の本薬師寺造営前の遺構にふれる。下層建物は、今回の調査で新たに２棟の存在が明らかになった。これらの建物は多少の時間差はあるにしても、先の調査で明らかになった塀や、建物とともに右京八条三坊西南坪に展開する一連の遺構とみられる。藤原京の条坊の設定から、本薬師寺の造営までの間に一定の時間の経過があったことを遺構の上でも示している。

本薬師寺といえば、薬師寺式伽藍配置としてわが国で初めて２基の塔をそなえた伽藍としてあまりにも有名である。今回の調査によって西塔の造営が他の堂塔に比してかなり遅れることがわかったことにより、２基の塔が並立した時期については、藤原宮期でおさまるのか、あるいは平城薬師寺造営以後にまでくだるのかなど、大きな問題を提供することになった。この解明のためには出土瓦をはじめとする平城薬師寺との比較など、より詳細で多角的な検討を要する。

西塔の未調査部分をふくめ今後の伽藍のより広い範囲の調査に期待しておきたい。　（千田剛道　土器：西口）

表２　塔の規模の比較　単位：m

	基壇長	基壇高	雨落幅	犬走幅	階段幅	階段出	石敷規模	参道幅
本薬師寺　西塔	約13.5	1.65	約0.6	約0.75	約3.8	1.6	不　明	約3.4
〃　　東塔	約14.2	1.45	約0.6	約0.6	約4.1	1.65	約21.8	約3.4
平城薬師寺西塔	13.65	1.4	約0.6	約0.6	約2.9	1.8	約20.8	—

2　寺域西限の調査（1995-2次）

本調査は、農業用倉庫新築に伴い実施したものである。調査地は本薬師寺寺域の西北部にあたり、寺域の西を限る大垣およびその外側を南北に走る西三坊大路の存在が予想された。このため調査では、東西12m、南北２mの発掘区を設定した。調査地の基本的な土層は、上から耕作土、床土、黄褐色土（西半では部分的に灰色微砂層）で、遺構は地表下約30cmにある黄褐色土上面で確認した。

調査によって検出した遺構には、南北溝２、土坑１と中世の耕作溝多数がある。東側で検出した南北溝SD401は、幅0.8m、深さ0.15mとやや小さく、西側にある南北溝SD402は、幅1.75m、深さ0.3mと大きい。ともに約２m分を検出した。溝SD402の埋土の上部には、瓦片が含まれていた。溝SD401の西側で検出した土坑SK405は、一辺75cmの柱穴状の遺構であるが、深さ10cm程度しか残存しておらず、性格は不明である。

検出した２本の南北溝は、当初の予想通り、西三坊大路SF102の両側溝と理解するのが適当であろうが、その心心間の距離は6.5mと短く、断定するには至らない。これまで知られている奇数条坊大路の幅員は、8.5m前後が一般的であり、今回の6.5mという数値はむしろ小路の幅である。遺構の規模や近隣の調査成果からすると西にある溝SD402が、西側溝の可能性が高いが、だからといって、東の溝SD401が、側溝ではないとも断定できない。いずれにせよ、今回の調査面積は狭小であって、これ以上推測を重ねても空論となる。事実のみを記して今後の調査の進展を待ちたい

なお瓦は、溝の埋土である暗褐色土などから、6276Aa（２点）、6647Ⅰ（１点）、6641（H？１点）の計４点の軒瓦が出土した。6647Ⅰは、瓦当がほぼ完存するが、他は小破片である。6647Ⅰは、５回反転の右偏行忍冬唐草紋で、上外区の珠紋数が16、下外区の線鋸歯紋数が27。金堂所用裳階用の軒平瓦である。また丸瓦は計29点（2.8kg）、平瓦は計112点（6.3kg）が出土している。

（黒崎　直）

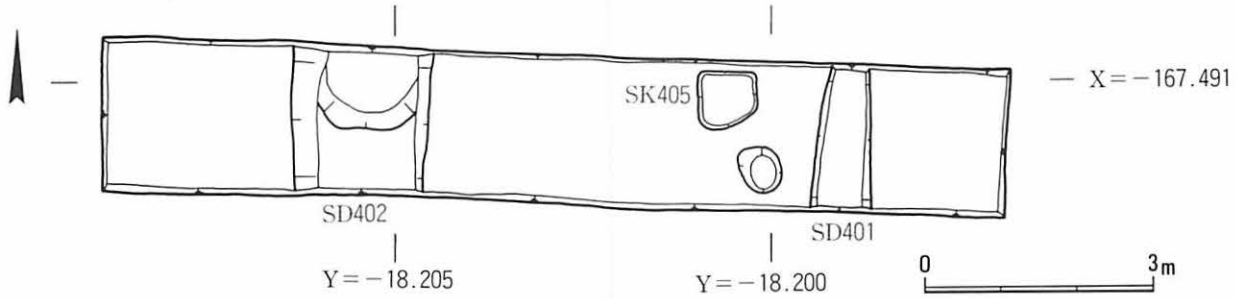


図29　本薬師寺1995-２次調査遺構図　1：100

3　寺域南辺の調査（1995-3次）

この調査は、農業用水路改修にともなうもので、調査地は本薬師寺回廊西南隅の南約20mの位置から、幅３mで西に向かい総延長約65m、調査面積は、211m²である。

水路工事により、大部分の場所では、ベースの暗灰色粗砂層や灰色粘質土まで掘削されており、瓦溜１箇所をのぞき、顕著な遺構は残っていない。瓦溜SX410は、調査区の東端に近い部分にあり、東西3.5m、南北1.5m、深さ50cmの土坑状を呈し、さらに調査区の北へ広がる（図30）。埋土には、多量の本薬師寺創建期の瓦（33～37頁参照）のほか多量の木屑が含まれていた。伽藍造営のごく初期の整地に関わる遺構であろう。　（千田剛道）

図30　瓦溜ＳＸ410（南から）

4　寺域南限・八条大路の調査（1996-1次）

この調査は、農業用水路改修にともなう事前発掘調査として実施したものである。

調査位置は、本薬師寺の伽藍中心線からは西へ約40m、西塔基壇から南へ40mほど離れる。

調査区の北端から22mは本薬師寺伽藍地内に属し、南端から13mは藤原京右京九条三坊の西北坪にかかり、この間に八条大路が想定される。

調査区は、1995-3次調査区東端から南へ続く南北52m、東西3mで、調査面積は156m²である。

調査区のうち東側約1mは、現水路の堆積が遺構面近くまで達している。

調査区の基本層序は上から、耕土、旧耕土、暗灰色砂、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土（地山）で、水路西側の水田耕土上面から90cm下の暗褐色砂質土面で遺構検出をおこなった。

検出した主な遺構には、旧流路、東西溝1、柱穴4、土坑1がある。

旧流路SD424は、調査区のほぼ中央、南北19mにわたって、灰色砂層を主体とする堆積が認められる。検出長が短く勾配は測定できなかったが、周辺の微地形からみて北東から南西へ流れるものと考えられる。

八条大路関連の遺構としては東西溝SD425がある。SD425は、幅2.8m、残存深さ40cmで、南岸に比べて北岸は緩勾配である。溝底の中央北寄りの幅0.7mほどがわずかに深い。1975年度調査(本薬師寺第1次『藤原概報6』)で検出したSD104の延長上にあり、八条大路北側溝にあたると考えられる。

1975年度調査では南側溝SD103も検出しているが、今回の調査区では断面観察でもその存在は確認できず、削平されたものと考えられる。

本薬師寺伽藍地内では、単独の柱穴2を検出した。八条大路北側溝SD425の北1mにある柱穴SX426は、掘形が南北70cm、残存深さ40cmほどと小規模である。本薬師寺伽藍地南辺の閉塞施設にともなう遺構の可能性もあろう。

右京九条三坊西北坪では、柱穴1、土坑1を検出した。柱穴SX422は、南北65cm、東西50cmで、性格は不明である。

土坑SK420は、南北2.2m、東西0.2m以上であるが、遺物をともなわず、時期や性格は不明である。

出土遺物は、きわめて少なく瓦数点のみ。そのなかに熨斗瓦1点を含む。　（長尾　充／遺構）

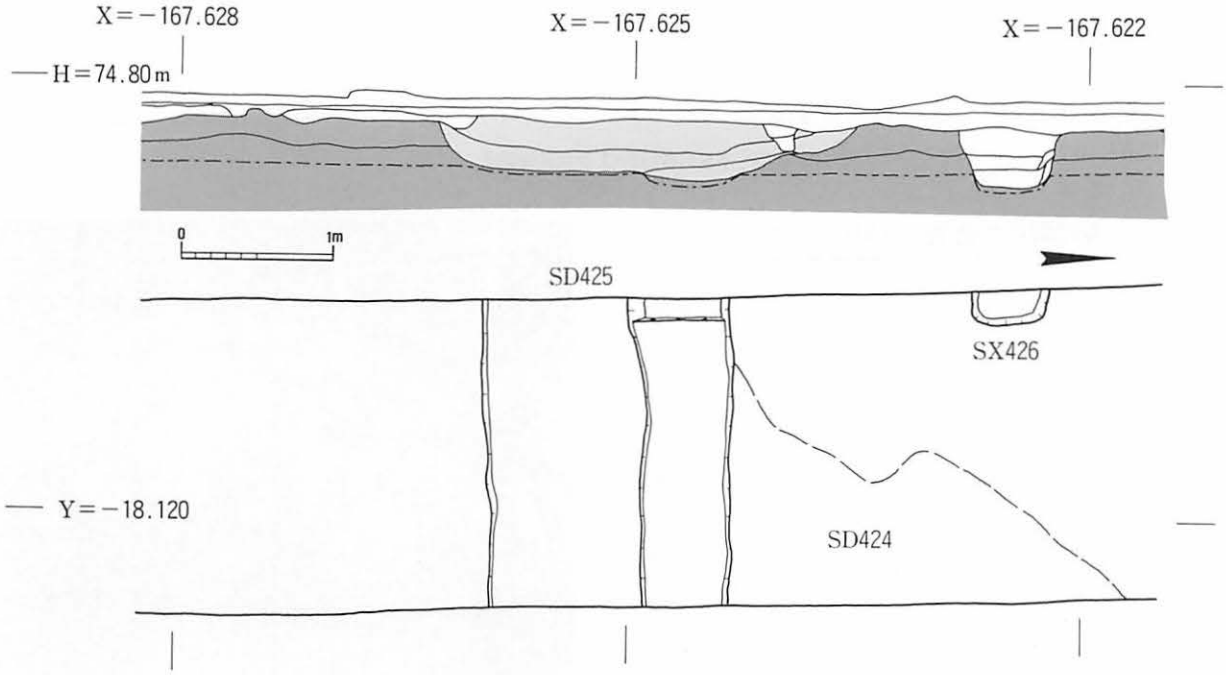


図31　本薬師寺1996-1次調査遺構図・土層図　1：50

5　本薬師寺出土の瓦

1995年度と1996年度に実施した本薬師寺の調査のうち、1995-1・3次調査で出土した瓦について報告する。

1995-1次調査出土瓦

軒瓦、丸・平瓦、道具瓦がある。軒瓦は軒丸瓦169点と軒平瓦178点の合計347点。道具瓦は面戸瓦67点と熨斗瓦255点。平瓦には刻印平瓦が2点ある。丸瓦は破片数で12,765点2,107kg、平瓦は50,036点13,519kg出土した。

軒　瓦　表3に示したように、調査区内で出土した軒瓦は調査区中央付近を境にして南北で内容に違いがある。南は南面西回廊の瓦、北は西塔の瓦とみて分析する。

調査区中央付近より南では、軒丸瓦6276Aa-軒平瓦6641Hの組合せ（図33-1・2）が8割を占めている。中門・南面東回廊での成果もこれと同じだった（『藤原概報24』）。この組合わせが南面回廊の所用軒瓦である。

調査区中央付近より北の西塔所用軒瓦の様相はこれまで調査された堂塔とは違う。本屋根用軒瓦は6276Aa-6641Hが多いが、6276Ab・Ac（図33-2・9）もその約半数ある。これと組み合う軒平瓦は6641O（4）。6641Oは、前回の参道の調査(『藤原概報26』)では、「6641新種」と報告したが、平城宮馬寮出土品（『平城報告XII』PL.54)との同笵を確認した。上外区に珠紋、下外区と脇区に線鋸歯紋をおいた右行の偏行唐草紋で、6641Gに似るが単位数11は2単位多い。6641Gと6641Oの内区紋様を比較すると、左から6単位目の唐草紋2つの巻きが逆転し、7単位目の唐草紋が2葉構成となる点が共通する。Gの紋様の右側（8単位目の次）に2単位分を加えてOを作笵したのだろう。上外区の珠紋数20もGの19に近い。内区の左端には笵割れがあり、これは平城宮馬寮出土例より本薬師寺出土例の方が進行している。平城薬師寺では6641Oの出土は確認されていない。

裳階用軒平瓦は6641I（8）が6641K（6）をしのぐ点数出土した。6641Iは単位数9の右行偏行唐草紋。平城薬師寺創建瓦の一つ。単位紋は基本的に3葉構成で6641Kより祖形に近いが、これは平城薬師寺造営時に復古的な紋様を採用したからで、藤原宮式の紋様をもつ6641Kがより古い。裳階用軒丸瓦は6276E（5・7）。瓦当厚3cmあたりを境に、薄いもの（薄型）と厚いもの（厚型）に分かれる。薄型の初期段階では表出されていた蓮子周環は厚型にない。過去の調査で出土した6276Eはほとんどが薄型だった。ところが、西塔周囲では厚型が圧倒的多数。胎土・焼成の共通性などから、6276E（薄型）が6641Kと組み、6276E（厚型）は6641Iと組み合う。

図32　ヘラ書き熨斗瓦　1：3

その他に、軒丸瓦は6304E、薬師寺32型式と36型式などが出土した。6304E（10）は瓦笵が著しく磨耗する。以前に東塔で出土したものも同様に紋様が模糊とした個体だった。セットになる軒平瓦6664Oはない。薬師寺36型式はこれまで素紋縁とみていたが、今回、当初笵では忍冬紋縁（36型式a、11）で、後に素紋縁に改笵した（36型式b）ことがわかった。

道具瓦　南面回廊周辺を中心に面戸瓦と熨斗瓦が多量に出土した。土坑SK369からは焼成前に凹面にヘラで文字を記した熨斗瓦が1点出土。幅5.1cm、現存長19.5cm。下端を欠失する。釈文は、

「□[以カ]罪在百之刑□」

最後の文字は下半分を欠き判読不能。「百之刑」で思い当たるのは律の笞杖徒流死のうちの杖、百叩きの刑。大宝律は大宝元年（701）8月に完成、翌大宝2年（702）7月読習、10月14日大宝令とともに頒賜された。このヘラ書き熨斗瓦は、凸面にハ字状縄叩きをもつ本薬師寺創建期の瓦である。土坑SK368で西塔関係の瓦と伴出したが、大宝律とほぼ同時期の刑罰に関わる記載として注目される。

1995-3次調査出土瓦

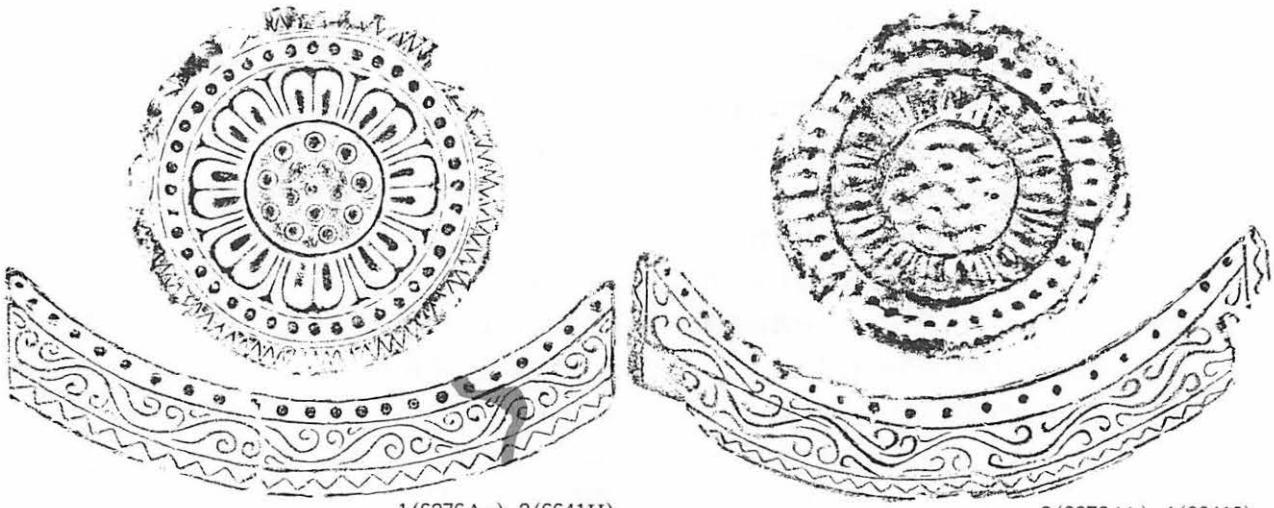
軒瓦は軒丸瓦28点と軒平瓦34点の合計62点、道具瓦は面戸瓦3点と熨斗瓦25点である。平瓦には「右」刻印平瓦1点がある。このうち、調査区東端の瓦溜SX410から、軒丸瓦25点、軒平瓦27点、面戸瓦3点、熨斗瓦18点と刻印平瓦1点が出土した。それ以外は、機械掘削の排土からの採集。SX410出土瓦について詳述する。

軒丸瓦は、6121A(16点)、6121B(4点：Ba3点、Bb1

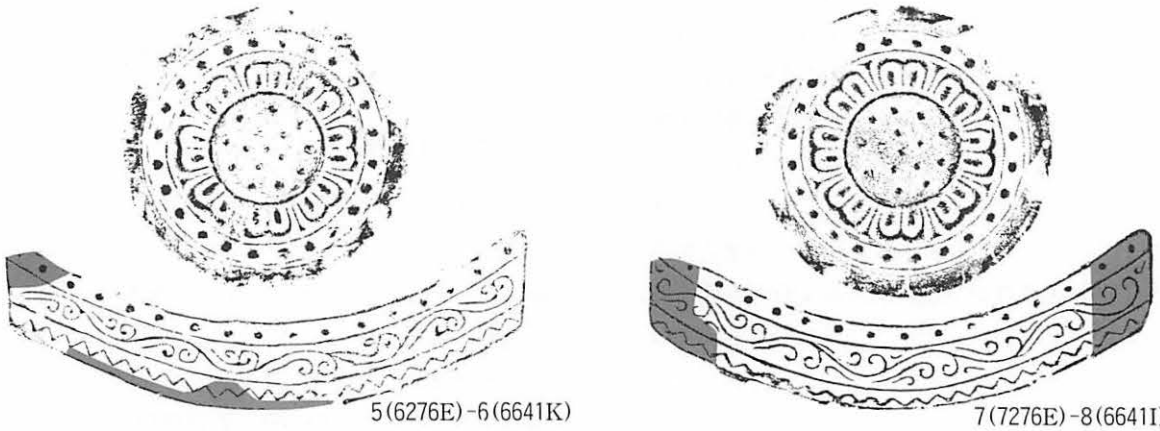
表3　本薬師寺1995-1次調査軒瓦等集計表　(　)は種不明を含む

軒丸瓦型式	点数			軒平瓦型式	点数		
6121A	2	3		6641G	4		
B	1			H	58		
6276Aa	55	82(84)	140(142)	I	34	139(141)	
Ab	17			K	25		
Ac	10			O	38		
E	58			6647Cb	1	4(11)	19(27)
6304E	1			Cc	3		
型式不明	(7)			G	4		
				I	11		
				三重弧紋	2	4(5)	
				四重弧紋	2		
				重弧紋	(1)		
奈良以前計	144(153)				162(173)		

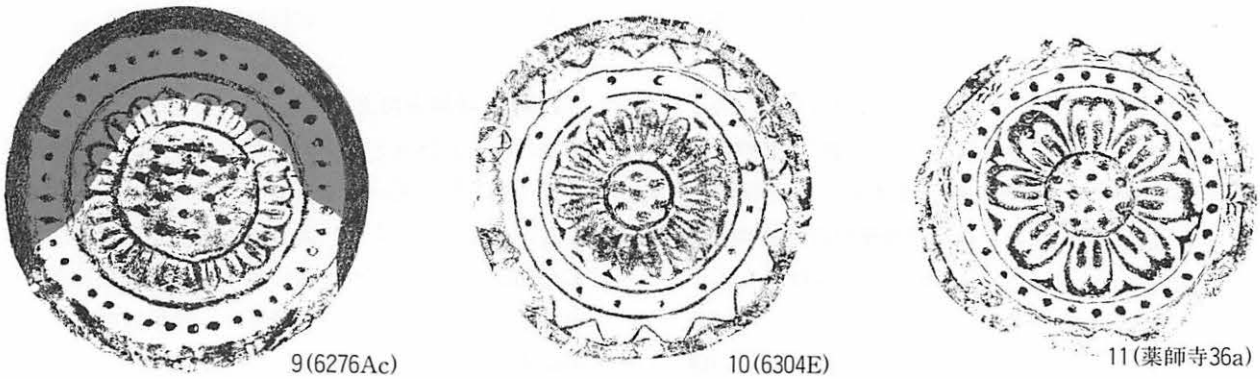
軒丸瓦型式	点数		軒平瓦型式	点数
薬師寺32	4	7		
33	1			
36a	1			
36b	1			
平安時代計	12(15)			0
近世以降	(1)			(5)
合計	156(169)			162(178)
熨斗瓦	255		隅切平瓦	2
面戸瓦	67		刻印平瓦	2



1(6276Aa)-2(6641H)　　3(6276Ab)-4(66410)



5(6276E)-6(6641K)　　7(7276E)-8(6641I)



9(6276Ac)　　10(6304E)　　11(薬師寺36a)

図33　本薬師寺1995-1次調査出土軒瓦　1：4

点)、6121C（1点)、6276Aa（4点）の25点。

6121A（図34-1）は単弁八弁蓮華紋。弁と子葉は中央が大きくくぼむ。中房蓮子1＋5＋9。蓮子には周環がある。外区珠紋数40、線鋸歯紋数80。線鋸歯紋の内側に二重の圏線がめぐる。丸瓦部は凹凸両面にやや太い斜格子刻み目、端面にも刻み目を入れて瓦当裏面の高い位置に差し込まれる。6121B（3・4）はAに似るが弁がやや細くかつ小さく、間弁先端がT字形。中房蓮子1＋4＋8。蓮子に周環はない。珠紋数40、線鋸歯紋数80。線鋸歯紋は鋭く珠紋との間に圏線がない。蓮子の小さいBa（3）とこれを大きく彫り直したBb（4）がある。Bbは初出。6121C（5）はBに似るが弁がやや大きく、蓮子の配置が違う。中房蓮子1＋4＋8か。珠紋と線鋸歯紋の間に圏線なし。6121Cは初出。6276Aa（2）は複弁八弁蓮華紋。蓮弁の照りむくりは弱い。中房蓮子1＋5＋9。蓮子周環がある。珠紋数40、線鋸歯紋数80。両者の間に二重の圏線がある。

軒平瓦は、重弧紋5点（三重弧紋1点・四重弧紋1点)、6647Cc（8点）およびCbかCc（2点)、6647G（11点）と型式不明1点である。三重弧紋は瓦当厚が小さい。側面を斜めに切った隅軒平瓦。四重弧紋（6）は弧線の太さがすべて同じ幅で、凹線は浅い。6647G（7）は、8回反転の右偏行忍冬唐草紋。本薬師寺所用。珠紋数37、線鋸歯紋数59。鋸歯紋の上下は界線に接する。タテ縄叩きで凹凸面を丁寧に調整。6647Cc（8）は5回反転の右偏行忍冬唐草紋。珠紋数27、線鋸歯紋数39。線鋸歯紋の上下は界線に届かない。藤原宮所用6647Caの紋様を全体に太く彫り直した6647Cbを、さらに左右で珠紋半個分切り縮めたのがCc。Cb・Ccともに本薬師寺所用で藤原宮からは出土しない。CaとCb・Ccの製作技法を比較すると、Caは平行叩きだが、Cb・Ccはタテ縄叩き。また、Caでは平瓦部凸面に重弧紋風の刻みを入れて顎を接合するが、Cb・Ccは指で横方向に浅いくぼみを付けるにとどまる。

丸瓦は個体識別で28個体、玉縁の隅数計測法で18個体あり、すべて玉縁式。本屋根用と裳階用がある。本屋根用は、玉縁長7.1cm、玉縁先端幅12.8cm、筒部長38.2cm、段部幅16.6cm、筒部広端幅18.2cm、全長45.3cm（以上すべて平均値）である。粘土板巻き付け作りで、筒部と玉縁を一連の粘土板で作り、段部凸面に粘土を足す。凸面はタテ縄叩きのあと丁寧にヨコナデ調整する。青灰色で硬質のものと、灰白色でやや軟質の2種がある。側面の面取りは凹凸両面と凹面のみが各々約4割ずつある。裳階用は1点確認できたのみ。筒部広端幅13cmあり、本屋根用の約7割の大きさ。製作技法は本屋根用と同じである。

本屋根用丸瓦の凹面の布圧痕を観察すると玉縁の縫い目は丸瓦1個体に2箇所程度、1つの模骨で4箇所程度ある。縫い方には逆三角形のダーツをとって縫うものと、縦に1～2cmほど重ね合わせてまっすぐ縫うものがある。後者の布の重ね合わせはSタイプで縫い方はまつり縫い。針目は大半が布の折り山を手前にして左上り右下がりになる。この縫い方では下にいくに従い縫い目の左右で布目にみだれが生じるが、布目が一切乱れないものもある。玉縁部での布袋の縫い目を識別することにより、同一布袋で作られた丸瓦を3組確認できた。うち2組は分割角度が54度と73度ずれる。これらの角度だと分割突帯はなかったようだが、もう1組はほぼ同位置で分割されていて、多くの資料で検証する必要がある。3組の丸瓦は、それぞれ凸面のナデ調整に程度差があり、瓦工の違いを示す可能性がある。

平瓦には通常の大きさの本屋根用と小型品の裳階用がある。本屋根用は、全長41.4cm、広端幅30cm、狭端幅25.6cm(平均値)。裳階用は、全長28.9cm、広端幅23.3cm、狭端幅19.8cm（平均値）あり、本屋根用の約7～8割程度の大きさ。粘土板桶巻き作りで、凸面はタテ縄叩き。縄叩き目は、条が線状で太いものと細いもの、縄の撚りが明瞭なものの3種があり、裳階用は太い線状の縄叩き目、本屋根用は大半が細い縄叩き目である。縄を三つ編みにした「ハ」字形の縄叩きは1点もない。凹面は丁寧なナデ調整がなされており、広端側1/3ほど以外は布目は残らない。側面の面取りは凹凸両面が約8割、広端の面取りは凹面のみと無いものがほぼ半々、狭端の面取りは凹面のみが半分で、凹凸両面が約3割をしめる。本屋根用は大半が灰白色だが、青灰色で硬質に焼きあがっているものもあり、それらは凸面狭端側をヨコナデ調整する。

小　結

本薬師寺1995-1・3次調査で出土した瓦は、いくつかの重要な問題を提起する。これを簡単にまとめよう。

まず、1995-3次調査瓦溜SX410出土瓦は次の点で注目できる。

1：軒丸瓦に占める6121型式の比率が高い。しかも6276

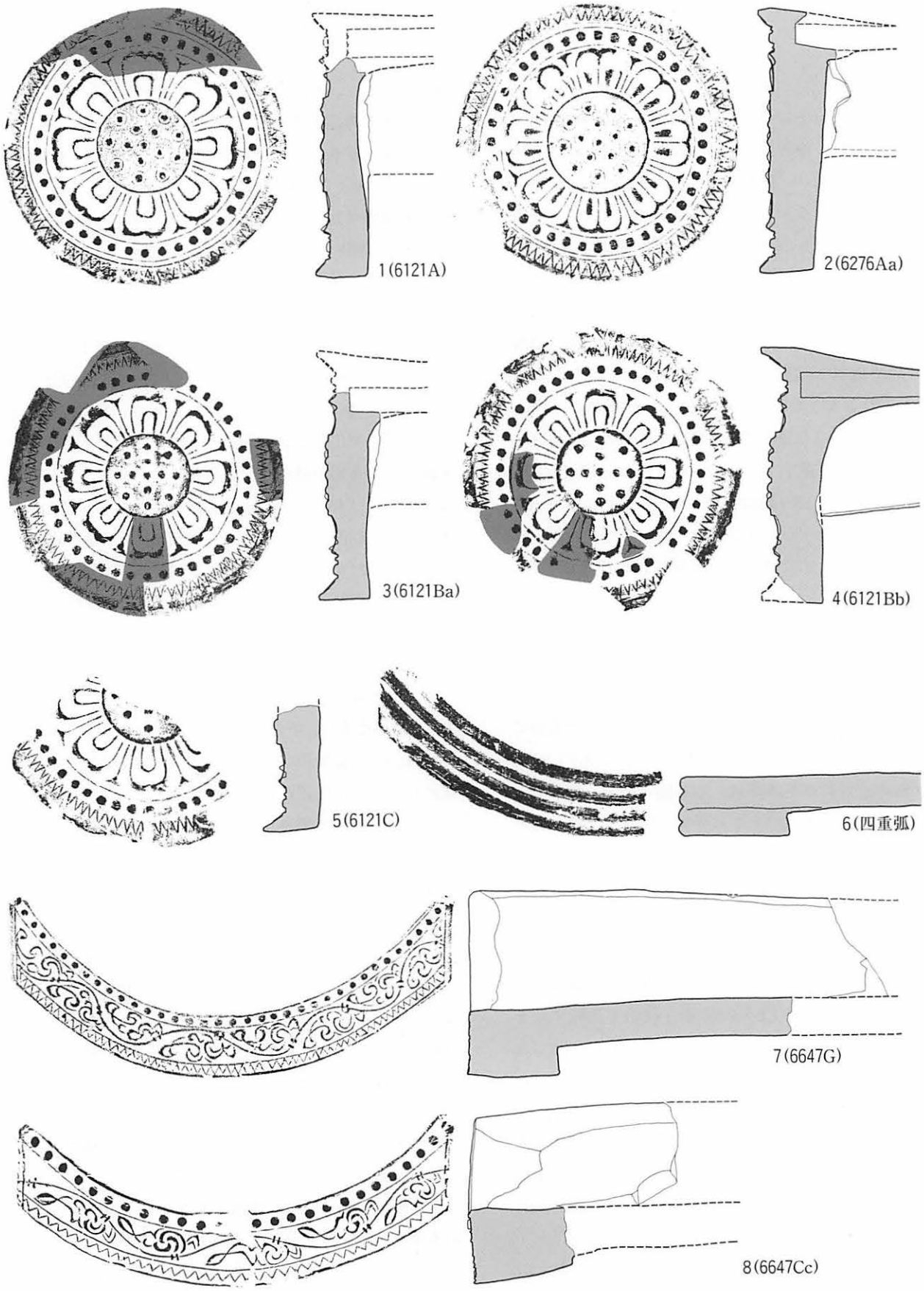


図34　本薬師寺1995-3次調査瓦溜ＳＸ410出土軒瓦　1：4

Aaを含めいずれも瓦笵がシャープである。

2：軒平瓦は重弧紋と6647型式で、6641型式がない。

3：本屋根用と裳階用の瓦がある。

4：造瓦組織が左右に区別されていた可能性を示唆する「右」の刻印がある。

昨年度の参道の調査（1994-1次調査『藤原概報26』）で、金堂所用の本屋根用軒瓦を6121A-6647Gと推測したが、SX410出土瓦はそれを証明する。創建金堂の軒先はこのセットと、6121Ba・Bb-6647Cb・Ccで飾ることが企画され、瓦が調達されたことは間違いない。

裳階用軒瓦（6276E-6647I）は出土しなかったが、裳階用の丸瓦と平瓦が出土した。しかも、それらは本屋根用の瓦と同じ技法で製作されている。これは金堂の裳階が当初から計画・造作されたことを物語る。

平瓦に「右」の刻印が1点ある。これまで出土した「左」・「右」の刻印をもつ平瓦を再度検討したところ、これらはすべて撚りの細いタテ縄叩きだった。つまり、「左」・「右」の刻印平瓦は金堂所用に限定できる蓋然性が高い。左右が製作組織の別を示す考古資料には、奈良時代後半の木造百万塔がある。本薬師寺金堂の造瓦組織も同様の構成をとっていた可能性がある。

次に、1995-1次調査で出土した瓦について問題を整理する。この調査で出土した西塔の軒瓦は新旧二つの様相が混在する。古い様相を示すのは6276Aa-6641Hと6276E（薄型）-6641Kで、これは東塔と共通する。新しい様相は6276Ab・Ac-6641Oと6276E（厚型）-6641Iの2組。6276Aの彫り直しによって前後関係は明らかだ。後者では裳階用のセットは平城薬師寺と同じだが、本屋根用のセット6276Ac-6641Oは平城薬師寺からは出土していない。

西塔は基壇土から金堂所用軒平瓦6647Ccが出土したので、基壇築成は金堂完成を遡らない。所用軒瓦から西塔の創建時期について、次のような仮説を提示できる。

1：東塔とほぼ同じ時期に、6276Aa-6641Hと6276E（薄型）-6641Kで創建。6276Ab・Ac-6641Oと6276E（厚型）-6641Iで大規模な葺き替えが行われた。

2：創建時期は、6276Ab・Ac-6641Oと6276E（厚型）-6641Iの時期。これに6276Aa-6641Hと6276E（薄型）-6641Kのストック分を加えて屋根を葺いた。

要は、新旧いずれのセットを主体とみるかだ。

1の場合、東塔にはそのような状況がないので西塔は建立後に大規模な修理が必要とされたか、あるいは移築に伴う再建の可能性も考慮の余地をもってくる。ただし、解体・再建を示す足場穴は検出されていない。

2の場合は、西塔の建立がほかの堂塔に比べてかなり遅れる。6641G・H・Oの3種は、H→G→Oの順に製作された。Hは紋様が最も整斉で、東塔や中門・回廊の創建軒平瓦。GとOとの紋様の系譜関係は先に述べた。6641Gには6276Aa・Abが、6641Oには6276Ab・Acが組む。本薬師寺では、6641Gはごく少量しか出土しないが、逆に6276Ac-6641Oは平城薬師寺からは出土しない。さらに裳階用軒平瓦6641Iは平城薬師寺創建瓦の一つ。しかも、西塔出土6641Iにはかなり笵傷があるから、平城薬師寺の造営が一段落してからこれらの瓦が本薬師寺に供給されたとみてよい。とすると、西塔の瓦の製作供給時期は奈良時代に降り、『続日本紀』文武2年（698）10月4日条の「薬師寺の構作ほぼおわる」の時点で、西塔は建ち上がっていなかった蓋然性が高くなる。その場合、完成直前に焼け落ちた大官大寺の伽藍配置との関連が問題となろう。

（花谷　浩／考古第1）

コラム：あすかふじわら②

◆60年前の本薬師寺西塔跡

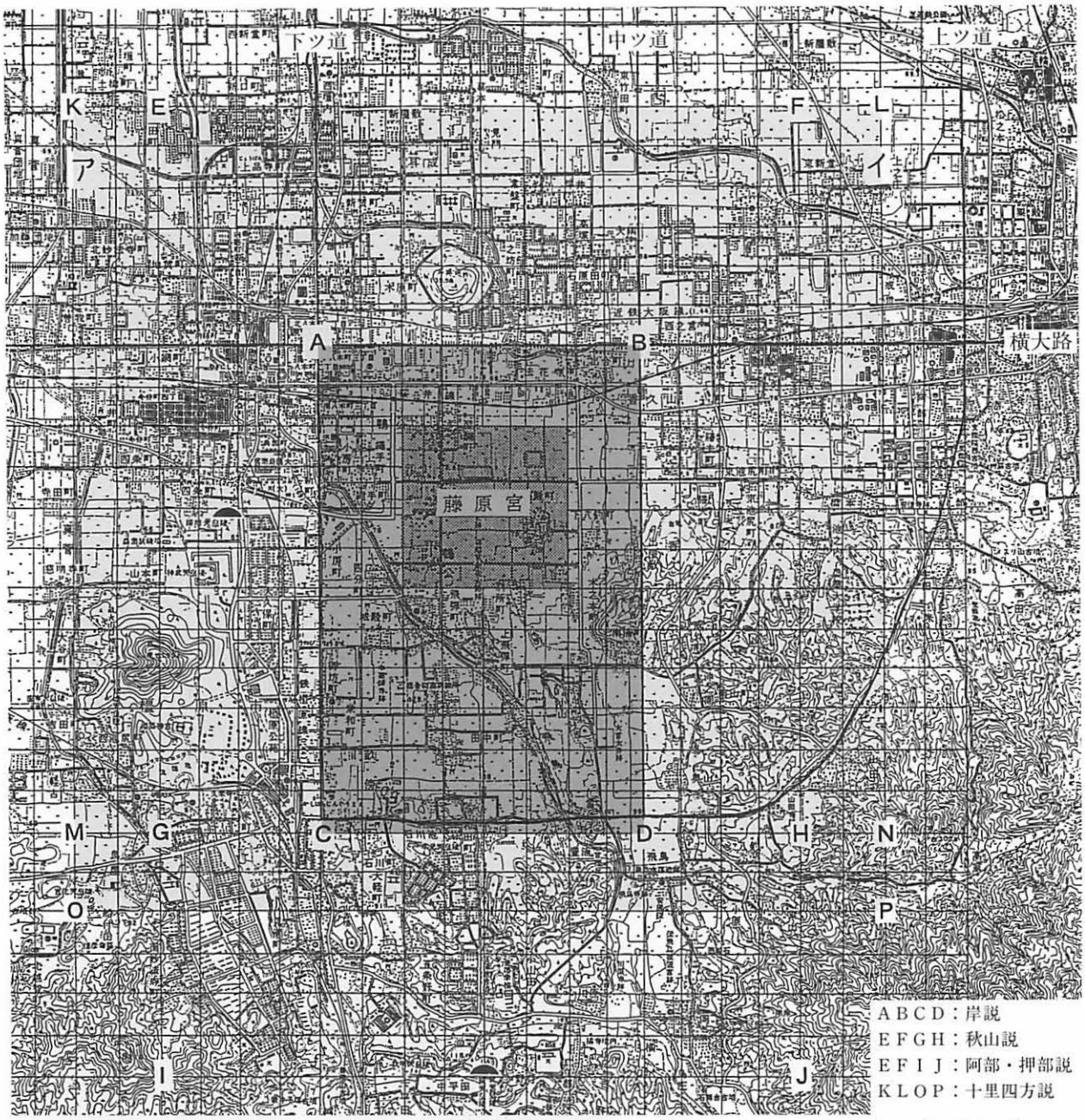
金堂土壇から西塔跡を望んだ写真。周囲は一面の田園地帯。背後の山は、畝傍山。本薬師寺や藤原宮の調査研究に大きな足跡を残した足立康『薬師寺伽藍の研究』（日本古文化研究所報告　第五 1937年）から転載。西塔跡は1996年に初めて発掘調査の手が加わった。橿原市城殿町所在。24頁参照。（C）

コラム：あすかふじわら③

◆藤原京の範囲

藤原京の京域については、1968年岸俊男によって、古代の幹線道に囲まれた東西2.1km、南北3.2kmの範囲に、東西8坊、南北12条分の条坊が復原され、それが定説となった。奈良国立文化財研究所では、1969年以来その成果を受け、藤原京跡の発掘調査を担当してきた。しかし周知のように、その後の調査で、岸説の範囲外からも条坊遺構が相次いで発見され、京域はもっと広がるという、いわゆる「大藤原京」案各種が提出された。そして1996年に至り、大極殿から 東西に2.6kmも離れた橿原市土橋遺跡や桜井市上之庄遺跡から、十坊大路とみられる条坊遺構が発掘された。その上、これを東西の京極とみなす所見もあって、宮を中心に置く十里四方の京域案が、現実味を帯びて急浮上してきた。

この京域は、『周礼』考工記に記された都の形に類似するが、藤原京がそれを模倣したものと断ずるには、なお検証が必要だろう。また併せて、この広大な都がいつ計画され施工されたのか、京域が十坊以上に広がる可能性はないのか、京域が時期によって伸縮しなかったのかなど、解明すべき課題も多い。その解決には、更なる発掘調査が不可欠で、当研究所では、岸説の範囲を越えて調査対象とするべく、検討を重ねているところである。　（黒崎　直）



藤原京の条坊と京域想定図　ア 土橋遺跡　イ 上之庄遺跡

※方眼1目盛は半里：約265m

Ⅲ 飛鳥地域等の調査

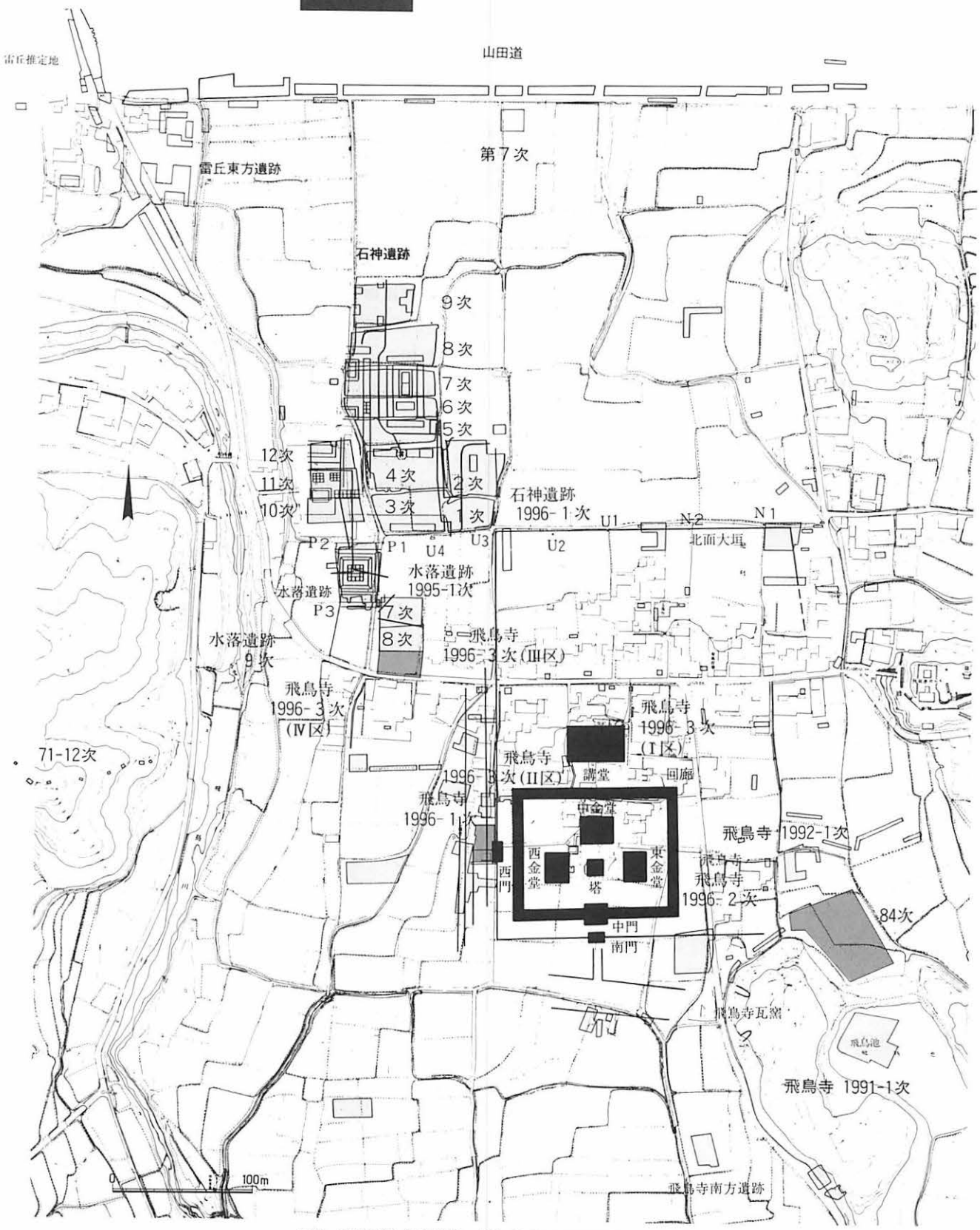


図35　飛鳥地域（水落遺跡・飛鳥寺周辺調査位置図）　1：4000

◆水落遺跡の調査 —第9次・1995-1次

1 水落遺跡第9次調査

はじめに

漏刻台とこれを方形に囲む廊状建物を中心区画とする水落遺跡について、本年度は、その外郭施設の検出を主目的に、昨年度の第8次調査の南隣接地において調査をおこなった。調査面積は533㎡である。

基本層序

上から順に、耕作土、床土、炭混り褐色砂質土（平安時代遺物包含層）、茶褐色土混褐色砂または茶褐色微砂、暗褐色微砂（古墳時代遺物包含層）であった。茶褐色土混り褐色砂または茶褐色微砂の上面で平安時代などの遺構を検出し、暗褐色微砂上面で7世紀代に属する遺構を検出した。

遺　構

検出した遺構は、時期別にみると、7世紀代に属する掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物、掘立柱塀、合口土器棺墓、中世以降の耕作にともなう素掘溝など、おおよそ3期に分けられる。

7世紀の遺構　掘立柱建物SB3700は規模の大きな東西棟建物で、桁行4間（柱間3.08m等間）、梁間3間（柱間2.67m等間）の身舎に、調査区内では南・東・北に庇がつく。庇の出はいずれも2.67mである。西面は調査区外にあるが、西にも庇があって四面庇建物になるであろう。柱掘形の平面の形状は一辺1～1.8mの方形で、現存の深さは約0.7～1.1mある。柱はすべて抜き取っていた。抜取穴は、不整円形で、掘形内におさまるものが多い。柱掘形の埋土は茶褐色砂質土や礫混り暗褐色砂質土などで、抜取穴の埋土は褐色砂質土などであった。建物の方位は、柱根や痕跡によらないので正確を期しがたいが、方眼北に対して東に40分前後振れる。

平安時代の遺構　掘立柱建物SB3703は、調査区東側にある南北棟建物で、桁行3間（柱間2.3m等間）、梁間2間（柱間1.85m等間）である。この東に柱筋が平行な3間の掘立柱塀SA3710がある。柱間は2.2m前後である。

掘立柱建物SB3707は、西側にある東西棟建物で、桁行4間（柱間2.38m等間）、梁間2間（柱間1.8m等間）である。南側にやはり東西棟の掘立柱建物SB3706がある。桁間3間（柱間2.07m等間）、梁間2間（柱間1.6m等間）である。この建物は総柱構造である可能性もある。

SB3707の北側には3間の掘立柱塀SA3709があり、柱間は2.37m前後である。目隠塀と推定される。

SA3709の西の柱の間、南側において合口土器棺墓SX3708を検出した。掘形の形状は、南北に長い楕円形

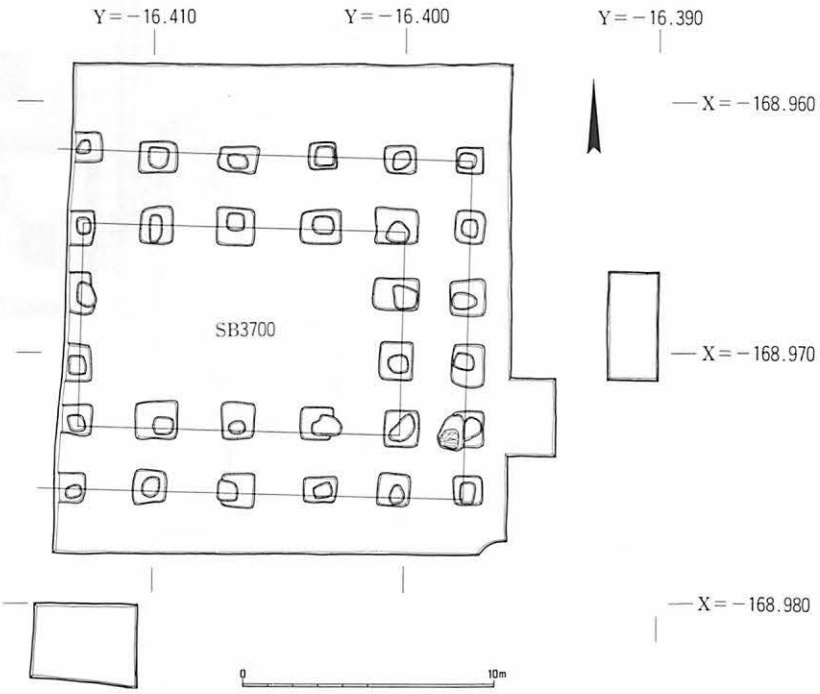


図36　水落遺跡第9次調査遺構図（下層）1：300

で、長軸約0.48m、短軸約0.36m、現存の深さは約0.1m。ここに口縁部を合せた甕2個体を南北方向に、横倒しに据えてあり、北側の甕内部には直径約14cmの土師器皿が甕の底面に添うようにおいてあった。棺内には、それ以外に遺物はなかった。

遺　物

土器、瓦、金属製品、石製品などが出土している。

土器のうち最も多いのは、古墳時代に属するものである。そのなかには、縄叩き文の陶質土器のほか、格子叩き文などをもつ軟質の韓式土器も含んでいる。7世紀代の土器類はきわめて少量である。

軒丸瓦は、飛鳥寺V型式3点の他、同Ⅷ・XⅣ・XⅤb各1点がある。軒平瓦は出土しなかった。

金属製品としては、鉄鏃・鉄釘などが、石製品では、石帯が出土した。

まとめ

本調査区において規模の大きい建物SB3700がみつかった。上述のように、遺構の重複や、7世紀代の出土遺物はきわめて少ないので、この建物のこまかな所属時期を決定することはむずかしい。

そこで、いま建物の方位によるとすれば、その振れは、方眼北に対して東に40分前後である。この方位は、石神遺跡と水落遺跡を区画する大垣SA600や水落遺跡第7次調査区石組溝SD3400、さらに石神遺跡A期（斉明朝）のうちA-1期からA-3期の古い段階にかけての諸施設群に一致する。

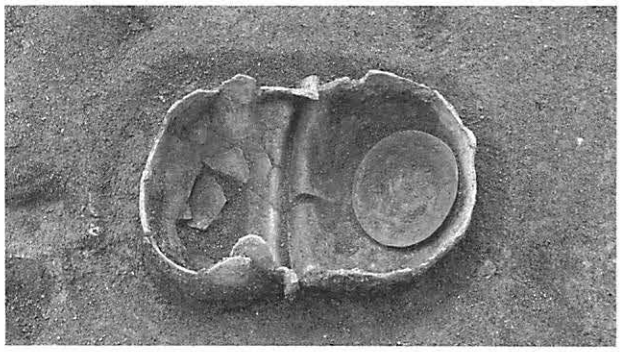


図37　合口土器棺墓SX3708（東から）

一方で、水落遺跡の礎石建物を含む中心区画は方眼北に対して西に約40分振れている。この違いを重視して、いまはSB3700を漏刻台などの中心区画に先行して建てられた建物としておきたい。

今回の調査と、第7・8次調査（『藤原概報25・26』）の成果をあわせると、水落遺跡においては中心区画の建設にともなって、その南50m以上にわたる範囲に建物や塀といった地上構築物を新たに建設した形跡はないことになる。

また、水落遺跡の南を画す塀は未検出である。外郭施設を含めた空間利用の実態の解明については、なお今後の調査の進展に委ねねばならない。（深澤芳樹／考古第1）

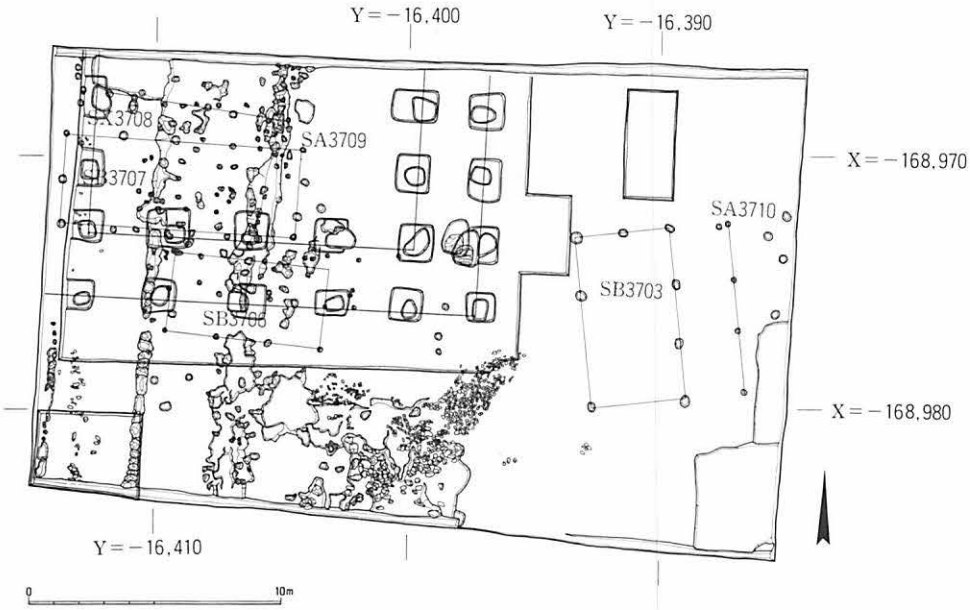


図38　水落遺跡第9次調査遺構図（上層）1：300　色刷りは下層

2　水落遺跡1995-1次調査

はじめに

この調査は、高市郡明日香村大字飛鳥地内について明日香村が行う下水道埋設事業にともなう事前調査の第1年次の調査である。

調査は、前年までに検討されたルートと順序にしたがっており、今年度は飛鳥寺寺域北辺から石神遺跡、水落遺跡にいたる全長430m間に必要とされる合計12箇所の竪坑予定地について、遺構の存否を確認し、ルート確定の資料を得る目的で実施した。

遺　構

調査地は東からN-1・2・3・4、U-1・2・3・4、P-1・2・3・4と呼び分けた（図35）が、このうちN-3・4とP-4については事業者側の都合で調査を見送った。なお、ここでのN、U、Pはそれぞれ飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設定した飛鳥藤原地域の調査地区割の5AMD-N、5AMD-U、5AME-Pの中地区名であり、以下、各調査トレンチ毎に概述する。

N-1トレンチ　1982年に調査された飛鳥寺東北隅（飛鳥寺1982-1次調査『藤原概報13』）の東約15mの東西里道上に、東西3m、南北2mの調査区を設けた。道路敷直下で、北3分の1については近年の水路工事によって破壊されていることが判明し、南についても地山岩盤とバラス層を確認しただけで遺構は検出されなかった。

N-2トレンチ　飛鳥寺寺域東北隅の西40mに位置する東西里道上に1×1mの調査区を設けた。層序は上から道路基礎、暗褐色土、茶褐色土、茶褐色粘質土、褐色土で、褐色土上半に軒丸瓦（飛鳥寺Ⅰ型式）1点などの遺物が少量含まれるだけで、それ以下は地表下約2mまで無遺物層が続く。この高さは東北隅検出時の遺構面をこえており、調査区内では遺構は確認されなかった。

U-1トレンチ　1977年に飛鳥寺寺域北限塀と北門及び外濠を検出した調査区（飛鳥寺北方の調査『藤原概報8』）の西北に隣接する東西里道上に、東西3m、南北2mの調査区を設けた。層序は上から道路基礎、暗褐色土、暗茶褐色土、茶褐色土、褐色土である。上面から0.7～0.9mの褐色土面で遺構検出をおこなった。黄褐色粘質土を埋土とする土坑2基を検出したが、外濠は検出されなかった。土坑はともに東西に長く、調査区の中程でとぎれて東には延びない。土坑の方向は西で南に傾く方向にある里道に平行しており、寺域北限の塀や外濠の方向とは一致しない。土坑からは少量の瓦と土器が出土した。褐色土面は東から西へ下降し東半は比較的浅いが、そこでも寺域北外濠は検出されなかった。1977年の調査では外濠は調査区の東7mの位置で北へ折れ曲っており、本調査区は北門から北へ延びる通路の上に位置するものと考えられる。

U-2トレンチ　U-1トレンチの西約30mに1×1mの調査区を設定した。層序は道路基礎、暗褐色土、暗茶褐色土、茶褐色土、褐色土で、道路面下1mの褐色土上面で小穴1を検出した。小穴は直径60cm程の不整円形で、少量の土器が含まれ、弥生時代の遺構と思われる。外濠状の遺構や堆積土は認められなかった。

U-3トレンチ　飛鳥寺北門から西へ15mの東西里道上に東西3m、南北2mの調査区を設定した。層序は上から、道路基礎、灰褐色土、茶褐色砂質土、灰褐色粘質土、暗灰褐色砂質土である。暗灰褐色砂質土面で北へ緩やかに下降する東西溝を検出。幅1.5m以上、深さ0.4m以上。埋土は上層の褐色粘質土と下層の暗灰褐色粘土に分けられ、溝からは少量の瓦と土器片が出土した。溝の南岸には直径60cm大の擂鉢状の穴が5基あり、護岸の石の抜取穴とみられる。位置と規模から、この東西溝は飛鳥寺の北面外濠と考えられる。

U-4トレンチ　石神遺跡第1次調査区の東南角の里道交点に1×1mの調査区を設定。この里道交点は飛鳥寺の西面大垣の北延長上にあり、寺域北西隅に位置すると推定されている。層序は道路基礎、茶灰褐色土、青褐色粘土斑入り灰色砂層、灰褐色粘質土、淡灰褐色微砂質土、砂礫、暗褐色粘質土、青灰色土である。地表下1.1mの灰色砂層は瓦と近世陶器が含まれる旧水路堆積層で、地表下1.4mの灰褐色粘質土以下は西に下降する旧流路の堆積層にあたる。調査は地表下1.6mの深さまで到ったが、第1次調査区の黄褐色粘土の地山は確認されなかった。

P-1トレンチ　U-4トレンチの西約36m、石神遺跡第3次調査区の東端付近に南接する東西里道上に東西3m、南北2mの調査区を設定した。第3次調査で検出した東西棟建物の南に石敷や建物があるかどうかが課題であった。層序は上から、道路基礎、黄灰色土、暗灰褐色砂礫土である。地表下0.9mにある暗灰褐色砂礫土上面で中世

の東西素掘溝１条を検出した。素掘溝以南は黄色粘土の入った暗褐色粘土が広がり、それを埋土とする東西溝状の土坑と判断された。なお、土坑には石神遺跡第３次調査の溝SD576に特徴的な白色粘土塊が含まれる。素掘溝以北では東から、暗褐色粘土を埋土とする浅い円形土坑、灰色粘土混りの砂礫を埋土とする一辺0.6ｍの柱穴、礫混りの灰色粘土を埋土とする一辺1.3ｍ以上の大型柱穴各1基を検出した。しかし、周辺での調査成果と対照しても建物などにはまとまらなかった。

P-2トレンチ　P－１トレンチの西約40ｍのＴ字路交差点に、１×１ｍの調査区を設定。石神遺跡第３次調査区の西南部で、水落遺跡の東北部にあたり、漏刻関連施設全体に及ぶ掘込地業の北端が想定される位置である。層序は、上から道路基礎、石炭殻層、青灰褐色土、黄灰色砂質土・暗灰褐色微砂土である。地表下0.8ｍの黄灰色砂質土面で遺構検出した結果、南半に暗茶褐色土が広がり、その下は淡灰褐色粘質土と暗褐色砂質土の互層からなる積土層であった。この積土層は深さ0.3ｍしか確認していないが、1985年の水落遺跡第５次調査（『藤原概報16』）で確認した掘込地業埋土と類似し、また、この位置が礎石建物の基壇北縁の北約12ｍにあって、基壇南縁から掘込地業南端までの距離と等しいことから、全体におよぶ掘込地業の北端にあたると判断された。

P-3トレンチ　P－２トレンチの南約45ｍ、史跡水落遺跡の整備地の東を通る南北村道上に南北５ｍ、東西2.2ｍの調査区を設定。調査区の西側では1982～86年の第２～６次調査（『藤原概報12・16・17』）、東側では1994年の第７次調査（『藤原概報25』）が行われており、その成果から調査区内で掘込地業の南端が検出されることは確実であった。ただ、第７次調査ではＡ期の東西塀とＢ期の東西溝が検出されておらず、その存否の確認が課題であった。

層序は基本的には道路基礎、黄灰色土、赤褐色土、暗灰褐色砂質粘土、暗灰色砂質土、明褐色砂である。暗灰褐色砂質粘土には９世紀の黒色土器片が含まれ、赤褐色土と暗灰褐色砂質粘土は遺跡中枢部の調査時の「褐色砂質土」に相当する平安時代の遺物包含層である。その下面での遺構検出の結果、北半に東西方向に積土の縞が認められ、掘込地業の上部にあたると判断された。掘込地業埋土は上から暗茶灰色粘質土、暗灰褐色微砂土、明黄灰色砂、黄灰色砂で厚さ5cm程の互層をなす。深さ40cmまで確認したが、従来の所見と変わらない。埋土からは７世紀前半代までの土師器、須恵器が少量出土した。

掘込地業の南には地山である明褐色砂の上に暗褐色砂質土が広がる。この砂質土には７世紀代の遺物が少量含まれ、掘込地業と同時期の周辺部の整地土と考えられる。調査区南端にある礫の入った柱穴①、東西溝、暗灰色粘質土の柱穴②とその柱抜取穴はその上面で検出された。柱穴①は一辺60cm以上の規模で、柱間2.1ｍにある柱穴③とともに暗紫色の焼土が含まれる特徴があり、その点で第７次調査の掘込地業南端に接して検出した柱穴SX3414と酷似している。柱穴③はこのSX3414の真西約５ｍに位置し、柱痕跡が平安時代の遺物包含層中で確認されることから平安時代の柱穴と考えられる。東西溝は第６次調査のSD296の東延長部で幅0.9ｍ、深さ30cm以上。柱穴②は第６次調査の東西塀SA295の東延長部で、掘形、柱抜取穴が東西溝とほぼ重複していて見極めにくい点も第６次調査の所見と一致している。

以上のように、掘込地業の南端については当初の想定通りの位置で確認され、Ａ期の東西塀とＢ期の東西溝については第６次調査での所見を再確認することになった。先述のように溝と塀とは東の第７次調査では検出されておらず、溝はこの位置で南に曲がり、塀は南に曲がるか、東西棟建物の北側柱列となるものと考えられる。

出土遺物

土器、瓦、土製品、石製品が少量ある。土器は、Ｐ－２・３の掘込地業埋土出土の土器類を含めて極めて少量で、いずれも遺構の時期を決定する資料としては貧弱である。瓦は、整理箱20箱分の丸・平瓦のほか、軒丸瓦飛鳥寺Ｉa型式３点、XIV型式２点、軒平瓦III型式（四重弧紋）１点がある。

まとめ

Ｕ－１では、飛鳥寺北門関連の遺構面を確認し、Ｕ－３では寺域北限の外濠とみられる石組護岸のある東西溝を確認した。Ｐ－２・３では、水落遺跡の掘込地業の北端と南端を確認した。その位置は従来の調査成果から復原された通りの位置であって、復原は正鵠を射たものであろう。復原にしたがえば、南北村道上には、水落遺跡の掘込地業をはじめとする遺構が遺存し、Ｐ－３の南についても石組溝や木樋暗渠が延びていることは確実である。

（西口壽生）

◆飛鳥寺の調査—1996-1・3次、第84次

1　西門地区の調査（1996-1次）

はじめに

本調査は、飛鳥寺西門跡に隣接する奈良県有地を公園整備するのに先だって行った。調査地は、飛鳥大仏を安置する安居院本堂（中金堂跡）の西約80m、「入鹿の首塚」と俗称される五輪塔の東側、西門跡推定地の一部とその外の一郭である。調査面積は262m²。

1956・57年調査の結果、飛鳥寺は一塔三金堂の特異な伽藍配置が判明した（『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊　1958年、以下『飛鳥寺報告』）。この時、寺域確認のために西門および南門とその南方の参道が調査され、それをもとに二町四方の寺域を復元した。

その後、1977年に大字飛鳥集落の北で北面大垣を確認（『藤原概報8』）、1982年にその東方で大垣東北隅と東面大垣を確認した（『藤原概報13』）。それによって、寺地は南北に長い台形で、南北293m、東西は北で215m、南で約260m、面積約70,000m²と推定されるに至った。なお、寺域の南限は南門ではなく、それに接続する石敷参道の南端と考えている。ちなみに、『太子伝玉林抄』『太子伝古今目録抄』などによれば、飛鳥寺の四つの門には各々、東門に「飛鳥寺」、西門に「法興寺」、南門に「元興寺」、北門に「法満寺」の扁額が掲げられていたという。

1956年の調査によって、西門は礎石建ち八脚門と推定され、正面11.3m（高麗尺32尺）、奥行き5.3m（15尺）、推定基壇規模が正面13.8m、奥行き9.3mに復原された。正面の柱間は中央だけが4.2m（12尺）、両脇が3.5m（10尺）で、中央間が広い。梁間は2.6m（7.5尺）等間である。南門は正面8.8m・奥行き4.6mで、西門の方が大きい。

西門の外側の状況については、本調査区の南での調査（1984年度K地点調査区『藤原概報15』）と北での調査（1969年橿原考古学研究所飛鳥京跡第18次調査『飛鳥京跡二』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第40冊、奈文研1989-2次調査『藤原概報20』）、および西での調査（1966年橿考研飛鳥京跡第11次調査『飛鳥京跡二』）などによって、次のようなことがわかっている。

西門あるいは西面大垣から西約9mに幅1.2mの石組大溝SD6685があり、西約18mにも幅0.5mの石組小溝SD6684がある。大垣と石組大溝との間には石敷SX736・737や石列SX735がある。石組大溝の西に接して南北方向の掘立柱塀SA738があるが、これは大溝を作るときには撤去されていた。大垣の西約14mの地下には土管暗渠SX740が埋められていた。また、今調査区の西には、幅4.3mの玉石敷南北道路SH6682がある（図46）。

今回の調査は、これらの過去の調査成果に基づき、西門およびその外側の状況の把握を目的とした。

基本層序

盛土（20～40cm）、旧水田耕土（20cm）、床土（20～40cm）の下層に中世の遺物を含む灰黄色砂質土（10～15cm）があり、これを除去して遺構検出を行った。調査区東辺では、床土直下に古墳時代の包含層である暗褐色粘質土が現れ、この上面で遺構を検出した。石列SX735あたりから西には、7世紀後半の整地土層（褐色砂質土・褐色バラス層）が残り、その上面で遺構検出を行った。その後、これを部分的にはずして下層遺構を調査した。

飛鳥時代の遺構

西門SB240　礎石立ちの八脚門。1956年の調査では、基壇の一部および、南北3列ある柱のうち棟通りと東側柱筋の合計7箇所で柱位置を確認した。そのうち東側柱筋の南端と南から2間目に礎石が残っていた。門の基壇東側には河原石で組んだ雨落溝（SD241）がある。SD241の西側石は基壇東側の化粧を兼ねる。基壇南辺は後世の破壊が著しく、基壇の南縁は確認できていない。

今回は、西側柱筋の柱位置2箇所を確認し、八脚門を確定した。礎石は残っていなかったが、門の北西隅とその南側で据付掘形を確認した。推定される柱の間隔は、

図39　石組小溝SD6684（北から）

図40　石組大溝SD6685（北から）

脇の間の柱間3.5mとして矛盾はない。北西隅の礎石掘形は、直径1.3m、検出面からの深さ15cmで、黄褐色山土が版築状に詰まる。基壇土および基壇化粧は全く残っていなかった。推定基壇西辺にある小穴列SX923とその西の小穴列SX925は、基壇東側縁石と雨落溝側石を門の中軸線で折り返した位置にあり、基壇縁石と雨落溝側石の抜取痕跡かも知れない。

基壇の西側および北側では、足場の柱穴列SS920・921を検出した。SS920は西側柱礎石位置から西約2.3mにあり、北1間が3.0m、南2間は2.1m等間となる。SS921は柱間2.1mの1間のみ。西門北妻柱筋から1.45mを隔てる。SS920の南端の柱穴とSS921東側の柱穴は、柱抜取穴に黄色の山土が充塡され、掘形にも若干の山土が混じるが、SS920の北側3個の柱穴は掘形に山土が含まれず、抜取穴埋土は灰褐色砂質土で瓦片を含む。2時期の足場穴に区分できるのであろう。

石組大溝SD6685　調査区のほぼ中央にある石組溝。溝幅は約1.2m、深さ0.5m。側石の最も大きいものは幅70cm、長さ1mある。西門の正面でも溝幅や深さに違いはなく、橋のような施設もない。溝埋没後、西側に素掘溝SD739が掘られたため西側石のいくつかは倒れ、また、東側石のいくつかは抜き取られていた。溝底には拳大の河原石を敷くが、北の方では瓦が混じる部分があり、改修を受けている。掘形から瓦片と土器片（飛鳥II～III）が出土した。埋土からは、大量の瓦のほか、土器と若干の鉄器が出土した。溝の北部では東側から瓦を投棄した状況が残っていた。土器は7世紀代でおさまる。

今調査区南の1984年K調査区ではSD6685の下層に、後述するSA738と柱位置が一致する柱穴を検出した。これが、南北塀になる可能性を想定し、推定柱位置で底石を除去して調査したが柱穴はなかった。

石列SX735と石敷SX736・737　SD6685の東側石の東1mには、石列SX735がある。今調査区では、石は1石を残してすべて抜取られていた。石列と石組大溝との間には石敷SX736があり、石列の東にも石敷SX737がある。ともに、部分的に残存していたにすぎない。SX736の南の方は後に、瓦敷に改修される。二つの石敷は、5cmほどの差で東側のSX737が高い。なお、北で行った1989年度の調査では、石列SX737のさらに東1mにも石列跡SX734を確認しているが、今回は検出しなかった。

石組小溝SD6684　調査区の西辺で確認した幅0.5m、深さ10cmほどの溝。西側に直径40～50cmの大きな石を、東側には直径20～30cmの小振りの石を並べる。北では底石が残っていた。調査区南辺から北約4.5mの位置には、この溝を横断するように東西に並ぶ石列SX946があり、その北は長さ約1mにわたって小石を積み上げている(SX947)。石列SX946の南に接する部分ではSD6684の西側石が2・3石分抜けているので、北へ向かう流水を西に向けるための施設と思われるが、その行方は調査できなかった。今調査区の西に接して、発掘調査が行われている(飛鳥京跡第11次調査)が、関連しそうな遺構は未確認。SD6684は掘形埋土に瓦や土器を含み、石組大溝SD6685に似る。2条の溝の間隔は心心間距離で8.8mである。

SD6684の東西には、石敷SX937・948やバラス敷SX951がある。バラス敷SX951は土管暗渠SX740の掘形を完全に覆っていた。

南北塀SA738　石組大溝SD6685の西に接した位置にあり、素掘溝SD739の底で検出した。柱の間隔は2.6m前後。西門の正面でも柱間は変わらない。柱掘形は一辺1.2m前後、検出面からの深さ1m。掘形埋土に若干の瓦片が混じり、柱抜取穴には黄褐色山土が詰まる。SD6685より古い。調査区の南辺では、この掘立柱塀SA738の西約4mで柱穴SX935をみつけた。後述する土管暗渠SX740の掘形を掘り込む。柱抜取穴には若干の黄褐色山土が混じ

西面大垣
SA700
SD6684
SX740
SA738
SX737
SD6685
SX735
SD934
SX951
SX952
SD739
SX948
SD953
1985-2次調査区
X=−169.100
SK930
SD928
足場穴SS921
柱列
SX938
雨落溝
SD241
SX923
SX947
SX946
SX937
SX929
西門SB240
X=−169.110
足場穴
SS920
SX935
石組小溝SD6684
土管暗渠SX740
掘立柱塀SA738
石組大溝SD6685
石列SX735
X=−169.120
1984年度K調査区
1956年調査区
Y=−16.320
0
10m
Y=−16.340
Y=−16.330
西門基壇
礎石

図41　飛鳥寺1996-1次調査遺構図・土層図　1：200

図42　土管

図43　土管暗渠SX740（北から）

る。SX935の北と西には、関連する柱穴はない。

土管暗渠SX740　直径約20cm、筒部の長さ約40cmの瓦製土管をつないだ施設。今調査区南の1984年度調査区と北方の1989-3次調査区で掘形と北の1989-2次調査区では、土管本体を確認している。調査区内で土管41個を検出した。玉縁を北に向けて据えられ、調査区の北端は南端より5cm低い。土管の並びは直線ではなく、調査区内でごく緩いS字形を描く。

暗渠掘形は、幅1.5～1.8m、深さ1mの溝状。古墳時代の河川堆積土の上面に山土を置いた上に細かい瓦片で瓦敷SX955を作り、その上にさらに盛土整地した面から掘り込まれる。掘形は、土管設置後、黄褐色山土や礫を交えた土で版築状に埋め立ててある。埋土に、少量の瓦と土器を含む。

その他の遺構　SX952は、土管掘形と重複する4個の柱穴。南北2.9m、東西3.0mに4個が四角く並ぶ。柱掘形は土管掘形より新しく、石敷SX948より古い。

土管の直下では、柱間約2.6mの柱列SX938を検出した。柱穴の直径は30～40cmほど。柱抜取穴に黄色い山土が混じる。柱位置が南北塀SA738とほぼ一致するので、これと一連の柱列とも考えられるが、両者の距離は3mあって足場穴としては遠すぎる。

斜行溝SD942は、柱穴SX935と重複する、南東―北西方向の素掘溝。埋土に山土と瓦片を含む。

奈良時代以降の遺構

素掘溝SD739　幅約3mの素掘溝。南北に走り、東岸は石組大溝SD6685の西側石を護岸とする。埋土下層は分厚い砂礫層。調査区北半部では最終的には西に蛇行する(SD953)。SD739・953からは大量の瓦のほか、11世紀までの土器が出土した。

SD6685の東方にも細い溝（SD928・934）がある。他に、土坑があり、SK930・931からは大量の瓦が出土した。

古墳時代の遺構

調査区東北隅では、飛鳥時代整地土層の下層で、方形の竪穴住居SB933を検出した。北辺と東辺は調査区外にあるが、一辺3m以上である。南辺に長径90cmの貯蔵穴があり、周辺から土師器高杯や甕・壺が出土した。また、床面の中央やや北寄りの床面が焼けていた。竈の痕跡であろう。時期は、出土土器から5世紀後半。同時期の遺構は、他に土管掘形断面で確認した河川跡がある。

表4　飛鳥寺1996-1次調査軒瓦等点数表

型　式	点数	型　式	点数
Ⅰa	12	角端点珠	1
Ⅰ	35	Ⅸ	1
Ⅲa	4	Ⅻ	26
Ⅲb	4	Ⅻb	1
Ⅲ	21	型式不明	5
Ⅳ	13	軒丸瓦計	171
Ⅴ	16	川原寺763	1
ⅣカⅤ	8	軒平瓦計	1
Ⅵ	5	垂木先瓦Ⅰ	1
Ⅶ	2	垂木先瓦Ⅳ	4
Ⅷ	4	型式不明	1
星組型式不明	13	垂木先瓦計	6

出土遺物

瓦塼類のほか、土器、金属器、石製品などが出土した。

瓦類　飛鳥時代から平安時代までの瓦が出土した。軒丸瓦171点、軒平瓦1点、垂木先瓦6点、鴟尾片、塼のほか、丸・平瓦がある（表4、図14）。

軒丸瓦は、飛鳥寺創建期のものが最も多い。素弁十弁のⅠ型式（「花組」）は、小さな破片が多く、主体をなすのは素弁十一弁「星組」のⅢ～Ⅷ型式である。Ⅲ型式は、間弁が中房にとどかないⅢa（図4-1）と、間弁が中房につながるⅢb（2）があり、両者が出土した。Ⅳ・Ⅴ・Ⅵは小振りの「星組」（4～6）。角端点珠八弁蓮華紋軒丸瓦（5）は初出である。創建以降では複弁八弁蓮華紋のⅩⅣ型式が目立つ（7）。瓦笵がシャープな段階（ⅩⅣa）から蓮子を彫り直し笵割れを起こした段階（ⅩⅣb）まで各種があり、接合手法にも変化がある。初期は鋭い刃物で細かな斜格子刻みを丸瓦の凹凸面に入れる。次に、凹凸面ともタテと斜めの簡略な斜格子刻み目に変わる。この段階では端面にも刻み目を入れる。最後はやや太いタテの刻み目だけとなる。奈良時代後半のⅩⅤ型式b（8）は、平城京元興寺6201Abと同笵。

軒平瓦は平安時代の均整唐草紋軒平瓦のみ。川原寺と同笵（川原寺763型式）で、飛鳥寺では初出。

垂木先瓦は、素弁九弁のⅠ型式と、弁央に稜線のはいる八弁のⅣ型式が出土した。Ⅰ型式は大阪・新堂廃寺と同笵（『年報1997-Ⅰ』12頁参照）。

丸・平瓦は、総数39,505点2,296kg出土した。創建期が最も多く、これに7世紀後半の瓦が次ぎ、奈良時代の瓦はそれほど多くはない。これは軒丸瓦の出土傾向と一致する。創建期の瓦は、行基丸瓦と格子叩き目ないし粗い

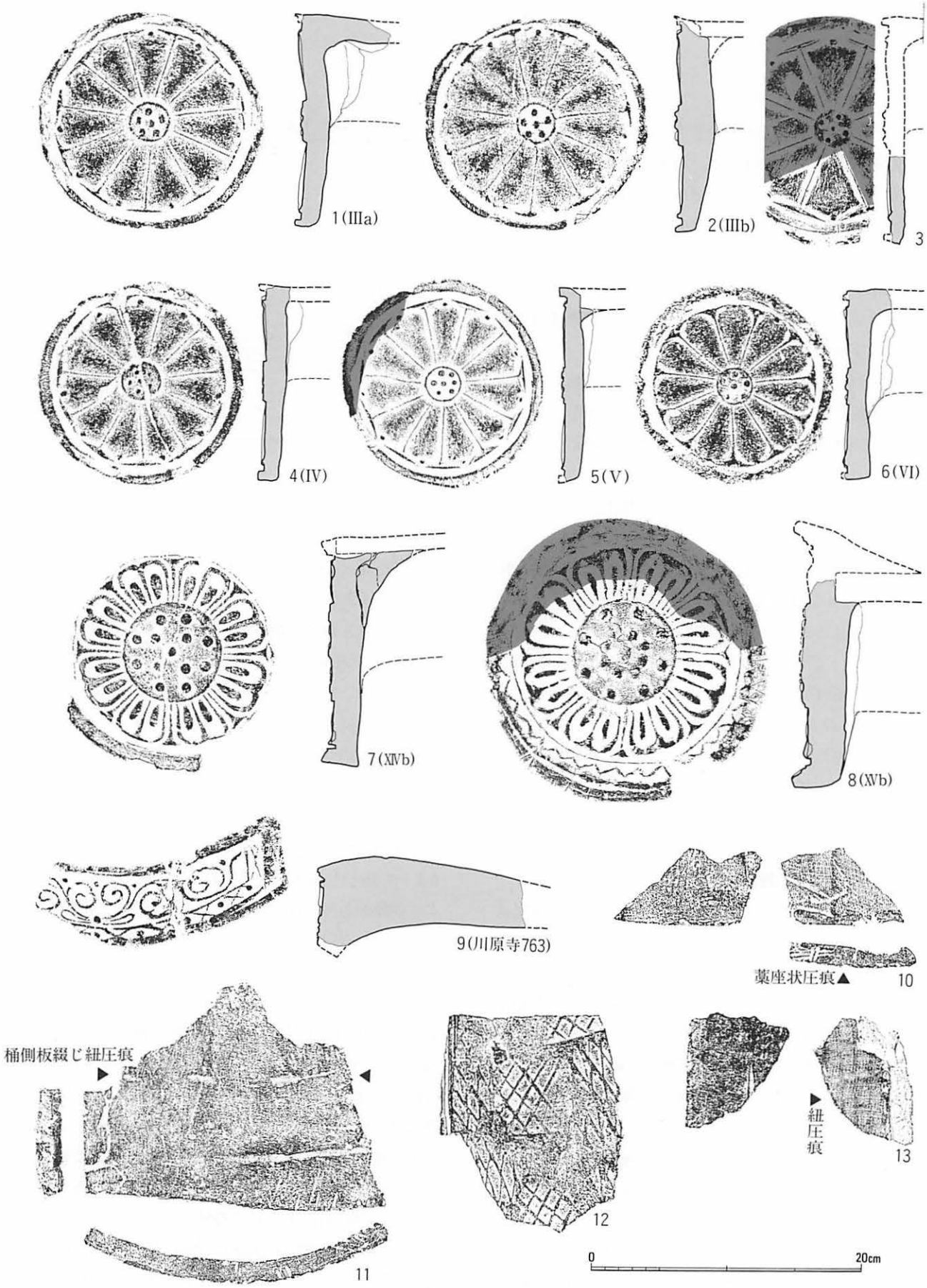


図44　飛鳥寺1996-1次調査出土瓦　1：4

平行叩き目の平瓦（「花組」に対応）および、玉縁丸瓦と細かい平行叩き目格子叩き目をタテにスリ消した薄手の平瓦（「星組」に対応）、の二群に分類できる。

行基丸瓦には、一木の模骨を使うものと側板連結模骨を使うものの二者がある。量は前者が圧倒的に多い。両者は、分割截線の入れ方が逆で、一木模骨の丸瓦は凸面側から、側板連結模骨の丸瓦は凹面側から入れる。玉縁丸瓦は玉縁内面に布目がつかない。分割截線は凹面側から入れる。

「花組」に伴う、粗い平行叩き目の平瓦には、粘土円筒を反転して広端側に補足の叩き締めを行うものがあり、凹面にあて具の痕跡が残る。格子叩き目の平瓦とも、分割凸帯は紐である。凹面は不調整、側面は破面をヘラケズリするｂ手法。

「星組」に伴う平瓦は、凸面をタテ方向に丁寧にナデ調整するのが特徴であり、上下２個４箇所の分割突起を目安に粘土円筒を４分割する。広端近くの凹面に、桶の側板を綴った紐の痕跡を残すものがある（図44-11）。類例は、大阪・新堂廃寺（烏含寺）にある（藤沢一夫「造瓦技術の進展」『日本の考古学』Ⅵ　歴史時代（上）1967年、286～310頁）。この一群も凹面は不調整、側面調整はｂ手法である。広端面に「藁座状圧痕」を残す例があった（10）。

７世紀後半の瓦は、大半が行基丸瓦と斜格子叩き目の粘土板桶巻き作り平瓦の組合わせである。平瓦は凹面をナデ調整し、凹凸両面の側辺に幅広い面取りをする（12）。この一群は軒丸瓦XⅣ型式に伴う。ほかに、叩き目が深い格子あるいは斜格子の平瓦や、凸面を完全にスリ消した平瓦がある。川原寺から搬入された玉縁丸瓦と凸面スリ消しの縄叩き平瓦それに凸面布目平瓦の一群、縄叩き桶巻き作り平瓦の一群がごく少量ある。また、竹状模骨丸瓦が１点確認できた（13）。

奈良時代の瓦は、行基丸瓦と一枚作りの縄叩き平瓦。叩き目や側面形に数種がある。

土管　暗渠SX740に使用されていた土管は分厚い円筒形で、連結のための細い玉縁部があり、筒部にはこれを挿入するためのえぐり込みがある。導水に使われる円孔部分は直径19cmほどだが、土管は、平均で全長約52cm、筒部長約38cm、重さ約22kgあり、極めて重厚である。個々の土管は、規格・重量にばらつきがあり、全長44.5～56cm、筒部長33.2～44.5cm、重さ15.5～29kgの幅がある。

土管の成形は、円孔部となる布巻き軸に粘土を巻き付ける。玉縁部の円孔内面には、粘土紐の積み上げ痕跡が観察できる。表面は、ナデ調整、筒部のえぐり込みは、ヘラケズリでつくる。表面に「廿」のへら描き記号をもつものがあり、これらはある程度規格が揃うようだ。また、多くの土管は、表面にベンガラが付着していたが、記号かどうかは明らかでない。

土器　古墳時代から平安時代前期に至る土師器と須恵器、平安時代前期の黒色土器のほか、弥生土器や瓦器が出土した。

石組大溝SD6685の掘形からは、土師器杯Ａ・Ｃ、鉢Ａ、皿、ロクロ成形の杯Ｂ、高杯Ｃ、甕、須恵器杯Ｈ、壺、甕が出土。飛鳥Ⅱ～Ⅲ。SD6685の埋土からは、土師器杯Ｃ・Ｈ・高杯Ｇ、甕、須恵器杯Ｂ・Ｇ・Ｈ、壺、甕、瓶など、飛鳥Ⅴまでの土器が出土。

素掘溝SD739下層の礫層からは、土師器杯Ａ、皿、小皿、高杯Ｇ、壺、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ、椀Ａ、鉢、壺など、飛鳥Ⅴから平安時代前期（10世紀前半）までの土器が出土した。また、SD953の埋土上層からは、11世紀代の土師器皿が出土した。

古墳時代の土器は、竪穴住居SB933や河川堆積から５世紀後半のものが出土したほか、４世紀から６世紀後半に及ぶ。

金属器　20点ほどの鉄釘や刀子片のほか、SD739から青銅製刀装具（責金具）が出土した。刀装具は、長径3.9cm、厚さ0.6cm。

石製品　弥生時代のサヌカイト製石鏃と剥片のほか、縄紋時代後期の石棒１点が石組大溝SD6685の掘形から出

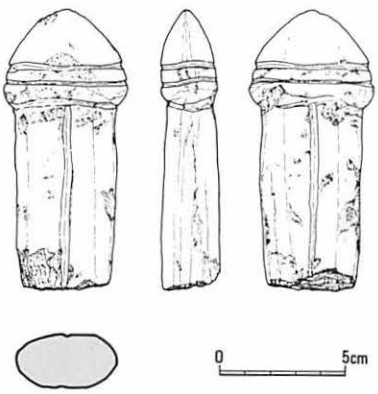


図45　石棒　1：3

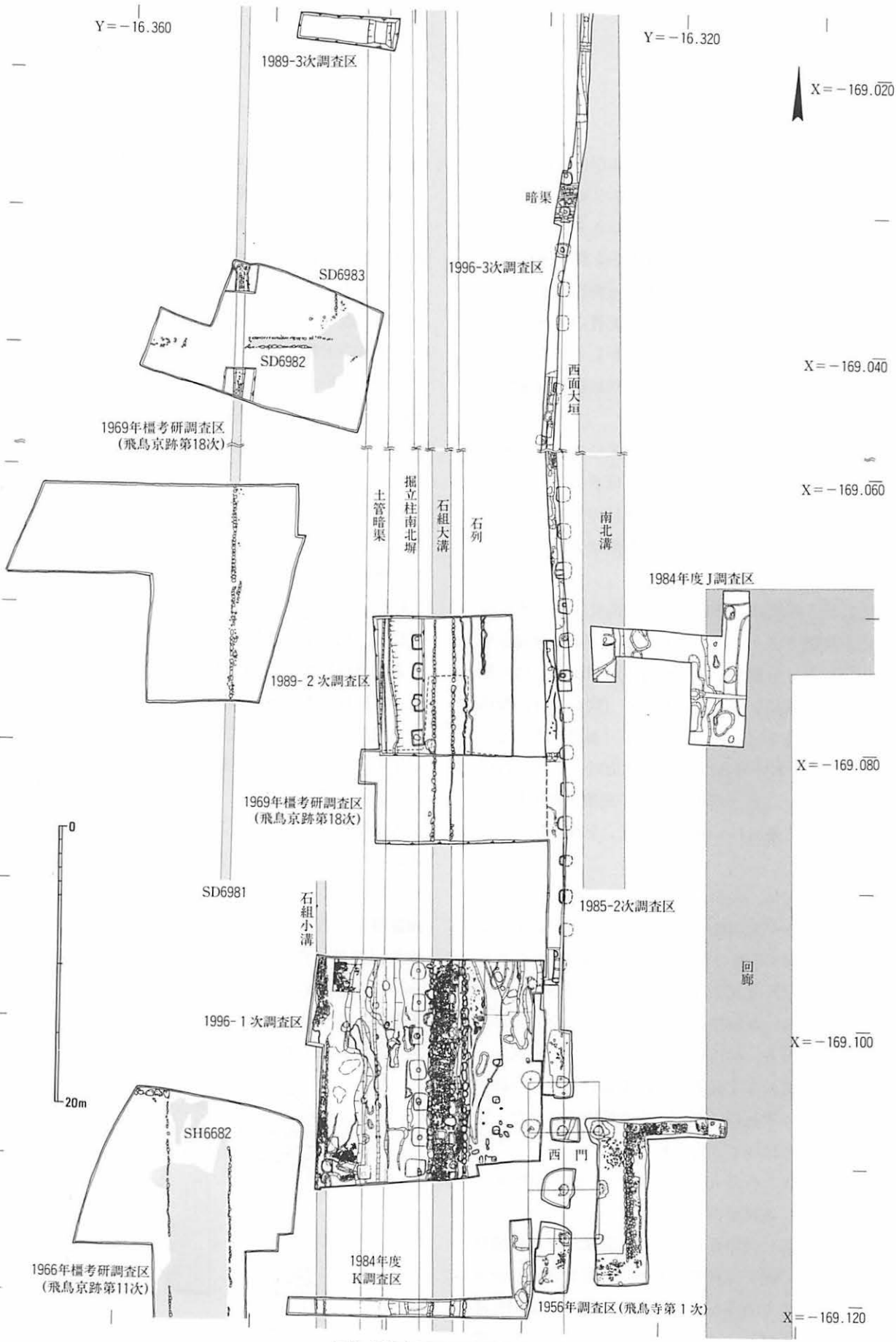


図46　飛鳥寺西門周辺遺構図　1：400

土した(図45)。頭部3条の横方向の沈線をめぐらし、軸部には両面に縦方向の沈線がある。下部を欠損する。全体に磨きを施すが、敲打痕が随所に残る。現存長11.1cm、最大幅4.92cm、最大厚2.3cm。

まとめ

西門の構造と規模について　今調査区東辺は削平が著しく西門礎石は失われ基壇土も完全に削平されていた。遺構検出面は基壇上面から60～70cm低い。しかし、礎石据付掘形により梁間2間の八脚門であることを確定した。1956年の調査成果と対比すれば西門脇の間の柱間は約3.5m（高麗尺10尺）とみてよい。基壇は掘込地業を行わず、礎石位置のみ据付掘形を掘る。掘形の底は基壇上面から約80～90cmの深さにあったと推測される。

また、基壇に関しては基壇西縁石と雨落溝側石の抜取痕跡かと思われる遺構（SX923・925）がある。この間を雨落溝と考えると、そこに足場SS920が位置するので、構造的には妥当である。ただ、南門では背面には石組雨落溝が巡るが、前面は雨葛石一段で処理しているから、前面の雨落溝の存在を確定することは今後の調査にゆだねたい。

さらに、西門の足場穴を検出し、軒の出について新しい知見をえた。『飛鳥寺報告』では、西門の平側の軒の出について次のように復原している。「側柱心から雨落溝内側までの寸尺が矩尺の6.5尺、雨落溝巾が2.8尺であるから、矢張軒出は8尺位で、南門と一致することが知られる(40～41頁)」。今回検出した足場SS920と西門西側柱との距離は約2.3m（高麗尺6.5尺）で、この推定を裏付けた。また、妻側の軒の出は、足場SS921を軒先とみると北妻柱筋から約1.45m（高麗尺4尺）となる。『飛鳥寺報告』では、妻柱から基壇の南北縁までの距離を、1.64m（曲尺5.4尺）としているが、これだと螻羽の軒先が基壇の内側に収まる。西門は切妻八脚門なので螻羽の軒先と基壇縁が必ずしも一致しないかもしれないが、軒の長さ復原の一つの根拠とはなろう。両者を一致させた場合、基壇の南北長はこれまでの推定より40cmほど短くなり、13.4mに復原できる。

西門の創建軒瓦は、III～V型式の「星組」であろう。「星組」の瓦は中心伽藍では中門北側の瓦堆積の主体を占めており、西門の造営時期が中門や回廊に近いことを物語る。少量ではあるが垂木先瓦も出土した。これも西門に用いられた可能性がある。鴟尾も破片が数点出土したがこれが西門に使われたかどうかははっきりしない。

西門外側の景観　西門外側で見つかった遺構は2時期に区分される。7世紀初頭頃の掘立柱南北塀SA738と柱列SX938・土管暗渠SX740、そして7世紀後半の石組大溝SD6685・石組小溝SD6684・石列SX735・石敷SX736・737・937・950など、の二つである。

南北塀SA738は西門の棟通りの西10.5m（高麗尺30尺）に位置し柱間約2.6mも7.5高麗尺とみてよかろう。また、南北塀SA738と柱列SX938の間隔は約3.2mで高麗尺9尺である。飛鳥寺の建物配置が高麗尺の地割を基準とすることは既に指摘されている（『飛鳥寺』飛鳥資料館図録第15冊　1986年、41～43頁）。飛鳥寺とその西側の地域の一体性が地割の面からも言及できよう。また土管暗渠SX740に先行する瓦敷SX935は飛鳥寺の「星組」に伴う丸・平瓦で構成されていることもこれを裏付けるだろう。

過去の調査成果を参考にすると、土管暗渠は、南北100m以上続き、南から北に上水を流下した。使用された土管の数は、250本をくだらない。南北塀SA738も少なくとも南北50m以上にわたって続き、飛鳥寺西の一郭の東を限る施設とも考えられるが、西面大垣との間隔があまり広くない点は一つの問題点として残る。

一方、7世紀後半の遺構は、石組大溝SD6685が西門あるいは西面大垣の西9mにあり、SD6685と石組小溝SD6684との距離も同じく9mである。これは、小尺30尺（大尺25尺）にあたり、基準尺がかわった可能性が高い。これらの遺構が造作されたのは、西門が複弁のXIV型式軒丸瓦で屋根修理された時期、飛鳥寺が官寺に準ぜられた天武朝であろう（『年報1995』16・17頁）。遅くともこの時、飛鳥寺西門の外側は石組溝や石敷に覆われた完全に人工的な景観に変貌した。

はじめにも述べたように、飛鳥寺西門の外は、『日本書紀』に何度も登場する「飛鳥寺の西の槻の木の広場」があったところである。中大兄皇子と中臣鎌子との出会いや、壬申の乱そして天武朝以後の饗宴の場として、「槻の木の広場」は飛鳥の一つの中心だった。今回の調査地が「飛鳥寺の西の槻の木の広場」の一部に相当するとの確証は得られなかったものの、飛鳥寺の西方の状況を推測するに足る資料をえた。今後の調査が期待される。

（花谷　浩）

2　飛鳥寺1996-3次調査

はじめに

この調査は高市郡明日香村飛鳥地内について明日香村が行う下水道整備事業に伴う事前調査の第２年次の調査である。今年度はⅠ：飛鳥寺講堂北から講堂東、Ⅱ：講堂西、Ⅲ：西面大垣、Ⅳ：水落遺跡南の４箇所の里道上に設けられた敷設予定区間を対象とした（39頁の調査位置図参照）。

遺構

Ⅰ区　道幅が狭いために全長80ｍの区間内に６個のトレンチを設けた。講堂東辺の４つの調査区（ⅠＡ～Ｃ・Ｆ区）では表土下40cmの古墳時代の遺物を少量含んだ暗褐色粘質土面で、近世～現代の水路護岸やその抜取穴等を確認。飛鳥寺に関わる遺構は検出されなかった。講堂北方では現来迎寺入口の石段下に南北約８ｍ（ⅠＤ区）、県道に面して南北３ｍのトレンチ（ⅠＥ区）を設けた。ⅠＤ区では地表下0.7ｍの茶褐色粘土上面で土坑１基等を検出した。土坑は一辺約１ｍ、深さ約0.4ｍ。瓦、土器の小片が含まれる。ⅠＥ区では地表下1.3ｍの茶褐色粘土上面で土坑１基を検出した。土坑は一辺約１ｍ、深さ約１ｍ。土坑の上面は灰褐色砂土と黄色粘土の互層であり、ある時期の境内地の整地面であろう。

Ⅱ区　講堂の北西から西辺犬走上を通り北回廊に至る約80ｍを対象としたが、講堂西南隅以北は道幅が狭く、今回は講堂西南隅から北回廊北端までの約23ｍについて幅0.8ｍの調査区を設けた。その際、調査区の北端を1957年の第３次調査区と重複させた。これは第３次調査の成果を現行の国土方眼座標及び標高で再計測することによって、今回調査が及ばなかった区間についても下水道管敷設のためのデータを得るとともに、講堂周辺部の復元をより確実にすることを目的としたもので、第３次調査の倒壊した基壇縁石等を再発掘した（図47）。

その結果、調査区の北端付近は南辺犬走と基壇の一部が位置するとみられた。しかし、旧調査区の南端は近世陶器の入った土坑による攪乱が著しく、その下面で柱穴１個を、東壁面で基壇あるいはその南外方の整地の一部と思われる土層を確認した以外は明確な遺構は検出されなかった。柱穴は一辺1.2ｍ、深さ1.4ｍで基壇縁直下にあり埋土に瓦を含まないことから講堂以前の遺構と考え

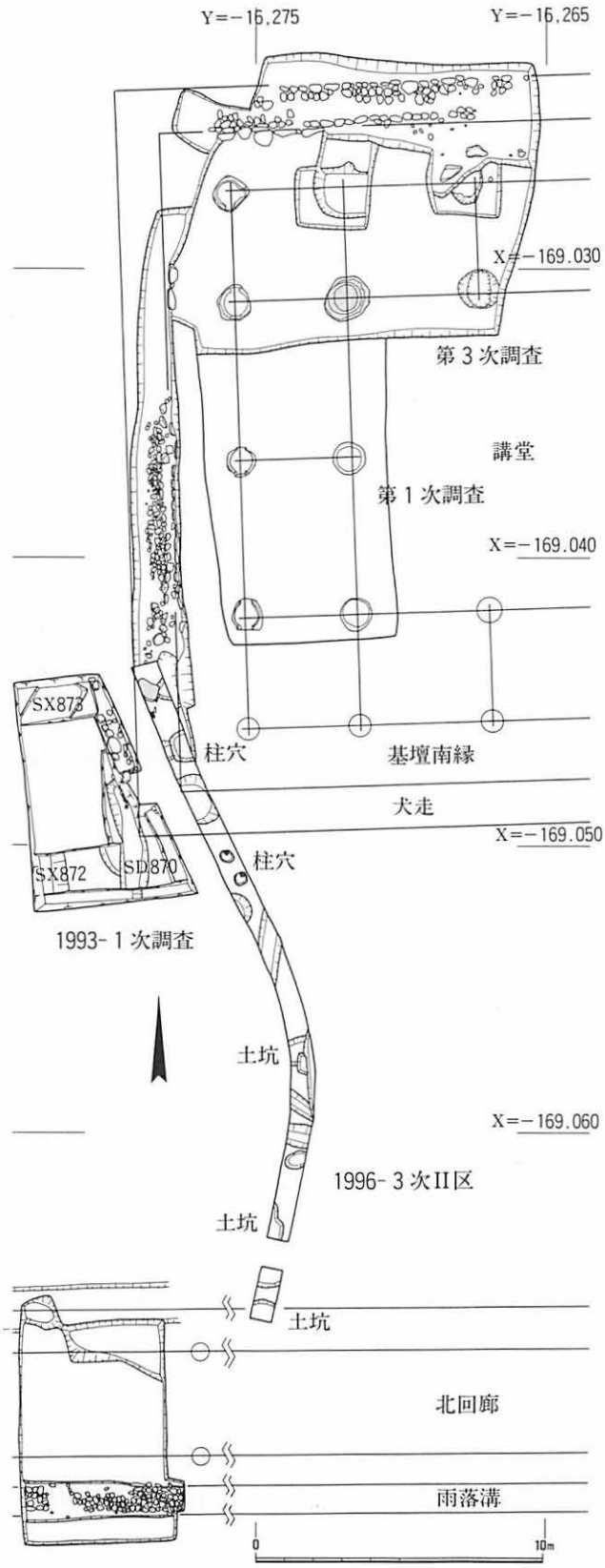


図47　Ⅱ区遺構図　1：250

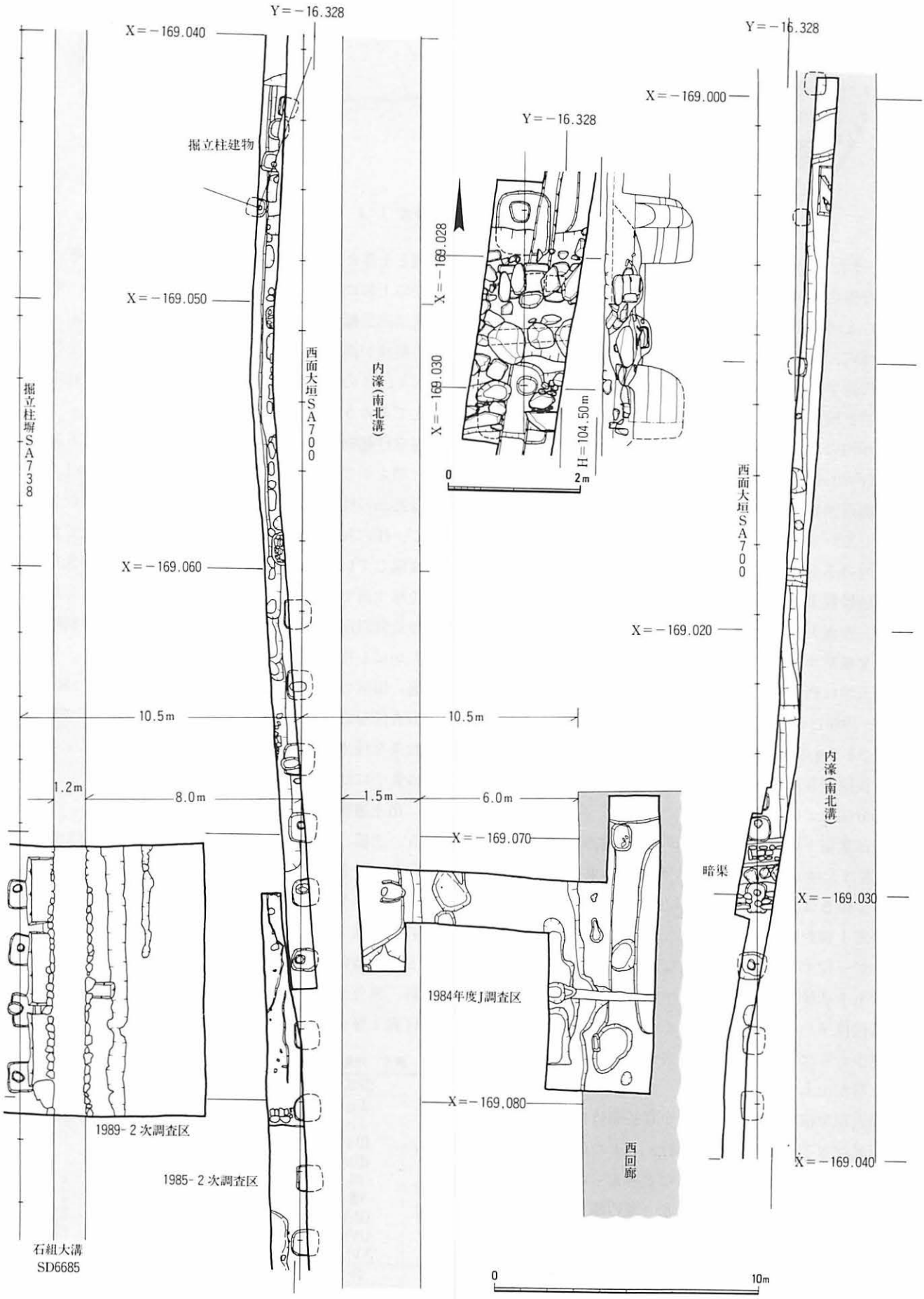


図48　Ⅲ区遺構図（1：200）、暗渠・石組溝平面・断面図　1：80

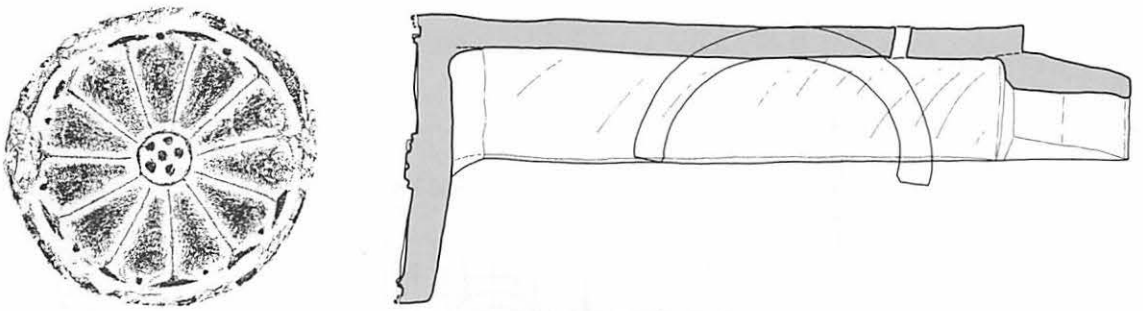


図49　内濠出土軒丸瓦Ⅲb型式　1：4

られる。また、西接する1993-1次調査で東折するかと推定された南北溝SD870の延長部も確認されなかった。講堂南から北回廊までの間も遺構は稀薄で、径0.5mの掘形をもつ柱穴、古墳時代の土器を含む暗褐色粘土の土坑、平安時代前半の土器を含む一辺1.5m以上、深さ0.4mの土坑などを検出したにとどまった。

Ⅲ区　西門の北、西面大垣が想定される村道上に幅0.8m、全長約80mの調査区を設定した。調査区の南では1984年度J地点調査区、1985-2次調査区、1989-2次調査区と隣接している（図48）。

調査地の基本的な層序は上から、現道路、茶灰色土、暗茶褐色砂質土であり、主に地表下0.4mの暗茶褐色砂質土面で、西面大垣、内濠、飛鳥寺以前の掘立柱建物、西面大垣を横断する暗渠（石組溝）等を検出した。

西面大垣は西門との取り付き部から11～16間目の6個と、25～29間目の5個の柱穴を確認した。柱穴は一辺1.2m、深さ1.5mの掘形で、柱は直径20cm。柱間は約2.6m等間に復原できる。大垣は国土方眼方位に対して北で西へ約50分偏している。

内濠は素掘りの南北溝で調査区北半で約30m分を検出した。溝は大垣の方位と一致し、大垣心の東1.5mに西岸をもち、深さは0.7m。今回の検出は西岸に限られたが、1984年度J調査区で東岸を確認した南北溝と堆積土や出土遺物が一致することから、溝幅は約3mに復原される。埋土は上下2層に大別され、茶褐色砂質土の上層からは奈良時代後半から平安時代後半までの土器が、下層の黄灰色粘土からは飛鳥寺創建瓦や奈良時代初頭から中頃までの土器が出土した。

西面大垣を横断する溝は西門から29間目にある。溝は構造が異なる3条が併走し（図48）、ともに内濠の水を大垣の外に排水する機能を果たしたと考えられる。重複関係と底の深さからみて、中央→北→南の順に作り替えられている。中央の暗渠は内幅25cm、深さ10cmの木樋に凸面を上にした平瓦を2枚重ねて蓋をし、その両側と上部を玉石で囲う。暗渠は大垣柱掘形上にあり、天井石上面から木樋底面までは約0.6m。北の暗渠は中央暗渠の北0.8mに平安時代初頭の平瓦の凹面を上にして敷き、その両側と上部を玉石で囲い、天井石の上にも玉石を詰める。暗渠の上部には内濠上層のあふれがのびている。南の石組溝は内法幅0.3m、深さ0.3mで底に玉石を敷く。開渠の可能性が高い。北側石が大垣の柱の上にあって共存は難しく、この石組溝の構築は大垣の廃絶時かそれ以後のことであろう。

掘立柱建物は柱穴3個を検出しただけで棟の方向や規模は明らかでない。柱穴は一辺0.8～1.0m、深さ1.4mで直径25cmの柱痕跡がある。柱間は南が1.8m、北が2m前後で、柱穴列の方位は国土方眼方位に対して北で東へ約30度偏している。柱穴は古墳時代後期の土器を含む暗茶褐色粘土面で検出され、埋土に瓦を含まないことから飛鳥寺造営以前の遺構と考えられるが、厳密な造営時期は明らかにし得なかった。

Ⅳ区　Ⅲ区の西約100mの里道上に南北約50m、幅0.8mの調査区を設けたが、調査区南半の地表下0.5mで東西小溝数条を検出しただけで、その下の深さ0.5m以上の茶褐色砂質土には遺構遺物等はみられない。

出土遺物

瓦、土器、金属製品がある。瓦には表5に示した飛鳥時代から鎌倉時代の軒瓦のほかに、近世近代の軒瓦、垂木先瓦、ヘラ書きのある平瓦、塼と多量の丸平瓦がある。図49は内濠下層出土の飛鳥寺軒丸瓦Ⅲb型式の完好例である。土器には古墳時代から平安時代までの土師器、須恵器、黒色土器、緑釉・灰釉陶器、近世陶磁器があり、Ⅱ区表土層から出土した14～15世紀の外国産三彩Ⅲ片が

表5　飛鳥寺1996-3次調査軒瓦点数表（ ）内は種不明を含む

	型式	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	計
軒丸瓦	Ⅰa	(1)	2 } 2(3)	8 } 9(12)	10 } 11(16)
	Ⅰb			1	1
	Ⅲa		1 } 1(2)	2 } 2(7)	1 } 3(9)
	Ⅲb				2
	Ⅶ			1	1
	Ⅷ	1		1	2
	XIIA			2	2
	XIVa	(1)		1(7)	1(8)
	XVb			1	1
	計	3	5	31	39
軒平瓦	重弧紋(新)		1		1
	Ⅵ	1			1
	鎌倉		1		1
	計	1	2		3

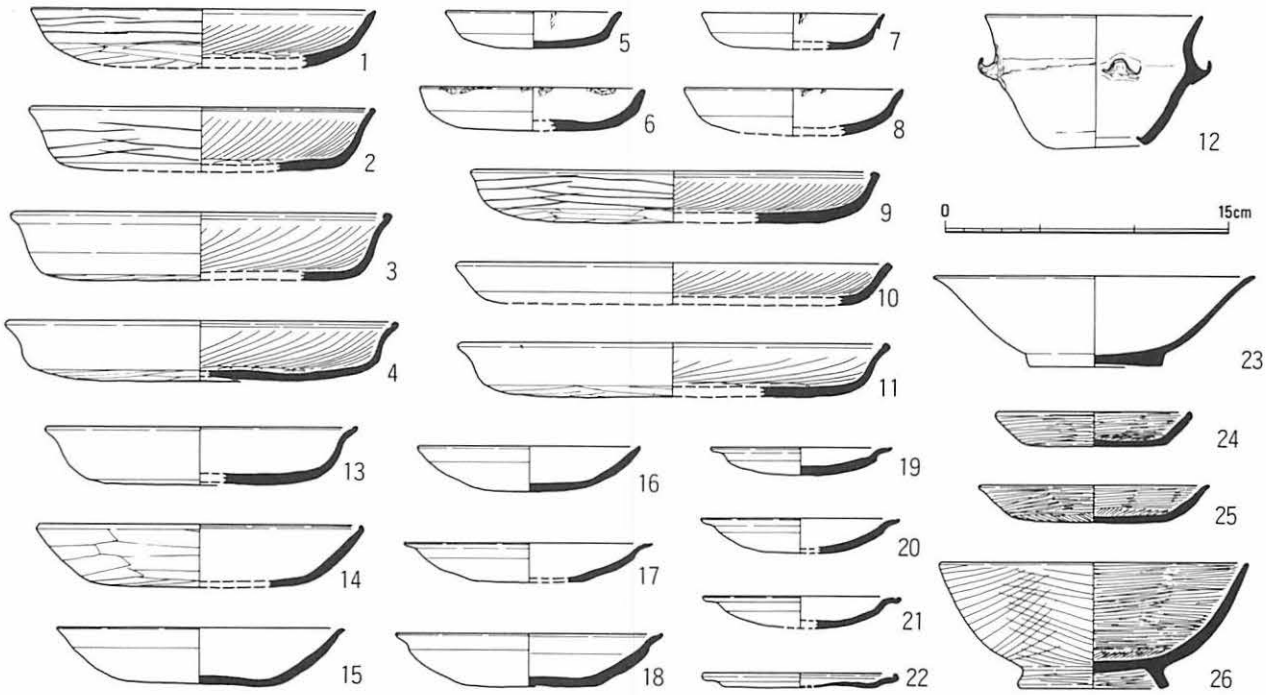


図50　内濠出土土器　1：4　下層：1～12、上層：13～26

珍しい。ここでは、飛鳥寺の変遷過程を理解する上でも重要なIII区の内濠出土土器を図示した(図50)。内濠出土土器は上層と下層とに大別され、いずれも土師器杯、皿が大半でその多くに灯明痕跡がある。下層には7世紀末から奈良時代中頃（平城宮III）までの時期の土師器杯C（1)、杯A（2～4)、皿C（5～8)、皿A（9～11)、甕、ミニチュア甑(12)、須恵器杯B、同蓋、壺などがあり、上層には奈良時代後半（平城宮IV）から平安時代後期までの、土師器杯（13～18)、皿、小皿（19～22)、黒色土器A類椀、同B類椀（26)、同B類小皿（24～25)、緑釉陶器椀（23)、灰釉陶器皿がある。

まとめ

II区では講堂に関わる新たな知見は得られなかったが、第3次調査地の倒壊した基壇縁石を再発掘、再計測し、1993-2次調査時に再測した身舎西北隅の礎石や1993-2次調査の講堂北東部の遺構とともに現行の国土方眼座標上に展開した結果、講堂基壇は『飛鳥寺報告』に示された1度33分44秒よりもやや大きく北で西へ偏していると考えられるに至った。それによれば『飛鳥寺報告』では復原基壇西縁線からはずれていた講堂基壇西縁の立石南半が、北辺と正しく直交するのである。図47ではその結果をもとに、第1次調査時に測図された講堂西庇南半の礎石4個の位置を修整して作図した。講堂が東西8間35.15m（100大尺)、南北4間18.6m（53大尺）の建物で、基壇は東西114大尺、南北65大尺であるのは変わらない。基壇の外には北では幅1.5mの犬走があり、西でも同様とすると里道の西端に位置する。ただ、上記は現状での整合性を求めたものであり、結論は全面的な再調査に委ねるべきである。

内濠は寺域東北隅では大垣の内側約2mに外岸を置いた幅約2mの素掘溝として検出されており、今回のそれと一体の施設と考えられる。しかし、北門の調査では大垣から約6m離れた位置にあり、西門前では確認されていない。また、出土土器によれば西内濠は平安時代まで存続するが、北内濠は奈良時代の土坑で壊されており、廃絶時期も一様ではなかったであろう。

今回検出した大垣を横断する暗渠は大垣を廃したあと、開渠の石組溝としている可能性が高く、近接した内濠に築地崩壊土の堆積がみられなかったことからも西限施設は終始掘立柱塀であったと考えられる。大垣の造営時期については内濠の瓦からは創建時まで遡る可能性があるものの、1984年度K調査区では大垣と併存する石組大溝SD6685の造営が7世紀後半のこととしており、今回も大垣が創建時の造営であることを示す証左は確認されなかった。

（西口壽生）

3　飛鳥寺東南の調査（第84次）

本調査は、奈良県が計画している万葉ミュージアムの建設にともなう事前調査である。調査区の面積は2400㎡で、1月から調査を開始し、97年度も調査を継続中である。そのため、96年度の報告は中間報告にとどめる。

調査地は飛鳥寺の東南方に位置する。飛鳥寺の中心伽藍の様相は1956・57年の調査で明らかになっている。寺域については、1956年と1979年に南限、1977年に北限、1982年に東限の塀を確認している。それらの成果から、本調査区内に寺域の東南隅が位置すると推定されていた。その一方で、調査区の西側には推定寺域の南限をかすめるように丘陵が張り出しており、丘陵と寺域との関係が問題点でもあった。また、1991年には、発掘区南側の飛鳥池の池底から、7世紀後半から8世紀初めにかけての、金属やガラス製品の生産工房跡（飛鳥池遺跡）を発見している。本調査区にも工房に関連する施設が広がっていると推定され、工房の広がりと飛鳥寺との関係も明らかになると考えられた。

調査区の旧地形は西側の丘陵から東に落ちる谷になっており、この谷に整地層が何層も積まれて、遺構面の層位は複雑な様相を示している。遺構検出は主として藤原宮期以降の整地層上でおこなった。

年度内の調査では、飛鳥寺寺域東南部分の区画施設は検出していない。すくなくとも藤原宮期以降は、調査区内に寺域東南隅が位置しないようである。一方、調査区

図51　第84次石敷井戸（西南から）

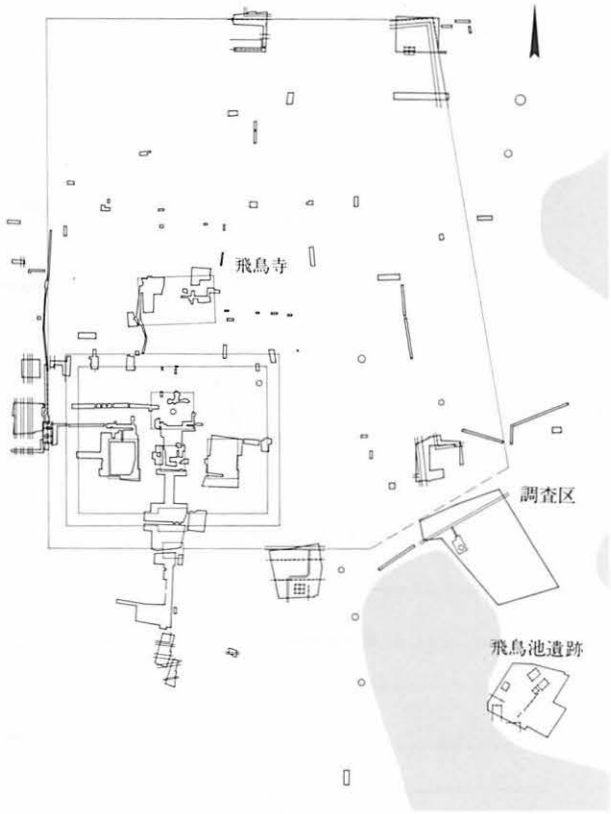


図52　第84次調査位置図

の北端で東西溝（藤原宮期～奈良時代前半）と、その南側で溝に沿った掘立柱塀を検出した。溝の北側でも、礫敷の通路をはさんで、大量の瓦が出土しており、塀の存在が予想される。したがって、溝の北と南それぞれに閉鎖された区画が存在していたと推定できる。溝は飛鳥寺の伽藍の方位よりも東で北に振れ、寺域東南隅を斜めに横切る位置にあり、従来の予想に反して、寺域は東南隅では斜めに切れていたと考えられる（図52）。

東西溝の南側には、ほぼ溝の方位に沿って建物や塀が建つ。調査区の北西にある井戸は、東西6m、南北8.5m、深さ約60～80cmの範囲で掘り下げられ、壁面は石積で化粧され、内部に石敷が施され、石敷面の南寄り中央に井戸本体がある（図51）。石敷の周囲には浅い溝がめぐり、井戸本体から北へ抜ける排水溝と合流して、石組の暗渠につながる。この暗渠が東西溝へ接続する。

東西溝の南側の区画では、建物や井戸の他に、炭化物を含む土坑を検出している。出土遺物にも鋳銅に関係したルツボ、羽口等があり、区画内に展開する施設が飛鳥池遺跡と一体であった可能性を示している。そのいっぽうで、銅箸、灯明皿、漆塗鉄鉢形須恵器や飛鳥寺所用瓦なども出土しており、飛鳥寺との密接な関係も窺わせている。

今後の調査では、寺域東南部の区画施設の検出、東西溝南側の区画内の遺構変遷とその性格、飛鳥寺と飛鳥池遺跡との関係の解明が焦点となる。　（島田敏男／遺構）

◆川原寺の調査
―1995-1・1996-1次、1996-2次

1　川原寺1995-1・1996-1次調査

はじめに

二つの調査は、史跡川原寺跡における、明日香村村営下水道管敷設計画による現状変更に伴う事前調査である。計画対象範囲は、史跡指定地の西半部分にあたり、川原寺に関わる遺構などの存在が予想された。調査は先ず1995年度に推進工法の発進竪坑位置を検討するため、合計８箇所での調査を行った（1995-１次調査）。その結果、１箇所（F-１区）で礎石２個を、また別の１箇所（F-４区）で西渡廊の基壇南縁石を確認し、竪坑位置の再検討が必要とされた。これを受けて翌1996年度には、２箇所（Ⅰ・Ⅱ区）と、推進工法によらない開削工法による下水道本管敷設予定地（Ⅲ～Ⅶ区）の調査を実施した（1996-１次調査）。なお、Ⅰ区については前年度のF-１区の再調査をあわせて実施した。

1995-１次調査（1996年３月）

E-１区　東西１ｍ×南北１ｍ（僧房西北入隅部）

E-２区　東西３ｍ×南北２ｍ（西僧房基壇上）

E-３区　東西１ｍ×南北１ｍ（西僧房西方）

E-４区　東西２ｍ×南北３ｍ（西僧房西方）

F-１区　東西３ｍ×南北５ｍ（西金堂西方）

F-２区　東西３ｍ×南北２ｍ（北面西回廊北側）

F-３区　東西１ｍ×南北１ｍ（西渡廊北側）

F-４区　東西１ｍ×南北１ｍ（西渡廊南辺）

1996-１次調査（1996年７～８月）

Ⅰ区　東西３ｍ×南北3.5ｍ（西金堂西方・F-１区南側）

Ⅰ区追加　東西３ｍ×南北５ｍ（F-１区の補足調査）

Ⅱ区　東西１ｍ×南北１ｍ（西渡廊南側・F-４区南側）

Ⅲ区　幅0.8ｍ×南北18ｍ（14.2ｍ調査）＋東西1.2ｍ×南北2.8ｍ（僧房西北方）

Ⅳ区　幅0.8ｍ×東西43ｍ（20.3ｍ調査）（寺域西北部）

Ⅴ区　幅0.8ｍ×東西37.5ｍ（西渡廊西方）

Ⅵ区　幅0.8～1.2ｍ×東西42ｍ（34ｍ調査）（寺域西南部）

Ⅶ区　幅0.8ｍ×南北67ｍ（59ｍ調査）（寺域西辺）

２年次にわたる調査の総面積は192㎡。1995-１次調査では、F-１・４区以外は川原寺に関連する遺構を検出しなかったので、記述を略す。F-１区とF-４区については、1996-１次調査の成果と合わせ報告する。

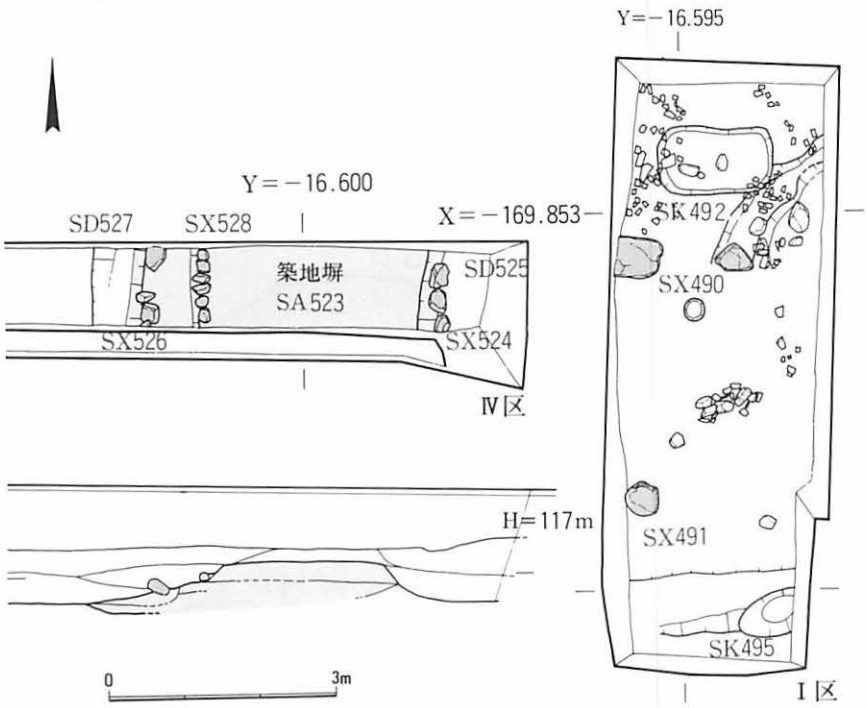


図53　Ⅰ区・Ⅵ区東端遺構図・土層図　1：100

調査の概要と検出した遺構

F-1区・Ⅰ区　２年次にわたる調査で、東西３ｍ、南北8.5ｍを調査した。調査区の層序は、道路基盤層（厚さ60cm）、旧道路盛土（30cm）、黄褐色混り茶褐色

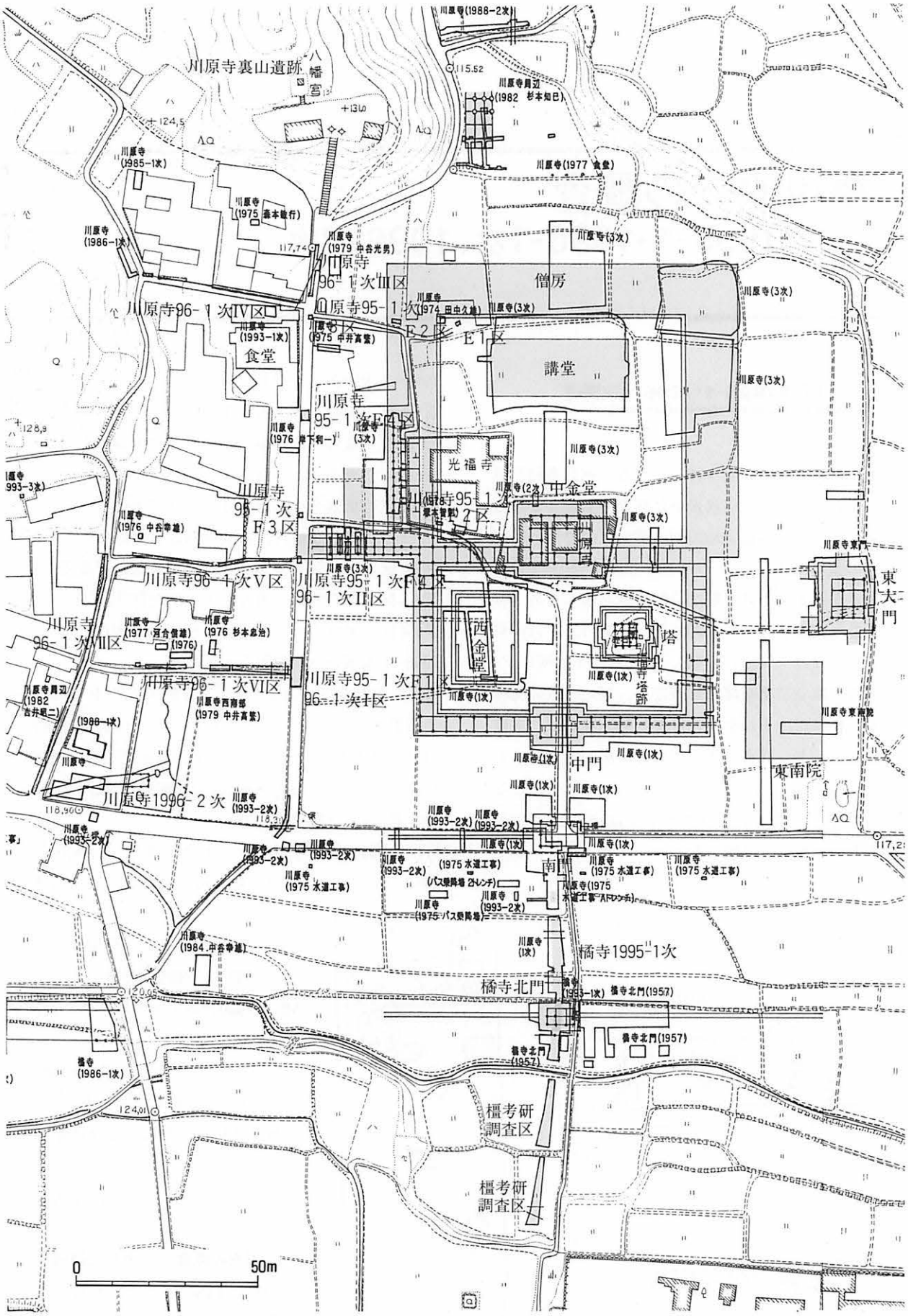


図54　川原寺1995-1・96-1次ほか周辺調査位置図　1：1500

土（15cm）、茶褐色土（20cm）、灰色粘土層（20cm）、黒灰色瓦混り粘土層（25cm）、黒灰色粘土混り青灰色粘土層（15～30cm）、暗灰色粘土層（10cm）、緑灰色砂質土層、である。黒灰色瓦混り粘土層と緑灰色砂質土層の上面で遺構を検出した。

黒灰色瓦混り粘土層上面では、自然石の礎石３個SX490・491を検出した。３個の礎石は逆Ｌ字形に並び、北側２個SX490が約1.4ｍを隔て東西に、１個（SX491）が南に約３ｍ離れて位置する。礎石は、西北隅のものが長径60cm以上と大きく、ほかの２個は直径35～40cmほどと小さい。礎石上面の標高は116.75ｍである。礎石は瓦を多量に含む黒灰色瓦混り粘土層の上に据えられている。この層からは、創建から平安時代後期までの瓦や土師器杯Ac・Ae、皿AIIe、小皿、甕、須恵器杯Ｂ蓋（猿投窯産を含む）・甕、鉢Ａ、黒色土器Ａ・Ｂ類椀・杯Ｂ、瓦器椀などの土器が出土した。土器は、12世紀までの年代を示すので、その上にのる礎石SX490・491は、12世紀以降、鎌倉時代の遺構と推定される。

緑灰色砂質土層は西から東に向かって傾斜し、調査区内で約30cmの比高がある。東端での標高は約116.2ｍである。この層の上面で土坑２基を検出した。

土坑SK495は調査区の東南隅にあり、銅のスラグや銅塊・銅滴・炭を多量に含む不整円形の土坑である。南北60cm、東西70cm以上で深さは約20cm。この土坑の南側には銅滴を大量に含む赤褐色砂層が堆積する。

礎石の北側下層でも、東西1.6ｍ×南北0.9ｍほどの浅い土坑SK492を検出した。埋土からフイゴ羽口や銅滓が出土した。土師器杯Ａ・Ｃ、甕Ｂ、須恵器杯ＡIIIなど飛鳥Ｖの土器が出土した。また、この土坑の下層には東南

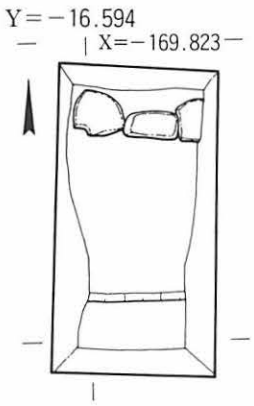


図55　F-4区・Ⅱ区遺構図　1：50（写真は南から）

に向かって傾斜する落ち込みがあり、ここからも多量の炭とともにフイゴ羽口やルツボの破片、銅滓などが出土した。

緑灰色砂質土層からは飛鳥Ｖの土師器、須恵器が、直下の地山上面からは、飛鳥Ⅳの土師器杯Ｂが出土した。

F-4区・Ⅱ区　調査区は、第３次調査（1958～59年、『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第９冊、1960年、以下『川原寺報告』）で検出した西渡廊の基壇上にあたる。層序は、道路基盤層（厚さ75cm）、黄褐色混り茶褐色土（20cm）、茶褐色土（15cm）、灰色粘土（10cm）、炭・焼土混じり黒灰色粘土（25cm）、青灰色砂質土である。

灰色粘土層あるいは炭・焼土混り黒灰色粘土の下面で予想通り西渡廊の基壇南縁の石列と南雨落溝を検出した。基壇縁石は３個を確認したにすぎないが、南側に面を揃える。上面の標高は116.5ｍである。基壇に接して素掘の雨落溝がある。幅約1.1ｍ。溝の中には暗灰色粘土が堆積する。西渡廊の基壇上から雨落溝上面にかけては多量の瓦のほか焼土や炭、炭化材を含む黒灰色粘土層がある。これは西渡廊の焼失時の堆積である。

Ⅲ　区　川原集落の北にある板蓋神社参道の石段下に、南北に設定した調査区である。調査区北半の層序は、道路基盤層（厚さ55～75cm）、旧水田耕土（25cm）、暗青灰色粘土（15～25cm）、茶褐色腐植土（10cm）、暗褐灰色粘砂（15cm）である。調査区北部では、暗褐灰色粘砂層の下に花崗岩岩盤があり、これが南に緩く傾斜する。調査区中央から南では、この岩盤層の上に明黄褐灰色砂質土の整地土層がある。調査区南半は近現代の攪乱が著しく、整地土層上面までは中世以降の堆積層であった。

調査区のほぼ中央で木樋暗渠SX500を検出した。木樋暗渠SX500は、北北東から南南西にまっすぐのび、国土方眼方位に対し、北で25度東にふれる。木樋暗渠は、上面に幅８cm、深さ５cmのＵ字形の溝を彫った角材（一辺15cm）をつないだもの。木樋の上面には行基丸瓦を並べて蓋とし、明黄褐灰色砂質整地土の中に埋め込まれていた。木樋は２本を確認した。北側の木樋は長さ3.3ｍ以上、南側のものは長さ2.2ｍ以上あり、２本とも全長は未確認。木樋上面の標高は116.06～115.98ｍである。

蓋の丸瓦は、木樋暗渠が完全に整地土の中に埋まっていた南側の木樋上に残っていた。６枚が原位置を保ち、さらにその北側で破片１枚が上下反転してのっていた。

丸瓦は狭端を南に向け、北から南に向かって並べられていた。木樋蓋に使われていた行基丸瓦は縄叩き成形である。丸瓦と木樋溝の間には灰色砂とその上に淡褐灰色泥土が堆積し、流水のあったことが知られたが、泥土は丸瓦内側にほとんど隙間なく詰まっており、最終的には詰まって機能しなかったであろう。

検出した2本の木樋のうち、北側の木樋には蓋が残っていない。北側の木樋は南端から約1.5mの西側に、幅25cmと幅40cmの二つの切り欠きを作っている。この切り欠きは木樋上面に彫られた溝の仕事とよく似ているので、当初からの加工であろう。その西方には、灰色砂を埋土とする東西溝SD501がある。SD501の南北両側には、平瓦や重弧紋軒平瓦を並べた護岸施設があり、木樋の西に隣接してこの護岸の底に収まる形で凹面を上にした平瓦が1枚据えてあった。これは、北側の木樋から流下した水をさらに西方に流すための施設と推測できるが、木樋設置当初からあったものではないだろう。東西溝SD501からは10世紀後半の土師器杯Aeや黒色土器が出土した。

Ⅳ　区　Ⅲ区南端から西に延び、川原集落の北部を東西に走る調査区である。地形的には西に向かって急激に高くなる。道路基盤層が軟弱であったことなどから中央部での調査を断念し、東端と西端でのみおこなった。

調査区東端の整地土下層で、Ⅲ区で検出した木樋暗渠の南延長部を確認した。木樋暗渠の構造はⅢ区で検出したものと同じである。木樋上面の標高差や蓋に使われた丸瓦の置き方から判断して、木樋SX500は北から南に水を引く施設と推定する。総延長は14m以上。創建から平安時代までの瓦や土器が出土した。土器は、9～10世紀の土師器杯Ae、C、高杯、鉢、椀C、皿A、須恵器杯B、皿C、甕、壺、黒色土器杯、椀、緑釉椀などや12世紀の瓦器椀など多様。

西端では、地表下0.8m、標高119.5mで地山の花崗岩岩盤風化土が現れる。この地山面は東に傾斜するが、西端から4mほどの所から東5mにかけては、標高118.5～118.6mの高さでほぼ水平になり、その東4mでも、118.4m前後で平坦である。岩盤風化土の上には、厚さ40～25cmの灰褐色土が堆積し、その上に10～20cmの厚さで瓦が堆積する。花崗岩風化土層をほぼ水平に加工していることとその上に多量の瓦が堆積していたことからみて、この一画に瓦葺き建物が存在した可能性は高い。土器は、9～10世紀の土師器杯Ae、羽釜、高杯、東播系須恵器擂鉢や14世紀の瓦器椀が出土した。

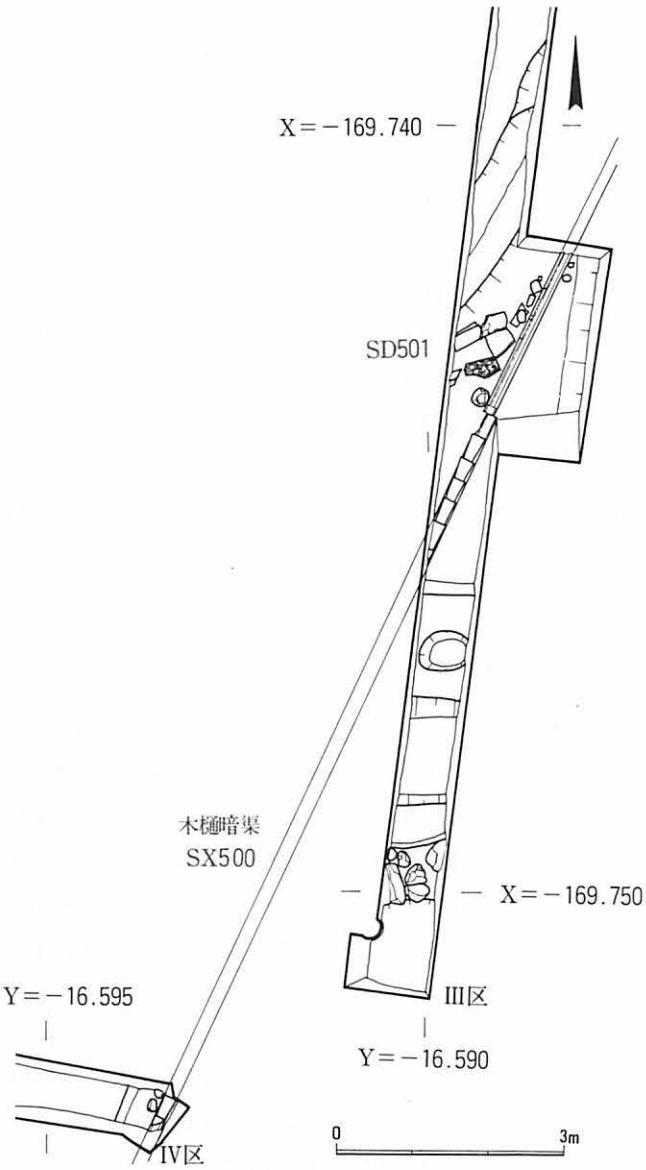


図56　Ⅲ区・Ⅳ区東端遺構図　1：100

Ⅴ　区　Ⅱ区の西側から西約45mに及ぶ調査区。調査区東端から約20mほどの範囲での基本層序は、道路基盤層(厚さ60～80cm)、茶灰褐色土層(15～20cm)、灰褐色土層(10～20cm)、黄褐色砂質土層（整地土・20～40cm)、黒灰色粘土層（20～40cm)、淡緑灰色砂質土層（整地土・30cm)、花崗岩風化土層（地山）である。

調査区東端には灰褐色土層から掘り込まれた上幅で1.5m以上の南北溝SD513がある。1958年から1959年にかけての第3次調査では、西渡廊の西は近世の池によって破壊されていると報告されており、このSD513はこの池に関連する可能性がある。この溝から西には中世以前の包含層や整地土層が残る。

標高117.0～117.2mの黄褐色砂質土層上面で中世以降の耕作溝を検出したほか調査区東端から13.5mの地点で柱穴1個、18mの地点では北東－南西方向の石列を検出した。この整地土層の下にある黒灰色粘土層は、平安時

代までの瓦を大量に含む。西渡廊の西延長あるいはその先にあった別の瓦葺き建物に関連する瓦と推測する。

黒灰色粘土層の下、淡緑灰色砂質土層は上面が地表下1.35～1.5m、標高116.4～116.6mにあり、西に向かって緩やかに高くなる。この層の上面、調査区東端から約9m付近で北に落ちる落ち込みSX515を検出した。30cmほどの段差があり、その底は地表下1.9m、標高116.3mで、花崗岩風化土層（地山層）が露呈する。この地山層は西に緩やかに高くなり、調査区東端から約15m付近で西に深くなる。この落ち込みは溝か土坑と思われるが、その性格を確認するには至らなかった。

Ⅵ　区　Ⅰ区の西に、東西41mにわたって設定した調査区。途中2箇所、長さ約8m分については、現行水路などのために調査できなかった。東半分については、下水管設置位置が変更される可能性もあったため、幅を1.2mに拡げて調査を実施した。

Ⅵ区西端では、道路面下約1m、標高118.1mに花崗岩風化土層があり、この上面で柱穴1個を確認した。柱穴は掘形直径約25cm、深さ20cmあり、径10cmほどの柱痕跡がある。柱痕跡は掘形底よりさらに深く、検出面からの深さは35cm。

調査区西端から約3mの位置は、現地形でも1mほどの東に低くなる段差がある。この段差をはさんで東では、花崗岩風化土層が約80cm低くなる。この上には確認した最も厚い部分で約80cmの整地土層がのっており、その上面で、東に向かって低くなる沼状の落ち込みSX374を検出した。SX374はⅥ区南側で1979年に行った調査で確認しており(『藤原概報10』)、今回検出したのはその北延長にあたる。確認できた限りで東西幅10m以上、最も深い地点で、高低差1.5mある。

沼状の落ち込みSX374の東部は調査不可能であった。西岸から約17m（調査区西端から約21m）東の地点では標高116.5mに花崗岩風化土層がほぼ水平に広がりその上に淡緑灰色粘質土の整地土層が堆積する。ここから東約15mの間は花崗岩風化土層が標高116.5～116.6mを保ちほぼ水平である。この面で直径3～4mの土坑1基を確認した。埋土は白色粘土混り暗灰色粘土である。

調査区の東端では、南北方向の築地塀SA523を確認した。基底幅4m、残存高約35cmあり、築地上面の標高は117.2mである。築地の東西両側には人頭大の玉石列(SX524・526）が並び、その外側に素掘溝（SD525・527）がある。さらに、西側玉石列の70cm内側には10cmほど高い位置にやや小振りの小玉石列SX528がある。積土の状況からして、SX528は築地の改修に伴う仕事であろう。玉石列SX524とF－1区・Ⅰ区で検出したSX490西側礎石との距離は約2.5mである。

Ⅶ　区　史跡指定範囲の西辺をなす道路上に設定した調査区。道路は北から南に傾斜している。調査予定地北端の約5mは東側の擁壁が崩落する恐れがあったため、調査を断念した。

調査区北端から約25m（Ⅵ区を設定した道路との交差点まで）の間は、道路面から40～50cm下で黄褐色粘質土の地山に達する。その上には道路基盤層があるだけで、包含層はなく、現行水道管掘形以外に遺構はなかった。北端での地山面の標高が121.2m、約25m南では119.7mである。調査区ほぼ中央、Ⅵ区を設定した道路との交差点付近にも近・現代の溝があるだけで、中世以前の遺構はなかった。

このあたりで道路の傾斜は緩くなり、ここから南約20mの間の地山面は、標高119.2～119.3mでほぼ水平となる。道路面下約50cmに地山面があり、その上には道路基盤層があるだけで包含層はない。調査区北端から南36mと41m、43mの3箇所で直径40cm、検出面からの深さ20cmほどの柱穴を各々1個検出した。いずれも直径10cmほどの柱痕跡があり、埋土に瓦を含まない。北側の2個の柱穴は埋土が似るので一連の遺構であろう。南北方向の距離は4.5m、東西方向の距離は1.8mである。

調査区南端から約23mの間は、瓦器を含む灰褐色砂質土の包含層がある。地山面および、南端から15mの間は黄褐色粘質土の整地土層上面で鎌倉時代の遺構を多数検出した。主要な遺構は、井戸1基のほか溝や柱穴、土坑である。

調査区南端から21mの地点で検出した井戸SE540は、玉石積の円形井戸で、掘形の直径2.5m、井戸枠の内径約0.9m、検出面からの深さ1.8mある。井戸枠に積まれた玉石は下の4段、約1mが残っていた。井戸掘形と井戸枠内埋土、井戸枠抜取穴から、13～14世紀の瓦器椀や土師器小皿、へそ皿、須恵器と少量の瓦が出土した。

井戸SE540から南は地山面が徐々に低くなり南端から15mの間はその上に黄褐色粘質土の整地土層が残る。遺

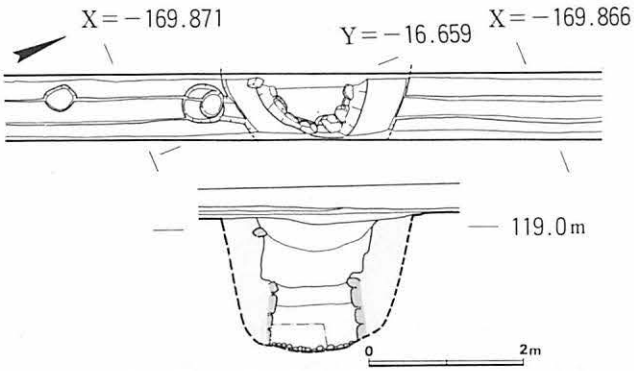


図57　Ⅶ区井戸ＳＥ540平面図・断面図　1：100

構検出面の高さは井戸の周囲で標高119.1ｍあり、南端で117.7ｍまで低くなる。南端では標高117.3ｍに花崗岩風化土層の地山面がある。鎌倉時代の遺構は調査区内に稠密に分布するが柱穴を建物にまとめることはできなかった。

出土遺物

瓦類、土器、土製品、金属器、木器などが出土した。

瓦塼類（図58・59）　丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、塼などがある。軒丸瓦46点、軒平瓦79点の計125点出土した。Ⅰ区からⅤ区、特に、F－1区とⅠ区およびⅤ区東部からの出土が目立つ。Ⅵ区は東端で検出した築地塀付近以外は出土量は少ない。

創建の軒瓦　軒丸瓦601型式は、A・B・C・Eの4種で合わせて計39点が出土した。出土点数は、A6点、B2点、C21点、E8点、種別不明2点。良好資料が出土した、A・C・Eを図示した（図58－1～4）。A（1）は弁の照りむくりが強い。外区に右上がりに傾斜する大ぶりの面違い鋸歯紋をおく。Bは中房と弁区が大きく盛り上がる。外区の面違い鋸歯紋は唯一左上がりに傾斜する。C（3・4）は面径が大きく、弁はやや扁平である。外区の面違い鋸歯紋はA同様右上がりの傾斜だが、Aより細かい。E（2）は外区素紋縁だが、鋸歯紋の痕跡がかすかに認められる。Eのみ中房蓮子が1＋4＋9、他は1＋5＋9である。

601型式については、金子裕之氏が主に瓦当裏面の特徴により、Ⅰ型：瓦当裏面を中凹みにつくる、Ⅱ型：瓦当を厚く裏面を平らにつくる、Ⅲ型：瓦当を薄く裏面を平らにつくる、の3種類に分類した（金子裕之「軒丸瓦の製作技術」『文化財論叢』奈文研　1983年、269～285頁）。今回出土した資料では、A・B・EはⅠ型のみ、CはⅠ型とⅢ型がある。また、Cには瓦当面の内区ほぼ全面に布圧痕をとどめる例（3）と、瓦当裏面の内面接合粘土の下（瓦当成形粘土の上面）に布圧痕を残す例（4）がある。2例ともⅢ型で、中房や弁区に笵傷が著しく、かつ他のⅢ型のCに比較して丸瓦先端に入れられた刻み目が粗い。製作時期が降るのであろう。

軒平瓦は、四重弧紋（651型式）69点（B12点、C9点、D33点、E7点、種別不明8点）と、三重弧紋（652型式）が2点出土した。四重弧紋651型式は、『川原寺報告』で主に顎の長さを基準にA～Eの5種に細分した。今回は、B～Eが出土した。B（図58－5）は顎の長さ7cm前後、凹線がやや太い。側縁を瓦当から狭端方向にヘラケズリするものが大半である。C（6）は顎の長さ8cm前後。凹線がやや太いが、Bよりも凹凸が著しい。凹面や顎・凸面の調整が粗雑であり、焼成も軟質のものが多い。Dは、顎の長さ9～9.5cmとやや長い。凹線の細いのが特徴。Eは、顎の長さ9～10cm。紋様は弧線がやや幅広で扁平。顎の両側面の面取りが広い。C～Eの側縁のヘラケズリは、Bとは逆に狭端から瓦当に向かう。B・Dは瓦当紋様（つまり挽き型の異同）によってさらに細分できる。軒丸瓦601型式との対応関係は今後詳細に検討する必要があるが、少なくとも調整手法が粗雑で焼成の良くない651型式Cは601型式CのⅡ・Ⅲ型に組み合うとみてよいだろう。

奈良時代の軒瓦　奈良時代後半の軒丸瓦623型式（平城宮6143A・平城薬師寺所用）と平城宮6291Abが各1点ある。623型式は平城薬師寺と同笵でそこからの供給品。山田寺にも同笵品がある。軒丸瓦6291Abは初出。平城宮と同笵である。623型式と6291Abはいずれも成形台一本作り技法である。軒丸瓦623型式と組み合う軒平瓦782型式（6703A・薬師寺253）は出土しなかった。

平安時代以降の軒瓦　F－4区・Ⅱ区および・Ⅳ区に集中し、これらの瓦が西渡廊に関連することを示している。軒丸瓦は、711型式が2点、622型式（坂田寺31型式）・712型式が各々1点づつある。

軒平瓦は、751・755・762・783の各型式がある。751型式が5点出土した以外は1点のみ。622型式と組む軒平瓦752型式（坂田寺121型式）は出土しなかった。751型式には凸面に朱線を残す例がある。茅負からの出は7cmと短い。

鎌倉時代以降の軒瓦は、中金堂西側のF－2区から出土した巴紋軒丸瓦1点とE－4区の鬼瓦片のみ。『川原寺報告』ではこの時期の瓦類が中金堂・塔・中門・南大門・西回廊上層・北僧坊北側の瓦溜など限られた地点のみから出土する、と報告されており、今調査でもそれを追認した。

丸瓦と平瓦　丸瓦と平瓦は、創建から平安時代後期に至る各種が出土した。丸瓦が6,031点1,322kg、平瓦は22,355

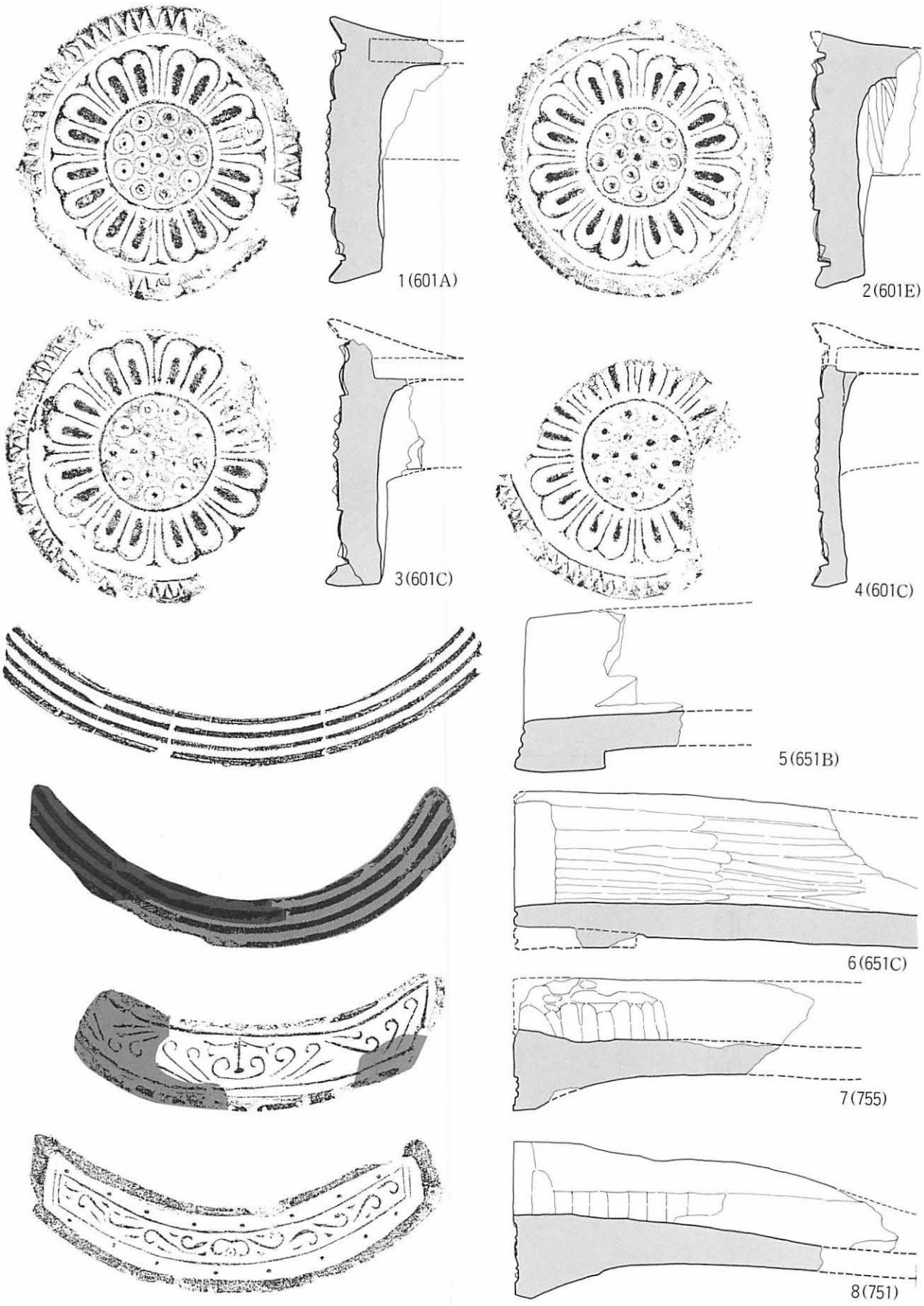


図58　川原寺1995-1・1996-1次調査出土軒瓦　1：4

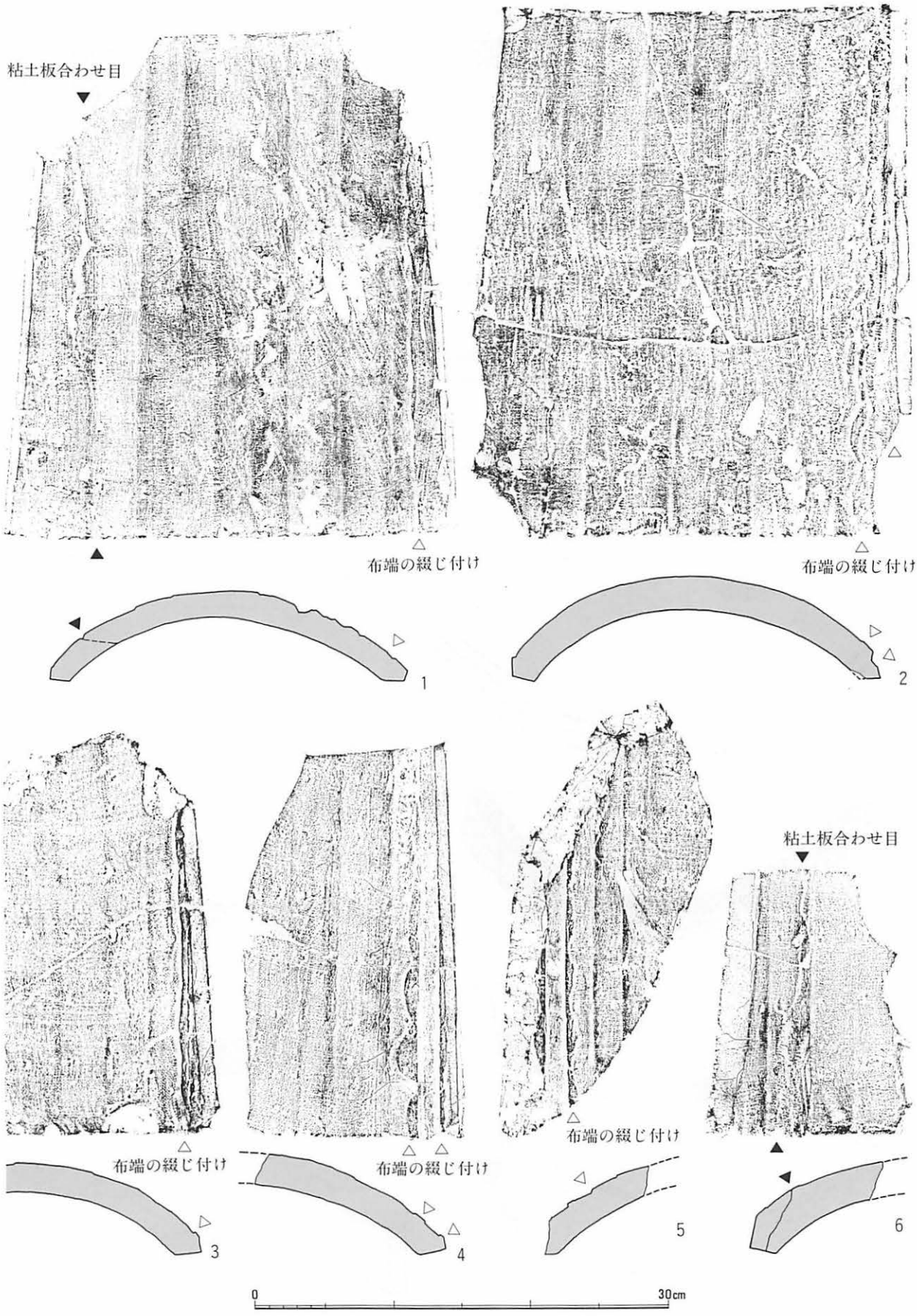


図59　川原寺1995-1・1996-1次調査出土凸面布目平瓦　1：4

点3,834kgある。

創建の丸瓦は玉縁丸瓦、平瓦はタテ縄叩きをすり消した桶巻き作り平瓦と凸面布目平瓦である。玉縁丸瓦は、玉縁内面にも布圧痕があり、段部内面に明瞭な段差をもつ(B手法：大脇潔「丸瓦の製作技術」『研究論集IX』1991年、1～56頁)。布を模骨にしばり付けた細い紐の痕跡を段部に残す例が多い。凸面布目平瓦には、桶の合わせ目を観察できる例がある。4は、桶に綴じ付けた布の両端縁を桶の側板にかがった状況が明瞭に見て取れる。布の両端縁の間には、布が及ばない側板一枚分の圧痕がある。また、ほぼ完形の2は、凸面の左側縁に平行して粘土板合わせ目Zがあり、右側縁には桶の合わせ目がある。創建時の平瓦にはこのほかに、ヨコ縄叩き桶巻き作り平瓦と斜格子叩きの桶巻き作り平瓦がある。『川原寺報告』では、前者を平安時代後期の瓦としたが、粘土板合わせ目があることや側縁の加工手法からみて創建時に遡る。

奈良時代以降の丸・平瓦は、タテ縄叩きの玉縁丸瓦と行基丸瓦、タテ縄叩きの一枚作り平瓦である。III・IV区の木樋暗渠SX500に蓋として行基丸瓦が使用されていた。平安時代後期の玉縁丸瓦では、模骨にかぶせる布を玉縁部と筒部で別布とし、段部のところで縫い合わせた例が目につく。これは模骨が鉛筆形になったための工夫であろう。また、人物らしき顔を表現した戯画瓦がある。

その他　塼は、上面に波形を削りだした大型矩形塼と薄い小型矩形塼がある。大型矩形塼は中央に釘穴をあける。小型矩形塼はV区から集中して出土した。西渡廊がとりつく建物に関連するのであろう。このほか、塑像の螺髪断片が1点出土した。

土　器　土器は、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器のほか、若干の陶器（緑釉・褐釉・灰釉)、磁器（白磁・青磁・染付)、製塩土器がある。

土器は、7世紀代から16世紀に至るまでの各時代のものがある。7世紀代の土器は、I区の土坑SK492や、整地土（緑灰色砂質土）から飛鳥Vの土師器・須恵器が出土し、整地土直下の地山面から飛鳥IVの土師器杯BIが出土した。これらは、川原寺造営時期に関連する。また、IV区東端からは、漆記号をもった飛鳥Iの須恵器杯H、V区中ほどの整地土層やVI区の沼状落ち込みSX374からも、飛鳥Iの須恵器杯Hや、瑁が出土した。そのほか、調査区各所で飛鳥Iの土器が少量づつ出土している。川原寺造営以前の遺構に関わる遺物として注目される。

出土量が多かったのは、平安時代9・10世紀代の土師器、須恵器、黒色土器である。F-1区、I区、III区、IV区、V区などから出土し、特にIII区からIV区東端にかけては出土時の器種が豊富である。食堂の所在と関連する可能性が考えられる。

12世紀から14世紀の土器が目立つのは、VII区南部。近接する1996-2次調査区で検出した井戸や環濠と関連するのだろう。

金属器など　金属器には、鉄釘、不明銅製品断片などのほか、銅滴や銅スラグ、フイゴ羽口とルツボなど鋳銅関係の遺物がI区から出土したことが注目される。

まとめ

ほとんどが幅0.8mの限られた調査区であったが、これまで調査の進んでいなかった川原寺跡の西側部分についていくつかの新たな知見をうることができた。

①1995-1次F-1区と1996-1次I区で合計3個の礎石を検出した。礎石の東西距離は1.5m、南北距離は3mである。建物の構造について当初は門と推定したが、桁行3mで梁間1.5mの南北棟建物に復元できる可能性もある。建物の時期は下層の整地層の年代から鎌倉時代であろう。

F-1区・I区の位置は、西渡廊の南方にあたる。1958・59年の第3次調査では、西渡廊の基壇南辺には平瓦を長く並べた暗渠がみつかっており、これを越えた南に建物の存在が推測されている。今回検出した礎石は創建当初ないし奈良時代に遡るものではないが、その暗渠の南南西にあることは注意してよい。

『川原寺報告』では西渡廊南に推定される建物を「西南院」との関連でとらえようとした。西南院は『太子伝玉林抄』巻21に「或記云。定恵和尚吾朝御住時、橘寺北河原寺之内西南院御住、東南院弘法大師御住也、今西南院之無、東南院之在。」とある。1973年の調査で東回廊の南東に東南院と推定される基壇建物を発見している(『藤原概報4』)から、これとほぼ対称の位置が西南院の所在地と想定される。I区の位置はまさにその位置である。

②VI区東端で検出した南北方向の築地塀も、西南院に関連する可能性がある。この塀は、北のV区までは延びないから、西渡廊の南の一画を囲う施設であったと思われる。これが西面するかあるいは東面するかは、今にわ

かには決めがたいが、基壇縁の改修痕跡が西側にあることはそれが外側に向いていたためと考えられること、またこれを東面する塀とすると、I区の礎石との距離が2.5mしかないのが説明できないこと、さらには、築地塀の東での瓦出土量が圧倒的に多いことなどから、これを西面する塀と考えた方がよいだろう。とすれば、VI区東端の南北築地塀は東側にある一画を囲む施設、西南院の西築地塀に擬することも無稽ではない。

③西渡廊に関わる遺構として、基壇南縁石と南雨落ち溝を検出した（F-4区・II区）。基壇と溝の上には焼土と炭を含んだ厚い瓦堆積があり、渡廊の焼失を物語っていた。この堆積はさらに西に続き（V区）、渡廊が既発掘部分からさらに西にのびることを示唆した。V区東端から約15mにある落ち込みは、西渡廊の一応の西限とみられる。『川原寺報告』では、西渡廊の先に建物の存在を推測している（同書29・55頁）が、今回の調査では建物の痕跡を確認できなかった。少なくとも、調査区を横断するような建物の跡はない。ただ、小型矩形塼がまとまって出土したことは建物の存在を示唆する。

④III区およびIV区東端では、西僧坊の西方で整地土層に埋め込まれた木樋暗渠を検出した。構造と傾斜から考えると、北から南に水を流した上水道と推定される。調査地点の南約20mの地点からは巨大な礎石が出土しており、食堂と推定されている（『川原寺報告』34頁註27およびPLAN1）。木樋暗渠は食堂あるいはそれに付属する厨などに水を供給する施設であろう。

⑤寺域西北部にあたるIV区西部では、平坦に加工された整地土面と多量の瓦を検出した。この一郭にも瓦葺き建物が存在した可能性が高い。

⑥川原寺寺域の西限に関しては、明確な遺構は確認できなかった。しかし、IV区西端では花崗岩風化土の地山が急斜面になっている。この北西で1988年と1989年に実施した発掘調査では川原寺に関わる遺構は見つかっていない。これを寺域の西限とみると、伽藍中軸線からの距離は約109mとなる。V区では、IV区西端の南延長線を越えて西に整地土層が広がる。VII区北半では花崗岩風化土の地山面を確認したにすぎず、調査区の東側に接した崖を寺域西限に関連する造成の跡とみれば、寺域の西辺は南で西に開く形となる。ただ、その場合でも南延長部を調査した1988-1次調査では関係する遺構を確認していないので、確証にかける。

⑦I区では、下層で銅の鋳造に関わる遺物がまとまって出土した。中に、風鐸の断片と思われる銅製品があり、平安時代以前おそらく創建時に、近辺に鋳銅工房があったことが予想される。

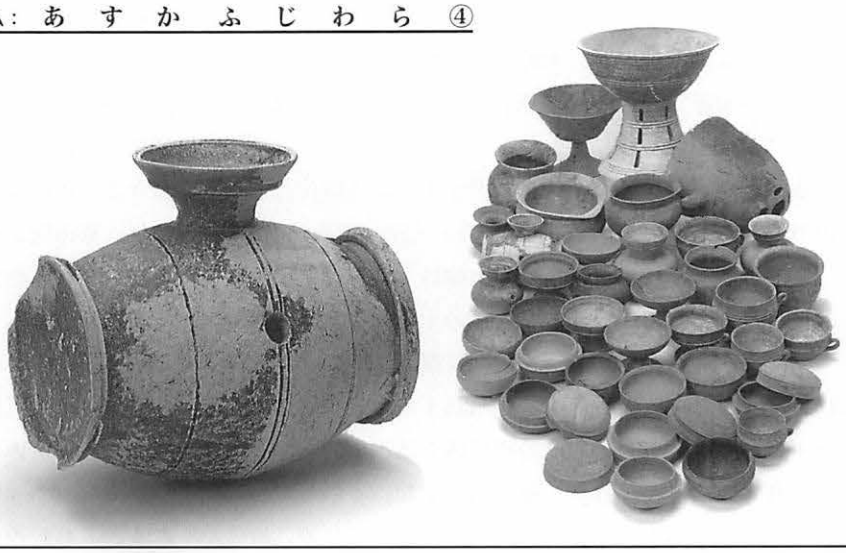
以上、調査の概要と調査成果に基づく推測を述べた。調査区が幅狭かったのと、生活道路を確保しながらの調査であったため、万全とはいいがたい面もある。特に、調査に危険が伴って中止せざるをえなかったIV区中央部と、現行水路があって未調査のVI区中央部については、工事施工に際して十分な安全対策を施した上で再度調査する必要がある。

（花谷　浩）

コラム：あ　す　か　ふ　じ　わ　ら　④

◆古墳時代の土器大集合！

藤原宮跡の下層には弥生、古墳時代の遺跡が広がっており、四分遺跡と呼んでいる。これまで水田跡や環濠跡、井戸跡などが見つかっている。写真は、藤原宮内の西南隅にちかい第82次調査区において、四分遺跡の古墳時代斜行溝SD3100から出土した土器の一部。古式の須恵器や、土師器にまじって、韓式土器もめだつ。写真左は須恵器の樽形瓶で、高さ15.4cm（図8・9、8・9頁参照）。（C）



2　寺域西南部の調査（1996-2次）

はじめに

本調査は、史跡現状変更（店舗改築）申請に伴って実施したものである。調査地は川原寺の寺域西南部にあたり、東に接する水田（現駐車場）は、かつて1979年に発掘調査がおこなわれ、７世紀代の斜行溝と掘立柱建物・土坑や、中世の掘立柱建物や石組井戸などが確認されている。調査にあたっては、当初敷地の中央に発掘区を設けたが、斜行溝などを検出したことにより南西に拡張し、最終的に60㎡を調査した。調査地の基本的な土層は、宅地整地土、暗灰色土、黄褐色土、黄色地山土の順であるが、発掘区西北隅では黄色土がなく、暗灰色土の直下が黄色地山土となる。瓦器を伴う時期の遺構は黄褐色土上面で検出できたが、７世紀代の遺構は黄褐色土を除去して初めて確認することができた。

遺　構

調査によって検出した遺構には、掘立柱建物、掘立柱塀、斜行溝、井戸、土坑などがあり、これらは川原寺創建前後の７世紀代の遺構と、瓦器を伴う12世紀代の遺構とに大別できる。

７世紀代の主たる遺構には、斜行溝１、掘立柱建物２があり、掘立柱建物は、斜行溝を埋めた後に建てられている。

斜行溝SD367は、発掘区のほぼ中央を東北東から西南西に走る幅1.7m～3.0m、深さ0.9m～1.4mの断面U字形を呈する大型の素掘溝である。その東延長部は、1979年度の調査で確認されている。溝の埋土は大きく３層に分かれ、上・中層には溝を埋め立てた褐色系の土が堆積するが、下層には粘土と砂が交互に堆積しており、水が流れた様子がうかがえる。下層には７世紀前半の遺物が含まれ、上・中層からは馬の下顎骨や７世紀前半の土器などと共に７世紀中頃の遺物が出土した。

掘立柱建物SB370は、発掘区東端で、西妻柱列の柱穴２個を検出した。これは1979年の調査で梁間２間、桁行３間以上とされた東西棟建物（SB03）の西延長部とみられ、今回の調査で、西妻柱列を確認したことになる。その結果、建物SB370は梁間２間、桁行６間で、柱間は梁間1.8m、桁行2.1m等間であったことが確定した。なお、発掘区の西北隅でも柱穴２個を検出した。いずれの柱穴も調査区の壁や後世の溝に重複しており、詳細は不明だが、柱間は2.1mに復原できる。掘立柱塀の可能性もあるが、建物SB370の北側柱列と柱筋や柱間寸法が揃うところから、これを南側柱とする東西棟の掘立柱建物SB551

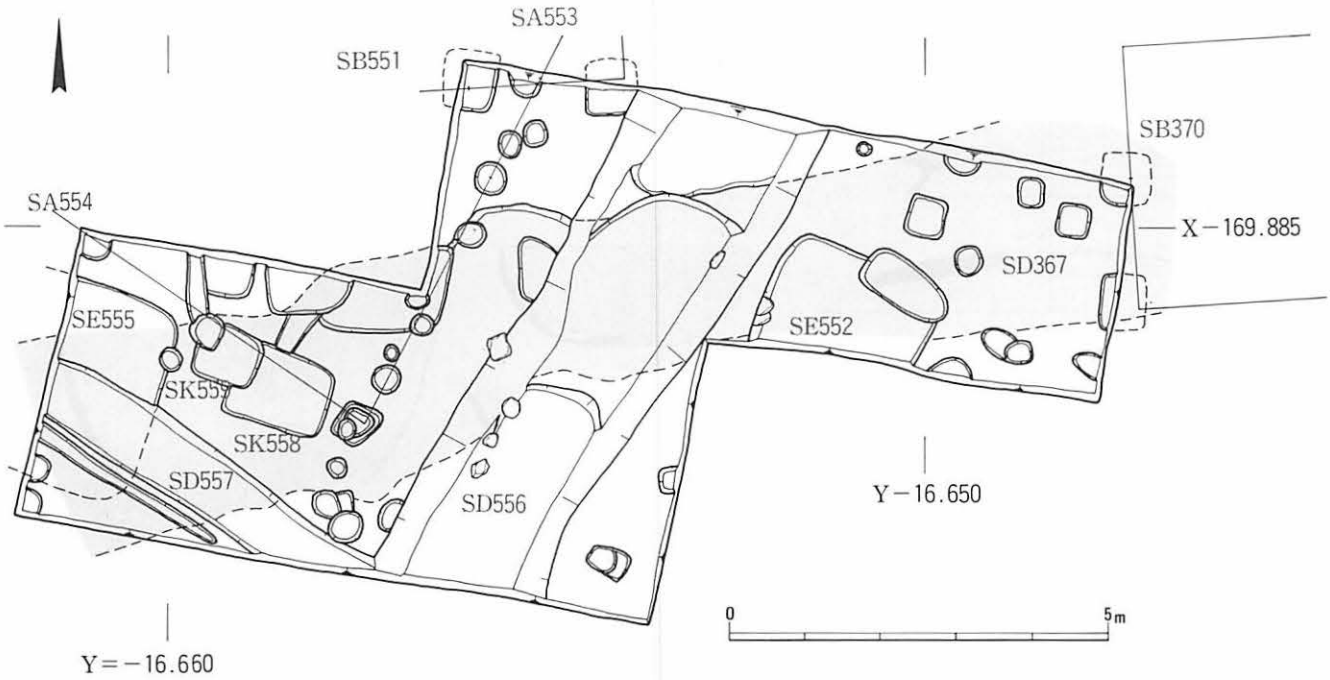


図60　川原寺1996-２次調査遺構図　1：100

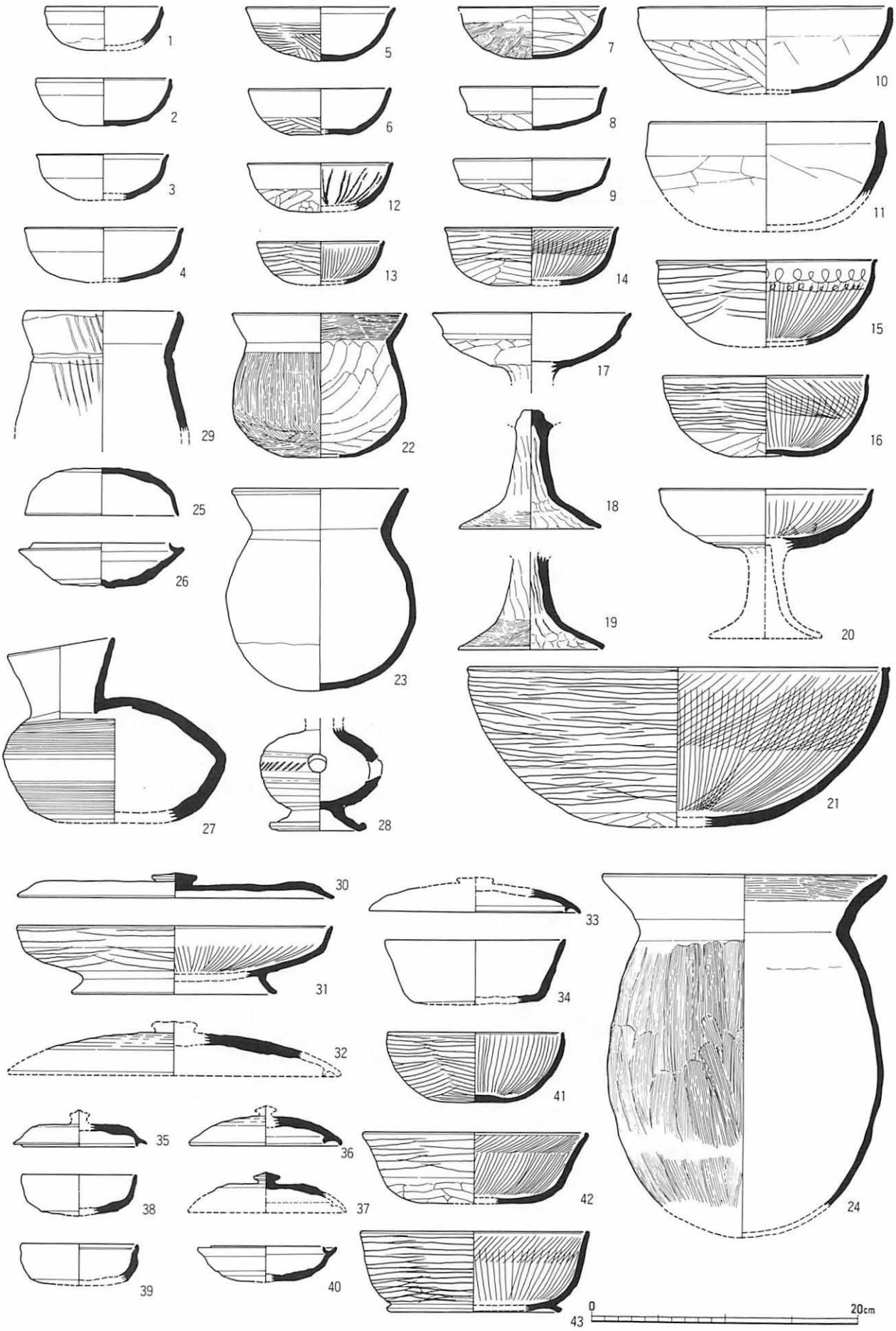


図61　斜行溝SD367出土土器（その1）

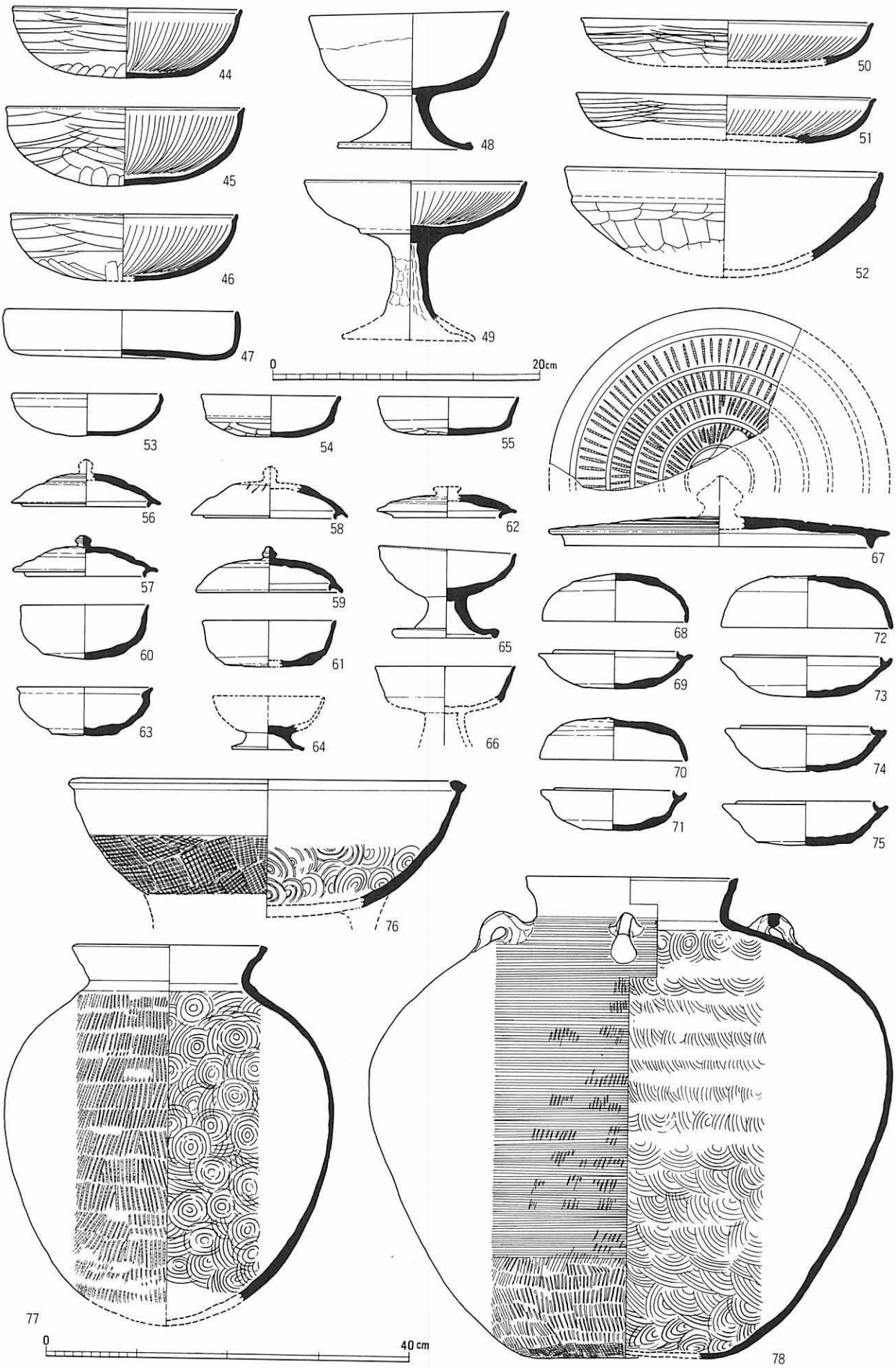


図62　斜行溝SD367出土土器（その2）

を想定しておきたい。

12世紀代の主たる遺構には、環濠1、溝1、掘立柱塀2、井戸2、土坑2がある。これらは前述したように、調査区西北隅にある一部の遺構を除いて7世紀代の遺構を覆う黄褐色土層の上面から掘込まれており、両時期の遺構の峻別は比較的明確である。なお、12世紀代の遺構相互にも重複がみられ、2時期に分けることができる。

まず先行する時期の遺構には、環濠SD556、井戸SE552・555、土坑SK558・559がある。環濠SD556は、調査区中央部を東北から西南に走る上幅2.0m～2.5m、下幅約1.5m、深さ0.6m前後の逆台形の断面を持つ素掘溝である。堆積土中には瓦器類が含まれていたが、古代の斜行溝SD367と重なる周辺には、7世紀代の土器も混入していた。集落をめぐる環濠の可能性が高い。

井戸SE552は、環濠SD556の東に接して掘られた方形の井戸。東西2.1m、南北1.5m以上の掘形を持つが、井戸底までは未調査で、深さや井戸枠の構造などは不明である。井戸SE555は、環濠SD556の西方で確認した横板組の井戸である。南北2.5m、東西1.6m以上の掘形を持ち、井戸枠の一部は抜き取られていた。井戸底までは未調査である。土坑SK558・559は、環濠SD556と井戸SE555の間に掘られた一辺1m前後、深さ約0.2mの方形の土坑。SK558を壊してSK559が掘られているが、出土土器や埋土の状況から両者さほどの時間差はないようである。

次いで新しい時期の遺構は溝SD557、掘立柱塀SA553・554で、この時期にも環濠SD556は存続する。発掘区西半を西北から東南に走る溝SD557は幅約1m、深さ0.3mの素掘溝で、東端は環濠SD556に直角に連接する。深さは異なるが、この2つの溝は同時に存在したものであろう。

塀SA553は環濠SD556の西肩に平行して建てられた掘立柱塀で、3間分を検出した。柱間は南から1.8m・1.5m・2.1mと不揃いで、塀はなお北へ伸びる。塀SA554は溝SD557の北肩に平行して建てられた掘立柱塀で、2間分を確認した。柱間は2.1m等間で、塀はなお西へ伸びる。この2本の塀は、東南隅の柱穴を共有する点から同時に存在したことは明らかであり、また、溝SD556・557の肩からそれぞれ1m離れたところに建てられていることから、これらの溝とも密接な関係をもっていたことがわかる。

遺　物

12世紀代の環濠の土器・陶器と7世紀代の溝SD367等の土器、瓦類が主なものである。ここでは、飛鳥Ⅰの基準資料である1979年度調査の仮称「斜行溝SD02」の延長部にあたるSD367出土遺物をとりあげる（図61・62）。

SD367出土遺物　溝の層序は流水時の下層とその埋立土の中・上層にわかれる。下層の遺物は、発掘が限定されたため少量で、大半は、上・中層の資料である。

瓦塼類　上・中層に川原寺創建の軒丸瓦601型式5点、四重弧紋軒平瓦2点、同心円紋叩き塼1点と創建時の丸・平瓦があり、下層には同心円紋叩き塼1点がある以外瓦類はない。上層の瓦には側面を打ち欠いたものがあり、屋根に葺かれたものが含まれる。中層には少量の創建瓦のほかに飛鳥時代の丸・平瓦がある。

土器類　土師器、須恵器と少量の製塩土器、漆壺、トリベと垂球状土製品片がある。下層がより純粋で、上・中層に新しいものが混じる傾向は、瓦類と一致する。

下層には土師器杯G（1～7、10）、杯H（8・9・11）、杯C（12～16）、高杯H（17）、高杯C（18～20）、鉢（21）、甕（22～24）、須恵器杯G、杯H（25・26）、平瓶（27）、瓶（28）、高杯、提瓶、甕、製塩土器（29）がある。土師器杯Gに口縁端部が内傾する（1・2）、外反する（3・4）のほか外面をヘラケズリのあと磨く（5・6）、ハケメ調整の（7）など多様なものがあり、杯H類とともに杯類の大半を占める。杯CⅠ（15・16）は径高指数39の2段暗文、CⅡ（14）は指数34の2段暗文で5分割削り、CⅢ（13）は指数34で1段暗文である。CⅢ（12）は甘橿丘東麓の焼土層出土土器に特徴的な杯Cと類似する。須恵器杯Hは蓋の口径11.3～12.4cm、身の口径10.3cmで、底部はヘラ切りのままである。これらの特徴は飛鳥Ⅰの「斜行溝SD02」と一致している。

中層には土師器杯C（44～46）、杯X（47）、杯G（53）、杯H（54・55）、皿A（50・51）、鉢H（52）、高杯C（49）、竈、ロクロ土師器脚付き椀（48）、須恵器杯G（56～61）、杯H（68～75）、壺蓋（62）、蓋（67）、高杯（64～66）、器台（76）、甕（77・78）などがある。土師器杯CⅠ、須恵器杯類の特徴は飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層の土器群と類似する。

上層（30～43）には土師器杯A（42）、杯B（43）、杯C（41）、蓋（30）、皿A、皿B（31）、須恵器杯A（34）、

蓋（32・33）など飛鳥Ⅳに属するものが混じり、小型化した須恵器杯G（35・38・39）、杯H（40）は飛鳥Ⅱに属する。

まとめ

今回の調査では、1979年度に確認した7世紀代の斜行溝 SD367の西延長部を検出するとともに、その溝を埋めてから建てられた掘立柱建物 SB370の西妻柱列を検出した。斜行溝の堆積土中には、7世紀前半から中頃にかけての土器が多数包含されており、上述したように飛鳥時代の土器編年に手がかりをあたえる一括資料として注目できる。また掘立柱建物は、川原寺創建にかかわる遺構とみられ、中心伽藍の西方にも寺院の活動を支える施設が置かれていたことがうかがわれる。

調査ではさらに、12世紀代の集落を囲う環濠の跡を検出した。確認したのは延長わずか8mほどであるが、2m強の溝幅や逆台形をなす断面の形状などから、これが「環濠集落」にともなう環濠であることはほぼ誤りない。同様な環濠の例は、藤原宮の西方官衙北地区でも発掘されている（藤原宮第27-6、63-2、66-2～4、71-15、75-12次調査『藤原概報10・21・22・24・25』）。そこでは幅約2～4mの濠が、南北約65mの範囲を方形に囲んでいる状況が復原されており、その規模から「環濠集落」よりはむしろ「土豪の居館」であろうと考えられている。しかし、濠は部分的に二重になったり、今回の調査のようにT字形に組み合わさったりして、なお北の方へ続き、最終的に環濠がめぐる範囲は、さらにひろがるようである。問題は、環濠で囲まれた内部にどのような遺構が存在したかであるが、部分的な調査地の制約を受け、建物跡などはまだ見つかっていない。その解明は今後の課題といえる。それでも、これらの遺構が、12世紀後半に始まり14世紀まで存続したことが、出土土器や井戸枠に残された紀年銘から知られている。

川原寺周辺で、これまで「環濠集落」の存在が注意されたことはなかった。現在の集落のあり方などからすると、環濠で囲われるべき範囲は、今回検出した濠の西北方であろう。それは、濠に沿う塀が囲う方向もまた西北を示しており、この部分が、川原集落の東西の分水嶺（？）となる尾根筋にあたっていることもその想定の正しさを示している。残念ながら、環濠に囲まれた集落の大きさや構造、とくに内部でどのような生活が営まれていたのかなどを知る手がかりは、今のところない。現集落と重複する可能性が高く、調査の進め方に困難を伴うが、中世の川原寺との関連を考える上でも環濠集落の調査は重要と思われる。発掘の進展が期待されるところである。

（黒崎　直　土器：西口）

コラム：あすかふじわら⑤

◆短命だった両槻宮

1992年、飛鳥・酒船石遺跡のある丘陵が、石垣で化粧していることがわかった。それは、花崗岩の地覆石上に、天理から運んだ塼状の砂岩を積み上げ、高いところで4段(0.7m)残していた。

その様子は、斉明2年（656）、後飛鳥岡本宮からみた両槻宮造営の記事を彷彿させた。そこでは、積石の内側の丘陵を版築で補強していた。そして斜めに亀裂が走り、地震によって、版築層がずれていた。

酒船石は、両槻宮の天宮にかかわる重要施設らしいことがわかった。あの酒船石は水占いでもする施設だろうか。

その後の調査で、後飛鳥岡本宮側の斜面には、石列を3段にめぐらせていた。

1997年度、万葉ミュージアム建設予定地の調査で、藤原宮期につくった石敷井戸に酒船石遺跡の砂岩切石を転用していた。

さらに、明日香村調査による酒船石丘陵西下の調査でも、飛鳥浄御原宮の時期の大型建物があり、周囲の舗装、方形区画などに同様の砂岩切石を転用していた。切石は、寸法にバラエティがあり、加工痕跡から、酒船石丘陵の壁面につかっていたものである。

つまり、天武朝には、両槻宮の石積化粧を剝がして、他の施設に転用してよい状況であった。地震は、天武13年（685）の崩壊痕跡と理解されているので、その結果、廃棄を促進したのであろう。その節目は、近江大津宮への遷都、壬申の乱も影響した。こうしたことを考慮すれば、斉明2年に造営した両槻宮は、斉明朝だけの短命だった可能性があろう。

だが、持統10年（696）、二槻宮行幸の記録をどう理解するかにあるが、これは酒船石丘陵西で判明した南北大型建物に関するものであろう。そこでは、もはや、道教にもとづく宮殿としての機能はなかったと思う。

（猪熊兼勝）

◆橘寺の調査—1995-1次

1 はじめに

この調査は、明日香村川原の特別史跡川原寺跡南門前の県道から現橘寺西門へ至る村道の拡幅計画に伴う調査である（図54参照）。調査は、水田毎に1から6に区分し、1～4区を当研究所が担当し、南の5・6区を橿原考古学研究所が担当した(「明日香村史跡橘寺旧境内発掘調査概報」奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報1995年度』1996年)。1～4区の水田では1957年の川原寺第1次調査に際して川原寺南門前の石敷参道、2時期にわたる橘寺北門などが確認されており、今回の調査区の大半はそれと重複するが、村道は先の調査以後に無届けで拡幅されているものの区間内に未調査地が残ることと、西方130mでの橘寺1986-1次調査で確認された橘寺の創建期に遡る掘立柱塀と素掘溝からなる北限施設が4区の下層に及ぶと想定されることから調査を行ったもので、40年ぶりに行った補足調査の色彩が強い。

2 遺構

検出した主な遺構は川原寺南門前石敷、東西道路とその側溝、橘寺北門、掘立柱遺構、橘寺寺域内参道側溝、同バラス敷、掘立柱塀SA01、素掘溝SD02、炭化物土坑、長方形土坑、小柱穴などがある。遺構は大別してⅠ期(7世紀後半)、Ⅱ期（奈良時代)、Ⅲ期（鎌倉時代以降）に分類され、地域的には東西道路とその北（川原寺）と南（橘寺）とに分かれる。

橘寺

Ⅲ期の橘寺北門については先の調査で桁行3間、梁間2間の八脚門であり、一回り大きなⅡ期の北門基壇を利用して再建されたことが判明している。今調査では南側中央間西の礎石1個、南雨落溝と再建以前のⅡ期の基壇、南雨落溝を再検出し、先の調査成果を現行の国土方眼座標と標高で計測するとともに基壇北半から水田畦畔について精査した。その結果、棟通り中央間西の礎石抜取穴とされている穴の東に、掘立柱遺構1基を検出した。掘立柱遺構は直径1.2m、深さ1.4mの掘形の底に板を敷きその上に直径0.4mの柱を立てている。長さ1.2mの柱根が遺存した。掘形埋土には焼土と共に室町時代の軒平瓦（川原寺952型式）などが入っており、永正年間（1504～1521）の焼失以後に立てられたものである。先の調査の礎石抜取穴はこの遺構の掘形と眼鏡状に連結し、底面も同じ深さにあることから同様の遺構とみられる。旧北門の棟通りにあることから何らかの閉塞施設とも考えられるが、門の中央やや西寄りに位置する上に、対称位置には存在しない。焼失後の北門基壇上に2本の太い柱が約1.2m離れて立っていたことになるがその機能、性格は明らかでない。なお、基壇北端が想定された水田畦畔下では後世の石垣の背面に奈良時代の基壇土と基壇縁石の抜取穴を発見し、報告の想定の正しさを確認した。

北門の南はⅢ期にはバラスや瓦による舗装がなされた参道であるが、その下層の黄褐色粘土の整地土上面で南北素掘溝を検出し、厚さ0.3mの整地土下でⅠ期の掘立柱塀SA01、東西溝SD02を検出した。南北溝は幅0.8～0.6m、深さ0.2m。北で北門の中央間西礎石にそろい、5・6区でも南延長部にあたる溝を検出していることから奈良時代の寺域内参道西側溝と考えられる。Ⅱ期の南雨落溝底石の下にある東西溝は幅2.0m、深さ0.8m。南北の壁面に不整形な窪みがあり、護岸石積を抜き取っている可能性がある。埋土からは7世紀後半の土器が出土した。溝は1986-1次で検出したSD02の東延長線上に位置し一連の遺構とみられる。東西溝南岸に近接して掘られた掘立柱塀の柱穴は一辺1.2m、深さ1.1m。直径0.25mの柱を西側から抜き取っている。柱位置はⅡ期の基壇南縁の南2.8m、Ⅲ期の北門棟通りの南7mで、東西溝南岸から0.8mしか離れておらず、南岸から2m余の位置にある1986-1次調査の掘立柱塀SA01と直ちに一体とすること

に疑問の余地があるが、層序からは同時に存在する遺構である。なお、門を想定して周辺を精査したが柱穴の南は地山が高くなっておりそこに柱穴等はみられない。

東西道路

先の調査では一段高い北門の北、川原寺南門との間に東西古道の存在を想定しているが道幅を示す遺構を特定していなかった。未調査区を中心に精査した結果、北門北縁の北約４ｍで先に検出している東西溝と参道石敷南の東西溝の間がバラス敷になっていることを確認し、この２本の東西溝が道路側溝と考えられた。南の東西溝は幅1.6ｍ、深さ0.3ｍで７世紀末の土器が少量含まれる。溝はその北と南に広がる６世紀末～７世紀前半の土器やスラグ、炭の入った土坑を壊し、路面のバラス敷はそれを覆う。北の東西溝は幅0.8ｍ以上、深さ0.3ｍの素掘溝で、北岸には奈良時代の瓦を含む石敷が延びる。石敷の下には大型花崗岩を東西に並べた石列が一部残っており、当初は石列が北岸であったと思われる。道路幅は側溝心心間で約12.6ｍ、路面では11.4ｍである。側溝出土遺物からは今一つ明確ではないが、道路は川原寺の造営・整備時に作られ奈良平安時代を通じて存在したであろう。

川原寺

東西道路北側溝の北に広がる石敷は、後述する出土瓦の検討からも明らかなように川原寺に関わる遺構で、南門からのびる参道の南に設けられた広場の南端に位置するのであろう。石敷は人頭大の花崗岩玉石を乱雑に敷いたもので、下層の石列以南が南に傾斜する以外は石の上端がほぼ揃っている。瓦を交えた補修と小礫による補修を受けている。補修に利用した瓦類には緑釉水波紋塼や奈良時代の瓦が含まれており、平安時代までは存続したのであろう。

3 遺 物

多量の瓦塼類と少量の土器類のほか、フイゴ羽口などの土製品、鉄釘などの金属製品がわずかにある。瓦塼類には丸・平瓦、軒瓦、鬼瓦、緑釉水波紋塼があり、遺構の帰属を明瞭に示す点で良好な資料である。

軒瓦は、軒丸瓦８点と軒平瓦13点が出土した。川原寺との同笵品が多い。軒丸瓦の内訳は川原寺創建の面違い鋸歯紋縁複弁八弁蓮華紋601型式２点（Ｃ種１点）、608型式１点、雷紋縁の「紀寺式」621型式１点（図64-１）、珠

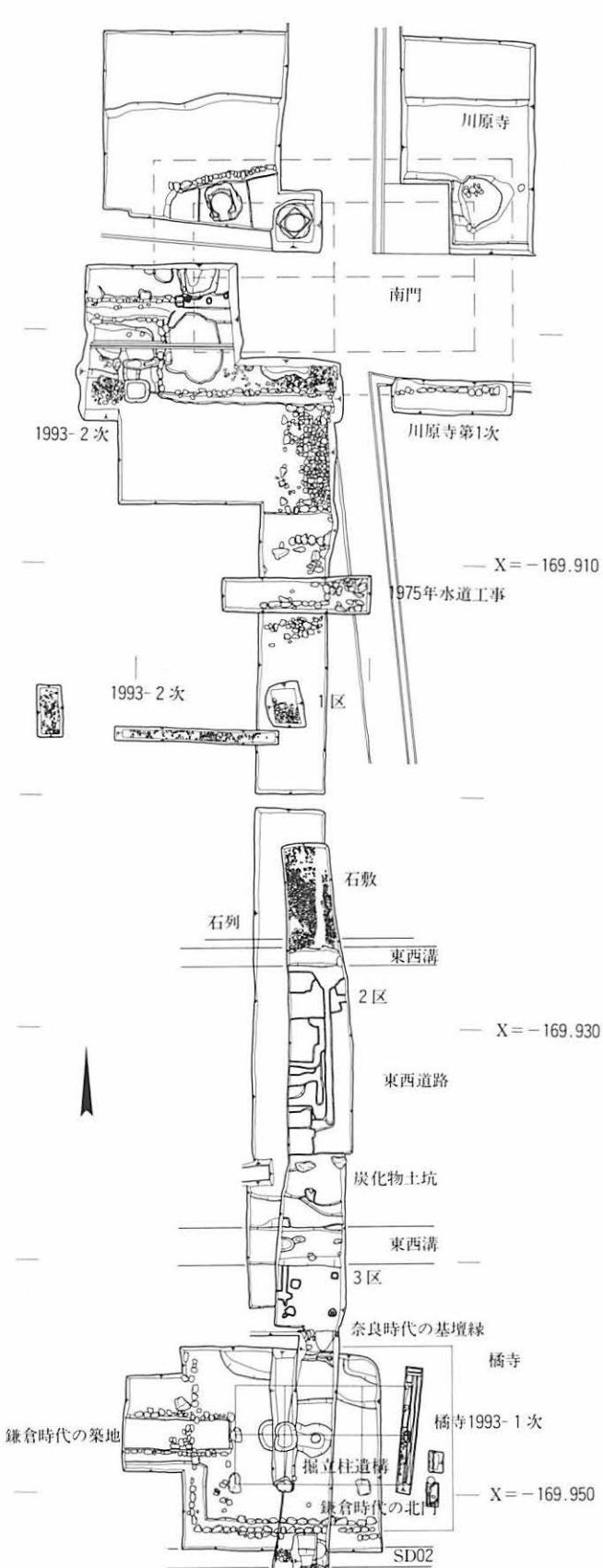


図63　橘寺1995-1次調査等遺構図　1：300

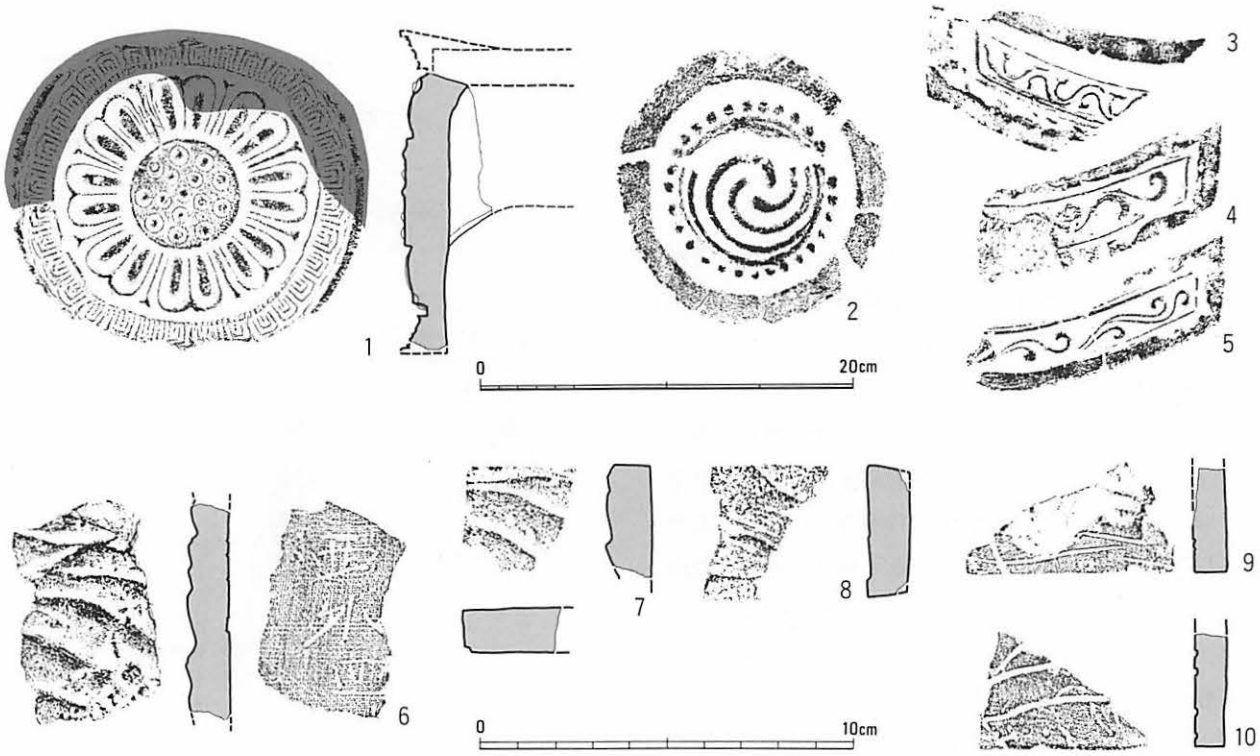


図64　橘寺1995-1次調査出土瓦塼類(1～6)と川原寺出土緑釉水波紋塼(7～10) 1～5は1:4、6～10は、1:2

紋縁の単弁十六弁蓮華紋701型式１点、鎌倉時代巴紋(２)と近世以降の巴紋各１点である。軒平瓦は四重弧紋651型式８点（B：１点、D：７点)、鎌倉時代４点（３～５：川原寺951型式１点)、室町時代１点（川原寺952型式）である。鬼瓦は鎌倉時代のもの。これらの瓦を出土地点でみると橘寺北門以南の橘寺寺域内では鎌倉時代以降の軒瓦が目立つ。北門の再建に関連するのであろう。川原寺の創建瓦など７世紀代の瓦は北門から北に多く、川原寺の所用瓦であろう。丸・平瓦は７世紀から鎌倉時代までのもの。丸瓦は913点139.4kg、平瓦は4,507点490.5kgが出土。平瓦には凸面布目平瓦があり、なかに桶の合わせ目の枠板に布端を綴じ付けた痕跡を残すものがある。

注目されるのは緑釉水波紋塼破片２点である（図64-6・7)。６は焼成前に「西外四」とヘラ書きする。７は隅を残す縦、横4.5cmの小片。ともに厚さ1.8cm前後の板状の敷塼である。表面にはヘラ削りして水波紋を半肉彫りし緑釉を施す。緑釉は一部側面に及ぶ。裏面には布目がある。調査区北部の石敷から出土したのと、橘寺では過去に出土しておらず、川原寺所用とみてよかろう。

川原寺ではこれまで２種類の緑釉水波紋塼が出土している。一つは今回出土したものと同じ半肉彫り表現(８：仮にA類とする）で、もう一つは線描き表現（９・10：仮にB類とする）である。川原寺裏山遺跡の緑釉塼はB類に限られるらしい。A類は一辺11cmと６cmの例が知られるが、８は幅5.2cmしかない。B類は11.5～15.5cmの大きさと報告されている（網干善教「飛鳥川原寺裏山遺跡と出土遺物」『仏教芸術』第99号 1975年)。東回廊南端東側出土例（A類）には、「□八」のヘラ書きがあり（『川原寺報告』38頁 Fig.20、PL.52-97)、また、川原寺裏山遺跡出土例には「北大一」あるいは「第十一□三」といったヘラ書きや墨書があるという（京都国立博物館『特別陳列　川原寺裏山遺跡出土品』1975年)。奈良時代の法華寺出土例には裏面に「十三條十」のヘラ書きをもつものがあり、配列場所を示すものと推定されている（帝室博物館『天平地寶』1937年口絵)。これは、大きな画面を碁盤目に区切って製作し、パーツの完成後に再構成する方式であろう。川原寺の緑釉水波紋塼にも同様の方式が採用されていたと考えられる。

4　まとめ

調査の結果、先に川原寺と橘寺の間に想定されていた東西道路は幅約12ｍで橘寺寺域に近接して通り、道路以北は南北幅約14ｍの石敷広場と南北長約11ｍの石敷参道である可能性が高くなった。

橘寺寺域の北限施設については、７世紀後半代の掘立柱塀と素掘溝が北門の南に及ぶことが明らかになった。年代的には川原寺の造営に際しての整備と考えられるが、川原寺南門の正面に開門していたか否かは明らかでない。北限施設はその後、奈良時代にはおそらく寺域の北限にそって、築地、北門が造られ、鎌倉時代の大改作を経て、永正年間（1504～1521）に主要伽藍とともに焼失したのであろう。廃絶した北門基壇上の２本の掘立柱遺構は室町時代以降に基壇上に立てられた、寺域を明示する施設の一部であろう。　　（西口壽生　瓦類：花谷）

◆坂田寺の調査—1996-1次

1　はじめに

この調査は高市郡明日香村祝戸における民家新築工事申請に伴う事前調査である。

申請地は通称「マラ石」の南、国営飛鳥歴史公園祝戸地区に南接する細長い畑地で、1980年に発見された仏堂跡の西約60m、仏堂に取り付く回廊で囲まれた奈良時代の坂田寺の中枢伽藍の西半に位置し、その南端は西回廊の中央部分にあたる。したがって調査は西回廊の位置と規模の確認と、伽藍が西面していた場合の中門の確認を目的とし、あわせて、不明な点が多い7世紀代の坂田寺の遺構の確認をめざした。

なお、奈良時代の坂田寺は国土方眼方位に対して北で西に約15度偏した方位に造営されており、以下では繁雑を避けるために仏堂の正面を西として記述する。

2　層序と遺構

調査地の層序は上から耕作土、床土、灰褐色土、茶褐色砂土、暗褐色砂土であり、中世の遺構は茶褐色砂土上面で、奈良時代の遺構は暗褐色砂土の下面で検出される。茶褐色砂土・暗褐色砂土は奈良・平安時代の境内面をなす土層である。境内面の下には黄褐色粘土、暗灰色砂土、茶褐色粘土等が複雑に存在するが、すべてが奈良時代の伽藍造成に関わる土層と考えられた。検出した遺構には中世の自然流路、柱穴、平安時代の土坑、奈良時代の西回廊礎石、回廊内側雨落溝である南北石組溝、境内地の舗装石敷、造成過程の柱穴、素掘溝などがある。

伽藍の造成

調査区東壁際で、7世紀代の坂田寺の伽藍推定の手がかりを求めて断ち割った結果、調査区内には前代の伽藍

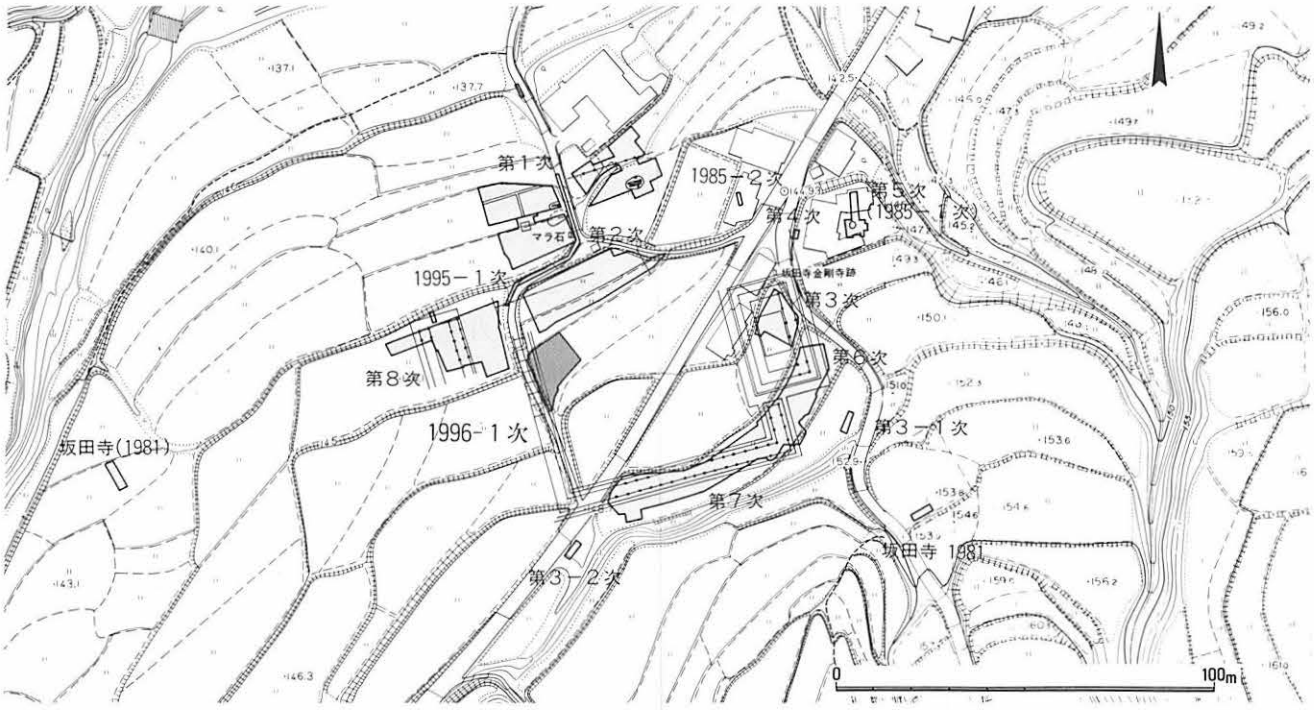


図65　坂田寺調査位置図　1：2000

関連遺構は発見されず、むしろ奈良時代の伽藍地は7世紀代の瓦や土器等を多量に含む粘質土等による大規模な造成によって作られていることが判明した。造成土は基本的にば北、西に厚く盛られている。造成土は北では検出面下2m、南では同じく1.6mにある暗灰色粘土までを確認したが、同層もその一部である。調査区西端では検出面下2mに至っても瓦を含む灰色砂層があり、西側は谷であったとみられる。奈良時代の造成以前の高地は伽藍の東寄り、仏堂を中心とする地域であろう。

造成は境内面下0.4mでほぼ上面を揃え、その上を黄褐色土を中心とする土で広く整地する。なお、最終段階の直前には北東部を中心にする半径5mほどの楕円形の範囲が浅い皿状になっており、そこに最大厚0.3mの炭化物や瓦を多量に含む粘質土を積んでいる。

調査区東南端の下層素掘溝は先述の炭化物層の後、造成の最終段階直前に掘られた溝で上端幅1.2m、深さ0.25mの断面V字形をなす。後述する平安時代の土坑の下で「く」字形に湾曲して南に延びる。埋土には丸・平瓦が多量に含まれ、流水の形跡はない。調査区東南隅の下層柱穴は一辺0.8m以上、深さ0.8mの規模で、境内面下0.6mの造成土中から掘られている。下層溝とともに造成過程の遺構であるが性格は明らかでない。

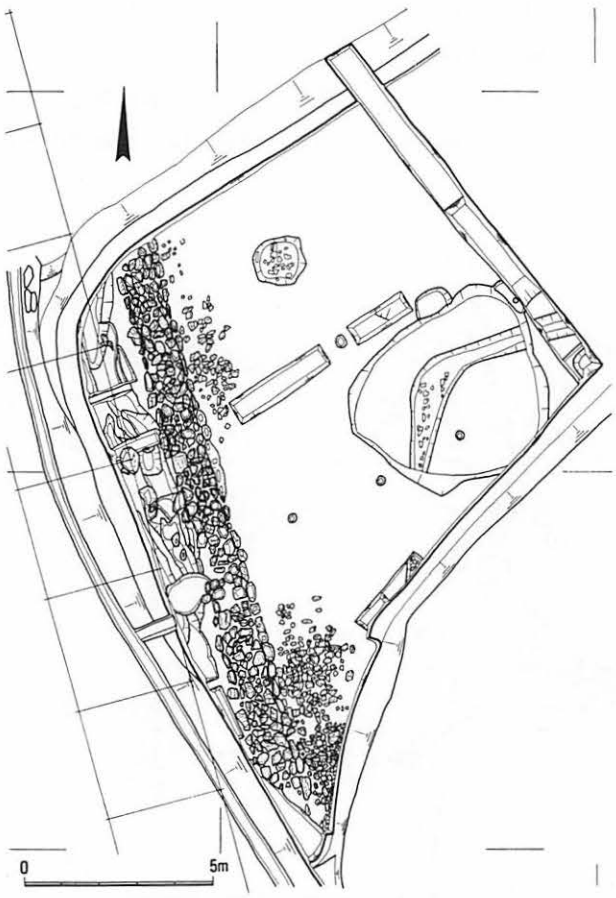


図66　坂田寺1996-1次調査遺構図　1：200

奈良時代の西回廊

調査区の西で検出した礎石は辺0.4×0.5m、高さ0.25mの不整方形を呈する花崗岩自然石で、礎石の上面は直近の雨落溝西側石上面よりも10cm高い。柱間は南・東回廊では桁行、梁間とも約3mであり、本礎石の北3mにある穴は礎石抜取穴であろう。礎石周囲の回廊基壇は中世の自然流路によって洗い流されているが、わずかに残った土から判断すると、回廊基壇は厚さ1m以上の砂層の上に積まれた伽藍造成土の上に、暗褐色土を厚さ0.5m積んで作られる。その上面から掘った穴に礎石を据え、雨落溝の石組を作る。検出した礎石は第7次調査成果に照らすと回廊西南隅内側柱から12間目にあたる。

南北石組溝は礎石の東約1.3mに西側石を据えた幅0.8m、深さ0.1mの溝で底には0.2～0.4m大の自然石を敷く。南北約16m分検出し、さらに南と北とに延びる。北接する第2次調査区は大きく一段下がっており、削平されたとみられる。溝底は検出区間内で約0.2m北へ低く、南回廊内側雨落溝底石の高さから推算した西南隅部との比高は約1.1mで、西回廊全体は30/1000の傾斜をもつことになる。ちなみに南回廊の傾斜は5/1000である。

雨落溝内側の境内地内には石敷・礫敷が施されている。0.2m大の玉石を敷いた石敷は雨落溝東側石から2mの範囲に残り、その内側は小石を乱雑に敷いた礫敷となっている。礫敷と石敷の境界は明確でなく、石敷上を覆う茶褐色土や礫敷中に瓦や奈良・平安時代の土器が入っていることからすると、礫敷は後世の補修であると思われるが、建立当初、回廊内全域が石敷であったのか雨落溝に近接した部分だけであったのかは明らかでない。

平安時代・中世の遺構

調査区東部の土坑は径5.5m、深さ0.4mで、埋土には平安時代後期の土器が含まれている。境内地内部の整備に伴う土坑と思われるが、坂田寺は仏堂・南回廊での所見ではともに10世紀後半代に倒壊しており、それとの先後関係については明らかでない。中世の柱穴は直径0.3mの円形柱穴が6個あるが、建物などにまとまらない。調査区西端の自然流路は、回廊雨落溝の石敷上から西側石

を壊し、回廊基壇土の大半を洗い流した急流で、底面には流れの渦でできた穴があり、島状に取り残された礎石の北には滝壺状の穴が生じている。堆積した灰色砂には13世紀前半の瓦器などが含まれている。

3　遺物

瓦、土器、金属製品、土製品、銭貨などがある。

瓦には多量の７世紀代のものと少量の平安時代のものがある。軒瓦には軒丸瓦18点、軒平瓦８点がある（表６）。軒平瓦に２種の新型式があり、第７次調査で公表した一覧に追加しておく。１種は六重弧紋の109型式の薄手品（図67上左）で、第７次調査で瓦当厚の判明する例が出土しているがそれは未公表であった。109型式Ａ種（藤原宮6561Ａ）が瓦当厚約5.4cmである（図67上右）のに対して、本例は4.4cmと薄手で○と×の型押しも小さい。瓦当幅や全長も短いかどうかは良好例の出土を待って決したい。他の１種（図67下）は平安時代の軒平瓦で、中心飾りが123型式Ａ種に似るが、唐草紋と外区、脇区紋様が異なる。外区に界線をめぐらすだけであるのは124型式Ａ種に似るが、唐草紋の形状の差が大きく、中心飾りが不明なので124型式Ａ種の右半と確定することもできない。凸面に縦削りを施し、凹面は瓦当上縁側を削る。なお、丸瓦は1,554点、154kgが、平瓦は12,453点、651kgが出土した。丸瓦には側板連結模骨痕をもつ行基丸瓦が多数含まれている。

土器には７世紀前半から平安時代の土師器、須恵器、黒色土器と中世の瓦器の他に、緑釉椀、三彩火舎、二彩壺、灰釉椀、白磁椀などがある。緑釉椀と二彩壺は調査区南端の境内地内石敷周辺および平安時代の土坑から出土した。土製品にはフイゴ羽口、炉壁、鋳型があるが、

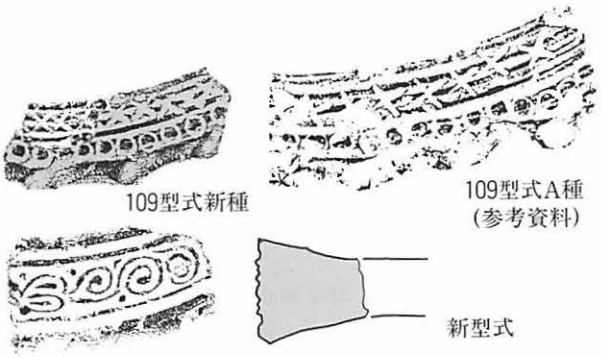


図67　坂田寺1996-1次調査出土軒平瓦　1：4

表６　坂田寺1996-１次調査軒瓦等点数表（　）内は種不明を含む

	型式	点数		型式	点数
軒丸瓦	６Ａ	2	軒平瓦	104Ａ？	1
	７Ａ	1		109新種	1
	11Ａ	1		121Ａ	1
	21Ａ	2 (6)		122Ａ	1
	23Ａ	1		123Ａ	3
	26Ｂ？	1		新型式	1
	28Ｂ？	1		合計	8
	32Ａ	1 (3)	その他	面戸瓦	1
	不明	2		円盤状瓦製品	1
	合計	18		塼	1

いずれも伽藍造成土中に含まれたものである。鋳型は長径6.2cm、厚さ5.2cmの破片で一端に端面が残り、弧を描く型面も遺存するが製品は判然としない。金属製品には鉄釘28点、銅製饅頭金具１点、銅板３点などがある。饅頭金具は直径2.7cm、高さ1.2cmの笠形の頭部に0.5cm角、長さ4.5cmの脚がつく。銭貨には雨落溝埋土から出土した延喜通寶１枚がある。

4　まとめ

回廊東西長について第７次調査では西回廊が南北里道上にあると考えて19間以上にはならないとした。しかし、今回の成果によって西回廊は里道の西寄りにあることが判明し、回廊東西長は両隅の間を数えて21間（約64ｍ）であることが確定した。回廊南北長については今回の成果から14間以上であることが確認された。その北、第２次調査の石垣までの間は約18ｍで、石垣の法面等を考慮すると回廊北側柱までは５間以内であり、回廊南北長は18～19間（55～58ｍ）と推定される。

回廊内側雨落溝である石組南北溝が、調査区の南端まで直線で延びることが確認された事によって、西回廊の南端から９間目以北に大型の構築物としての門は存在しえないことが判明した。中門は仏堂正面にはなく北回廊に設けられたと考えられる。北回廊想定地の西半部にあたる第２次調査地では今回の検出面よりも約１ｍ下で、東西方向の石垣などを検出しており、石垣は一段高く造成された中枢伽藍の基底部にあたるとみられる。石垣は回廊東西幅の中央にあたる部分で途切れて、幅12ｍ余の斜道となっており、中門はこの斜道の正面上段に設けられたと考えられる。斜道の北約18ｍの東西中軸線をはさんだ位置に幢竿支柱の基礎とみられる１対の掘立柱遺構が検出されていることも傍証の一つとなろう。そうした場合、奈良時代の坂田寺は北入りで中門をくぐった正面に仏堂がない変則的な伽藍配置となる。回廊内に他の堂宇が存在するかどうかの課題はなお複雑になったといえよう。

（西口壽生　瓦；佐川）

◆山田寺の調査—第10次・第11次

1　南面東回廊の調査（第10次）

調査目的と基本層序

調査目的　第10次調査は第５次調査で確認した東面回廊の南端すなわち出隅部分で、西に曲がる南面回廊に関する最初の調査である。調査目的は南面回廊についての情報を得て、すでに調査済みの北面・東面回廊（第３～６次調査）の知見と比較して、回廊全体の様相をより鮮明に把握することにある。本調査区は東南出隅部分を含め、南面回廊の東から６間目までの礎石を検出できる範囲で設定した（図68）。調査面積は170㎡である。

基本層序　発掘区の基本層序は、上から盛土（40～50㎝）、明灰褐色砂質土（15～30㎝）、瓦堆積（20㎝）、基壇上暗青灰色粗砂（厚さ約10㎝）、基壇直上暗青灰粘質土（厚さ２～３㎝）を経て、回廊基壇土に達する。瓦堆積からは大量の瓦や部材が出土した。瓦や部材の一部は基壇上暗青灰色粗砂からも出土した。基壇縁石外側の土層は、上から瓦堆積、暗青灰色粗砂、灰黒色粘砂土、暗灰色砂質土を経て、地山である緑灰色粘土に達する（図71）。

創建時の南面回廊

回廊SC050の礎石と柱間寸法　回廊の南柱筋の礎石は完全に保存されており、出隅から６間分、計６基を、創建当時の位置で発見した（図69）。北柱筋の礎石は入隅とそこから西へ１基目の計２基だけが残っており、さらに西側の礎石は、近代の東西方向の水路SD702の掘削にともなって抜き取られていた。その抜取穴SX723・725がSD702の底でみつかった。柱間寸法は桁行・梁間ともに3.78ｍ（１尺＝29.1㎝の場合13尺）等間である。この寸法は東面回廊と北面回廊で確認した寸法と一致する。

礎石の石材は花崗岩である。北柱筋の礎石は方座の上に単弁12弁の蓮華座を彫っており、保存が良好である。南柱筋の礎石では蓮華座の両端に幅約27㎝の突出する地覆座があるので、蓮弁は10弁となる。南北柱筋とも方座の上辺は約65㎝、蓮華座の上面径は約42㎝で高さは７㎝。したがって、南面回廊は南側に壁や連子窓を設置し、北側は柱だけで開放状態にあった。なお、礎石の地覆座の間をつなぐ地覆石は、すべて抜き取られ存在しなかった。

回廊基壇の規模と構造　基壇の外装は東面回廊と同様に、花崗岩の自然石一石を縁石に使用し、６点が転倒していた以外は、原位置に据え付けられた状態を保持していた。縁石の外面は南柱筋の礎石心から1.3ｍの位置にあるので、基壇幅は従来通り6.38ｍに復原できる。縁石の高さは45～50㎝である。基壇の構造は、地山の緑灰色粘土を削り出しその上に花崗岩の風化土を突き固めた版築土（一層の厚さ３～５㎝）を20～40㎝積む。最上層はきめ細かい版築土である。縁石は基壇土築成途中で据えた。

礎石据付穴の掘込面　南柱筋東から３基目と４基目、および北柱筋東から２基目の礎石据付掘形は、基壇築成完了後に基壇上面から掘り込んでいる。それ以外の南柱筋東から２基目、５～７基目、および北柱筋東から３基目の礎石据付掘形は、基壇築成最終段階近くで掘り、礎石を据えて、さらに２、３層版築して完了させている。こうした２つの現象が起こるのは、基壇上面を平坦にする最終調整段階に礎石を据えたからである。

石組暗渠SX700　南、北柱筋の東から２間目の中央に南北方向に石組暗渠SX700を築く（図72）。ここは東面回廊西側の石組雨落溝SD061の南の延長部にあたる。以下、設置工程を復原する。基壇築成完了後、基壇上面から幅100～110㎝、深さ60～70㎝の横断面が逆台形の溝を掘る。溝底に全長50㎝、幅約18㎝、厚さ約12㎝の塼と全長56.5㎝、幅約18㎝、厚さ12㎝の塼を敷く（図73）。底塼と掘形の間に全長30～55㎝、幅27㎝、厚さ６～７㎝の榛原石製側石を立て、側石間の継目に小石を詰め、その上に外側から粘土塊を貼って、漏水防止の目張りをする。それから掘形と側石との間に土を入れる。さらに側石の上に全長30～58、幅約30㎝、厚さ７～12㎝の榛原石製蓋石をか

ぶせ、土を入れて、掘形を完全に埋め戻す。暗渠の排水口の底石に接するほぼ同じレベルに、35cm四方の板石を置き、排水時の土の侵食を防ぐ。そこから流れ出た水は、南の縁石から60cm離れたところに北肩をもつ素掘りの東西雨落溝SD705に注ぎ込む。SD705の南肩は調査区の南壁内にもぐるので全体を明らかにできなかった。

礎石間の柱穴　回廊南、北柱筋の礎石間の中心には、北・東面回廊と同様に、柱穴SX713・720・722・724・727・728がある。また、SX720・722の中間の棟通りにあるSX721も柱穴である。北柱筋では基壇上面で柱掘形SX720を確認し、南柱筋では一部を基壇上面で、一部を地覆石抜取溝の底面で検出した。柱掘形の平面形は一辺50～100cmの隅丸方形を呈し、深さは基壇上面から50～70cmある。従来、柱掘形と呼びながらも、柱抜取穴などは検出されなかったが、今回は後述する南北暗渠SX700を設置した部分を除いて、柱抜取穴を検出できた(図70)。これらの柱穴はすべて基壇築成完了後に掘り込まれており、おそらく地覆石を据える以前に、柱を抜き取っている。これらは規則的な配列をしているので、回廊造営にともなう支柱などの臨時施設であろう。

その後の南面回廊

地覆石の抜き取り　地覆の下に本来あったはずの地覆石はなく、これを抜き取った溝SD710を東面回廊と同様に確認した(図71のB層)。地覆石の抜き取りは回廊全体で行われた可能性が高い。回廊全体の地覆石をはずすためには、回廊の腰壁や地覆を解体しない限り、地覆石に沿って溝を掘って横から抜くことになったのであろう。しかし、抜き取り後の地覆の下に何らかの支えがなければ、地覆はたわむであろうし、腰壁を維持することにも影響がでよう。南柱筋の東から3、4、6間目の地覆石抜取溝から、鴟尾を含む瓦が部分的に出土しているので、本来はこれらを重ね置きして、部分的に地覆を支えていたのかもしれない。また、地覆の下に入っていた黒灰色砂も、人為的に地覆の下に入れた可能性もある。なお、地覆石を抜き取った目的については検討中である。

地覆石抜き取りの時期　地覆石抜取溝SD710からは、10世紀中～後期の土師器の皿と9～10世紀の黒色土器が出土した。また、凸面縦位縄叩き目の平瓦（7世紀末～8世紀初頭）もみつかった。第5次調査で検出された地覆石抜取溝SX560から出土した9世紀前～中期の土器によって、地覆石の抜き取りの年代を推定しているが(『藤原概報14』)、今回の発見によって、地覆石抜き取りの年代が一世紀余り下る可能性がでてきた。この年代は回廊で囲まれた空間の舗装がバラス敷きとなる時期でもある。

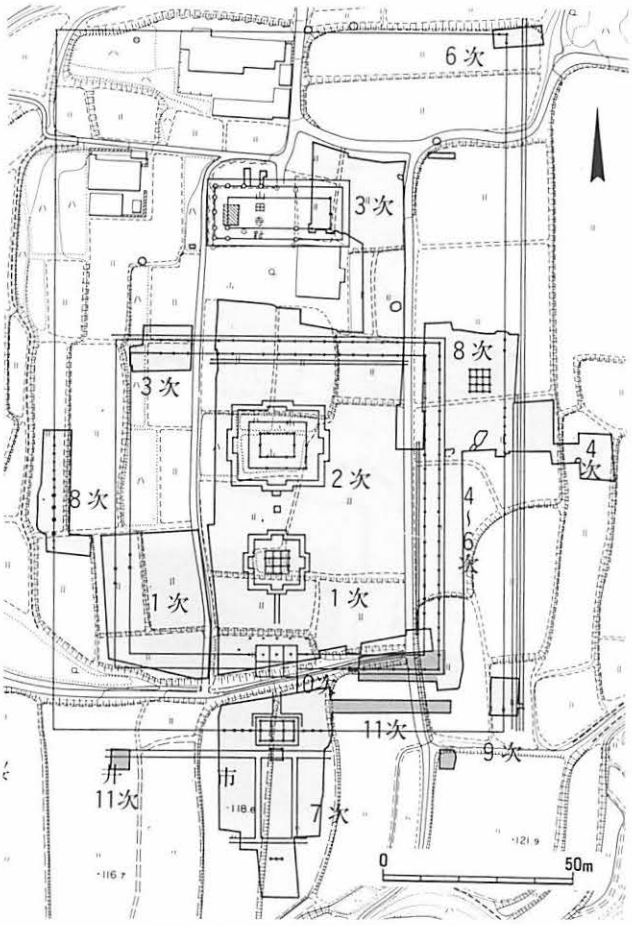


図68　山田寺の調査位置図　1：2000

回廊東南隅の後補の礎石　回廊東南隅の1間四方の礎石間には、大振りの礎石、小型の自然石や切石が置かれていた。南柱筋の東から1間目中央には、小型の花崗岩SX712が、南柱筋の東から2基目の礎石と入隅の礎石の中央には、部材を受けるための座を作り出した大型の花崗岩製礎石SX717が、入隅の礎石の東辺中央には一辺約25cmの榛原石製の切石SX715が、そして1間四方の中心にあたる棟通りの隅には小型の花崗岩SX708が、それぞれ置かれていた。SX712を据えたのは地覆石をはずして以降なので、ほかの礎石を置いての一連の作業も同時に行われたのであろう。類似の現象は、第8次調査で検出した回廊東北隅でも認められる(『藤原概報21』)。SX717に対応する回廊東北隅の礎石Bも大型で、部材を受けるための座を作り出している。SX715は第8次調査の礎石A・Cと同じく幅25cmあるので回廊の地覆石を転用した可能性がある。第8次調査ではこれらの礎石を根太受けとみて、東北隅を床張りにし、壁を設けて小部屋とした可能性を考えている。SX708・715・717に柱を立てて虹梁

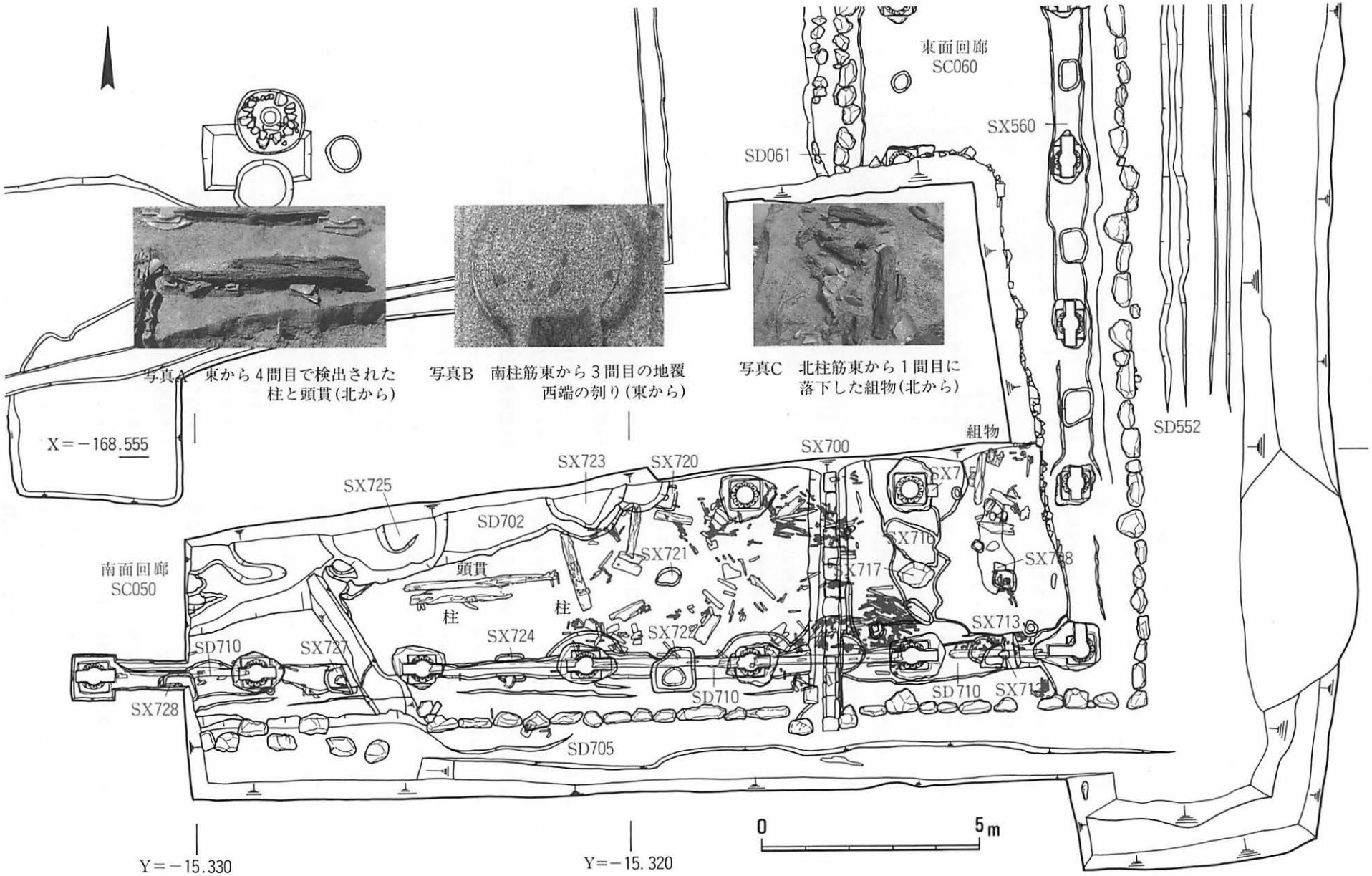


図69 山田寺第10次調査遺構図 1：125

から上の支えを補強した可能性も考えられよう。

埋まりかかっていた基壇縁石　回廊倒壊の原因と関連する基壇を覆う暗青灰色粗砂とその上の瓦堆積のレベルは、縁石の南側でもほぼ同一である。つまり、回廊倒壊以前に縁石はほぼ埋まっていたのである(図71)。縁石南の各堆積土層からは、10世紀中頃から11世紀初頭にかけての土器が出土した。回廊倒壊に近い段階で、縁石南の土砂の堆積が一挙に進行したのである。東面大垣SA500が10世紀前半に東斜面からの土砂で倒壊した後、そこに土塁状の高まりSX535を築いたのは、おそらく東斜面からの土砂の流入を防ぐためであった(『藤原概報25』)。しかし、土砂は南面回廊縁石の南まで流入していたのである。

機能を喪失した南北暗渠SX700　暗渠の断面断ち割り調査によって以下のことが判明した。おそらく石組内の清掃が必要になり、蓋石をはずすための溝が掘られたようだ。その後、蓋石を元に戻し、その範囲を埋め戻して、基壇を復旧する(図73)。しかし、暗渠は排水口が回廊南縁石の急速な埋没によってふさがれ、機能を喪失したらしい。その結果、基壇上部に小溝を掘って急場の水路とし、そこに砂層が残される(図73小溝埋土)。その後もここは溝状を呈し、基壇直上に暗青灰色粘質土、完形瓦や木舞を含む暗褐色土が堆積していく。そして、その上を回廊倒壊に関わる暗青灰色粗砂と瓦堆積が覆っている。これらと縁石南の土層からは10世紀後半～11世紀初頭の土器が出土しており、その頃までに暗渠は機能を停止している。なお、排水口から北へ3枚分の蓋石がはずされ、排水口両脇の縁石が南に倒され、調査区北端から北へ少なくとも1枚分の蓋石もはずされていた。暗渠が機能を喪失する直前に、排水を容易にするための仕業だろう。

補足されなかった軒丸瓦　軒平瓦は従来から回廊所用とされている重弧紋AⅠ種が、10次調査出土軒平瓦の全体の約6割を占めており、従来の見解を裏付けている(表7)。これに対して、回廊所用の山田寺式軒丸瓦D種と垂木先瓦D種は、それぞれ全体の約4割に満たない。後述する落下瓦中に軒丸瓦はなく、軒平瓦も少量であった。創建時の回廊東南隅には、いわゆる双頭鴟尾を置いていたはずだが、これも出土しなかった。倒壊直前の南面回廊には、丸瓦と平瓦、若干の軒平瓦を葺いていただけで、軒丸瓦と垂木先瓦は南面回廊から落下、または修理で降ろされた後、基本的に補足されなかったのである。降ろ

図70　礎石の中間にある柱穴SX728(北から)

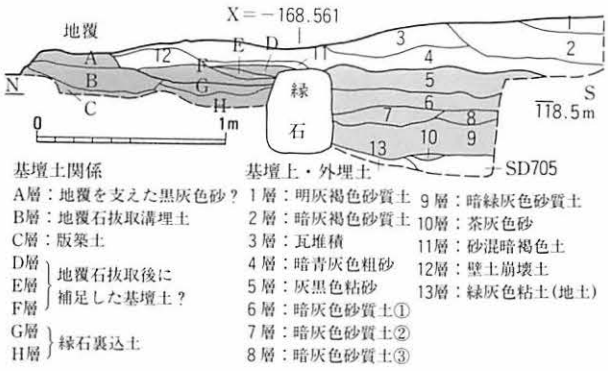


図71　埋まりかかっていた基壇縁石

図72　南北暗渠SX700(西南から)

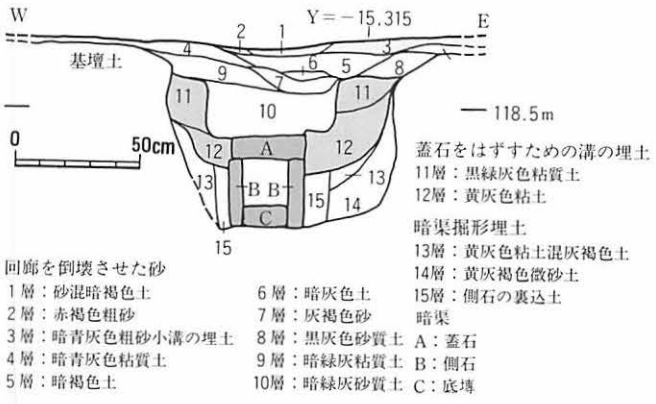


表7　山田寺第10次調査軒瓦等出土点数表

軒丸瓦型式		点数				垂木先瓦型式	点数
山田寺式	A	11	四重弧紋	CI	5	B	3
	B	1		CII	3	B？	1
	C	1		DI	1	B′	1
	D	8		DII	3	Ca	3
6231C		1		E	2	Cb	4
計		22		FII	2	C	1
				HI	1	D	8
軒丸瓦型式		点数	三重弧紋B		1	E	1
四重弧紋	AI	48	蠖羽瓦A		1	計	22
	AII	2	均整唐草紋3		1		
	BI	2	近　世		4		
	BII	4	計		80		

図74　北流れ落下瓦上層：反転平瓦（北から）

図75　北流れ落下瓦中層：反転丸瓦など（北から）

図76　北流れ落下瓦下層：正常落下平瓦（北から）

された軒丸瓦のなかには、奈良時代後半に塔や金堂の周囲の瓦敷に転用されたものもあったであろう。なお、鬼瓦（奈良時代）が1点、鴟尾が9点、塼が5点出土したが、その多くは地覆石抜取溝SD710か南北暗渠SX700の排水口両脇の縁石を抜き取りかけた穴から出土した。

南面回廊倒壊と落下瓦

落下瓦　南北暗渠SX700が設置された付近で、南面回廊北流れの屋根が落下する過程を示す良好な落下瓦を検出した。落下瓦は上・中・下層からなり上層は平瓦群で凸面を上に広端を北に向けた反転瓦である(図74)。中層は丸瓦群で凹面を上に、玉縁や狭端を北に向けた反転瓦と、凸面を上に、玉縁や狭端を南に向けた正常落下瓦が入り乱れていた(図75)。前者は上層平瓦と組み、後者はつぎの下層の平瓦と組む。下層は平瓦群で、凹面を上に、狭端を北に向けた北流れの正常落下瓦である(図76)。正常落下した平瓦群の南端は、南面回廊の棟通りにあたり、その付近から割り面戸瓦28点、切り熨斗瓦2点、割り熨斗瓦115点が出土した。この状況から、まず北流れ棟寄り半分の平瓦と丸瓦が、棟の熨斗瓦と面戸瓦とともにほぼ真下に正常落下し、その上に北流れ軒寄り半分の平瓦と丸瓦が反転してかぶさったことが判明した。すなわち、この範囲の北流れ屋根は棟が落ち、北柱筋の柱が飛ばされて、瞬時に「く」の字形になって崩壊したのであろう。

基壇縁石上では瓦当面南向き、凹面上向きを呈する2、3枚の軒平瓦（凸面朱付着）と平瓦が2箇所で検出された。南流れの瓦は真下に落下した部分もあった。

なお今回出土した瓦の総重量は丸瓦が1,592kg（4748点）、平瓦が5,190kg（13,533点）あり、その比は1：3.26で、第5次調査で出土状況から判明した比1：1.64と異なり、平瓦の出土量が格段に多いことになるが、その理由は不明。これらの中にはヘラ書丸瓦が10点、ヘラ書平瓦が13点、戯画平瓦が4点、近世刻印瓦が2点ある。

回廊倒壊の時期　暗青灰色粗砂とその上の瓦堆積出土の最新の土器の年代は11世紀初頭で、これは従来指摘されてきた倒壊年代と一致し、基壇直上や縁石南の堆積土出土土器の最新年代にも近い。回廊縁石の南が埋没し、暗渠が機能を喪失し、とうとう基壇上面に小溝が設けられたり、暗青灰色粘質土が回廊内側から雨水か風で運ばれ、基壇上面に堆積するようなありさまであった。10世紀後半から短時間に進行した南面回廊の荒廃ぶりからみて屋

根を含む回廊の部材の一部がすでに脆弱化し、屋根崩壊や回廊倒壊の間接的原因になったことも想像されるのである。

南面回廊出土の建築部材

地覆・柱・頭貫・組物など回廊の主要軸部を含む多くの建築部材がある。残存状態は、倒壊した建物がほぼそのまま出土した東面回廊に近い東側ほど良く、西ほど西下りの地形のために削平されて悪い。出土点数が多い部材は、壁材である木舞や野地板などで、多くは断片化し散乱していた。ここでは、回廊とその倒壊について特記すべき情報を、部材別に整理する。なお、連子窓関係の材と虹梁から上の屋根材はほとんど残っていない。

地　覆　南柱筋には5本の地覆が原位置にあり撹乱層で取り上げた東から5間目の地覆も合わせると計6本となる。南柱筋東から1間目を除き地覆の残りの良さは特筆される。最も残りの良い材で測ると成は12cm、幅は18cm、全長は347cmある。すべてに腰壁束を立てた枘穴が2箇所ずつある。両端は柱に合わせて半円に刳られており、その仕口の形状が判明したのは初めてである。東から4基目の礎石上では両側の地覆端部に生き面が残り、その間を測ると36cmである(図69写真B)。東面回廊の調査では柱は腰長押付近で直径38cmあり、項部では4～5cm細くなることが知られていた。柱の足元部分の直径は発掘時の所見で従来35cmと推定されていた。地覆端部の知見から足元部分の直径はほぼ36cmとみられるので柱がエンタシスであることを確認した。多くの地覆の中央部がやや下垂していたのは上部の加重を受ける地覆石がなかったからであろう。

柱　東から4間目で、ほぼ南北方向で倒れた柱と、そのすぐ西で頭貫と一緒に東西方向に倒れた柱の2本がある。南北方向の柱は全体に残りが悪い。南柱筋の東から4本目の柱と推定される。項部の可能性があるやや細い端部が北向きであり、東隣りで北向きに倒れた腰壁を検出したことなどから柱の北面が裂けて北側に倒れたと推定される。残存部の最大長は190cm、最大幅は24cm。東西方向の柱は、倒壊後に上面と心材部が腐敗で失われてしまった(図69写真A)。項部と思われるやや細い端部を西に向け、後述の頭貫と西端部をそろえる。残存部の最大長は224cm、最大幅は36cm。この柱と頭貫の下には、倒壊時に流入してきた暗青灰色粗砂があり、北柱筋の東から4本目の柱が頭貫もろとも南西方向に倒れ込み出土位置まで動いたと推定される。

頭　貫　上述のように、東西方向に倒れた柱の北側には寄り添うようにして頭貫が出土した。上面に方立が入れられていた可能性がある枘穴が残るので、倒壊時に上下が逆転したと推定される。西半分はほぼ完存しており、全長は344cmで、幅15.5cm、成は21cmを測る。

木　舞　南柱筋の東から1間目で、地覆上面に直接木舞が乗っていた。木舞の保存は良く、出土状況からみて、東面回廊の小脇壁の可能性がある。つぎに東から2間目では、地覆の北側に木舞が密集して検出された。そのほとんどが地覆と平行で、これに直交する材は数点しかなかった。つまり、この部分の壁はほかの壁と異なり、横方向の木舞を密に並べる方法で下地を作っていたと推定される。これは補修時のものであった可能性がある。さらに、南柱筋東から5間目の南側から出土した壁土を切り取って持ち帰り、詳細に調査した。壁土の中には、約30cm間隔の横方向の木舞が2本通っていた。これは腰壁部分の下地構造として従来推定してきたものと一致する。

組　物　北柱筋の東端の柱間中央で、肘木1点と巻斗3点が落下した状態のままで出土(図69写真C)。巻斗1点は肘木の下部に取り付いたままで、肘木受けに大斗を使っていないことから、これは棟木を受けていたものである。落下の位置と状態から、直上にあった組物であることは明らかである。出土状況は棟木が東に落下したことを示す。これは東面回廊の棟木の落下位置が東面回廊の中央部では西柱筋だが、東面回廊南部では東寄りになるとする第5次調査の所見と一致する(『藤原概報14』)。この部分の壁は東向きに倒れたのであろう。以上の他、南柱筋東から3間目の基壇縁石の南側から巻斗の裂けたもの2点が出土している。

野地板　断片が約25点出土。新知見は得られなかった。

茅　負　3点出土した。基壇南出土のものは全長76cm、高さ11.2cm、幅12.4cmで、他に全長135.5cm、高さ13cm、幅12cmと、全長80cm、高さ13cm、幅10.5cmのものとがある。後者の2点は本来1本で継手および3箇所の釘穴がある。いずれも原位置は推定できない。

(佐川正敏／史料　建築部材：藤田)

2　寺域南辺の調査（第11次）

調査の概要

本調査は、特別史跡「山田寺跡」の整備事業が進行する中で、回廊東南隅部から中門基壇南半をかすめて西に流れる水路の改修工事が必要となり、その付け替え予定地の適否を判断するために実施した。

新たに設けるべき水路は、現水路の東の流入位置と西の流出位置、および検出遺構との位置関係を勘案した結果、中門基壇と南門基壇とのほぼ中間を、東西ほぼ一直線で通すのが現況では最良と考えられた。このため調査では、南門（第７次）調査区の東端以東を対象とし、東西約35ｍ、南北約3.5mの調査区（中央）を設けた。また併せて、南門調査の際に確認した寺域南面を流れる東西大溝SD625の、より詳細な状況を知るため、その上流側（東）と下流側（西）に各１箇所、５ｍ四方の調査区を設けた。ただし東調査区では、堆積土が分厚く、安全面をも考慮し遺構面に達しないままに掘り下げを中断した。

中央調査区における基本的な土層は、耕作に関連する床土や暗褐色土の下に、暗灰色や黒灰色、ないしは青灰色をした砂や粘質土や微砂が交互に分厚く堆積しており、東の丘陵側から多量の土砂がもたらされた状況を示している。これらの堆積土中には、量はさほど多くないものの中世の遺物が含まれており、調査区中央付近の同様の砂層中から、肘木などの建築部材が出土した。

調査区西端では、岩盤が風化した青灰色地山層が標高117.75ｍ付近で顔を出し、その上部に20cmほど整地土が堆積している。調査区の西端で検出した瓦敷SX750は、この整地土の上面に敷かれたもので、おおよそ３㎡分を確認した。しかし瓦敷よりも東は、整地土が薄くなると共に、小溝などの遺構も稀薄になっていく。その傾向は発掘区の東端まで続き、東端部では標高117.80ｍ付近で同様な岩盤が風化した地山が存在するものの、西端のような整地土層は認められず、寺の生活に関連する遺構も確認することができなかった。

このように今回の調査では、瓦敷以外、明確な遺構を検出できなかったが、地山面を確認したことにより、回廊内のみならず南面大垣の北側、すなわち寺域の内側も、ほぼ平坦に地均しされていたことが窺えるようになった。これは、寺域東南隅を発掘した第９次調査で、東面大垣西側の地山面が標高117.85ｍ付近で確認されていることとも矛盾しない。

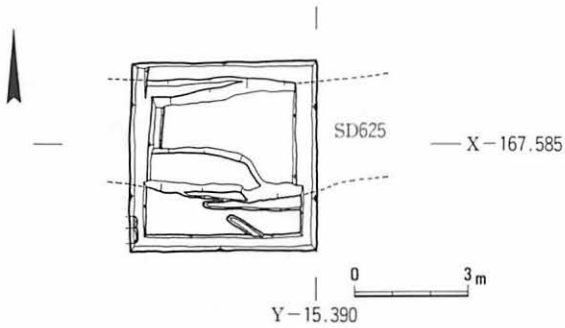


図77　山田寺第11次調査遺構図　1：200

一方、西調査区では、予想した位置で東西溝SD625の西延長部を確認した(図77)。調査区の基本的な土層は、耕土、床土、暗灰色土、暗褐色土、緑灰色地山土の順であり、遺構は地表下約90cmにある地山面(標高約116.50ｍ)で検出した。

東西溝SD625は、幅2.8m～3.2m、深さ0.6ｍ～0.8mの素掘りの溝である。堆積土には砂礫が含まれており、相当の水量があったことがうかがわれる。また堆積土中からは、瓦や土器などが出土した。

なお、調査区西南隅で、柱穴状の穴を確認したが、詳細は不明である。このように、南門のすぐ南側を流れる寺域南面の大溝が、一直線で西へ引き通されていたことが判明した。

遺　物

出土遺物のうち、中央発掘区の上部砂層中から出土した建築部材、および西発掘区の大溝から出土した瓦類について触れておく。

建築部材　肘木は、現状で長さ156.1cm、幅18.0cm、高さ22.0cmある。推定当初断面寸法は、東面回廊出土部材と同一である。下木材で、両端に巻斗を固定する太枘穴があり、壁付きの肘木である。笹繰りは確認できるが、舌の有無は不明である。

瓦類　軒丸瓦が22点、軒平瓦が28点、垂木先瓦が46点出土した。回廊用の軒瓦（山田寺式軒丸瓦Ｄ：13点と重弧紋軒平瓦ＡⅠ：７点）と垂木先瓦Ｄ（18点）、南門用の重弧紋軒平瓦ＢⅡ（13点）と垂木先瓦Ｂ・Ｃ（計25点）が多く、調査区周囲の建物を反映している。丸瓦の総重量は190kg（1171点）、平瓦の総重量は435kg（2253点）ある。その他、割り熨斗瓦７点、割り面戸瓦５点、隅平瓦３点、鴟尾２点が出土した。なお、丸瓦には４点、平瓦には11点のヘラ書瓦が含まれている。　（黒崎　直）

◆吉備池廃寺の調査―第81-14・16次

1　調査の経緯と概要

大和三山の一つである香久山から東北東へ1kmほど離れた桜井市吉備に、吉備池という農業用の溜池がある。この池の東南部を中心として、飛鳥時代の瓦が散布することは以前から知られていた。そして、堤防部分の不自然な張り出しや断面観察に基づき、寺院（創建時の吉備寺）の跡とする見解も提示されている（前園実知雄「磐余の考古学的環境」『考古学論攷』第6冊　1981年）。

しかしながら、発掘調査を行っていないこともあって、それが寺院跡であるという明証はなかった。一方、この西北西約700mには、古くから吉備寺跡に比定されてきた（前園氏は移転先と考えた）「大臣藪」があるが、それが中世城館であって、寺院の跡ではないことから、吉備寺の存在そのものを疑う説もあらわれる。

とくに近年は、吉備池で出土する軒瓦と同笵の瓦が、香久山西北麓からまとまって出土することが明らかとなった。木之本廃寺と仮称しているが、このことから、吉備池には、木之本廃寺の瓦を生産する瓦窯が存在したとみるのが有力となっていたのである（大脇潔「吉備寺はなかった」『文化財論叢II』1995年）。

現在、吉備池については、護岸工事が進んでおり、顕

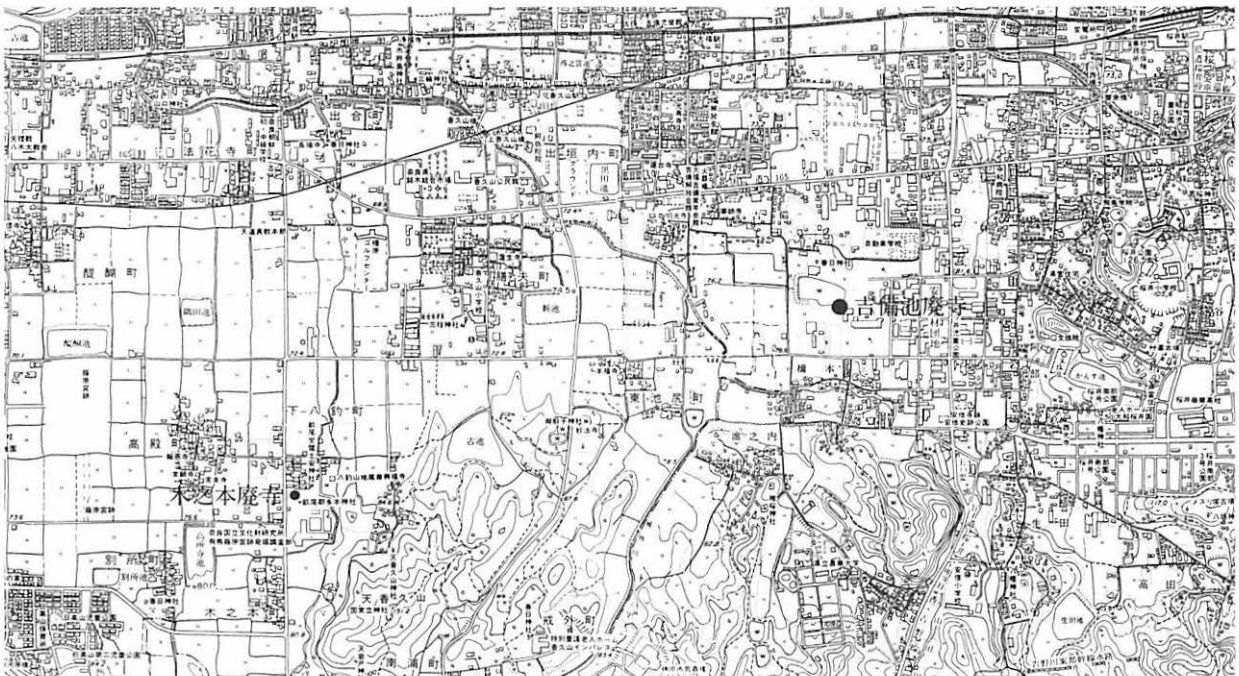


図78　吉備池廃寺位置図　1：25000

図79　吉備池廃寺地形図　1：2000

著な瓦の散布が認められる東南部の一角を除いて、堤防の内側はすでにコンクリートの擁壁が完成している。今回の調査（第81-14次調査）は、この残りの部分にどういった遺構が存在するのかを確認するためにおこなった、奈良国立文化財研究所と桜井市教育委員会の共同調査である。なお、それとは別に、吉備池に給水する水路の改修に伴う立会調査（第81-16次調査）も実施しているが、こちらでは顕著な遺構を確認していない。

今回の調査地は、堤防の一部が内側に張り出した土壇状を呈している。調査では、基準点測量・地形測量ののち、瓦窯の存在を想定して、事前にまず対象地の地中レーダー探査と磁気探査を２回にわたって実施した。しかしながら、瓦窯らしい反応はなく、むしろ基壇版築層らしい反応が得られるという結果となった。

こうした状況下で発掘調査に入ったわけであるが、それは、まさに探査成果を裏づけるものとなった。瓦窯ではなく、飛鳥時代の寺院（過去の吉備寺比定地と区別するため、「吉備池廃寺」と命名）の金堂と考えられる巨大な基壇の存在が明らかとなったのである。

発掘は、まず、一連の護岸擁壁が延長される可能性のある池岸部分を対象にして、土壇の西辺から着手した。ここで、掘込地業と版築土の存在により、建物の基壇であることが確定する。同時に、西北角の部分を含めた基壇の西辺と北辺が明らかとなった。

次に、それを受けて基壇規模を確認すべく、土壇上に南北・東西トレンチを設定した。これは、事前の探査で土壇の中央付近を東西に走る段差の存在を認めており、基壇端の可能性を想定したためである。しかし、トレンチ発掘の結果、それは畑の耕作による段差で、基壇土は現在の土壇よりも外側に広がることが明らかとなった。

そこで、基壇端を確認するため、土壇の東と南に改めて調査区を設定した。この結果、東辺については、掘込地業の端を検出し、基壇の東西長がほぼ確定した。一方、南辺については、土壇南側の調査区までは基壇がのびないことが判明したが、水路などの存在により、基壇端の正確な位置はつかめなかった。したがって、基壇の南北長については、概略の数値を把握したにとどまる。

今回検出した遺構は、この飛鳥時代の建物基壇と東側の砂利敷のほか、掘立柱の柱穴、基壇の北と西をめぐる近世の素掘溝、近現代の盗掘坑をはじめとする土坑などである。以下、おもなものについて述べる。

2　金堂の遺構

現在の土壇がすっぽりと収まる巨大な基壇であり、掘込地業をともなう。基底部分の土層は、場所によって一定しないが、地山（自然堆積層）である暗青灰色微砂（西辺・南辺）、暗灰褐色～青灰色砂礫（北辺）または灰黒色粘土（東辺）の上に、少量の土器片を含む暗褐色砂質土がのるのを基本とする。金堂基壇は、これをベースとして構築されている。なお、西辺では、この上に薄く青灰色微砂をおき、北辺では、地山を掘り上げた暗灰褐色砂質土ほかの整地土を積む。

掘込地業　掘込地業の深さは、ベースないし上記の整地土の上面から0.9～1.1mに及び、この底面から、版築による基壇土を積み上げている。これには、地山に由来する青灰色微砂も含まれるが、大半は黄灰色～橙褐色の山土である。各層の厚さは2～15cmで、5cm程度の部分が多い。また基壇西辺部では最下部に多数の礫をまじえていた。掘込地業の底面の標高は、東辺が79.9m、南辺が79.6m、地形的に最も低い西北角が79.3mである。

掘込地業の範囲は、東西が36mと確定し、南北は、27m以上30m以内であることが判明した。ただし、西辺と北辺では、掘込地業の範囲を越えて基壇版築土が広がっており、基壇の規模が、もうひとまわり大きくなることは確実である。東西37m、南北28mほどの基壇になるものと推定される。

なお、基壇西南部に設定した調査区では、掘込地業の西辺がいったん東へ屈折したのち、さらに南に折れることを確認した。掘込地業の平面がこのように屈折する理由は明らかでなく、反対側の東南隅や南辺がどういう形状となるかも不明である。長方形の隅を欠いた形をとるのか、あるいは階段などによる複雑な出入りをもつのか、今回の調査からは判断しがたい。ただ、階段部分の積土は、本体部分の版築を終えたのちに継ぎ足す例がほとんどで、階段部分を含めた掘込地業をおこなう意味は希薄である。いずれにしても、掘込地業南辺の形状については、今後の課題としておく。

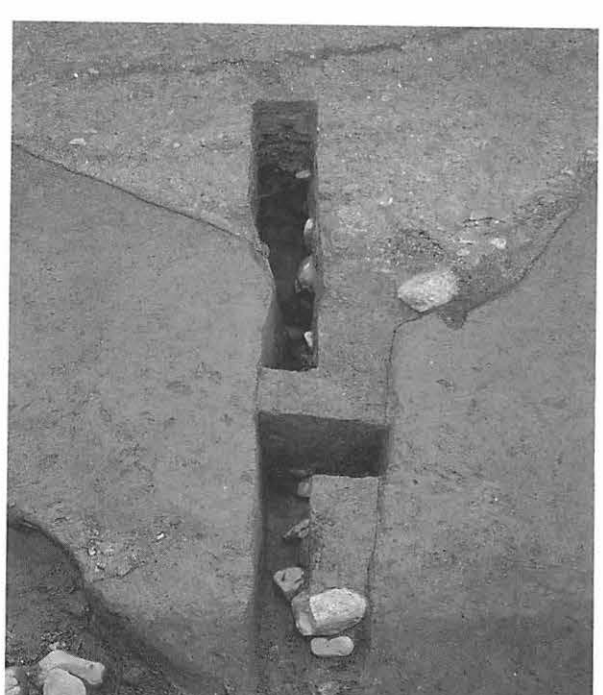


図80　掘込地業の排水溝（北西から）

掘込地業の排水溝　掘込地業の西北角には、排水溝が掘削されていた。掘込地業の中に溜まる水や版築土中の水分を抜くため、地形的に最も低い場所に設けたものである。端部が後代の溝により破壊されているが、2.1mにわたって残る。幅0.5～0.6m、検出面からの深さは、掘込地業の肩で0.7mある。底面はほぼ水平で、掘込地業の底から0.1～0.15m低い。溝底の標高は79.2mである。溝の下部には、掘込地業から連続する拳大～人頭大の礫を多数含み、上部は一時に埋めたてていた。

基　壇　基壇の上面は削平を受けているため、本来の基壇高については知ることができない。しかし、掘込地業の底面から版築土上面までの高さは、現状で2.5～2.7mに達する。また、この上部には、厚さ0.7m内外の耕土層があり、その大半は基壇土をすき込むことによって形成されたものとみられる。おそらく、本来の基壇は、掘込地業底面から3m以上、地表面から2m以上に及ぶ、ひじょうに高いものであっただろう。

ただ、今回の基壇上面における調査は、幅の狭いトレンチによるもので、しかも遺構の保全を第一として、基壇土の掘り下げをおこなっていない。そのため、礎石抜

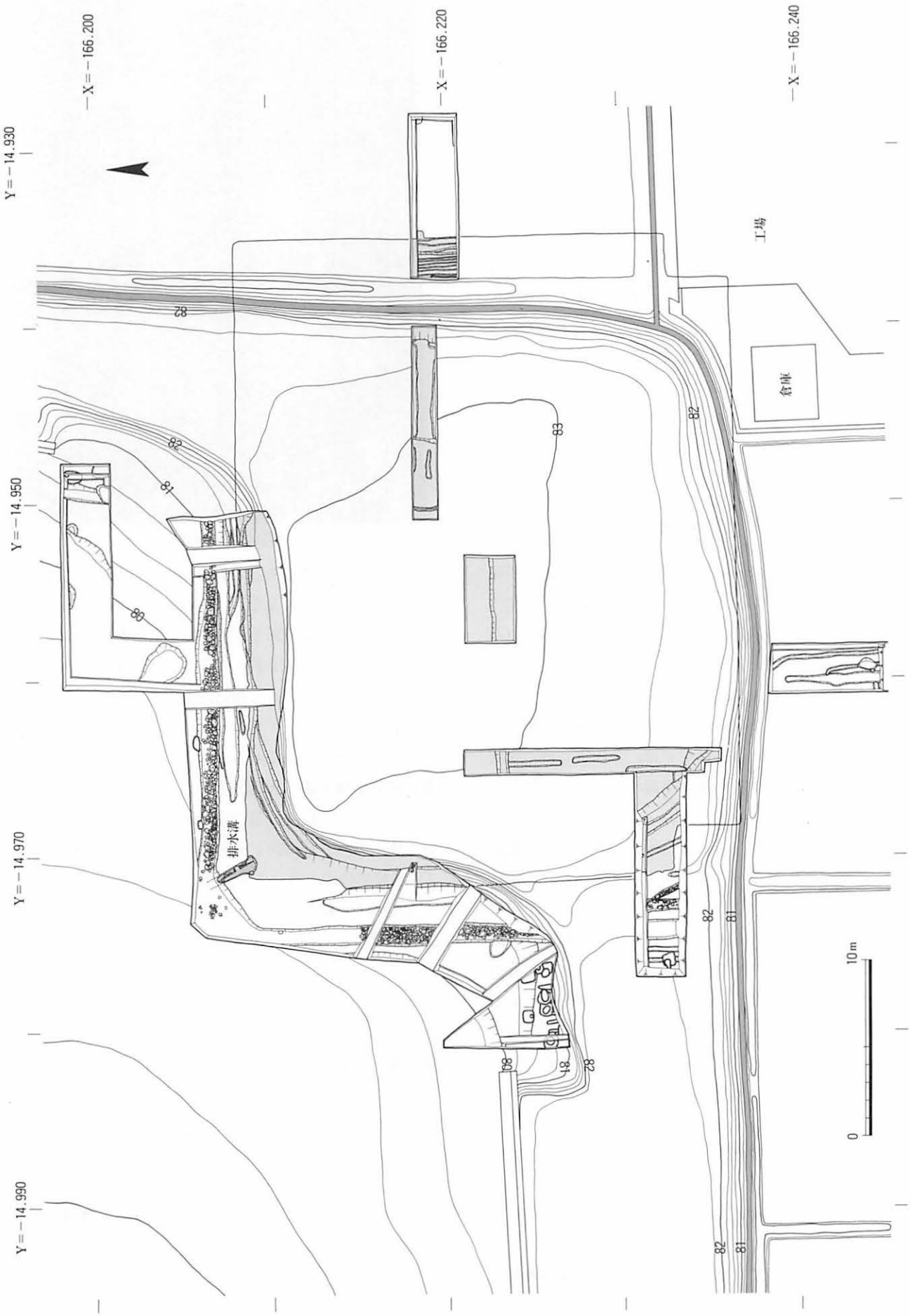
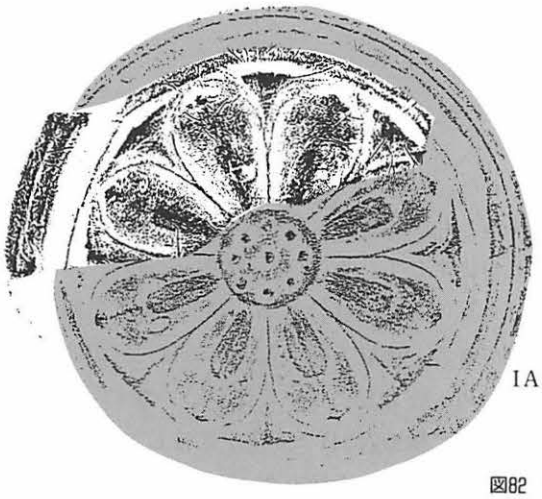


図81　吉備廃寺遺構図　1：300　薄い網目は基壇土



1
IA(出土品)

2
IB(松田光氏所蔵品)

図82　吉備池廃寺の軒丸瓦　1：3

取穴の一部がかかっている可能性が高い箇所もあったが、確定はできなかった。礎石の据えつけおよび抜き取り痕跡や、それから復原される柱配置の解明は、将来の全面的調査に委ねることにしたい。

このほか、基壇外装についても、削平および後代の溝の重複により、その痕跡を認めることはできなかった。また加工痕をもつ石材や凝灰岩片も全くなく、基壇外装の形状については不明である。

なお、発掘調査では、火災に遭った痕跡はまったく認められなかった。建物の廃絶理由が、焼失によるものでないことは確実である。

3　その他の遺構

金堂基壇外周の溝　基壇の西辺と北辺には、人頭大ほどの自然礫を多数落とし込んだ素掘りの溝がめぐっている。幅0.8～1.3m、検出面からの深さは0.6～0.8mである。溝の方向は掘込地業の肩とほぼ平行するが、両者の間隔は、西辺が2.5m、北辺が1.5mと異なる。

この溝は、人為的に埋められた状況を呈しており、埋土の中から、近世の染付が出土した。なお、堤防の積土からも近世の陶磁器が出土することから、吉備池の築造が近世に降ることは明らかで、それ以前は水田であったと推定される。上記の溝は、水田耕作の際に支障となる礫を廃棄するために掘ったものであろう。

ただし、こうした礫は、本来、金堂基壇に伴うものであった可能性が高い。後代にわざわざこの場所まで運び、さらに廃棄する必要性は認めがたいからである。礫の数量や大きさからみて、礎石の根石、基壇周囲の雨落や犬走などの機能が想定されよう。また、礫を廃棄した溝が東辺になく、地形的に低い西と北の二辺にあることから、基壇基底部の高さをそろえる何らかの工作に伴う可能性もある。いずれにしても、基壇の高さを勘案すると、乱石積の基壇外装とは考えがたいと思う。

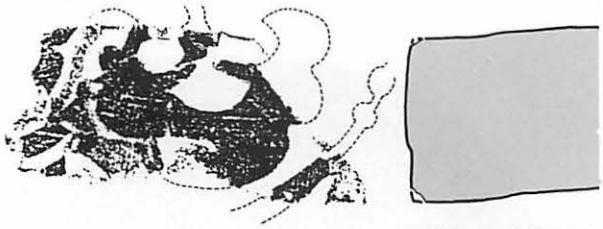
砂利敷　基壇東辺部の調査区において、基壇の外側に径3～5cmの砂利敷を確認した。金堂の廃絶後は灰色粘土層で覆われるが、この部分では、当時の地表面が遺存していることになる。金堂周囲の舗装状態を示すものとして重要である。砂利敷上面の標高は、80.8mである。

掘立柱穴　金堂基壇の西と北東で、掘立柱掘形と抜取穴を検出した。建物の一部とみられるが、規模は確定しがたい。柱穴には少なくとも3時期の重複がある。うち2時期の柱掘形には、基壇土に近い山土が多量に含まれており、金堂造営開始後のものであろう。一方、山土を含まない残りの柱掘形は寺院造営に先行する可能性が高い。この抜取穴から、7世紀中頃の土師器杯Cが出土した。吉備池廃寺の建立時期をうかがわせるものである。

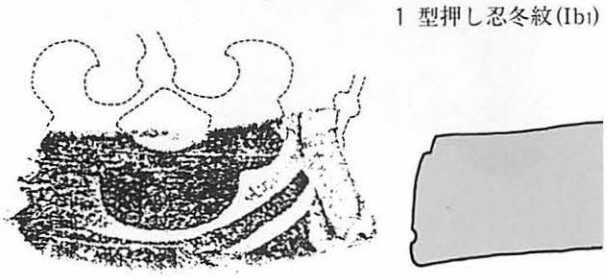
4　出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、瓦類のほか土器類、金属製品、石製品があるが、瓦を除くと量的には僅少である。土器類は、土師器・須恵器・瓦器・近世陶磁器・埴輪など、あわせて整理用木箱で3箱分、金属製品は、寛永通宝1点と鉛玉（鉄砲玉）1点、石製品は弥生時代の磨製石斧1点などが出土しているにすぎない。以下、瓦類について概略を述べる。

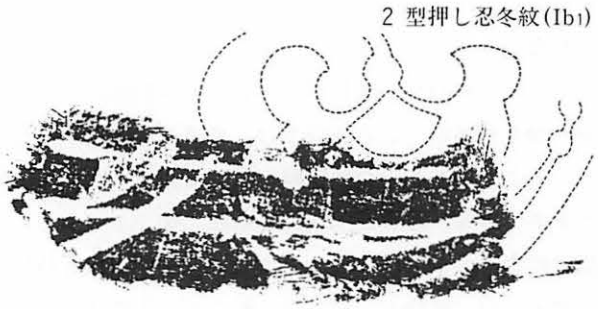
軒丸瓦　軒丸瓦Ⅰ（以下、型式名は、大脇前掲論文による）は、18点出土した。うち、ⅠBと比べて文様の割付にやや乱れのあるⅠAと確定できたものが5点あるが(図82-1)、小片が多いため、ⅠBと確定できたものはない。3月下旬に、神奈川県在住の松田光氏のご厚意により、氏所蔵の吉備池廃寺採集の軒瓦（佐野美術館『仏教美術入門展』図版89　1988年）を実見したが、その中にはⅠBもある（図82-2）。今後の吉備池廃寺の調査で、ⅠBも見つかるであろう。ⅠA・ⅠBとも外縁に五重圏紋をめぐらし、三重目が太い。山田寺などの山田寺式軒丸瓦も、重圏紋の外側から二重目が太く、後出の瓦に継



1 型押し忍冬紋(Ib1)



2 型押し忍冬紋(Ib1)



3 三重弧紋を伴う型押し忍冬紋(Ib2)

図83 吉備池廃寺の軒平瓦 2：3

承された特徴である。丸瓦部は、広端の凹面側を斜めに削り、カキヤブリを加えて瓦当裏面に接合する。

軒平瓦 型押し忍冬紋軒平瓦Ｉb1が５点、それに轆轤挽きの三重弧紋を加えた軒平瓦Ｉb2が１点出土した。

忍冬紋は、若草伽藍213Ｂ(Ｉa)と同一のスタンプを使用しているが、傷はそれより進行している。若草伽藍と異なり、スタンプを上下交互に押していないので、唐草紋の効果が出ていないし、瓦当面が３～４cmと幅狭いため、スタンプが瓦当面からはみ出て、忍冬紋が３分の２しか表出されていない（図83-１・２）。

７世紀前葉の若草伽藍では、手彫り、スタンプ、軒丸瓦用笵型、軒平瓦用笵型による、日本初の紋様をもつ軒平瓦を製作する試みが進行していた。しかし、213Ｂのスタンプを、若草伽藍の瓦工房から吉備池廃寺の工房へ運んで使用した瓦技術者は、若草伽藍の軒平瓦に関する情報を熟知していなかったのである。

丸・平瓦 丸瓦は1,530点（248kg）、平瓦は8,206点（912kg）が出土。ともに厚手品（厚さ20～25mm）が主体で、凸面は叩き目を完全になで消す。丸瓦は玉縁式である。さらに、平瓦のうち重量にして約９％が、硬質で薄手(厚さ10mm前後）であり、その多くが凸面に平行叩きや格子叩きを施す。おそらく小型平瓦であろう。しかし、これと組み合うべき硬質で薄手の小型丸瓦は皆無に等しい。

木之本廃寺との比較 木之本廃寺では、吉備池廃寺の軒丸瓦ＩＡ・ＩＢ、型押し忍冬紋軒平瓦Ｉb1・Ｉb2と同笵の軒瓦が出土している（『藤原概報16・17』）。それによれば、軒丸瓦の瓦当径は約21cm、軒平瓦の瓦当幅は約36cmに復原できる。両廃寺間の笵傷関係は、吉備池廃寺例が小片のため、軒丸瓦については不明である。軒平瓦は、いずれも若草伽藍213Ｂより傷が進行しているが、両廃寺の前後関係は今後の課題である。また、両廃寺における軒丸瓦の接合手法は同一であり、軒平瓦の忍冬紋の向きと瓦当幅の薄さも共通する。さらに、これらにともなう丸瓦と平瓦の多くがいずれも厚手で、他に硬質・薄手の小型平瓦を一定量含むことも両廃寺に共通する。

なお、木之本廃寺の残存状況が良好な例を参考にすると、丸瓦と平瓦の全長は、ともに36cmほどになる。吉備池廃寺と木之本廃寺の瓦は、軒瓦の瓦当はもちろん、丸瓦・平瓦も飛鳥時代の他の寺院を凌ぐ大きさであり、大規模な金堂にふさわしい。

まとめ

基壇の性格 今回検出した基壇は、東西37ｍ、南北約28ｍにおよぶ巨大なもので、面積にして1000㎡を越える。また、地表面からの基壇高も２ｍに達し、伽藍の中心的な建物であることは間違いない。平面が正方形でないことから、金堂または講堂とみられるが、飛鳥時代の講堂は、飛鳥寺や山田寺のように、桁行（８間）が梁間（４間）の２倍近い細長い平面となる例が多く、基壇の高さも塔・金堂に比べて低い。この点から、講堂とは考えがたく、金堂であることは確実であろう。

ここでは、比較のため、推古天皇が豊浦宮に即位した592年から694年の藤原遷都までを飛鳥時代とし、その間の主要寺院の金堂の平面を図示しておく(図84)。これから明らかなように、吉備池廃寺の金堂は、ほぼ同時期と推定される山田寺金堂の実に3.1倍、藤原京の官寺である本薬師寺金堂に比べても1.9倍の基壇面積を有する。飛鳥時代最大の金堂であることがわかる。

伽藍配置 金堂以外の堂塔については、発掘調査をおこなっていないため、伽藍全体については明らかでない。しかし、金堂土壇の西方に約50ｍ離れて、やはり方形を呈する土壇が存在する事実が注目される。二つの土壇は正しく東西に並んでおり、形状とあわせて、吉備池廃寺の建物基壇であることは確実とみてよい。

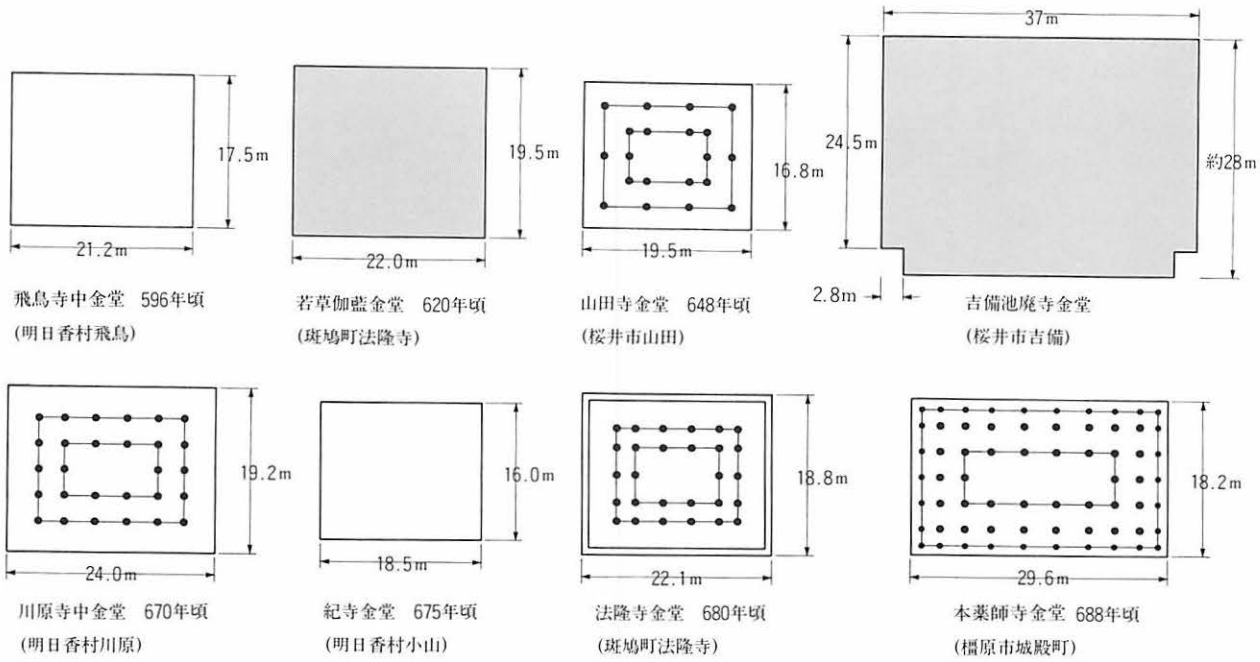


図84　飛鳥時代の金堂の平面規模の比較　網目は掘込地業

西方の土壇は、護岸工事により、北辺と東辺の原状が損われているが、金堂と同じく、かなり高い基壇と考えられる。また、工事前の写真や図面からみると、金堂土壇に比べて、より正方形に近い平面をもつようである。塔基壇と推定するのが妥当であろう。

したがって、吉備池廃寺は、東に金堂、西に塔を配した伽藍配置をとる可能性が高い。金堂が南面することから、伽藍の正面が南であることは動かないとみられるので、金堂と塔を並置した、いわゆる法隆寺（西院伽藍）式の配置が復原されよう。吉備池廃寺は、この伽藍配置の最古の例となる可能性がある。

また、その場合、金堂と塔の間隔が、心心間距離で84m前後ときわめて長大な数値となる。これは、法隆寺西院伽藍の塔・金堂心心間距離31.5mの2.7倍に達する。この点から、吉備池廃寺は、個々の建物のみならず、全体の伽藍もきわめて大規模であったと推定される。

ただし、塔跡と考えられる土壇は未発掘であり、上記の想定の正否については、今後の調査に委ねるほかはない。また、そのほかの施設、たとえば中門・回廊や講堂については、現状でまったくその徴証を得ることができない。発掘による伽藍全容の解明が期待される。

年　代　吉備池廃寺から出土する軒瓦は、採集品を含めて、2種類の組合せしか知られていない。

軒丸瓦は、いずれも、山田寺にわずかに先行する特徴を備えている。『上宮聖徳法王帝説裏書』および発掘調査の所見によれば、山田寺の伽藍の中で最初に造営されたのは金堂であり、その建立は皇極2年（643）に始まっている。したがって、吉備池廃寺の軒丸瓦は、この直前の時期に位置づけられる可能性が大きい。

一方、軒平瓦は、若草伽藍で使ったスタンプを再利用しており、若草伽藍の主要部が完成した後の製作と考えられる。若草伽藍は、643年の上宮王家滅亡時には、ほぼ完成していたとみてよい。吉備池廃寺の軒平瓦の製作年代は特定しがたいが、少なくとも、軒丸瓦と同時として矛盾はないことになる。また、型押し忍冬紋の上に重弧紋を加えた軒平瓦の存在は、山田寺で成立する重弧紋軒平瓦への過渡的な様相を示すものとみられる。

以上のことから、吉備池廃寺の軒瓦は、643年創建の山田寺にわずかに先行する年代を与えることができる。いずれにしても、吉備池廃寺の軒瓦の製作開始が、640年から大きく隔たることはないだろう。吉備池廃寺の軒瓦は、時期をきわめて限定できる資料なのである。

さらに注目されるのは、補修用の瓦がまったく存在しないという事実である。また、軒瓦以外の丸瓦・平瓦の出土量も僅少であり、とくに使用に耐えるような完形品は1例もない。こうした点から、吉備池廃寺がこの地で命脈を絶った寺院でないことは明らかである。短期間のうちに、ほかへ移建されたことは、間違いないであろう。吉備池廃寺で出土するのは、その際に残していった再利用不能の瓦とみられる。

吉備池廃寺の性格　それでは、吉備池廃寺はどういった性格をもち、史料上のどの寺に相当するのだろうか。

まず、その規模からみて、一豪族の氏寺とは考えられない。この点でも、吉備氏の氏寺としての吉備寺にあてる説は成立しえないと思う。吉備池廃寺とほぼ同時期の氏寺としては、大化改新後に右大臣となった蘇我倉山田石川麻呂の発願による山田寺がある。しかし、吉備池廃寺の金堂は、山田寺はもちろん、のちの官寺である川原寺や本薬師寺をも遙かに凌ぐ規模を有しているのである。やはり、天皇家にかかわる寺院と考えるべきであろう。

また、吉備池廃寺の位置は、宮室が集中した飛鳥地域に近い。天皇家関係の寺院であればなおのこと、それに

関わる記録は残りやすいはずである。吉備池廃寺を、史料上の寺院の中に求めうる可能性は高い。

そこで、有力な候補として浮上してくるのが、百済大寺(くだらのおおでら)である。この寺は、『日本書紀』と『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』(以下『縁起』)が、ともに舒明11年(639)の発願と伝える、日本最初の勅願寺であった。寺地の移転を伴う複雑な沿革をたどるが、その法燈は、高市大寺(たけちのおおでら)・大官大寺を経て、今の大安寺に伝わる。

百済大寺の所在については、現在の広陵町百済周辺に比定するのが通説だが、この一帯で、それに該当する遺構や瓦の出土は全く知られていない。一方、香久山の西北麓一帯に百済大寺を比定する見解もあり(和田萃「百済宮再考」『季刊明日香風』第12号 1984年ほか)、木之本廃寺はその有力な候補となっていた。従来から、木之本廃寺の軒瓦(=吉備池廃寺の軒瓦)については、百済大寺のものとする見解が有力だったのである(山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』1983年、大脇潔『飛鳥の寺』1989年ほか)。

軒瓦から見た吉備池廃寺の年代は、まさしく百済大寺の年代と合致する。というより、現状で、百済大寺の瓦はこれ以外に求めがたいのである。この軒瓦を出土する遺跡は、いずれも、今まで寺院跡としての明証を欠いていたが、それが遺構として、しかも並外れた規模のものと確認された以上、吉備池廃寺を百済大寺と見る説は、考古学的にかなりの説得力をもつといってよい。

また『縁起』によれば、百済大寺は、天武2年(673)に高市の地に移建され、高市大寺となった。『日本書紀』も同年の造高市大寺司任命を伝えている。そして、これらも、吉備池廃寺が短期間のうちに他へ移転したという知見と符合するのである。

なお、その場合、吉備池廃寺と同笵の軒瓦を出土する木之本廃寺は、高市大寺の有力候補となる。木之本廃寺を百済大寺に比定すると、その近辺に求めざるをえない高市大寺とが、あまりに近接した位置関係となってしまう。あえて移転する意味があったとは思われない。また、木之本廃寺周辺は、十市郡と高市郡の郡界が錯綜しており、古代にいずれに属したか即断できないが、吉備池廃寺の地が一貫して十市郡に属したことは、ほぼ疑いない。吉備池廃寺を高市大寺にあてるのは困難である。

このほかにも、吉備池廃寺の周辺には、「カウベ」や「コヲベ」「高部」といった地名があり(橿考研編『大和国条里復原図』1980年)、『縁起』や『日本三代実録』の記事から百済大寺近傍にあったとみられる「子部社」「子部大神」との関連をうかがわせる。また、金堂の南方では、過去の発掘で旧河道を検出しており(前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』1985年)、『日本書紀』『縁起』がともに百済大寺の所在を「百済川の側(ほとり)」と伝える記事との関係も注意される。

以上のことから、なお問題とすべき点は少なくないが、吉備池廃寺が百済大寺である蓋然性は、きわめて高いと考える。史料との整合性をはじめ、残された課題については、伽藍全体の解明とともに今後の解決に委ね、ここでは、ひとまず吉備池廃寺を百済大寺にあてる仮説を提示しておくことにしたい。 (小澤 毅/史料 瓦:佐川)

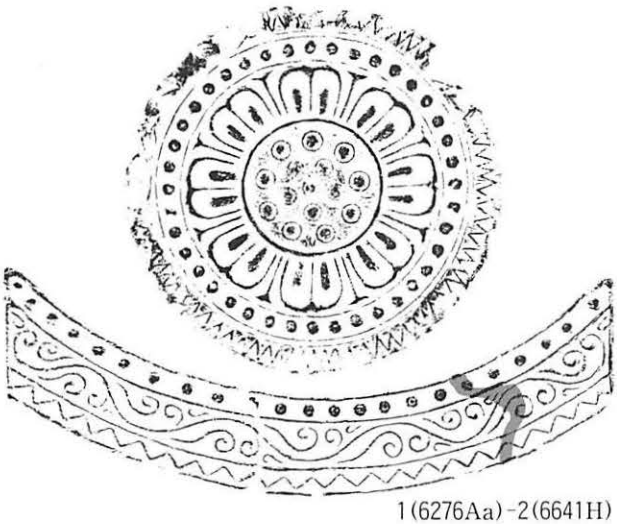
表8 その他の発掘調査概要

次 数	地 区	概 要
藤原宮78-10	藤原宮西面外濠	外濠の一部とみられる青灰色粘土と微砂層の互層を確認。
〃 81	藤原京右京一条一坊	坪内の東西道路や小規模建物群、井戸などを検出。工房関係の遺物も出土した。
〃 81-2	藤原宮東方官衙南地区	丸太と石で護岸した南北溝1、井戸1、土坑2など江戸時代の遺構を検出。
〃 81-3	藤原宮西方官衙南地区	中世の細溝、土坑など検出。藤原宮期の遺構なし。
〃 81-4	藤原宮西方官衙南地区	中世の細溝を検出。藤原宮期の遺構なし。
〃 81-5	藤原京右京五条三坊	中・近世の細溝を多数検出。一部掘り下げ、藤原宮期の包含層や、7世紀代の細溝などを確認。
〃 81-9	奥山久米寺東方	河川による堆積を確認。顕著な遺構なし。
〃 81-10	藤原宮東方官衙北地区	地表下約0.65mで、12世紀後半の南北溝2と円形土坑2を検出。藤原宮期の遺構は不明。
〃 81-11	藤原京左京六条三坊	香久山西麓の低地で、沼状堆積を確認。「埴安池」と関連するか。
〃 81-12	藤原宮東方官衙南地区	近世以降の土坑2、溝1などを検出。藤原宮期の遺構面は削平されている。
〃 81-13	藤原京左京七条三坊	古代の土坑1、14世紀代の瓦器をともなう土坑6などを検出。
〃 81-15	藤原京左京六条三坊	藤原宮期の柱穴2などの検出。
飛鳥寺1996-2	飛鳥寺東南部	中・近世の土坑数基を検出。飛鳥寺所用瓦も出土。
石神遺跡1996-1	石神遺跡	顕著な遺構なし。

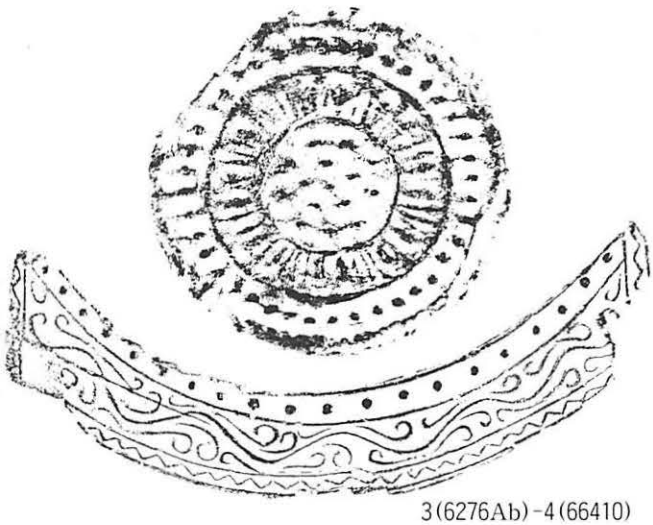
正　誤　表

頁	行	誤	正
15	図14	1・2・5・6・7・SA8701柱穴掘形	1・2・7　SA8701柱穴掘形、5・6　SA8701柱抜取穴
39	図35		「水落遺跡９次」を1.5cm右へ移動
57	図53	Ⅳ区	Ⅵ区
74	図64	〈キャプション〉(1～6)	(1～7)
〃	〃	〃　(7～10)	(8～10)
78	右最下行	30～58	30～58cm
79	左15行	後述する	前述した
81	図73	〈キャプション脱落〉	図73　南北暗渠SX700断面図
81	図73	3層：暗青灰色粗砂小溝の埋土 4層：暗青灰色粘質土	3層：暗青灰色粗砂 小溝の埋土 4層：暗青灰色粘質土
90	右17行	まとめ	5　まとめ

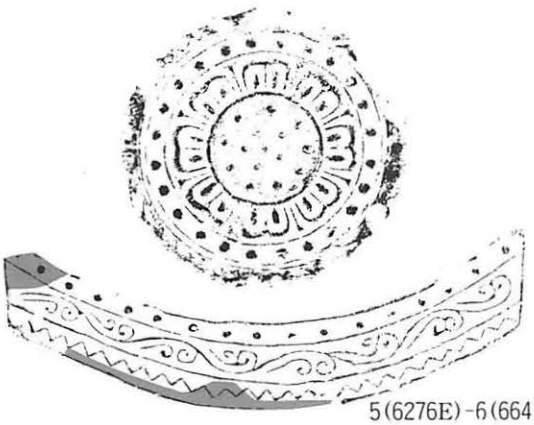
誤



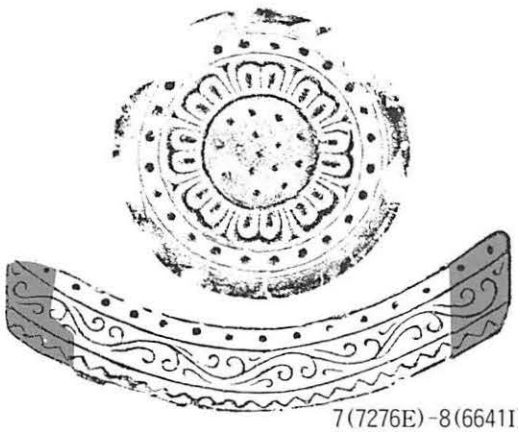
1(6276Aa)-2(6641H)



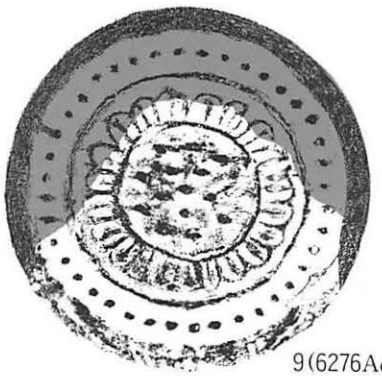
3(6276Ab)-4(66410)



5(6276E)-6(6641K)



7(7276E)-8(6641I)



9(6276Ac)

10(6304E)

11(薬師寺36a)

図33　本薬師寺1995-1次調査出土軒瓦　1：4

誤

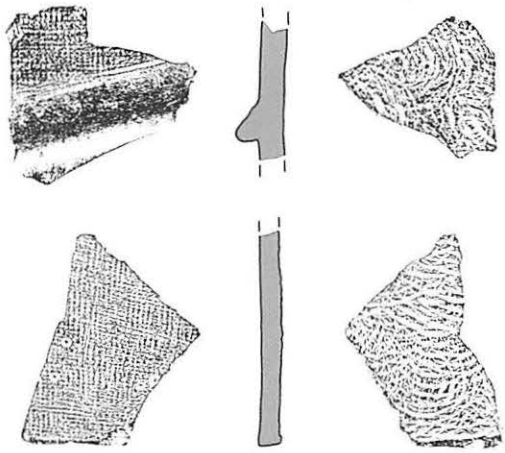


図17　陶棺片　1：4

正

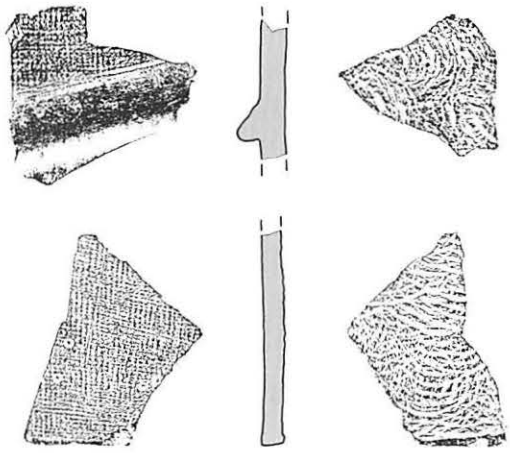
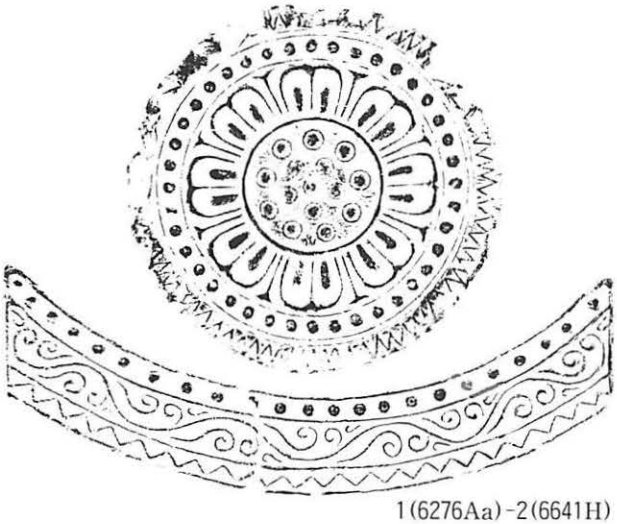
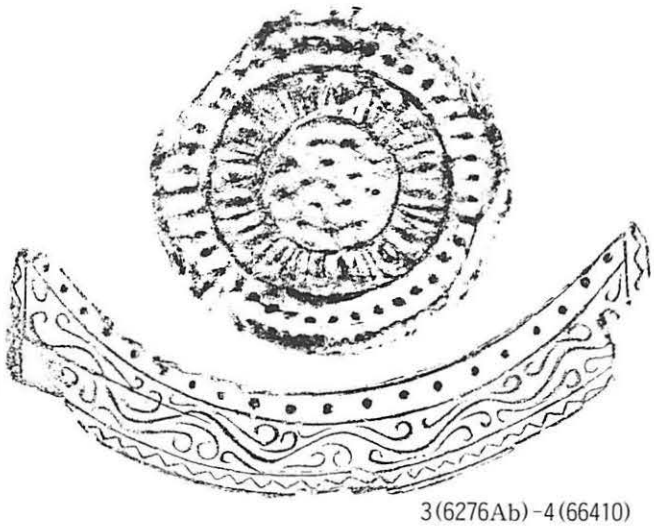


図17　陶棺片　1：4

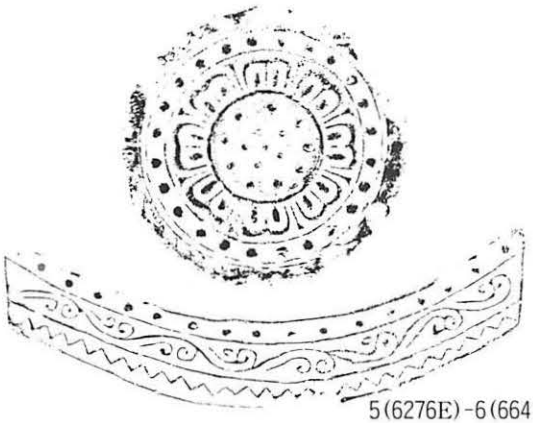
正



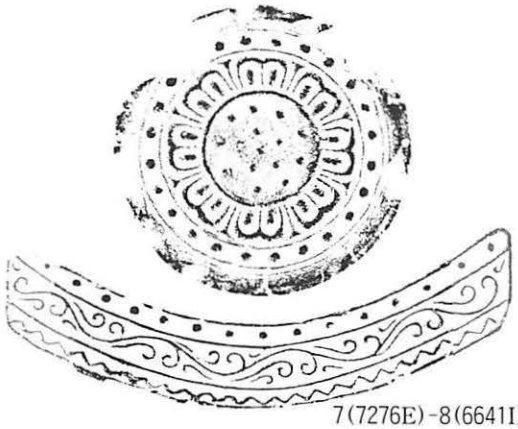
1(6276Aa)-2(6641H)



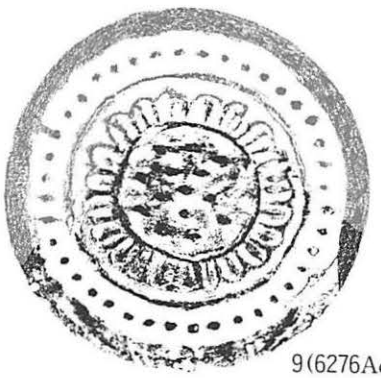
3(6276Ab)-4(66410)



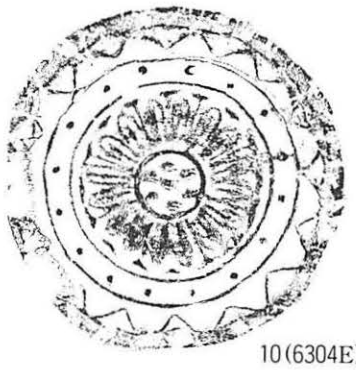
5(6276E)-6(6641K)



7(7276E)-8(6641I)



9(6276Ac)



10(6304E)

11(薬師寺36a)

図33　本薬師寺1995-1次調査出土軒瓦　1：4

誤

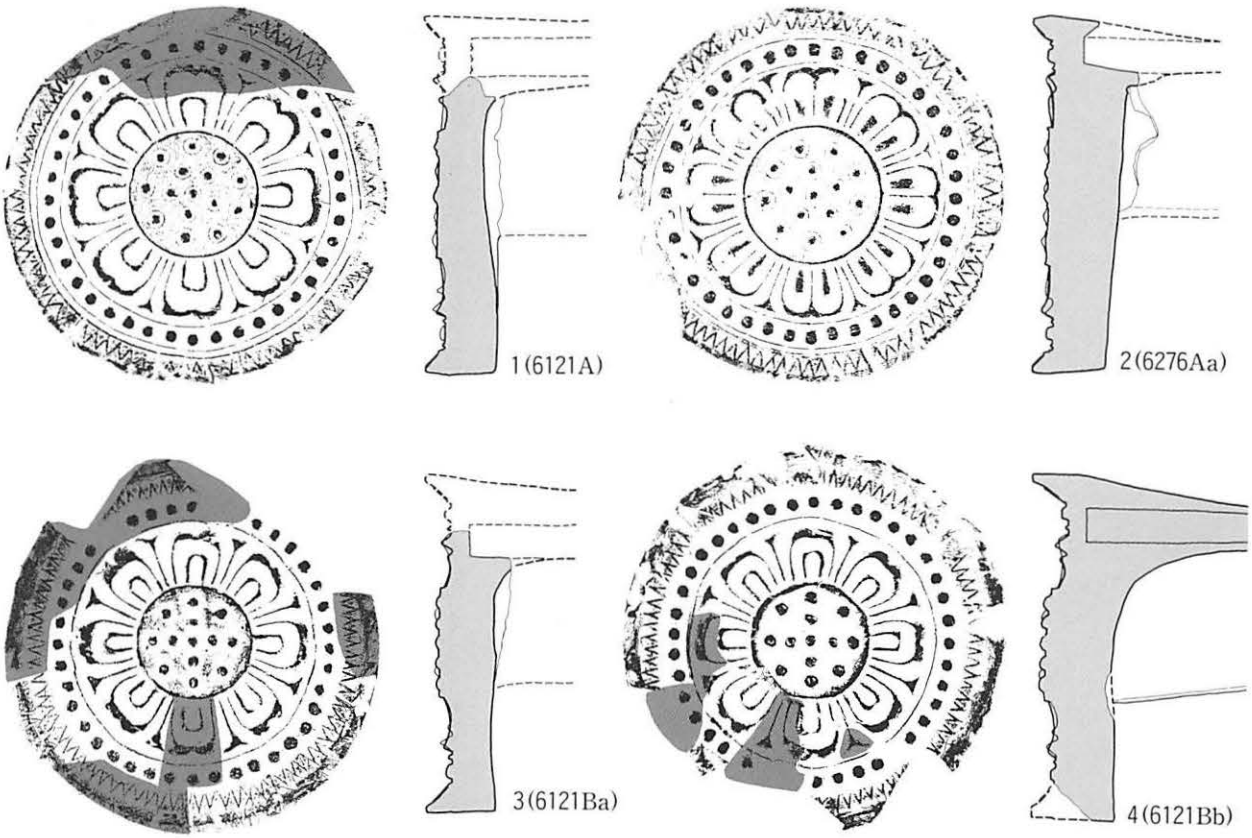


図34

誤

図38　水落遺跡第9次調査遺構図（上層）1：300　色刷りは下層

正

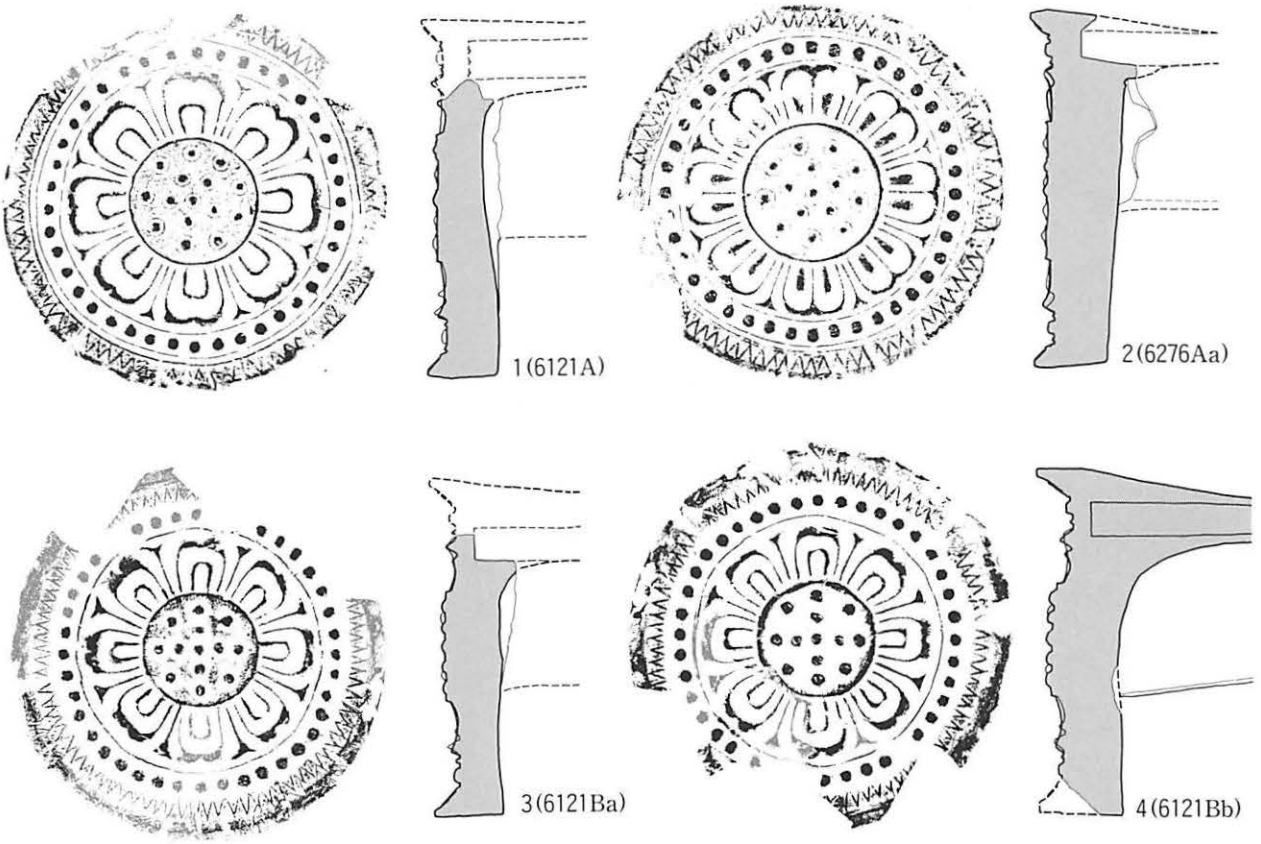


図34

正

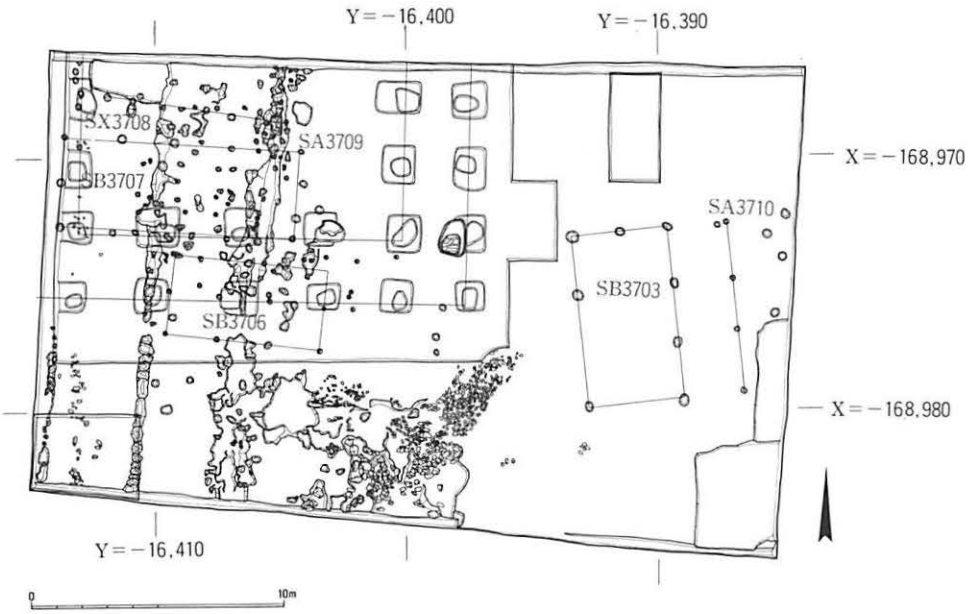


図38　水落遺跡第9次調査遺構図（上層）1：300　色刷りは下層

誤

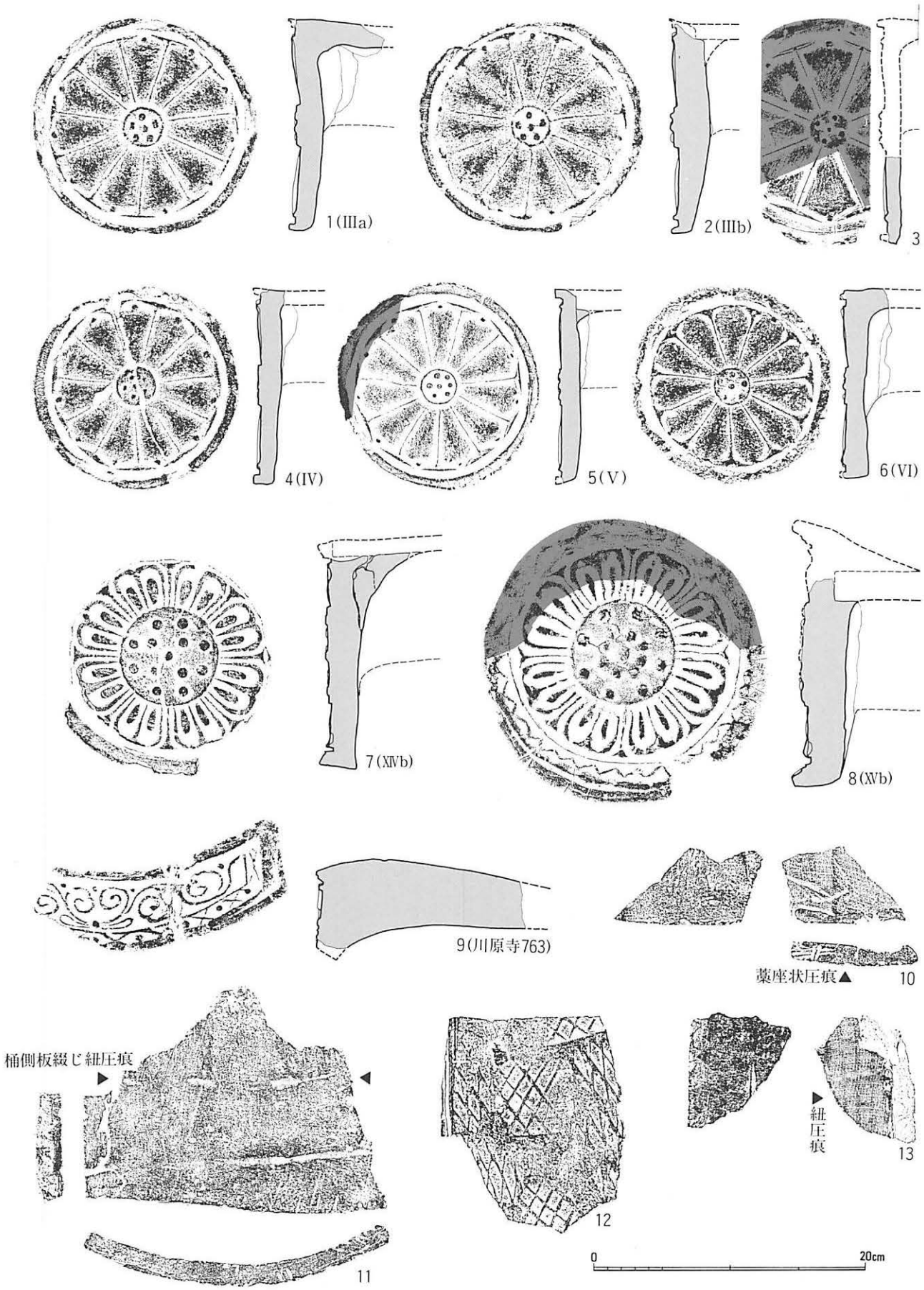


図44　飛鳥寺1996-1次調査出土瓦　1：4

正

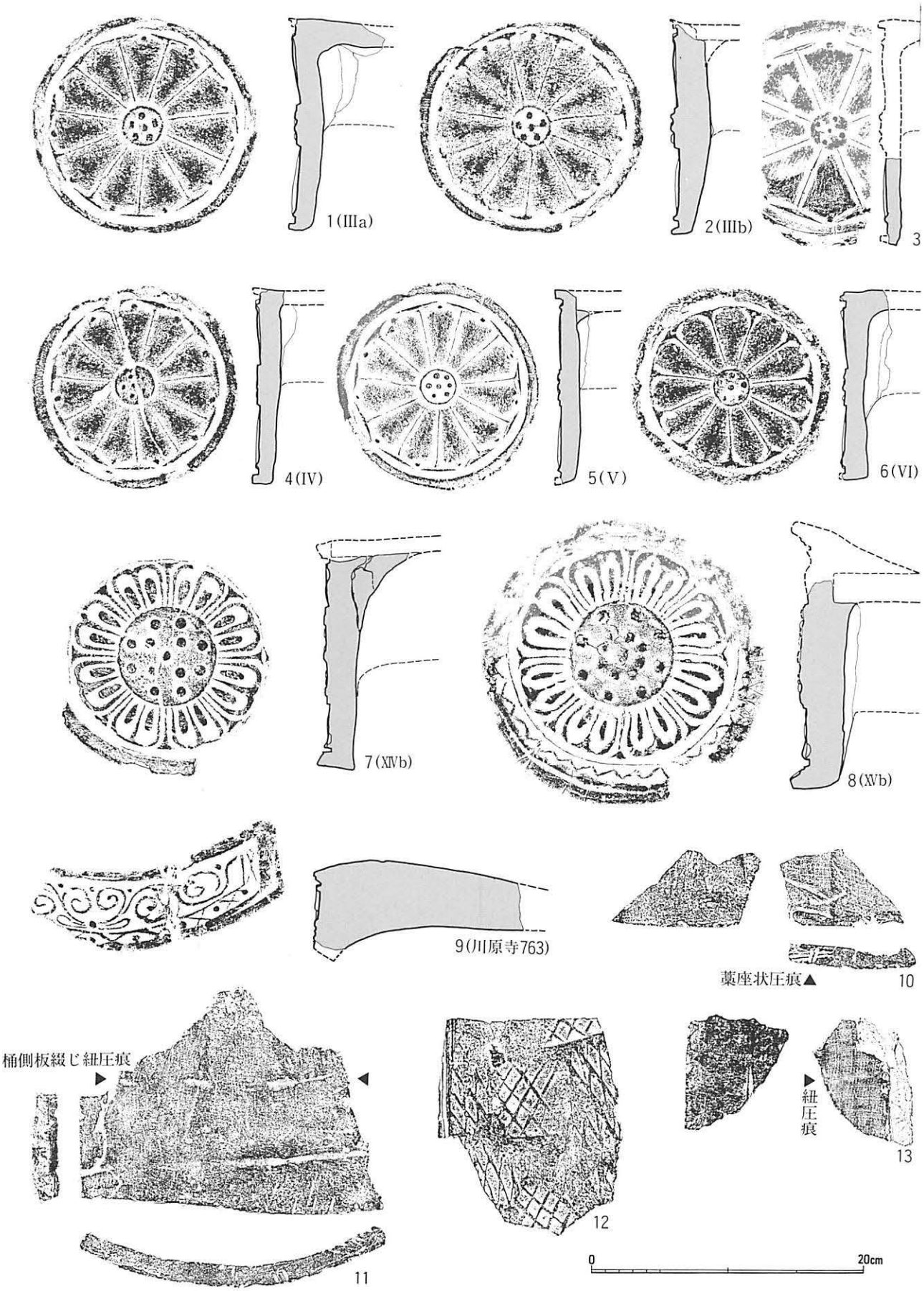
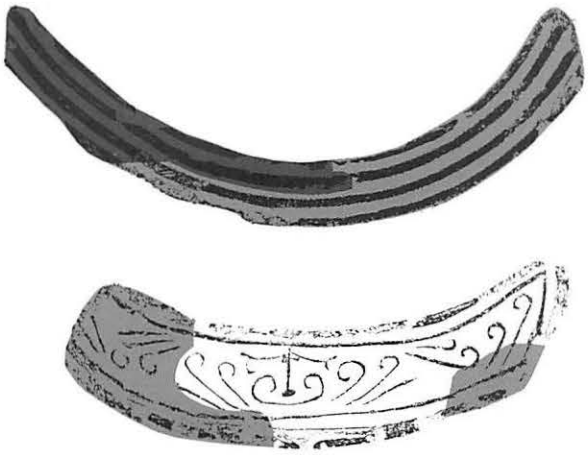


図44　飛鳥寺1996-1次調査出土瓦　1：4

誤



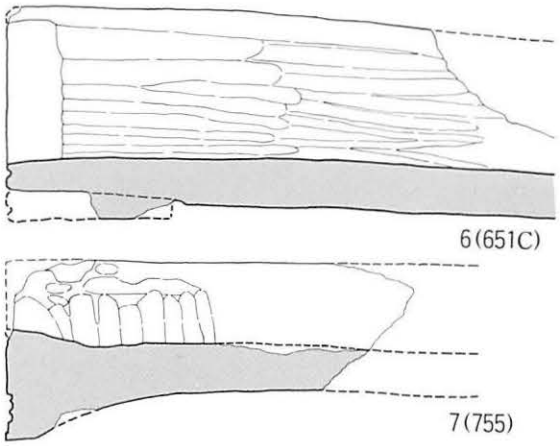


図58

誤

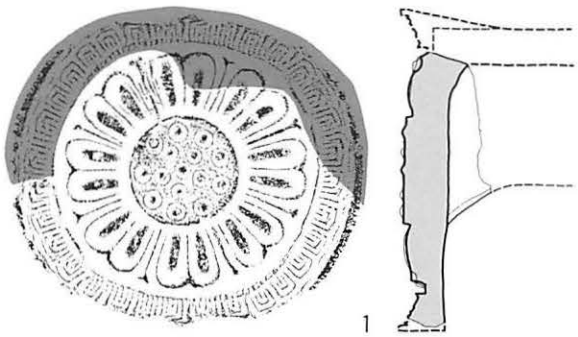


図64

正

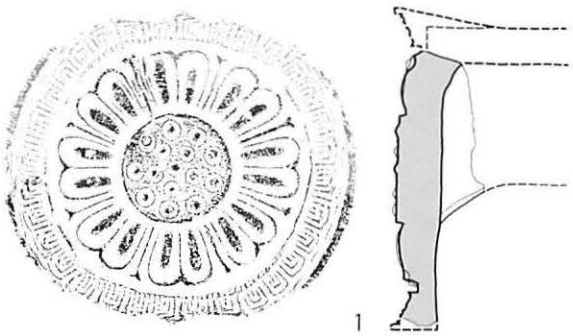


図64

誤

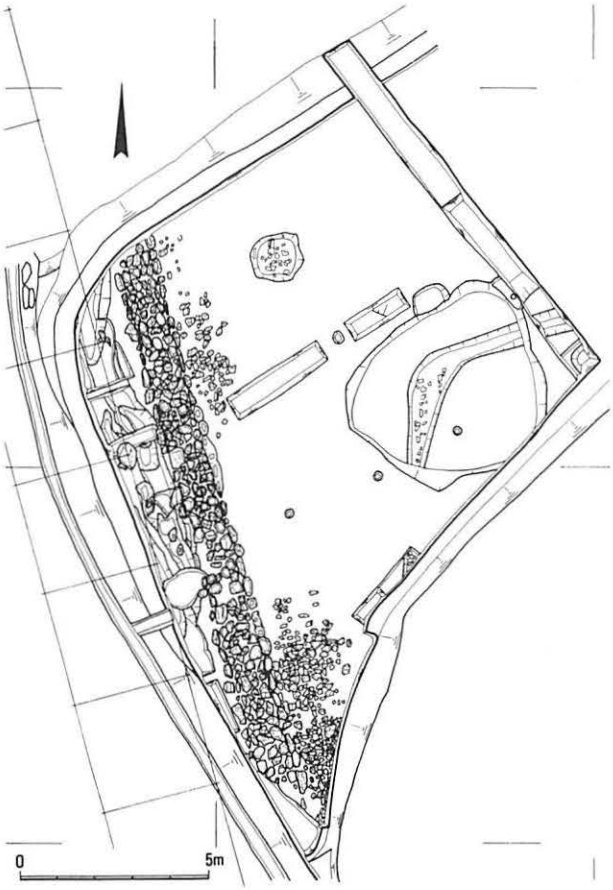


図66　坂田寺1996-1次調査遺構図　1：200

正

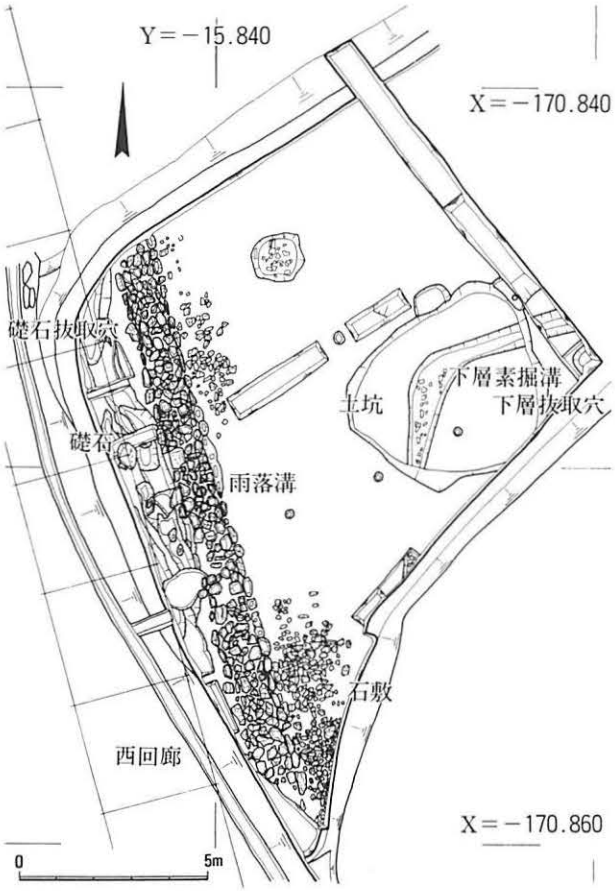


図66　坂田寺1996-1次調査遺構図　1：200

正

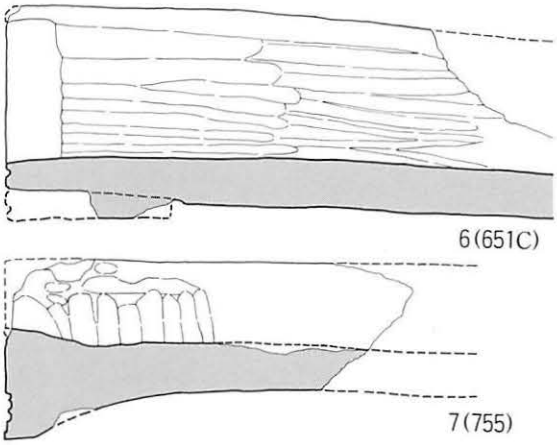


図58

誤

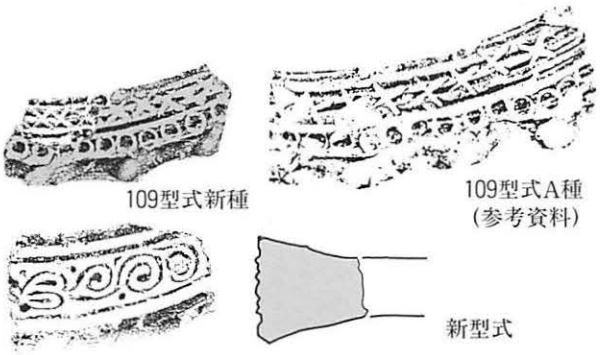


図67　坂田寺1996-1次調査出土軒平瓦　1：4

正

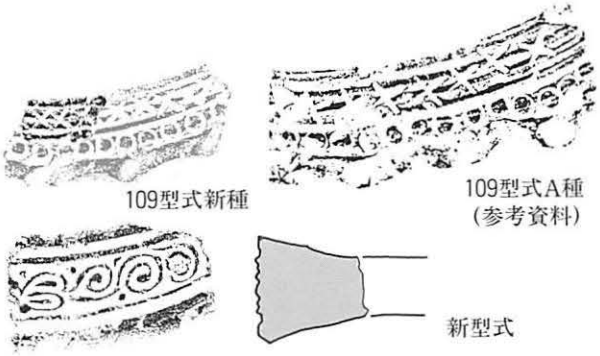


図67　坂田寺1996-1次調査出土軒平瓦　1：4

誤

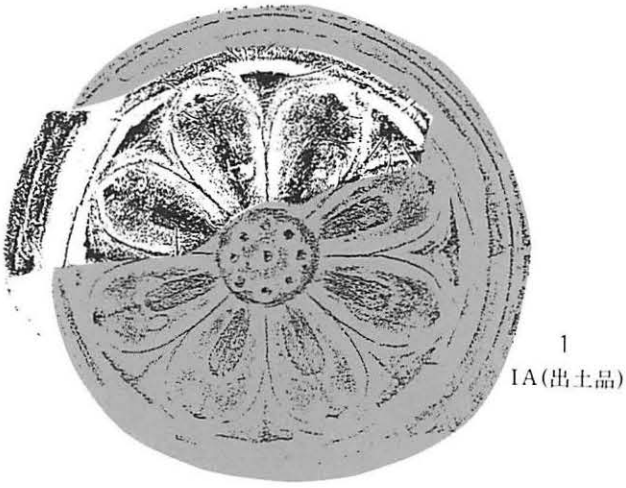


図82

正

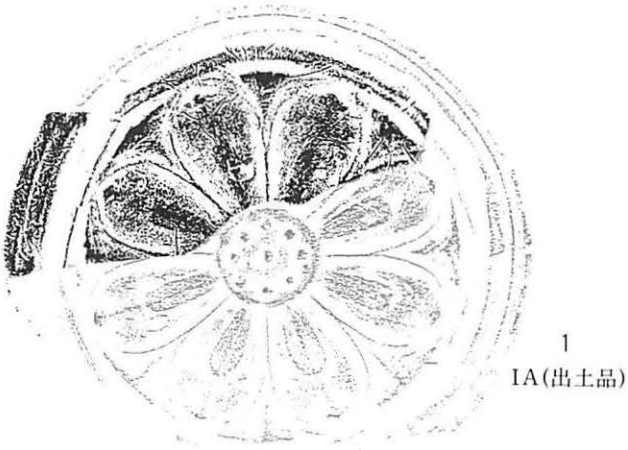
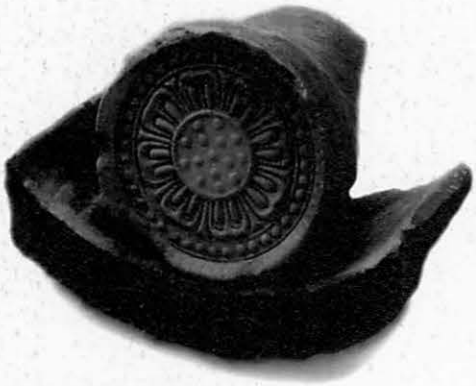


図82



奈良国立文化財研究所
〒630　奈良市二条町2丁目9-1
Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630, JAPAN